
和茶 6 人席

イイボン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

和茶6人席

【Nコード】

N7224E

【作者名】

イイポン

【あらすじ】

高3になる主人公の優馬。入学した頃は高校生活は平穏無事を願っていたが入学式早々、率先躬行の四文字熟語の似合う『光』と気炎万丈の四文字熟語の似合う『五右衛門』と出会ってしまう。そんな彼らによって優馬の高校生活は一転！！そして今年！！新たに3人の仲間が出来き、優馬達は集いの場を作る事にした。【和茶】という喫茶店のようなファミレスのような…とりあえず深夜までやっている喫茶店だ。毎回同じ店の同じ席に同じ人数で座る。なんてったって6人用の席は一つしかないからね…【和茶6人席】…ココで色

々な思いで作りの計画を立て、勿論実行する！！今年は良い年になる気がする。

『新学期』

『…はあ、今年で俺も3年かあ…』

俺の名前は優馬。どこにでも居る普通の高校生だ。まあ色々と問題には巻き込まれるが、コレは俺のせいではない。結論、やっぱり普通の高校生だ。

4月9日

春休みも終わり、今日からまた二トから学生に戻される。まあ学校は好きでもなければ嫌いでもない。

授業中は寝て、休み時間はだべって、昼飯を食って、また寝て、そして帰宅。

強いて言えば朝起きて学校に行くまでの間が一番嫌だ。

そんな感じで小学校、中学校、高校1・2年で一度も学校が嫌だから行きたくないと思った事は無かった。

今年も例外ではない。

『おひさあ〜!!』

登下校はいつも大体、友人の五右衛門と一緒にだった。おっと、勘違いされそうだから言うておくが五右衛門はあだ名で実際の名前は洋介だ。

長期休暇明けの登校日もいつもの待ち合わせ場所で合流した。

『おう！今年もお前と同じクラスかな??』

『おいおい…それだけは簡便だぜ…』

『ハハハハ。ちげーねえ!!』

まあ当然っちゃー当然の事だが、俺と五右衛門は春休みの出来事を話しながら登校した。

チャリを走らせ20分。ようやく学校に着いた。近くも無いし、遠くも無い距離だ。

『おお!!優馬!五右衛門!お前らまた同じクラスだぜッ!!!!っいでにワイも!ハハハ。マジに腐れ縁やのお!』

彼の名前は光。男とも女とも取れる名前だが当然男だ。

『ヤッパリか…』

『来る途中に何か嫌な予感がするなあって優馬と話してさ…見事的中！！ハハハ。』

『まっ。クラスわけの決定は変えられねえし。諦めるしかねえな！』

『男3人…3年間同じクラスか…きもちわりいいい。』

『ブハハハハハ。』

実際、3人とも照れくさいのか公では素直に喜ばなかったが3人同じクラスで嫌では無かった、ココまで来たらとことん付き合ってる！

俺らはそんな風に思っていた。俺らが知り合ったのは高校の入学式の時だった。

『イツテ。気をつけろよ。』

『あ？誰だデメエ。デメエが気をつける！ボケが！』

『…クソ、高校入学早々最悪な日だ。あんな奴と同じクラスになったらマジに俺の高校生活たまったもんじゃねえな。…』

俺は、高校時代はのんびり過ごしたかった。だからアホな不良とは関わらず何気なく3年過ごすつもりだった。

『はい！皆さん。はじめまして1年4組の担任をすることになりました斉藤隆です。私は皆さんと教師として生徒という関係じゃなく友達のような付き合いをしていきたいと思っています。堅苦しい挨拶はこの辺で、じゃあ1年間よろしく！』

担任は教師風吹かせるようなタイプでは無い、結構良さそうな感じの奴だった。

『じゃあ、色々な中学から集まった事だし、とりあえず自己紹介でもするか！じゃあ伊藤から順番に…』

『はじめまして、伊藤智之です、クラスに同中の人が居ないので友達ができるか不安ですが皆と仲良くやっていきたいと思います、一年間よろしく願います。』

交友関係より成績を重視する、嫌われるタイプの真面目君だ。

パチパチパチ。自己紹介の後には良くわからないが皆拍手をする。俺も適当に2、3回手を叩いた。

『ハイ！伊藤！宜しくな！次は…梅田』

斉藤は五十音順で自己紹介を進めて行き、俺の番が回ってきた。

『ハイ！次は高橋。』

『高橋優馬です。趣味は競馬です。一年間宜しくです。』

…パチパチパチ。今までで一番短い自己紹介のせいか、拍手まで少し間があった。俺は自己紹介だの自己アピールだのそういった類の行事は苦手だった。

『出ました！最短記録！7秒！』

斉藤はウケ狙いなのかボケてきやがった。クラスは苦笑し、斉藤は赤面していた。

『次は…田中』

…反応が無かった。

入学早々で席順など決まっていなかったたので席は適当だったたので、誰が誰の後に発表するのかわからなかった。

まあ大抵同中の連中で固まって座っていたたので、クラスは田中って誰？と言わんばかりにガヤガヤしてきた。

『おい。田中！お前の番だぞ！』と俺の方に近づいてきた。

『…おいおい、俺は今自己紹介したじゃねえか。こいつまたボケるのか！？簡便してくれよ。…』

と俺の不安は一瞬の事で斉藤は俺の横を通り後ろの奴に話しかけていた。どおやら俺の後ろの奴が田中らしい。

田中は寝ていて、全然聞いていなかった。斉藤が肩を叩いたせいか、ビクツツとして目覚めた。

『…！！』俺の高校生活は終わったと思った。

入学式の時に肩がぶつかってもめた奴が田中だった。

『触んじゃねエ！！』

田中の突然の叫びにクラスが静まり返り。俺も不覚ながらびっくりしてしまった。

『田中！どおした！機嫌でも悪いのか！？』

『うつせえ！話しかけんな！眠いんじゃ』と言い田中はまた眠りに付いた。

斉藤も悟り、これ以上は突っかからなかった。

『田中の眠りは妨げるな！彼が田中です。いきなり良い事を学びましたね。』

斉藤は上手くクラスをまとめ、シーンとしていたクラスに笑いが飛び交った。

『田中の次は…土屋。』

『土屋光。ヒカリやのーてヒカルな！漢字のままやと女みたいな名前やけど最高に男前さかい女と間違われた事はありません！皆よろしゅー！』

自分流の方言を使い、普通に面白い奴だった。クラスにも一気に溶け込み土屋の事を知らない奴も笑っていた。

『土屋はおもしろいなあ！その面白さ半分先生に分けてくれ！』

『有料でツセ！？』

『こりやまた…お高く付きそうで…』

土屋は斉藤とも打ち解けていた。

『先生には土屋の才能を買う金は無いので…次…中村』

土屋の自己紹介からクラスが楽しい雰囲気になり、ラストの渡辺まで詰まる事なく進んだ。

他の高校は知らないが、この高校ははじめの日の授業は全て学級の時間がとっており、自己紹介の後には寝ててもよし、クラスの子と話しても良しと、かなり楽な高校である。

俺は同中の奴と少し話し、眠くなってきたので眠りに付いた…

キーンコーンカーンコーン。

チャイムの音で目が覚めた。

『…ううう。良く寝た。一時間目終了かあ…』

と時計を見てみると昼飯の時間だった。

『…やっべえ。めっちゃ寝ちまったよ…』

昼飯など持つて来ていなかったの、購買に買いに行き、食い終わったらまた寝た。

初日のせい、小学校、中学校と寝てばかりの生活をしてたせい、とにかく昼飯を食った今、眠たくて仕方なかった。

『高橋君：高橋君：』

眠っていると俺を呼ぶ声が聞こえた。

『え？…ん？…あ！悪い。』

ようやく起きた俺は、声が現実と気づき前の女の子に謝った。

『これ、みんなの連絡簿らしいから後ろの席の子にまわして。』

『あ…ああ』

プリントを一枚取り、残りを後ろに回わそうとした。

『……！…おいおい、後ろの子ってあいつじゃねえか、最悪だ……』
後ろを見てみるが、奴はやっぱり寝ていた。

『田中…おい…田中…』

俺は何故か小さい声で、呼びかけた。やっぱり起きそうに無い。
仕方ないので俺は、田中の肩をゆすり起こした。

『うるせえなあ！触んじゃねえつつてんだろ！』

田中が俺の手を思いつきり払いのけた。

ガツツシャアアン……！

『イテッ……！』

田中が俺の手を振り払ったときに横にあったガラスに俺の手が当たり、割れてしまった。

俺としては最悪意外何でもない。

腕を2、3箇所斬り、血がポタポタとたれ落ちた。

流石の田中も同様していた。

『わりい。マジわりい。大丈夫か！？』

『ああ。大丈夫だ。気にすんな。』

全然大丈夫じゃねえ！とぶん殴りたかったが何故か田中の謝罪は心がこもっている気がした。

斉藤が放っておくはずも無く、走ってこっちに来た。

『高橋！！！！大丈夫か！！！！！！』

齊藤は急いでハンカチを取り出し俺の傷口に当てた。斬り所が良かったのか、見た目より痛くはなかった。

『もお大丈夫です。』

『何が平気だ！！血が出てるんだぞ！！』

自己紹介の時の齊藤とは別人で、真剣さに圧倒された。

『は……はあ……』

周りのクラスの先生や、生徒が何が起きたんだと教室から顔を出して見ていた。

おそらく、大半の先生や生徒は荒れた生徒がガラスを殴って割ってしまった……そお考えているだろう。

実際は違うが、第三者の目にはそんな感じにうつっていても仕方ない。

『……最悪だ、皆こつち見てるよ……』

俺は手を怪我した事より他の先生や生徒から目をつけられる方がよっぽど厄介だった。

『誰か！保健室に連れてってツてやってくれ！先生は周りの教室に事情を説明してくる。』

土屋が立ち上がり、俺の元に来た。

『俺がつれてきますわ。高橋、大丈夫か！？』

『ああ。悪いな。』

『土屋、ありがとな！保健室の場所わかるか！？』

土屋はうなずき、俺の肩を組むように自分の肩にまわした。

『田中……お前も一緒に行ってやれ！』

齊藤は田中にも一緒に行くように言い、周りの教室に状況を話しに言った。

『じゃあ汚した方俺が持つからそつち側頼むわ！』

と土屋の言葉にああと返事し、俺の手を肩に回してくれた。

どおやら一番冷静なのは俺らしい。

足を怪我したのなら二人が肩を貸してくれるのも理解できるが、腕

を怪我して、肩を借りている。

かなり変な光景で妙に恥ずかしい気分だった。

渡り廊下くらいに来て俺はもおいいだろうと、腕を二人の肩からはずした。

『おい！勝手にほどくなよ！』

土屋がちゃんとした日本語を話した。

『あのなあ…わりいけど俺が怪我したのは手で足じゃねえんだ。』

『…』

『…』

『…』

少しの沈黙を挟み三人は爆笑した。俺も怪我の事など忘れてただただ笑えた。

土屋も田中も腹を抱えて笑っていた。

保険室について見てもらうと、バンソウコウ4枚で処置終了。

その内治るでしようと言われた。

教室に戻ると、斉藤に状況を話し、何でもないと伝えた。

さっきまでの殺伐とした空気が嘘のように30分後にはガヤガヤと何事も無かったかようになっていた。

俺は多分、斉藤が上手く周りの教室や生徒に話してくれたおかげだと、被害者ながら感謝した。

6 現目かが終わり、帰宅の準備をしていると、土屋が帰りにカラオケでもいかへんか？と俺と田中を誘いに来て3人で出かける事にした。

『野郎3人でカラオケはねエだろ！』

『田中に同意！！』

『俺の美声きかそおとおもたのにな！じゃあファミレスにするか！』
俺たちは5時間くらいファミレスで騒ぎ、今日初対面とは思えないほど、語りまくった。

明日も学校だしそろそろ帰るか土屋と田中と別れて帰宅することになった。

俺は一人になるとチャリをこぎながら綺麗な星空に向かって全力で……高校初日サイコー！！！！……と叫んだ。

『おい！優馬！早くしねえと遅れるぞ！！』

五右衛門に引っ張れた。

『おお！わりいわりい！春休み明けで頭まだ回ってねえや！！』
キーンコーンカーンコーン！！

『やべえ！！』

俺ら教室に向かって走り出した。

『コラア！高橋ツ！土屋ツ！田中ア！貴様ら初日早々社長出勤力ア！！後で俺のところに来い！！』

『優馬がボケてるから斉藤に呼び出しじゃねエか！』

『ハハハ。初日からついてねえなあ。』

『わりいって！ジューズおごるからさ！付き合ってくれ。』

『あいあい！』

こおして俺の高校生活最後の年が始まった。

『班決め』

『3年4組の担任になった斉藤隆です。もお知ってる人がほとんどだと思うが最初に自己紹介をするのが決まりだから、まあ適当に聞いてくれ！そして今年初めて俺が担任になった生徒は最後の年に俺が担任で超幸運だ！！さあて本題に入るぞ！今日からお前らも最上級生だ！俺もお前らと一緒にこの高校に来て3年目だ！俺は今年で卒業じゃないが最後の1年楽しく過ごして生きたいとおもう！勉強を頑張つて良い大学に行くのも人生！青春時代を満喫して高校最後の思い出を沢山作るも人生！俺は勉強も大切だとおもうが、最後の仲間との思い出はもっと大切だとおもってる！だから、悔いの残らない一年にして欲しい！以上だ！』

担任の大声での挨拶が終わった。

初日は新入生を迎える入学式がある。くそ暑い体育館に集合して新入生を拍手で迎え、校長のくだらない挨拶を聞き、新入生代表の嘘の公約を聞いて終了。どこの学校でも一緒だとおもうが、あまりに教科書通りで最高につまらない。俺だけじゃなく恐らくほとんどの生徒がめんどくさいと感じているだろう。そんな俺らの思いを無視するかのよう担任が言い放った。

『よし！そろそろ入学式の時間だ！本来なら番号順に並んで皆で一緒に行くのが普通だが、俺は教科書どおりと言うのが大嫌いだ！そして無断欠席や遅れてくる輩は居ないと思っている。だから各々各自9時半までに体育館に集合する事！体育館では出席番号順に座っていてくれ！』

俺は1年2年と斉藤が担任だったからこいつの適当さは知っていたから何とも思わなかったが、斉藤が初めての生徒はガヤガヤと話していた。

生徒の気持ちを分かる良い奴と言う意見もあれば、今年は大学受験もあるのにこんなふざけた奴で良いのか…と意見もあり、教師と言

うのはつくづく大変な職業であると俺は思った。

皆が体育館に向かい、俺も五右衛門や光と一緒に体育館に向かった。

『おいおい！今年のクラスの女マジで可愛い子多くねエか！？』

『ああ！確かに1、2年の時は酷かったからな…』

『カカカ！ちげえねえ！』

今年こそはこいつらじゃなく異性と過ごすんだ！！と3人は誓った。

…実を言うと…五右衛門は2年の時に一度付き合った彼女が居た…彼女と言うより…まあ彼女だ！高2の9月…いつもの様に3人で昼飯をしていると、違うクラスの辻本真理と言う女から五右衛門に手紙が渡されたのだ。

『明日の昼休みにまた来るからその時に返事頂戴！』

『エ！？ア…アア』

『じゃあまたね…！』

辻本真理…通称マリア…学校一とは言わないがかなりの美人だった。当然俺と光は食いついた。五右衛門は俺と光の攻撃を全て受け止め、手紙だけは…このマリアからの手紙だけは…と死守した。結局、五右衛門の願いは届かず3人一緒に手紙を見る事にした。

【田中君。突然の手紙ごめんなさい。びっくりしていると思うけど1年の時からずっと好きでした。2年も半分過ぎて9月…このまま3年生になっちゃったら就職や進学で忙しくなって言えないまま終わっちゃいそうだから、気持ちを伝えようと決めました。もし良かったら残りの半分に一緒に居たいです。田中君さえ良ければ付き合ってください…（＊愛O V＊W）】

『…』

『…』

『だああああ！！っしやあああ！！！！ついにこの時が来た…1年の時から視線は気になっていただけとまさかと思い、言えなかったのだが…とうとう愛の告白を受けてしまった！！』

冷め切った俺と光を無視し、五右衛門はハイテンションだった。

親友ならお前らも喜んでくれよと言う五右衛門、馬鹿言え…親友だ

から素直に喜べないんだ！！そりやいつかは…喜んでやるけど…今は無理だ！

と俺も光も同じ気持ちだった。

…次の日の昼…

三人は腹は減っているがご飯が喉を通らない状況だった。特に五右衛門。昨日の時間を過ぎてもマリアは来なかった。

『ダハハハ。やっぱ昨日のは罰ゲームみたいやのお』

『ハハハハ。マツ！マリアに限って五右衛門を好きになる事は無いな！！俺や光ならともかく！！』

『ハハハ。そりや言えちよるわ！！』

約束の時間を過ぎても来ないのを心から喜ぶ俺と光。目をウルウルさせる五右衛門。

『田中君！遅くなってごめん！！』

！！！！！！！！

3人とも背筋がツビクとなりドアの方を見てみると…女神…いやマリアが居たのだった。

『ちよつと昼休み部活の用事で忙しいから、返事の答えがOKだったら放課後、中庭に来て！時間は…4時で！じゃあ待ってるね！！』
つと春の桜が散るように、良いたい事だけ言って走り去ってしまった。恥ずかしかったのか…本当に忙しかったのか…

五右衛門は一気にハイテンションになり、俺と光は一気にテンションダウンだ…

まあ、何だかんだで俺と光も放課後、一緒に中庭について行つた。

五右衛門の要望で30分前から中庭で待機している。もちろん五右衛門は一人、俺と光は少し離れたところからの見学だ。

悔しい気持ちが無い訳ではないが、流石に親友の恋の邪魔だけはしてはいけないと俺も光も心得ていた。

4時になつてもマリアは来る事は無くとうとう4時半になった。俺と光も流石にコレは騙されたかもしれないと、少し五右衛門がかわいそうになつてきた。と言う俺らの思いを断ち切るかの様にマリア

が走ってきた。どおやら五右衛門に遅れてごめん。と謝罪している様子だった。

離れたところにいたので、声が全然聞こえなかった。

少しすると、もお一人女の子が来た。なんやら3人で話はじめた。少し話すと二人は帰ったのかどつかにいつてしまった。2分後に五右衛門は膝から崩れ落ち、俺らが隠れている方を泣き出しそうな顔で見つめていた。

俺も光も流石にもお話は終わったと思い、五右衛門の方に行った。

『おう！どおしたん！？向こうから告つて来たんだし上手く行ったんだろ！？』

『せやせや！』

『アア…告白もされて…付き合う事になった…』

ちっ！と舌打ちし、何がともあれ良かったなと俺も光も全く気が付かなかったが、内心自分の事のように喜んだ。

『マテマテマテ…聞いてくれ…付き合うことになったのは…マリアじゃなくて…小沢聡子…』

『エ！？』

『ハア！？』

小沢聡子…通称…ブス田キモ子…以下略…

何で？！どおして！？と中学生の餓鬼がエロい事を問うかのように興味深深で目をキラキラとさせながら状況説明を受けた。

と、言っても俺も光も一瞬で理解が出来た。

五右衛門にマリアから受け取った手紙を俺達に渡し、…裏…と呟いた。

手紙の裏を見ると、…聡子…と可愛らしく書いてあった。

その後登下校、昼飯、放課後デートを毎日して、キモ子とは1週間で別れたのだった…しかも振られて…

『確かによお今回のクラス可愛い子も多いけどそおじゃねえのもチラホラ居るぞ…！』

『せやなあ。例えば…キモ子…！！』

『ダハハハハハハ！！』

三人は昔が懐かしいと入学式の最中にも関わらず大声で爆笑し、後々、斉藤から本気のグーパンチを受けた。

無言で座り続けて25分：入学式も無事に終了した：俺達は無事じゃないが：

10分の休み時間はあつという間に終わり、2現目のホームルームが始まった。

『おおい！ホームルームをはじめるぞお！』

始業の鐘がなつても中々静かにならなかったため、斉藤が吼えた。

『今日やる事は、【班決め】、【係り・役員決め】、その後は班長の指示にて【席替え】だ！じゃあまず【係り・役員決め】をさつさと終わらせるか！俺が黒板に書くから好きな所に自分の名前を書き込め！！かぶったらジャンケンで決めろ！！』

皆が一斉に黒板に書きに行った。そんな中、馬鹿3人は喋っており斉藤の話を全く聞いていなかった。ゆえに皆が何しに行ったのかも不思議だった。ジャンケンしてる奴も居れば、言い争っている奴：

『何やってんだ！？』

『さあ…』

まあどおでも良いやと、また喋りだした。

『よし！意外と早く決まったな！！流石、俺のクラス！優秀だ！…ん？誰か書いてない奴居ないか！！？3人分空いてるぞ！！』

クラスはシーンとなり、流石の俺達も前を向き黙った。

『あれ！？皆書いたか！？俺が人数間違えたかな！？』

と斉藤は一人ずつ名前をチェックし始めた。

今になって3人は状況が理解できた。そう、名前を書いてない3人は俺達だった。

当然、出席番号順にチェックしているため、俺が一番初めに呼ばれた。

『高橋優馬アアアア！！！！』

とてつもなくでかい声で叫び、覚悟していた俺がマジにビビった。

『俺：揉め事嫌いなんだ：最後にあまったところにしようと思つて、あえて書きませんでした！！』

『ふむ、その言う事なら良い。残りは：実行委員！：実行委員！：実行委員！の3つだ！！』

クラスは爆笑したが、俺はたまらなく最悪だった。

『田中と土屋も実行委員だが文句は無いな！？』

『うい。』

『はい。』

二人もしぶしぶ了承した、せめてもの救いが俺と五右衛門と光が一緒の実行委員だという事だ：

俺達の学校での実行委員とは、学校行事に全て参加し、朝早くきて準備し、皆が帰宅後、後片付けもやらなければいけない：まさに囚人だ。

ただでさえ厳しいくて最も皆が嫌がる役員なのに、今年は3年で修学旅行、卒業式まである。

『じゃあコレにて【係り・役員決め】を終了する。5分間の休憩後、次は【班決め】だ。解散！』

多分斉藤がトイレにでも行きたくなつたのだろう。授業中なのに5分の休憩がもらえた。

『実行委員とかマジありえねえ……』

『せやなあ：何が悲しゅうて実行委員なんぞやらないかんのや！』

『いや：意外に捨てたもんじゃないかもしれんぞ：女子の3人を見てみる！！』

実行委員は唯一男子3人女子3人の巨大委員であり、他の係りとかは男女各一人づつ、多くても男女各二人と言うのが主流だった。

大抵こおゆう係り決めって言うのは仲の良い子とペアになるケースが多く、今回も例外ではなかった。

『！！！！！！』

女子三人の名前を見て俺達は心の中で小さくガッツポーズし、ハイタッチした。

3人とも今回初めて同じクラスになる子だが、可愛いだの綺麗だのと結構有名だった。

『さて、そろそろ【班決め】をはじめろぞお！このクラスは42人なので、6人で一班！合計7班にわかれてくれ！ただし！男女各3人づつにわかれる事！！この班は修学旅行とかにも影響してくるから真剣に決める事！！最後に実行委員の人は実行委員班として班を組んでもらうので班長だけ決める事！！質問は一切認めません！以上！』

斉藤が話を終えると、仲の良い連中で相談したり、一気にざわつきだした。

実行委員班とか言う事で勝手に決められたが、どおせ俺達は3人も同じ班になる予定だったので特に問題は無かった。

皆が班を決めている間、俺達は暇なので話していると、実行委員の女子達が来て軽くジコシヨして班長を決めよと言い出した。

結局俺達から言う事になり、出席番号の一番早い俺から言う事になった。

『えっと、俺は高橋優馬！優馬って呼んでくれれば良いから。宜しく。』

さつき斉藤に大声で叫ばれた事もあり、名前の紹介とかしてもしなくても良いのだが一応言っておいた。

『俺は田中洋介！こいつらは五右衛門って呼んでるし、五右衛門でも好きなように呼んで。じゃあ一年間宜しく。』

結局、五右衛門は五右衛門と呼ばれることになった。

『わいは土屋光や！話し方に固定が無いのが特徴！まあ癖みたいなもんやし、気にせんというや！俺の事は何て呼んでくれてもええから。ヨロシユー。』

光も普段となんら変わらない口調で淡々と紹介した。

男性陣が紹介を終えて、女性陣のジコシヨになった。

『私は井上嬉紀。友達とかは皆キキって呼んでるけど好きに呼んで良いよ。よろしくね。』

これまた落ち着いた口調で言われて3人ともついつい…はい…とい
つてしまった。

『あたしは内藤薫。キキと一緒に名前で呼んでくれて良いよ。カオ
ルじゃなくてカオリね。皆カオリンって呼んでるしそおよんで！ヨ
ロシクウ。』

完全なる天然系だ。

『あたしは白鳥羽樹。羽樹って気に入ってるから羽樹って呼んで！
！ヨロスウ』

おじさんたちにはまぶしいくらい元気の良い子だ。

ジコシヨも無事終了し、質問タイムに入った。俺達にとっては合コ
ン感覚だった。

『ええっとカオリンさんは歳なんぼですか！？』

『25でエす。』

『エエエエツエエエ！！！』

『嘘でエす。』

『…』

『ハハハハハ』

光の意味不明な質問で場が盛り上がり、結局ホームルーム中ずつと
話して結局班長は決めれず斉藤の指名でキキが班長になる事になっ
た。

4月16日。新学期が始まって一週間が過ぎた。

『ういっす。遅くなってスマン！』

『おう。』

俺は今日も変わらず五右衛門と一緒に登校した。

学校に着くと光はもお来ており、キキとカオリンと一緒に話してい
た。

『オハハ。』

『オハヨ！』

いつもは俺と五右衛門が最後に来るのだが、今日は羽樹がまだ来て
いない。

『今日はまだ羽樹来てないん!?!』

『まだやのお…具合わるうて休むんちゃうか!?!』

『ふうん』

俺らの班の席はこうだ。

キキ・光

羽樹・俺

カオリン・五右衛門

何か自分の隣の子が休むといつもは狭く感じる机のスペースも無駄に広く感じ、心なしか何か寂しい。

斉藤の話によるとどおやら今日は休みらしい。

『やっぱり、休みたいやねえ。』

『ネ。羽樹ちゃん体調悪いのかな!?!』

『いや、さつき斉藤に聞いてみたら、家の都合で今日は休むみたいな事言ってたぞ。』

『そっかア』

『マッ!明日は来れるやる!!今日は何かポカンと空いてて寂しい感じしよるけど用事ある時はしゃあないしな!それより授業や!1現目は移動じゃけん、はようしな遅れるぞ。』

1現目は科学、科学室での実験だった。実験と言っても蛙の解剖とかグロいもんじゃない。

今日はメタンの生成の実験だった。

メタンは1個の炭素原子に4個の水素原子が結合した分子である。

化学式は CH_4 。

実は、俺と光は科学は結構得意である。

班長のキキは科学が苦手らしく、俺と光をメインに実験が進められた。

『常温、常圧で無色、無臭の気体。人に対する毒性はない。融点は…183、沸点は…162。』

『せやせや、メタンは強力な温室効果ガスでもあつてのお、同量の二酸化炭素の21倍の温室効果をもたらすと言われちよるんやで!』

！」

まさに知らない人にとってはオタクの会話だった。

五右衛門は昔から俺達と一緒にいたせいかなんら変わりなかったがキキとカオリンはポーとして、天然記念物を見るような目でこっちを見ていた。

こんな可愛い子達に見つめられるのはいつ以来だろうと俺も光も二ヤニヤして悪い気はしなかった。

科学の実験は大体2時間くらい取ってあり、終わった班からレポートを提出し、解散だった。

俺達の班は超優秀！俺と光で実験を20分で終わらせ、残りの3人がレポートを書いて、30分で終了した。

科学の先生に合格を貰い、教室に戻って話していた。

『光君と優馬君つてめっちゃ頭良いんだね！！？』

『うんうん！！びつくりした！！』

教室に戻ると、キキとカオリンからのお褒めの言葉がもらえた。

五右衛門はムスツとしていた。五右衛門は勉強はてんでダメで強いて成績が良いのと言えば体育くらいだった。

その点光の場合は賢さにはキレがあるが運動能力のキレはいまいちだった。

俺はと言うと、どっちつかずの平凡キャラだった。理数系は出来るが光と違って文系は全然ダメ。運動も自分の好きなものはできるが、五右衛門と違い、オールマイティではない。

まあ俺達はバランスが良いといえばバランスの良い3人だった。

『勉強の事は光が一番かもな！！』

『かもやない！確実や！』

俺らは、小さい話題でも大きく膨らませ、話が途絶える事はあんまりなかった。あつという間に時間は過ぎ、チラホラと他の班のメンバーが戻ってきた。

3、4現目はホームルームだった。初日以来で久しぶりだった。

『今日は久しぶりにホームルームの時間をとった。3年になって一

週間がたったわけだ。班員の奴らとも仲良くなってきたみたいだし、今日は班で1年間のテーマを考えてもらおうと思う！一言でテーマと言っても分かりにくいから…まあ何でも良い！例を上げるなら、【仲間】とか【絆】とかそんな感じで大切にすることを考えて欲しい。それを好きな言葉で言い表せれば良い！」

斉藤の不十分な説明で、微妙に混乱気味のクラスだったが、各々各自で少しずつ理解した。

まあ要するに、簡単に言うとな自分の班で何か好きな言葉を考えてと言う事だろう。

『また、訳分からん事言い出しよって…』

『好きな言葉かあ…斉藤が言ったみたいに仲間だとか絆ってありきたりすぎる事ない！？』

『キキに同意！』

『あたしも！』

『せっかく各班で決めるんだからこの六人！ってのを強調したいよな。』

『せやな。仲間だの絆だのは班やのおてクラス全体に対していつちよるみたいやしのお』

『それにしても今日羽樹が休みつてのは痛いな…』

『だよな…どおせなら6人全員で決めたいよな。』

俺らは、班員が一人欠席しているので、明日提出ではダメかと斉藤に聞きに言った。

意外にも答えはダメだった。どおやらコレは班決めの時、初日に決めるはずだった事だが、皆、良く分からないまま決めても良いのが出来ないと思い、斉藤が学年主任に頭を下げ、4組だけ一週間延期をもらったのだった。斉藤から詳しい話を聞かされて、俺らはしぶしぶ席に戻った。

『ダメかあ。』

『羽樹も気に入る奴を考えるしかないな…！』

『うんうん。私が思うに、最後の高校生活だし、皆実行委員っての

もあるし、今年の出来事は一生忘れられない思い出になると思う。』

『せやな！友情…思い出…』

『願い系も込めた方が良くないか！？』

『願い系！？何それ！？』

『良く分かんけど、願い系！』

この班員が珍しく集中して考えている中、五右衛門が言い出した。

『あ！コレ良いかも！どんな時も味方！…永遠の友達って感じかな』

『良い！！！それ良いと思う！！』

『たしかに、わるうないな！』

五右衛門からまさか名案がでるとは誰も思ってたなかった。結局、皆同意で五右衛門の提案に決定！

友達なら間違った時はおかしいぞと批判してやれと言う人も居るかも知れない。

いや、多分大半の人はそお言うだろう。親、教師にそお教えられてきた。

本当の友達なら…本当に相手の事を考えているなら…悪い事は悪いと言ってやれ！！

でもやっぱりそおは思わない。

間違った事したら味方になってくれる人は少ない…そんな時に友達が味方になってやらないと本当の友達だとは思わない。

どんな時も味方で居て、間違っていたら味方のまま解決する。

友達だからこそ間違っている時にも味方するべきだと思う。

だって正しいときにはだれだって味方になってくれるじゃん…

そんな思いを胸に…

… friend of eternity …

コレが俺達の今年の公約と今後の願いである。

『穴掘り！？』

『はい！そろそろ意見はまとまってきたかあ！？授業も残り30分になってきたぞお！！できた班から順にコノ紙に書いて提出してくれ！！』

斉藤の大声でクラスは一瞬静まりかえった。もお11時半だった皆集中していたせいか時間を忘れて没頭してたらしい。

俺達はお決まったので斉藤に画用紙を貰いにいき、油性マジックで堂々と書いた。

俺達に続くように次々と画用紙を貰いに来て、一つの班を残して皆が提出した。

『皆、結構考えたみたいだねえ』

『そらそおやる！斉藤画用紙に書かせたうちゅう事はどっかに貼るとおもうぜ。』

俺らの他の班は…

…夢に向けて…

…最後の道を共に…

…腐れ縁…

…友達はおお一人の私…

etc…

どれも意味深い内容だった。

ラスト10分。ようやく最後の班も提出し、全ての班が時間内に終了できた。

『よおし！全班出し終わったな！！この画用紙は学年主任に提出する！！残り10分でもう一枚コノ紙に書いてもらう』

クラスがざわつきだした。何で何枚も書く必要があるんだろうと言う意見と、もう一枚の紙のようなものは見慣れない紙で何だあれ！？と言う意見も混じっていた。

騒ぎ出した生徒に斉藤としては珍しく皆が納得するような理由を話

し出した。

『何枚も何枚もめんどくさいのは分かる！けどおしてもコレだけは譲れん！！お前らは俺が持つ最初の卒業生だ！俺にとってもお前らにとっても決して忘れる事の無い年にしたいと思っている。今この時間を使って皆で書いた内容！意味！思い！それを卒業まで……いや、卒業してからでも忘れて欲しくない！！少なくとも今年中は忘れないで居て欲しい！忘れないと誓えるかッ！？』

齊藤のいきなりのクソ暑いセリフに皆がお利巧になった。

『鎌田！お前の班の言葉、今年中忘れず居られるか！！』

『はい。忘れないと思います。』

『渡辺！！お前も忘れない自信があるか！！』

『頑張ります。』

『皆も忘れるなよ！！覚えている自信が無い奴は拳手しろ！！』

……こんな時に誰が手を上げる……

当然誰も手を上げるものをおらず。全員今日決めた言葉を忘れない事を誓った。

『よし！流石は俺の生徒！仲間！今の誓いをお前らに証明してもらう！』

静かだったクラスがまたまたガヤガヤしだした。

『今から書いてもらう紙は特殊な素材で作ってあってな！！何ヶ月も何年も保存しておける素材で作ってある！故に高い！！が俺が自腹で7枚購入した！この紙にかいてもらってそれを昼から校庭に埋めに行く！！まあタイムカプセル1年間バージョンだ！！』

みんな大賛成だった。俺自身、齊藤にしては良い事を提案したと思う。誰からの異議もなく皆齊藤の言うとおりに紙にさっきの言葉を書き、提出した。

キーンコーンカーンコーン！！ちょうど授業も終わり昼飯の時間になった。

昼飯中は大体男女別々で食べている。そりゃそあだ。同じ班になったとはいえこの班のメンバーだけが友達ってわけではない。

女子は女子のグループで固まって食べ、俺達は……まあ3人で食っていた。

3年になってからは、天気の良い日は屋上や、中庭など外で食うケースが多い。

今日は屋上で食う事にした。この高校の屋上は意外と良い場所である程度の屋根があり、実際雨の日でも濡れる事はまず無い。

そして、昨年の卒業生達もココを使っていたらしく、校長室で昔使っていたソファーと落書きまみれの机が付属品としてはじめからあった。

今年の3年は珍しく、屋上を使う者は俺達意外居ない。よって、ソファーは使ったら自分達で中に戻さなければならぬ。屋根の下で雨が降っても濡れないのだが、湿気などでカビたり、腐ったりすると捨てなければならぬから、出したら戻す！を常に心がけている。

『ああ重てエ！！』

『今日天気めつちや良いしイス干そうぜ！！』

『せやなあ！！このオンボロ大切に扱ったらなわいらが卒業するまでもたへんで！！』

『ハハハ！だな！今の2年も使えるくらい大切にしねえとな！じゃないと卒業式の日に粗大ごみを4Fから3人で運ぶはめになる！』

『ダハハハハハハ！！』

俺達は、このソファーを自分達の愛用椅子として大切に使う事にした、ガムテープでの補正の後を見ると、恐らくコレまでの卒業生もそおやって大切に使ってきたのであろう。

『今日は皆、焼きそばパンとメロンパンか！！』

『ウお！3人とも同じじゃん！！』

『力カカ！3年も一緒に飯くってたらそないな事もある！』

俺達はおも今年で3年目の付き合になる。振り返れば色々な事を共に経験してきたがどの思い出も昨日の事のように思える。

『そお言えば、昼からタイムカプセル埋めるらしいなあ』

『斉藤はそお言っただけと授業としては数学と世界史だろ！？どっ

ちも斉藤の担当じゃねえし放課後になるんじゃない？」

『放課後とか簡便してほしいのお…貴重な青春の時間はたこおつくで！』

『ハハハハ！アホか』

まあ流石の斉藤も他の先生の授業をサボらると言う事は無いだろう
と思い、恐らく放課後に皆で埋めるもんだと思っていた。

キーンコーンカーンコーン！

『やべエ！…もおこんな時間かよ！…！』

『優馬早くそっち持て！！ソファー中入れるぞ！！』

『OK！光ドア開けてくれ！』

『ういうい！OKよお！』

話していると時を忘れてつい盛り上がってしまう。楽しい時は
短く感じ、辛い時は長く感じる。アインシュタインの相対性理論は
実に素晴らしい事だとおもった。

俺達は急いで教室に戻り、席に着いた。

『遅刻だぞ！！』

つと言ったのは数学の先生ではなく斉藤だった。

『あれ！？今日って数学じゃないんすか！？』

『高橋：お前話聞いてなかったのか！？昼からタイムカプセル埋め
るって言うておいただろ！？』

『それは聞いたけど、てつきり授業あるし放課後にやるもんだと思
つてて…』

『ふむ。まあ言いたい事は分かるが遅刻の理由にはなっていない！』

『…さーせん。』

『まあいい！今日の昼からの授業は俺の授業、哲学と交換してもら
った。だから木曜の哲学が数学になり、金曜の哲学が世界史になる。
わかったな！？』

そんな一方的な意見で納得するほど最近の高校生は理解できる兵隊
ではない。当然、ブイングが飛び交い、斉藤も流石に自分の勝手
な判断で生徒を巻き込んだ事に少し考えていた。

『よし！お前らの言い分も分かる！だからといって昼からの授業は
もお先生方に話したので変えられない。それを納得してもらうため
にお前らにもお得な条件を出す！！』

クラス内がしてやったりと勝利の笑みを浮かべていた。斉藤の一方
的な意見だが所詮先生と生徒。従わせようと思っただけだが斉藤
は先生という権力で俺達をねじ伏せる事は無かった。

『まずタイムカプセルを埋める場所を班員で話し合って決める！そ
の後その場所を地図にして俺に提出する！その地図は俺が責任も
って預かる。その後は班員協力して1メートルくらい穴を掘る！そ
の後、埋めて穴をしつかりと元に戻す！故にどこに埋めたかどおか
分からなくならないタメにも地図はかなり正確に書くように！！』
『いいいい！！とクラスが返事をし、斉藤の言っていたお得な条件とや
らに耳を向けた。

『コレだけの作業に昼から放課後までの時間はまずかからない！本
来、あまった時間は実習したり、俺の授業をしたりするもんだが、
今日は俺のわがままに皆を付き合わせている！だから終わったら帰
って良いぞ！！下校の時間より早くても帰宅してよし！！』

やったアアアと素直に喜ぶノータリンが殆どだったが、クラスに一
人二人居る優等生はその言葉をうのみにしなかった。

『先生！けどそんな事を先生の独断で判断して決めて良いんですか
！？当然他のクラスの生徒は皆、授業ですよね！？』

『ふむ。もちろんさつきも言ったように本来なら、自習してたりし
ないといけない。でもまあコレは俺とお前らとの約束だ！帰っても
良いし好きにしてくれて良い！責任は俺が取る！』

『大丈夫なんですか！？先生下手したらクビになりかねませんよ！
？』

『ハハハ！岩田！お前の気遣いはありがたく受け取っとく。だが若
造は若造らしく他人の心配何かせず無鉄砲に生きる！』

『……』

とまあクラスでかなり賢い岩田の意見でも斉藤は自分の言った事を

曲げる事は無かった。

『よし！そおと決まったら班で場所決め開始！！』

斉藤の声でクラスが一気にうるさくなった。普段のつまらない行事には、乗り気も無くダラダラと適当な奴も居るが、そお言う連中も楽しそうな行事には意外と食いつき、意見を出したり進んで参加しだす。俺もその一人だ。

『今日は殆どが班での授業になったねえ』

キキはどこか寂しげに呟いた。多分、羽樹が休んでいるせいであろう。班長のキキとしてはちよつと複雑な感じだった。

『まあ羽樹には後々びつしり報告すりゃあええ！』

『光の言う通りだな。羽樹なら状況も理解してくれると思うし、大して気にしないだろ！』

と言う五右衛門と光の意見を聞いても、キキと力オリンは微妙に不安そうだった。俺にはさっぱりわからんが、女と言う生き物は自分が居ないときに色々な事が決まって、それを後から聞かされるのは置いてきぼりになった感じがして、寂しい感情を抱くらしい。

中にはそんな事を全く気にしない女性も居るが年頃の子はノケモノなどに結構敏感だ。

俺を含めて男3人には理解しがたい事だった。逆にめんどろな事は班員がやってくれたと喜ぶ奴も居るだろう。

女は深く見るが、男は遠くを見る。

男にとっては世界が自分で、女にとっては自分が世界。

とまあ俺が簡単に語れるほど女と言う生き物は単純ではない。俺より賢い光はきつともつと羽樹の事を分かっているだろう。

『しゃあないのぉ。キキや力オリンが言うように羽樹が気にしたら多分わいらの班は終わる。わいら5人は仲が良いままでも一人欠けたら絶対に終わる。今日考えた言葉も多分無駄になると思う。そこで提案や！……』

まず、コノ時間はコノ時間でタイムカプセルを埋めないといけない。とりあえず穴を掘ってその穴には何も入れずにまた穴を埋める。タ

イムカプセルはそのまま教室に持ち帰る。その後、皆で帰宅して、羽樹の家に行く！それで羽樹を呼んで皆で一緒にもお一度埋めなおす！！

と言う提案だった。

『でも、それだともし羽樹の家に行つて居なかつたり、まだ用事で忙しかつたらどおするん！？』

『優馬：あほやのお。それならそれで俺達で学校に戻つて掘り返して羽樹が暇になるまでどつかにタイムカプセルを隠しときゃあええんちゃん！？』

『ア！でも羽樹の家知つてる人居るの！？』

『エ？おんどれらしらんのか！？』

アハハ：とキキとカオリンは苦笑いした。

『まあええ！羽樹の家なら斉藤にききゃあ分かるやろ！』

とまあ色々意見は出たが、最終的には皆それで行こうと同意した。とりあえず、埋めるのは適当で良いが、埋める場所はかなり正確に覚えておかないと羽樹を連れてきたけど何処に埋めたのか分かりませんでは話にならない。

俺達は夜暗くても絶対にわかる所に埋めることにした。校庭の壁には木が埋めてあり、端から3本目の木の前方にキキの歩幅で20行つた場所に埋めることに決定した。

善は急げ！！早速斉藤に作業かからせてくれと、埋める場所を書いた地図を渡した。

『井上の班が一番最初か。じゃあ倉庫のスコップを使って作業にかつてくれ。くれぐれも怪我だけはしないように班長が責任持つ事！俺も全員が外に出たら行くから』

キキは斉藤に倉庫の鍵を貰い、俺らのところに戻ってきた。

『もお先にやつていいってえ』

『よかつた、じゃあ早速掘りに行くでエ！！』

と言っても掘るのは俺と五右衛門。五右衛門は運動神経も良いし全然平気そうだが俺は後日の腰痛が不安だ：

校庭に着くと、キキは何度も20歩をはかり、その後掘る事になった。

指示だしは光とキキ。

掘るのは俺と五右衛門。

応援はカオリン…

何とも不満な役割である。まあ文句を言っても女の子に掘らせるわけにもいかんし、俺が光の様に上手く指示を出せるとも思えないのでしぶしぶ納得。

穴は腐敗などの影響で深い、浅いは斉藤に見せて合格なら埋められる。深すぎると雨水が溜まり、入れ物ごと腐敗してしまう。逆に浅すぎると運動部などが使ったり、雨や雪でぬかるんでいる時に出てきてしまつては危ない。

光の計算では約1メートル弱だろうとの事だ。俺も五右衛門も必死で堀、クラス全員が出てくる頃には丁度堀終わった。

『御疲れ様あ』

可愛い声援に少しだけ疲れが飛んだ。

『だあ…疲れた…』

『五右衛門と違って俺はマジに死ぬかと思つたわ!!』

『お疲れお疲れ!手洗つてきいや!キキとカオリンは斉藤よんできてくれや!』

俺と五右衛門は手をあらつて水をガブ飲みし、一服していた。

一方キキとカオリンは斉藤を呼びに行った。…見事に一発合格。

『おお!良い感じに掘れてるな!よし!箱を貸してみろ!』

と言われ、班員皆…やばい…と思つた。光は箱を渡すと斉藤は穴に降りた。

『こんな感じで良いな!俺も暇だしお前らは一番早かつたし埋めるの手伝うぞ!!』

『いやいやいや、良いツすよ!俺らでできますから!』

即座に五右衛門の拒否がはいる。

『先生は他の遅い子達を手伝つてあげてください。』

カオリンも必死で拒否った。

『まあ良いじゃねエか！！どおせ俺は全員のを手伝うつもりだ！』
齊藤の好意は普通ならかなりありがたい事だが、俺らの状況としては最悪だった。本来穴だけ掘って、何も居れずに土だけ埋めて、別の所に箱は隠しておく予定だった。

そんな俺達の内心を踏みにじるかの様に齊藤は気合を入れて穴を埋めだした。

『ウオラア！田中！手伝え！！』

『ア…アア。分かったよ。』

五右衛門も仕方なく埋めることにした。結局五右衛門と齊藤で全部埋めてしまい、もとどおりの状態に戻った。

『田中アア！！お前体力あるなあ！！』

元通りになってしまい、いや、箱が埋まっているから、元通りではなくなかなりマイナスである。皆、作戦失敗と…浮かない顔だった。カオリンにいたっては、今にも泣き出しそうだった。

『先生。お疲れはん！ほなもおわいら帰って良いでつしやる！？』

光は意外と普通だった。自分は掘っていないから！？また俺と五右衛門が掘れば良いから！？俺と五右衛門が…

『おう！お前らもお疲れさん！じゃあまた明日な！ゆっくり休んで腰痛だけにはなるなよ！！』

『分かってま！！ほなおさき。』

俺らは倉庫裏にスコップを隠し、再び手を洗って教室にもどった。

『おい！どおすんだよ！！また掘るのか！？』

『せやな。とりあえず羽樹を呼んで掘ってまた埋める！別に何もかわつとらせんで！？』

皆が深くため息をついた。特に俺と五右衛門は簡便してくれよ…と思った。

『羽ちゃんの住所はさっき先生から聞いたし、このまま行く！？それとも家に一回帰って着替えてから行く！？』

『あたしはどっちでもいいよお』

『わいもどつちでもええで。』

『じゃあこのまま行くか!』

俺も五右衛門も、もぉどおにでもなれって感じだった。

帰る用意をして皆で羽樹の家に向かう事になった。キキの話によると、学校から2kmくらいでそんなに遠くないみたいだ。

光とカオリンは電車通学だったので光は五右衛門の後ろカオリンは俺の後ろにのって出発した。

まあ2kmくらいだし、後ろにのってるのはカオリン大して重くない。俺も余裕だとおもっていたが、橋越えをしなければならぬらしい。

尋常じゃない坂にもかかわらず、キキは普段上っている事もあり軽く登っていった、五右衛門は流石だ…光を後ろに乗せてるのに普通だった。

俺はというと…カオリンにしっかり捕まってて…と言い立ちこぎして何とか淀の坂を越えた。

橋を超えるとすぐだった。橋があるぶん結構大変だが距離的には遠くない。

住宅街に入り、白鳥と言う家を探した。家は沢山あり、一つ一つ見回ってようやく白鳥と書かれた家を発見した。

『玄関に羽ちゃんの名前もあるしここであってるね。』

『じゃあキキとカオリンで羽樹呼んできてエヤ!』

『エ!?!うちらで!?!』

『何でやねん!お前ら古い友人じゃろが!』

『そおだけど…羽樹が引越してから、遊ぶときはいつもうちカオリンの家だったし…』

『んなこと知るか!わいらがいった方がびっくりするちゅーに!』

『んだな。多分おばさんが出ると思うし、俺らが行くより顔見知りのキキとかがいった方が言いと思うぞ』

『うむうむ。』

こおゆう時の俺らの決断力は大きかった。一瞬で話を合わせられる

と言うか…まあ言い逃れが上手いだけの事だ！

ちよつと恥ずかしそうにキキとカオリンが呼び鈴を鳴らした。
ピンポン。。。

『はあい！今開けます！！！』

中から出てきたのは高校生の子供を持つ親とは思えないほど若く美人だった！！！

『あ…キキちゃんにカオリちゃん。久しぶりい元気にしてたあ？？』

『はい。羽ちゃん居ますか！？』

『居る居る。ちよつと待つててね！！』

美人さんが羽樹を呼びに行っている間俺達は外で待つことにした。

『えらい、美人やのお羽樹のママさん。』

『うん。ありややべえな。』

『エ！？今の人？ママさんなんて言ったら殺されるよ…あれは羽樹のお姉ちゃんだよ。』

『なにい！！どおりでめつちや綺麗なはずだ…』

『ありやそとお男食ってるぜ…』

五右衛門がキキたちに聞こえない程度に小さい声で言った。

『ダハハハ！！』

ガチャ！！

『あれ！？皆どおしたの！？』

羽樹が出てきた。俺達は制服以外の羽樹を見るのは初めてだった。びつくりするほど綺麗だったのでまたお姉さんが出てきたのかと思った。

最近は慣れなれしく班員と話してるけど冷静に見るとキキもカオリンも羽樹もクラスで5本指に入るくらいの美人だった事を改めて実感する俺と五右衛門と光だった。ココでボーっとしてただの気持ち悪い野郎になってしまう。俺は何気なく声をかけた。

『よう！今日はサボりか！！？』

『違う違う！部屋ん中りホームするから手伝ってたの！！』

『んなもん、休みの日にやれちゅーに…』

『今日は父さんが休みでさ、それで姉貴も休みだし母さんは専業主婦だし！うち意外皆家に居たからうちも休んで手伝ってたって事！』
『んでもお終わったの！？』

『ん！？うん！それより五右衛門！なんで制服泥まみれなの！？』

『ダハハ。それは今から説明する！』

とりあえず近くの公園に行き、光を中心に話を進めた。

『そっかあ。ありがと…結構そゆうの嬉しい！！』

皆、こおしてよかったと胸をなでおろした。

『でも、今の話だと、斉藤さんに埋められちゃってまた1メートル近くほらないといけないんじゃない！？』

少しの沈黙が流れていきなり光が笑い出した。

『ハハハハ！安心せえ！俺が掘る！』

『掘るって言ってもお前一人じゃ無理やし、まあ俺と五右衛門も手伝うわ！』

『優馬の言ってる方が正しいな！俺と優馬でもかなりきつかったのにお前一人じゃとてい無理やぞ！？』

『任せときいて！お前らにはどの道もう一回皆で決めた場所を掘ってもらわなあかんしのお！そんな時頼むわ！』

とりあえず光の自信満々の発言で掘りなおしの話は打ち切りとなり、新しく埋める場所を考える事になった。

『あたし良い考えあるんだけど！！』

『お！何や！ゆうてみい！』

『校庭じゃないんだけど良いかな！？』

『斉藤はダメって言うと思うけどコレは俺らが決めることだし何処でも良いんじゃない！？』

『じゃあ中庭にさめっちゃ大きい木あるじゃんね。その横に埋めない！？』

『うんうん！良いと思うよ！』

『私も力オリンと同じ！良いと思う』

『せやなあ。確かにええ考えやけど、あそこってコンクリやなかつ

た！？』

『殆どはね！でもその木の周りだけは土と砂利だから掘れない事もないよ！！』

『大分薄暗くなってきたし、とりあえず行ってみるか！！』

『だな！』

俺達は今度こそ本当のタイムカプセルを埋めるために、再び地獄の坂を上って学校に戻った。

4月だけに、そんなに日は長くなく、6時には結構暗くなっていた。今日は運動部も部活をしておらず、校舎に残っている生徒も殆ど居ない状態だった。

光の提案で俺達はお少し暗くなるまで待つことにした。

帰りは遅くなってしまうが、中庭の癒しの木の周りを無断で掘り返しているのが、もし先生や生徒に見つかったりでもしたら大変な罰を受ける事になるだろう。多分、適当な理由では言い逃れできない。その事を考慮して光はお少し時間を遅らせようと思ったと思う。

6時半になりさつきより人も減ってきた。

『そろそろ校庭に行って昼に埋めた箱だけでもとってこようぜ…』

『うん。あれ掘るだけでもマジで時間かかるしさ…』

『せやな…時間かかるかどおかは微妙やけどまあ向こうの作業なら見つかったても大して問題にはならんそうやしのお…』

『じゃあいこツか！！』

『なあんかたのしそお！！』

『ネツ！』

俺ら三人とは逆に女性陣は気楽そうだった。

俺らはまず、昼に隠しておいたスコップをとりに行った。

その間、女子達は昼埋めた場所を見つけるためにキキを中心に探していた。

流石にまだ今日の事だけに、微妙に他の地面とは違っていたのでここだろうと俺と五右衛門で掘り返そうとした。

『待て待て待て！スコップかしてみい！！』

「ん？お前：マジで一人で掘るんか！？」

「そおゆうたやる！何べんもゆわすな！」

五右衛門からスコップを借りた光は少しずつ土をどかした。

「おいおい…そんなんじゃ朝までかかるぞ…」

「ピーチクパーチク…うるさいやつちゃのお！だあつとれ！」

1、2分掘ると拳サイズの石が出てきた。光はスコップを置き、手で掘り始めた。流石に俺達は何も言わなかった。

「よっしゃ！あつたで！」

「え！！」

「ハ！？」

羽樹意外皆が驚いた。そりゃそおだ。あの時確かに斉藤が俺と五右衛門が掘った穴の一番下に置き、埋めた。

光は皆に説明した。

「わいらの作戦は斉藤が外に來た時点でおじゃん。穴に埋めてないのがばれたらそれこそ問い詰められて結局埋めさせられよる。」

「實際うめられたじゃねえか。」

「まあ聞けや。わいは急遽予定変更案を考えた。」

キキとカオリンが斉藤を呼びに行き、優馬と五右衛門が手を洗つて間に、箱の中身だけ抜いて違う箱に移して、二人が掘った穴から少しずらして穴を少しだけ掘って隠す。

「ちゅうこつちゃ！」

「…」

「…」

「すごい…」

やってることは単純だが、思考の切り替えが普通はできるもんじゃない。持ち前の賢さで光は女子達のヒーローとなった。

「ほれ。中庭もどるで！」

光から渡されたものは光の筆箱だった。筆箱の中には折りたたんだ紙がちゃんと入っていた。

「…筆箱かあ…こいつマジすげえなあ…」

言葉には出さなかったが俺は光を見直した。

スコップを持って俺達はまた中庭にもどった。

外はすっかり真っ暗になっており、校舎の電気がついているところも職員室だけだった。

『どおする！？掘り出すか！？』

『今は微妙やのお。掘つとる最中に誰もこん保障ないしのお、無音で掘れるとも思えへんしな。』

『じゃあどおするの！？』

『ちよつと危ないけど、今はこの方法しかないんじゃねえかな！？』

『どないや！？』

『俺と優馬は堀係りだからココで慎重に掘る。光はどおやって掘るかとか指示出してくれ。キキと羽樹とカオリは三箇所から誰か来ないか隠れて見てってくれ。』

『それだと人が来たときに知らせるのが不可能だぞ！キキ達もばれたらまずいんだし。…あ…俺の携帯番号教えるから危なそうだったらコールしてくれ！！バイブにして、ブルったら俺らも作業は中断して隠れる。』

『うん！二人のゆうとりの方法でいこまい！』

俺の番号をキキと羽樹とカオリに教え、それぞれの持ち場に着的たら連絡を入れて作業開始。

『あ…モシモシ！？優馬！？キキだけど…OKだよ！』

『了解。』

最初にキキからかかってきた。

『あのお。優馬君の携帯ですか？』

『ん？そあだけどカオリか！？』

『あ…ウん！良かったあ。準備OKです。』

『あい。』

次はカオリだった。

『モシ！優馬！？羽樹準備OK！』

『了解。』

最後に羽樹から連絡が入ってみんな持ち場に着いた。ただタイムカプセルを埋めるだけなのに凶悪犯罪をしているように大げさで、後から考えると笑えてくるような事だった。

『よし。皆から連絡あったぞ！』

『…』

『ん？お前らどおした？』

『てめえ。後から俺らにも3人の番号教えるよ！！』

『せやで！お前の悪知恵にはかなわんのぉ！！』

『アハハハ。やっぱりバレタ！？コレで3人の番号GETやぜ！勿論お前らにも教える！』

…優馬アアお前って奴は！！…感謝の現れか二人が一斉に飛びついてきた。

ブルブルブル！！ブルブルブル！！

『ウオ！』

キキからコールが入った。

『ちよつとあんたら声こつちまで聞こえてるよ！！』

『ああ。。わるい。。今から作業にかかるから見張りヨロシク。』

『しつかりね！』

『あい。』

キキからのお怒りコールだった。とりあえず打ち上げはコレが終わってからと、作業に取り掛かった。

俺はココからの会話は小声で話そうと言い二人は小さく頷いた。

『とりあえず砂利を端の方にどかしてくれ。』

『了解。』

『きいつけや！音立てたらまた怒られるで！』

慎重に砂利をどかすと土が出てきた。羽樹が言ったとおりココだけはコンクリじゃなかった。

『そおつと掘るんやで！！』

『ああ。』

俺と五右衛門。

五右衛門と光。

光と俺。

のローテーションで掘る事にして、順調に掘すすみ、40センチくらい掘れた。

『ハアハア。ちょっと休憩や！！キキらにそっちの状況いいといてくれや。』

『フウ。OK…』

とりあえずキキから順番に電話した。

『あ…俺だけど。そっちの様子どお！？』

『こっちは誰も来てないよ！！そっちは！？』

『OK。こっちは丁度半分くらい掘り終えたところ…じゃあ他の二人にも聞いてみる。』

『分かった。』

『キキのとは問題ないって…』

『おう、次カオリンよろ…』

『あ…俺だけど。そっちの様子どお！？キキは問題無いみたい。』

『え？えっと、こっちも大丈夫だと思うよお。』

『了解。なんかあったら連絡してな。』

『はい。』

『カオリンの方も問題なさげだな。』

『うし。ラスト羽樹か…』

『あ…俺だけど。羽樹…そっちの様子どお！？二人は問題無いみたい。』

『ごめん！かけなおす！！…ブチッ！！』

『…かけなおすつって切られた…』

『え！？おいおいおい！それやばくないか！？』

『やばいかものお…』

ブルブルブルブルブル…！！

『羽樹だ！！』

『やよ出んかい！！』

『はい！優馬だけど、大丈夫か！？』

『ちよつと先生が見回りに来た見たい…何とか隠れてうちは大丈夫だったけど…そっちはまずいかもよ…隠れる場所ないでしょ！？』

『ああ…見回りの時間はなるべくおとなしくしたほうが良いかもな…じゃあとりあえず一回切るな！』

『今、羽樹の周りを見回りが通ったつてよ…』

『そりゃ厄介やのお…とりあえず全員で人気の少ない校庭に集合や。』

『その方が良さそうだな…』

俺は、女子3人に連絡を入れてひとまず校庭に集合する事になった。集合場所は倉庫の横。

丁度倉庫で職員室からも見えないのし、ここだけは大きな壁で外からも見えない。まさに俺達が隠れるために用意されたようなスペースだった。

最後にキキが来て、全員集合。

『ごめんごめん。お待たせ！羽チャンの後にすぐうちの周りに見回りきてさ、中々移動できなかった。』

『OK！OK！気にすんなや。みんな見つからんでよかったわ。さつきチラツと見たけど生徒指導の村田が今日の見回りみたいやのお』

『ってかこの学校見回りなんかしてたっけ！？』

『何か春になると五右衛門みたいな不審者がでるとかで4月の頭から末までは先生が交代で見回りするらしいぞ！』

『へえそおなんだあ。』

『おいおい！俺みたいっておかしいし、羽樹もなんとくすな！』

『アハハハハ』

『しッ！！緊張感ないのお！懐中電灯の光が一瞬こっち照らしよつたで…』

『わりい…』

『ごめん…』

『まあええ！とりあえず村田つてのは厄介やのお、優馬、今何時や』

！？」

『ああ。え！？もお8時半や！！』

『ほおか。おなごら帰らんで平気なん！？』

『あたしは平気！！帰宅時間とか制限ないしね！』

『うちも大丈夫！』

『私も。』

皆時間には余裕があるらしく、俺らはひとまず休憩タイムに入った。6人とも晩飯を食ってなく、空腹だった。

光と俺で近くのコンビニまで行って何か調達してくる事にした。女子の護衛には五右衛門をつけているからまず大丈夫だろう！

それにうちの班の女子は何か見た目はか弱い、実際は五右衛門より強そうに最近になって思えてきた。

『優馬、こんな事久しぶりやのお！』

『ああ！俺としては今年はお前らと違うクラスになっておとなしく過ごしたかったけどな！！』

『ハハハ！わいもや！』

『ま！2年まではいつも俺ら3人で色々な事してたけど、今は+3人居るし、しかも女だし何か新鮮で良いわあ』

『せやなあ。とは言っても女やぜ！？俺らの問題にあんまり関わらせんはおがええんちゃうか！？』

『それは光に同感だな。こおゆう楽しみは連体責任になるし、俺らの娯楽につき合わせて叱られたりしたら悪いしな！』

『せやせや！今日が最初で最後のつもりでやるで！！』

『おう！』

おにぎりを12個、お茶を6本買い皆の元に戻った。

『お帰りの。めっちゃ買ってきたネエ。』

『お待たせ！とりあえず飲み物1本づつとおにぎり2個づつ買ってきた。』

『うちおにぎり1個で良いよ！』

『あたしも！！』

『私も!』

『...』

結局男子がおにぎり3個づつたべ、皆が食べ終わった頃には時刻は9時20分だった。

そろそろ職員も帰るだろうと思ったとき、職員室の電気が消え学校は真っ暗になった。

『お!できん消えたぞ!』

『よし。戻るか!』

職員室の電気が消えたのを確認した俺達は中庭へと戻り、作業を開始する事になった。もお見張りの必要はなさそうだし、女子達も一緒に木の下に集まり全員でラストスパートをかけた。

『フウ!今大体60センチくらいか!』

『そのくらいやの。もおあと20センチくらいで多分OKや!』

『おし!』

作業も終盤になり、と言ってもひたすら掘るだけの単純な事だが、そんな事でも俺らにとっては最高に楽しい瞬間だった。

春の夜で結構涼しいのだが、俺達は汗だった。光と五右衛門の交代で最後は俺と五右衛門で掘る事になった。

もお少して全てが終了する。見回りも居なくなつた事もあり、作業再開時は皆で話しながらワイワイやっていたが、今は皆集中していた。

掘っている奴も掘っていない奴も皆が大きく開いた穴だけを見ていた。

『よし!ちよい穴の中にスコップ入れてくれや!』

『ん!?ああ...こうか!』

『よっしゃよっしゃ!!掘るのは終いや!』

とうとう目標地点まで掘り終えたらしい。安堵の声が飛び交った。最後は皆で筆箱!今回のタイムカプセルを穴の中に入れ、残すところは穴を埋める作業だけ。

コレは全員で掘った土を穴の中に入れて筆箱がつぶれない程度に圧縮して、何とか見た目上元に戻った。

最後に砂利をばら撒いて作業終了！！

皆で顔を合わせて何がおかしいのか爆笑した後、綺麗に輝く夜空の星に届くくらいの声で皆で叫んだ！！

『ヨッシャアアア！！』

『ヤッタアア！！！！』

共にで作業し、共に汗をかき、共に泥まみれになり…達成できた。一人ではやりたいと思うことはあってもこんな事実行する奴は居ないだろう。

全員が自分以外の5人のために…と言う気持ちで疲労が限界に達してもあきらめずに最後まで頑張る事ができた。

こんな達成感いつ以来だろう。中学生の時？小学生の時？幼稚園時代？ひよつとしたら初めてかもしれない。

もともと団体行動より個人行動や少人数行動タイプだった俺は、皆で力を合わせて何かを成し遂げる事は、クラスの合唱や運動会…そう、誰かの指示、強制、それ意外でやった事はなかった。

だから今日のこの達成感が凄く新鮮に感じ、素直に喜べるのだろう…

今すぐ皆で打ち上げをしたい気持ちでいっぱいだったが、もお10時半ということもあり、今日のところは解散して帰ることになった。家に着くと吸い込まれるかのように風呂に入った、肉体労働の後の湯船はたまらなく気持ちよく、がちがちになった腕や足をお湯でマッサージしてくれているかのようにだった…ゆっくり深呼吸すると、ふと哲学の授業で斉藤が言っていた事を思い出した…

…皆。ウイリアム・オスラーって人を知っている人はいるか！？…まあ居ないだろう…

…彼は自分の人生を捧げて未来に素晴らしいものを残した。簡単に言うとは医学の生みの親だ…

…そんな彼が【青春の生活の中で、もっぱら幸福を与えてくれる本質的なものは友情の贈りものである。】…

…と言う言葉を残した。この意味を今日は考えて欲しいと思う…

あの時は、友情の贈り物！？友人からのプレゼント！？それが青春

時代に一番幸せを与えてくれる！？何だそれ！ただの貪欲な人じゃねえか…とくだらない解釈をしていた。無理もない。友情の贈り物などと言葉を濁されては頭の悪い俺は理解できるはずがない。でも、今なら…友情の贈り物とやらが青春時代を幸せにしてくれる…その意味が何となく…本当に何となくだが少しだけ理解できた気がする。

…
そして長い一日が終わった。

…次の日、俺達は皆学校を休んで打ち上げをした。飯を食って、男VS女のカラオケ戦をやって、男VS女のボーリング戦をやって…良い一日で終わると思ったらそお人生は甘くはなかった。ボーリングをやったのもあり、喉が渴いた俺達は喫茶店で休憩していたところに、斉藤が現れた。そんな偶然あるか！？俺達はばれずに出ようと試みたが、結果はアウト。結局、全員でサボりとばれ、後日…斉藤と生徒指導の村田から3時間にわたり説教を受け、レポート10枚の反省文を書く事になった。たががサボりにしては重すぎる罰だった、誰か文句を言わず皆で図書室にこもってひたすら反省文を書いた。

『球技大会！！（前）』

特に変わった事もなくもお5月が終わろうとしていた。生暖かい風が俺の肌を舐めるたび、夏が近い事を語っていた。

5月25日（日）

今日は日本ダービー！！3歳のサラブレッドの頂上を決定する日：じゃなくて今日は球技大会だ！！ココの学校は他の学校と違い球技大会は何故か日曜にやる。

その代わりと言うか当然と言うか、月曜は休みである。2年の時も五右衛門と光と同じ班で、同じチームだった。あの時は五右衛門の頑張りや光の作戦で決勝まで行く事が出来た。え？？俺は何してたかって？？俺は：見学していた。まあ誤解を招く前に言っておくが、下手だの嫌いだのそんな理由で見学していたのではない。

たまたま、前日足をひねって捻挫をしてしまったのである。そして今年も、たまたま前日足をひねって捻挫：なんて事故は2年も連続であるわけもなく、俺も今年はメンバーとして参加する事になった。そうそう。言っただけだったがこの学校の球技大会はバレーと決まっている。

まあバレーの場合は何処の学校でも取り入れられているスポーツだし：なんら疑問はないのだが、今年からチームはクラスごとに6〜7チーム。それぞれのチームの力の均衡を保つために班対抗試合だ。実行委員の俺達としてはこの方がチームわけの手間が省けて正直ラッキーだ。

試合の内容はというと、クラス内で試合し、クラスの代表を決める。クラスの代表に選ばれると決勝トーナメントに進出できる。決勝トーナメントでは各クラス代表チームどおしの試合となる。決勝トーナメントまで来て、ようやく他のクラスと試合すると言う結構珍しいルールである。

バレー事態のルールは足は使っていけないって言うのはあるが25

点先取ラリーポイント制の一般ルールとなんら変わりはない。

去年までは実行委員の人たちは試合には参加してもしなくてもどちらでも良かったが、今年はどおも全員参加らしい…

当然やるからには勝つ！！その気持ちは俺にもある。それに凄い事に俺らの班はバレー経験者が6人中4人と言う事態。

といったも経験したのは全員、中学生の時だが…経験者はと言うと、光！キキ！カオリン！羽樹！みんな中学の時はバレー部。

光の場合は1、2年の時に見てて分かるがそれなりに上手い！！女子達がどれくらい上手いのかは分からないがバレー部と言ってるくらいだしボールを怖がってよけたりはしないだろう。

その4人にバレー経験豊富ではないが運動神経抜群の五右衛門！！光や他のバレー部に引きを取らないくらい上手いのは言わずとも分かる。

最後に俺だが、正直いつてうまくもなく下手でもなく…とまあ出来なくはない程度だ。

おっと、そろそろ学校にむかねば遅刻してしまう。

日曜日だからといって親に送ってもらうなどとボンボンじみた事はなく、いつも通りチャリで行く事になった。五右衛門も例外ではない。いつもの様に待ち合わせて、学校に向かった。

今日は校内出入り禁止！！よって集合場所は運動場だ。

『こつちこつちいい！！』

古いドラマのワンシーンの様に明らかに見えている所から手を振って俺と五右衛門を呼んだのはカオリンだった。恥ずかしさのあまり俺も五右衛門も早足で班員の所に向かった。

『来ないのかと思ったよお』

『いやいや、来ない訳ないだろ！！』

『ホンマにきいひんかと思っただで！よっしゃ。とりあえず人数も揃った事やし優勝狙って頑張らなあかな！』

『ア…ア…ア…テスト。皆さん、おはようございます。今日は雲ひとつない球技大会日和になりましたね！！暑い中話を聞かせるの

も申し訳ないので手短に終わらせたいと思います。まず、くれぐれも怪我だけには気をつけてください。勝っても負けても楽しい一日にしましょう！！以上です！！」

校長の話が終わると体育の先生がルールの再確認をし、保健室のおばちゃんに怪我をした生徒は本部のテントまで来るようにとアナウンスを流し、最後に生徒会長から開始の合図がでて各クラスで試合を始める事になった。

俺らのクラスは体育館での試合だった。さっきまで締め切ってた事もあり、中はサウナ状態。マジで簡便して欲しい。日が当たらない分ましかなと思ったが、ガンガンの照りつけるお日様の下の方がよっぽど良い。

クラスで手分けして窓と言う窓を全て開いてようやく風が通りぬけた。気持ちを仕切りなおして試合開始。

俺らの班は7班。嬉しい事にシードだ。

1班 v s 2班は2班の勝ち。

3班 v s 4班は3班の勝ち。

5班 v s 6班は5班の勝ち。

ようやく俺達の試合が回ってきた。試合相手は1班に10点差以上つけて勝った2班だ。

「やっとな試合できるなあ。」

「シードでトーナメントには行きやすいけど待ってるだけってのも退屈だな……」

「この試合は絶対負けられへんで！！」

「絶対勝とうね！！」

「優馬！足引っ張らんようにネ！」

どっちがだ！！と五右衛門くらいの実力があれば言い返したが、この中で足を引っ張るとしたらズバリ俺だ。

ピーピーピー。

「両チーム、コートの中に入って！じゃあ2班のサーブ先取からで始めます。」

シャーツス！！

サーブを打つのは相手の中でも一番下手な宮田だ。予想通りアンダーサーブで威力は全然なかった。ポジション的にカオリンがサーブを対処し、光がトスして、五右衛門がビシとまずは1点先取。

『ナイス！！』

時計回りにローテーションし、俺は中央の位置だ。こっちのサーバーはキキ。光がキキにぼそつと呟き、キキは小さく頷いた。元バレー部だけって女子なのにサーブにはキレがあり鋭い！宮田狙いだ！宮田も一応、反応はできたのだが手の変なところにあたり、ボールは場外に飛んでいつてしまった。

やった！！やった！！と可愛らしくキキは喜んだが…弱者を煮て食う小悪魔に思えた…が勝負の世界では穴を狙うのは当然の事であり、皆もナイス！！とほめた。

次も同じように宮田を狙い…キキのサービスエース？？バレーではそおは言わないかもしれないが、とにかくサーブだけで2ポイントGETして試合は3vs0と俺達がリードしていた。流れは完全にこっちに来ていた。光がまたキキにボソツと呟き、キキは少し驚いていた。

いったいどんな事を吹き込んだのだろう…キキはサーブ前に『…本当に良いの？？』と聞きなおすかのようにもお一度光を見た。光は大きく頷き、キキはサーブを放った。

今度も宮田狙い…と誰もが思ったがボールは宮田とは逆の方向に綺麗に決まった。2班の奴らも馬鹿じゃない…宮田が穴と俺らに比べるとカバリーに走る。光はそれも予測し、あえて一番上手いであろう飯田を狙うように指示した。

『ダアア！！クソツ！！！！』

飯田が悔しそうに頭をボリボリかいた。結局キキはサーブを全てプラス点に変え、ローテーションしサーバーは光になった。

普通のバレーのルールは良く知らないが、球技大会のバレーのルールはサーブは最高3回までで、3回打ったらサーブ権の移動がなく

てもサーブ側のチームはサーバーをチェンジする。上手い人がジャンプサーブでバカバカ点を取ってはそれだけで試合が終わってしまうからである。と、ルールの説明をしてる間にもあっさり光は3ポイント決めてしまった。結局の所チーム事態が強いと、サーブで結構しまうものである。

次は五右衛門のサーブだった。五右衛門も光のアドバイスを受け、サーブを打った。

裏目った。そろそろ察してカーバーにくるだろうと光の読みははずれ、ボールは飯田のところにまっすぐ飛んでいった。

五右衛門のサーブは強烈だったが、決して取れない球でもなかった。飯田は上手くボールを往なして、威力を半減させ久しぶりのラリー開始となった。

飯田の受けたボールはフロントセンターの岡田の上に綺麗に上がり岡田も経験者だけあってこんな所でミスなどしない。

岡田はフロントライトにトスするように見せかけてバックスでフロントレフトにボールを回した。

完全にやられた。羽樹とカオリンは引っかかり俺のカバーをしようとレフト側に向かう頃にはもお飯田スパイクの体制に入っていた。

『あかん！！飛ぶな！！』

と光の声が入った頃にはもお飛んでしまっていた。飯田はチョンとボールをはたき思いっきりジャンプしている俺の横に落とした。

光がヘッドスライディングするかのように右手を前に出して飛び込み何とかボールには触れたがボールが生を取り戻す事はなかった。

『イエーイ！！ナイスナイス！！』と敵陣でハイタッチが交わされている。

『マジワリイ…』と謝ると皆は気にするな！お前だけの責任じゃない！！と俺の背中を叩いてくれた。

フウ…と大きく深呼吸して、汗で固まった前髪をかきあげ、気持ちをリセットした。

光から一言、俺に助言があった。

『…飯田はお前よか背が低い。自分よか背の高いお前にブロックされちゃあアタックしたところで早々壁は越えらへん。相手もそれはよあわかつとる。やでのあ2、3点捨てて相手の足を見る。それだけや。…』

時間の無い中の意味不明な光のアドバイスに俺はちよつと混乱していた。

現在7vs1今ので相手にサーブ権はとられたものの、俺達がまだ勝っている。

サーブは相手チームの女の子。いまさらだが相手チームは飯田と岡田のワンマンチーム彼ら二人潰せば相手の核は壊れる。

ポイントと優しいサーブに五右衛門が鬼の形相で飛びつき、トスを貰ったかのように思いつきり打ち付けた。

バーン！！

すさまじい音になり、威力も凄かったが、ネットに引っかかりそのままボールはこっちに転がってきた。

『…』

場内は静まり返っている中、場外は爆笑。

光は五右衛門に近づき、『アホか！！冷静に運べば余裕やったやろ！』と頭をどづいた。

五右衛門は頭をかきながらぺろりと舌を出して『えへへ』と笑った。

当然もう一発どづかれた。現在7vs2今の一点はもったいない。

またもや優しいサーブに今度はカオリンが対応した。

両手をしっかり前に出し、腰を落とし、綺麗なレシーブの体制をだした。いつもポケーとしているカオリンとは思えなかった。

『よっしゃ！こっちに回せ！わいが優馬にトスする！！』

『ハイ！』

『おう！』

勿論これは敵を惑わす作戦で光は優馬に出すだのキキに回すだの言うがそれは嘘。これは名前が出た右の人にトスするぞと言う合図だ

った。

今の場合だと俺の右は羽樹。優馬と言われて羽樹の表情が変わり、いつでもOK！と言わんばかりの表情だった。

勿論敵は俺に来るって思っているので俺がダラダラしては意味を成さない。俺は俺で偽りの表情を作り、トスと同時に空ジャンプする予定だった。

カオリンは少し緊張し、少し力んでしまった。

『ウガッ…』

またもや場内は静まり返り、場外は爆笑。という状況になった。カオリンが出したボールは光に行ったには行っただが、力が入った事もあり、ボールはパスではなくもはやパイ投げのパイ状態だった。

綺麗に光の顔にボールが当たり、光の顔にはくつきりと夕日マークが付いていた。

流石の光も五右衛門みたいにカオリンをどづいたりはしないだろうと思ったとき、光がカオリンに歩み寄った。

光はカオリンに近づき『こいつー』とカオリンの鼻を優しく突いた。カオリンは頭をかきながらぺろりと舌を出して『えへへ』と笑った。光は軽くカオリンの頭をなでた。

『よっしゃ！ミスはしゃあない！気持ち切り替えるでー！』

五右衛門はプルプルと震えながら今にも噴火しそうな火山のようになっていた。そしてその怒りはボールに向けられる事になるだろう。

7点差あった試合もいきなり3点連続により7vs3と少しずつ点差を縮めていた。

サブは今まで同様また、楽なボールだった。

一回目同様ボールは五右衛門の所に来た。五右衛門は冷静差を保って構えた。

『…ワイに高めに渡せ…』

と五右衛門に光が呟き、五右衛門はアンダーハンドパスの体制からオーバーハンドパスの体制に急遽切り替えた。

あまりにギリギリの体制変更だったから敵陣同様、俺達ですら1打目でトス上げし、2打目で…ツアタック!?と思った。

五右衛門から光に綺麗な弧を描いたトスが行った。

『よっしゃ!!キメたるで!!』

と光は思いつきジャンプし、軽く反り、スパイク体制に入った。

相手チームは皆腰を低く落とし、光からの攻撃に備えた。

と!!その時!!

凄いい勢いで五右衛門が走り出した。冷静になったと思えた五右衛門が噴火直前に戻っていた。

1歩…2歩…3歩…ジャンプ????

『ナアアイス!!!グッドタイミングや!!!』

と光が叫びスパイク体制からジャンプトスをした。

ポンッ!パアアン!!

後ろからのCクイック…あまりに一瞬すぎて、敵も味方も観客も茫然としていた。

『シャツアツアア!!!』

シーンとしていた体育館に五右衛門と光の声だけが響き渡った。二人に続くように全員が沸きあがった。

す…すげえ…めっちゃこいつらかっこええ!!って男の俺も思った…なんだ…この空気…いきなり体育館にイケメン芸能人が現れたかのように女子達はキアキアと騒ぎ、野郎どもは憧れのスポーツ選手の生プレイを見たかのようにすげえすげえを連発。

確かにすげえけどさ…なんつーか俺…気まずいじゃん。

騒ぎで一時中断状態だった試合も再開し、一点とサーブ権がこっちに回ってきた。ローテーションしてサーバーはカオリン。

俺はセッター…フロントセンターの位置。

カオリンのジャンプサーブが綺麗に決まり、一瞬で2点取得した。

『カオリン!!最後も綺麗に決めよまい!!』

光からの背中押しに自信満々に頷き、ボールを高くあげいつもより高く飛んだ。

お見事の一言：コレで4点連続GETで試合の状況は11vs3。
まあ楽勝だろうと誰もが思った。

え！！！！

カオリンが足を押さえて倒れていた。着地失敗。足をひねって捻挫したと思われる。

『斉藤はん！！！！ちよつと！！！！』

光が斉藤を呼んで、斉藤も急いできた。

『どおしたあ！！大丈夫かあ！！』

『サーブの時に多分足を捻らせて…捻挫じゃないかと思います…』
キキが丁寧に説明すると、斉藤は分かったと言い、近くにいた男子を一人呼んで保健室のおばちゃんの居る、本部席へと担いでいった。

『…』

『大丈夫かなあ…』

流石の光もいつもみたいに大丈夫や！！大丈夫や！！とは言わなかった。

明らかに大丈夫ではなさそうだったし…カオリンの心配は当然だが、一人欠けた事に試合の流れも不安だ。

とりあえず一人欠けて、5人で試合再開。

カオリンが3点しっかり取ってくれたおかげで、点差は7点まで8点まで開けることが出来た。

ローテーションでサーブのボタンは羽樹に渡された。

ミスはしなかったが、カオリンの事もあり、羽樹のサーブにはキレも勢いもありなく、宮田にもすんなりと受けられてしまった。

宮田のボールはお決まりの様に岡田にまわり、飯田に行き、あつという間にスパイクを打たれ、何も出来ず貴重な1点とサーブ権があつさり取られてしまった。

11vs4。

『審判！タイムやタイム！2分だけくれ！』

いきなり光が審判に少しの時間を貰って、俺らを集めた。

『あかん！！こんなんじゃあかん！！お前ら勝気あるんかいな！！』

今のスパイクにしても全然力バーできたやろが！カオリンの怪我の容態を気にすんなとは言わへん！心配やしそれはしゃあない！！でも冷静に考えてみい！試合が終わってカオリンが抜けたで負けてもあた。って怪我したカオリンに言う気か！？本当に気にしてんならそんな追い討ちかけたんなや！！やる気無いなら、さっさと試合投げ出してカオリンについとったれ！！はつきりゆうて邪魔なだけじゃ！！…しつかり試合に勝って、めでたい報告もつてたろうや！！」

光の厳しい発言にも誰も何も言わず、真剣な眼差しで聞いていた。光の言っている事は最もだ。俺らが負けたと報告すればカオリンは自分のせいで…と思うに違いない、高校3年の俺達にとっては今年の行事は最後の行事…大げさに言うとかラスのメンバーで協力しあう事なんて人生で今年が最後かもしれない。それをカオリンだつてわかつてる。だからこそカオリンは自分を攻めるだろう。あたしのせいで…みんなの最後の思い出を…と。

光の言い方はきつかったが、ゆえに俺には光の思いがはつきりと届いた。いや、俺だけじゃなく多分全員に届いただろう…

長く沈黙が続いたが誰も抜ける者は居なかった。

『よっしゃ！それでこそわいの親友や！抜ける奴いたら優馬や五右衛門だろうが女だろうが関係なく平手打ちしとったで！！…絶対勝つで！優勝するで！！』

誰も返事はしなかったが、以心伝心と言うのだろうか…俺には皆が

【おお！！！！】と叫んでるのが聞こえた気がした。

『審判。わるいな！再開してくれや！岡田らもすまん中断してもおて…』

『アア！俺らは全然良いぞ！そっちは人数少ないしな！』

『おおきに！せやかて勝ちはずらへんで！』

審判のピーツという合図で相手のサーブから試合が再開された。サーバーは岡田。

バレーの経験者だけに、油断は絶対出来ない。俺より一枚も二枚も

上手だ。

岡田はボールを高く上げ…パァン！！

体育館内に大きな音が響きボールは羽樹めがけて凄い威力で一直線に進んだ。

怖い…痛そう…避けたい…！と言う気持ちはあつただろう。女の子だもんだ。

羽樹はそんな気持ちを【勝ちたい！！】という意味で跳ね除け、歯を食いしばってレシーブした。

体は少しよろめき、ボールはコート外に飛んだが、生きている！ボールは地に付くことなく宙にある。

五右衛門が羽樹のカバーに走り、必死のダイブでボールはコート内にもどった。

それを光が綺麗に返し、スパイクで終わる…までは行かなかったが何とか生還した…

緊張が続く中15分が過ぎた。
24対18。

点の動きはほぼ一定で取られては取り…とうとうラスト1点で勝てる！

光がサーブの位置に着き、即効でポンと楽に打ち、ボールは宮田の横にコロっと落ちた。え？皆が不思議に思った。

宮田は長時間の試合に疲れきって全く動けなかった。

意外にもあっさり過ぎるくらいに最後が決まった。ピーピーピー！！！！

審判が試合終了の合図を出し、俺達は勝った…

他の試合…3班vs5班が始まった。

結果は22vs25で死闘の中5班が勝ち進んできた。

時間の関係上、5班vs7班はすぐに開始された。どおなってるんだ！？っと思うくらい圧勝した。

試合が終わって相手の表情を見て気がついた。真夏日の気温の中蒸し暑い体育館で3試合目、2試合目と3試合目の空きの休憩時間は

5分くらいだけ。

ラッキーといっちゃ相手に悪いが、蓄積された疲労により、幸運にもクラス代表権を手にした。

まっ！！実力勝負になっていたとしても俺達が勝っていたけどな……
そんな事を光たちと話しながら蒸し暑い体育館を出た。

『球技大会！！（中）』

一步でてまず思ったのは…涼しい！！

炎天下の下で、太陽の日は朝より増していたが、サウナ状態の体育館の中に居た俺達にとっては外はまるで別世界。エアコンでも効いているのではないかと思った。それも長くは続かず5分間外に居ただけで体育館のが涼しかったのでは？？と思えるくらい直射日光によつて俺達の体は焼き尽くされた。

午前中の試合も全部終わったので、皆で力オリンの様子を見に本部へ行った。

『あのお。内藤薫と言う生徒が足を怪我して来たと思うんですけど何処に居るか知りませんか？？』

キキが冷静かつ丁寧に保健室のおばちゃんに力オリンの事を聞いた。『ええ。内藤さんね。斉藤先生と一緒に来たんだけど、どうも靱帯を痛めたみたいだね…軽くみても捻挫、酷いと靱帯損傷が骨折してるわね。うちではそこまで酷い怪我は担当外だからさっき斉藤先生の車で病院に行ったわよ。』

軽くて捻挫？？…思っていたより事態は酷いみたいだ…

『そうですか…分かりました。失礼します。』

『あなた達も怪我には気をつけてね。』

俺達は軽く会釈し、本部を離れた…人気の無い木陰に座り、何となく空をぼーっと見ていた。

本当なら6人でクラス代表になった事を祝って生温い水で乾杯をしてただろう…

最初に口を開いたのは五右衛門だった。

『力オリンに電話して容態きいてみたら！？何かこんな状態だと落ち着かんしさ』

『そおだな…』と俺は携帯を取り出し…電話してみた。意外にも力オリンにだけはタイムカプセル事件以来の電話である。

トゥルルルル…トゥルルルル…

『はい。内藤薫の携帯です。』

出たのは力オリンじゃなくて斉藤だった。

『あ…高橋つすけど、薫の状態はどおなんすか！？』

『おお。高橋か。安心しろ、捻挫だ！捻挫！それも結構軽い捻挫らしい。1週間もかからず元通りだそうだ回復が早く安静にしてれば2、3日で普通に歩けるって医者と言ってたぞ！！あと薫が足引つ張ってごめん…って伝えてくれってさ…』

『そっすか…こつちも薫に班員からのメッセージあるんすけど伝言頼んで良いすか！？』

『おう！何でも言え。』

『ぜってえ優勝するから安心しろ！！と伝えてください。』

『…分かった。必ず伝える。お前らも怪我すんなよ！』

『あい、じゃあまた。』

電話を切り、皆に薫の容態と伝言を伝えた。保健室のおばちゃんが言ってた最悪の結果ではなかったので皆、安堵の笑みを浮かべた。

あとは優勝して、優勝メダルを貰うだけ！一人少なくとも問題ない！一人一人が1.2倍の動きでカバーすれば良いだけの事！！

さつきまで殺伐としていた空気がしだいに無くなり、いつも通りの俺達の会話に戻っていた。

『ピーガガガ、えー午前の試合が全て終了し、決勝トーナメント進出チームが決まりました。まず一年生から発表します…』

と1年、2年と発表され、いよいよ俺達の対戦相手となる、3年の発表だ。

『続きまして三年生、3年1組…3班、3年2組…1班、3年3組…6班、3年4組…7班、3年5組…1班、3年6組…3班以上で決勝トーナメント進出チームの発表を終わります。各々の学年に共通するお知らせをします。初戦の対戦相手は1組vs2組vs3組4組vs5組vs6組でスタートします。まずこの3クラスの代表達で総当り戦をし、勝ち上がった2クラスで決勝。グループの2位

どうして3位決定戦をしてもらいます。以上で午前の試合と、午後の試合のお知らせを終わります。各自、

昼食にしてください。』

今日は昼飯も班員で食う事にした。地べたにすわり、光が小さい石と使って色々な作戦を話し出した。

5人という大きな問題をどお乗り越えるか：結局大きな作戦は午前中と変わらず、試合中に光が色々指示を出すらしい。

あつという間に昼休みも終わり、午後の試合が開始されようとしていた。

『ピーガガピ：午後の試合を開始したいと思います。各クラスの代表チームは運動場に集合してください。なお一年生の午後の試合は体育館で行われます。一年生の方々は体育館に集合してください。』

2年生は運動所の北側、3年生は南側にて試合を行います。それでは午後も怪我には気をつけて楽しみましょう。以上でお知らせを終わります。』

俺達3年は運動場の南側：プール側のコートをもつての試合となるらしい。コートの周りに人だかりが出来ていたので俺たちもコート付近に移動した。

『三年生の各クラス代表チームは揃っていますか！？それぞれの班の班長さんはこちらまで来てください！！』

キキが俺達の代表で行き、他にも何人か班長が集まっていた。

『あと一人い：来てないのは5組の1班！！班長の方は速やかに集合してください。』

最後の班長が慌てて参上し、班長にルールの確認と、総当りの対戦表が渡された。

キキが戻り、対戦表を見てみると俺達は初戦と最後の二つだった。

4組 v s 5組

5組 v s 6組

6組 v s 4組

またしても連戦回避。

『なんかね、追加ルールで時間制限がついたみたい。』

『時間制限！？何秒以内に相手コートにボールを返さないといけないとか？？』

『全体の時間。一試合15分だつてさ。でも15分以内に25点とつたら5分しかたつてなくても試合は終了。』

『なあんだ。それだけ！？』

『うん！絶対勝とうねー！』

全員で円陣を組んで：おうー！と気合を入れた。開始まで10分を切った。さっきまでは敵だったクラスの連中が俺らのコートの周りに座り、応援体制になっていた。

中でも俺らと仲の良い奴らは直接、声をかけてくれた。：負けんなよー！…

『はよおやりたいのおー！10分がまちどおしいわー！』

『もおすつかり疲れもふつとんだしな！今は血が騒ぐつて言うか体が動きたがつてるつて言うか…』

『まあ1敗すら許されて無いからなー！気いぬかず頑張ろうぜー！』
五右衛門が言い終わると審判がピーと集合の笛をならした。

『4組の代表と5組の代表はコートの後ろにならんでください。』
両チームの整列を確認すると、試合開始の合図がでた。俺達は全員前にでて、相手チームと握手し、コイントスで最初のサーブ権を決め、ポジションに着いた。

最初にサーブ権を手に入れたのは相手チームだった。ボールをポン軽くはたき、確実性のあるサーブを打ってきた。威力は無いがミスも無い。

ボールは俺の方に来た。

ドクドクドク…何だか異常に緊張する…ボールが凄く遅く感じる…立ち眩みしそうな緊張感…ミスはダメ…

『優馬アー！！！！』

ビクー！！光の声で我に返ってからはボールのスピードも普段の速さになり、張り詰めていた緊張からも何とか脱出できた。

『OK!!』

普段通り。特別に緊張する事もなく普段通りやるのがベスト。その自分に言い聞かせ、オーバーハンドで光にパスした。

『ナイスナイス!! キキいくで!!!!』

五右衛門へのトスだ!!

『OK!』とキキは返事し五右衛門をちらつと見た。五右衛門は軽く頷き、光からトスが出された瞬間二人とも飛び上がった。

パンッ!!

五右衛門のスパイクが綺麗に決まり、先制点に場内、場外共に歓喜の声を上げた。

『二人ともええ感じやったで!!!』

『お前のトスもナイスやったわ!!!』

サーブ権の移動でローテーションし、サーバーは羽樹。光も流石にまだ誰が穴とかは良く分らずとりあえずバック側を狙えとだけ指示がでた。

羽樹はポーンとボールを少し手前に投げ、1、2歩、走ってスパイクサーブ!!

パン!!と大きい音が鳴り、相手コートのバックラインギリギリにストレートに決まった。

場外は大歓声!!午前中の羽樹のサーブはアンダーサーブでポーンと打ち上げるのばかりだった。

ゆえに場内は…皆が羽樹をみて【エエエエエエエエエエ!!!!?】である。俺や五右衛門は当然、この中の誰よりも上手かった。

羽樹は可愛くピースし、ウィンクした。鬼に金棒、羽樹にバレーボール…

『羽樹には指示は不要やったのぉ』と光も笑い。また一步優勝の二文字が近づいた気がした。

立て続けに3本。相手に触らせることなく羽樹のサーブは終了。

4vs0

サーブ権は五右衛門に渡った。

五右衛門はコントロール重視のフロッターサーブ。当然相手も楽々つないでくる。綺麗に回しスパイク！！

光が飛び込み、それをキキが上げて俺のアタックでまたまたプラス1点。

5vs0

正直言つて一番最初に戦った岡田たちのチームのが強いくらいだった。このチームが相手なら負ける気がしなかった。

あつという間に15分がたち、【17vs2】∴コールド勝ちには至らなかったが楽勝だった。

勝利と言う刺激によつて細胞膜のイオン透過性が変化することによつて、電位差が生じ、活動電位が発生し興奮状態になる。普段なら絶対ありえないがこうゆう時は、男女関係なく抱き合い喜びを分かち合う！！この時自分だけ冷静でいられたらどれだけ幸せか∴あ∴それだと自分だけ性的興奮に陥り∴下半身がとんでもない事になつてしまうか∴まあ何がともあれ、まず一勝して一笑！！

5組対6組の試合の他人事の様に観察していた∴しかし、最初の5分くらいで他人事に思えなくなった。

確かに5組の代表は強くは無かった、それに2試合連続で疲れも残っているとおもう、けど∴何だ！？彼らは何をしてるんだ！？∴試合開始から12分∴試合終了。25vs4。流石にクラス代表になつてくるだけあつて弱くは無い∴5組はたまたまだ∴ココからが真剣勝負なんだと班員で円陣を組んで気合を入れたおした。

『それでは4組vs6組の試合を始めたいと思います。選手の方はコートバックラインに整列してください。』

とうとう決勝を賭けた試合が始まるうとしている。緊張で手は汗でベタベタ、今になってカオリンに約束した【絶対に優勝する】と言う言葉が重荷になつてプレッシャーを感じる。

『優馬！いつもどおりでええんやで！勝てる勝てる！さっきの試合の疲れもあるやろーしな！』

『おう！頑張るしかないな！！』

…光、サンキューな！…ここでもまた光に救われた。精神的苦痛になる緊張やプレッシャーは光との会話で結構吹き飛んだ。

開始の挨拶をして、コイントスでサーブ権を決めた。今度はこっちがサーブ権を先取。サーバーは光からだ。

『よっしゃ！まず一本とつとくでえ！！』

こいつには緊張つてものが無いのか！？と俺は軽く尊敬した。

公約通り先制点を取るため光は全力でジャンプサーブした。ボールは敵の居ない所に一直線に進んだ！先制点GET！！

と誰もが思ったが、相手の一人がダイブし俺達の先制点を阻止した。威力もコースも申し分ないだけに、相手が取ったボールはシャボン玉の様に力が無く、ヒョロヒョロと舞い上がった。同時に相手の応援団からの歓声も大きくなった。相手のセッターが打ちにくい場所からでも綺麗にトスをあげ、最後はスパイクで終わる形まで持ち直した。

一方こっちは相手が光のサーブをとったのを確認し、皆が防御の体制に入った。俺にいたっては…ミスれ！！と神頼みまでしてしまった。

相手のセッターがトスを上げるとキキと羽樹はブロックの位置に移動し、相手のスパイクは思ったよりもするどくキキと羽樹の壁をすり抜けてしまったが、コースは絞れた。ナイスや！！と光が叫んですり抜けたボールに飛び込んで相手の3段攻撃にも何とか対応が出来た。

光が取ったボールは俺の真上に上がり俺は羽樹にトスを出すために叫んだ。

『キキ行くぞ！！』

光意外がこの作戦を使うのは初めてでキキは一瞬どっちか戸惑い、俺の目を見た。

キキの視線を感じ、俺はチラッと羽樹に視線を流した。キキはそれで理解した。『OK！！』キキから声が上がった。

俺の出したトスをキキはわざと空振り、敵の意表について羽樹がバ

シツと決めた。

1vs0…何とか先制点をものに出来た。

『羽樹ちゃんナイス！！優馬ナイスアシスト！！』

と場外からの歓声で俺は震え上がった。心のそこから【やった！！】
って思った。でも、本当に紙一重だった。

今の1ポイント相手が取っていてもおかしくない展開だった。先制
はしたが、油断はまだまだ出来ないと思った。

試合は先ほどと同様、光のサーブ権。もお危ない賭けはやめたのか
鋭いサーブではなく的確に相手の陣地に入れるよう、軽く打った。

当然相手も楽に取り、敵の猛攻に耐えられるように皆で構えた。相手
も綺麗に回し、鋭いスパイクを打ってきた。

バシ！！と同時に俺の腕にあたった。…エ？全く見えなかった…
腕に残る強烈な痛みを振り払い試合に集中するため、腕に当たった
後のボールを探した。

再びバシ！！と大きな音が聞こえた時にはもお遅かった。

何が何だか分からぬまま点が取られてしまった。

『ドンマイドンマイ！！今のはしゃあない！！』

と光の声が聞こえた。光に…どおなったん？…と軽く今の状況を聞
いた。

俺の腕に当たったボールは高々と空に上がり、相手のコート側に戻
ってしまっただけ。それを綺麗に相手が合わせてアタックし、今
に至るというわけだ。…完全に狙われた。いや、狙われてる？？今
後も？…

サーブ権の移動で相手のサーブとなった。現在試合は1vs1。
相手もサーブは鋭くなかった。綺麗な弧を描いて俺達のコート…俺
の所に来た。

俺はいつもの【初手は光へ！】の作戦どおり、光にボールをまわし
た。

ミステイク！！！！

あの作戦は光がフロント側…つまりネット側に居る時に行くものだ

った。

…しまった！！！！！…

班員からの視線が痛い…皆が『え？なにやってんの？？』そお言っている気がする。目のやり場を無くした俺は思わず目を閉じてしまった。

まさか目を閉じているとは思っていない光は事もあるうことが、ボールをリターンして俺に返してきた。

『おい！！！！！！優馬！！！！！！』

『え？？？？？』

…もお最悪…

五右衛門の大声で我に帰った俺の目の前にはボールが転がっていた。光は審判に目にすなが入ったからちよつと待ってくれと嘘を良い、1分だけ時間を稼いぎ皆を集めた。

『球技大会！！（中＋）』

光に言われるがまま集まった俺達は、輪を描くように丸く固まった。

『あんまり皆緊張したらあかんで！？特に優馬。』

『ああわるい…』

やつぱりこの中断は俺のせいだと、改めて実感した。

うつむいている俺にゆっくり光が近づいてきた。

『なあ優馬。大丈夫か？？』

『あ？』

『お前狙われ取るで？？さっきみたいにボケとったらのおどんどん狙われてまうで？？』

『ああ。だからわりいって言ってるじゃん。』

最悪の態度だ。心配して言ってくれてる光にも冷たく、自分でもこんな態度取ったらダメだって分かってるのに。気持ちとは反対の言葉がでてくる。

『おい！』

『ああ？？』

バチン！！！！

…え？…平手打ち？ダブル平手？…光に両手で平手打ちされるみたいにバチン！と顔をつかまれた。

『お”い”！！！！！！われ！！！！やる気あるんかいな！！！！？？』

？われのミスに怒つとるんや無い！！われのやる気の無さにイラついとるんや！！１度や２度ミスしたくらいでなんや！！お前のミスを力バーしたれなんだ俺らのミスでもあるんや！！お前一人で抱え込んでたらあかんで！？コレは個人競技とちやう！！チーム戦や！！逆に言えばおんどれがやる気のおなつたら負けるんじゃ！！勝気のおなつたんやつたらとつとつてて薫の見舞いでも行ってこいや！！ボケが！！』

それだけ言つと光はコートに戻った。

『…』

あまりにも的確に言われて、何も言い返せなかった。…勝つために…優勝するために…皆必死なのに俺は…罪悪感と自分の情けなさに涙が出そうだった。悔しさを下唇を噛み締める事で絶え、唇からは少し血が出た。

カオリンへの伝言を頼んだのは他でもない俺だ。光に叩かれて赤くなった頬を自分でもお2、3回叩き。気合を入れた。
ピーピーピー！！

『もお再開しますので選手の方はコートに戻ってください。』
審判からの合図でそれぞれがコートに戻り、俺だけが外に居た。

『優馬！早く！！』

キキに呼ばれトボトボと歩き持ち場に戻る途中で足を止めた。

『光！！サンキュー！！絶対勝とうな！！』

何だか意味不明で強烈に恥ずかしいけど…お礼を込めて言いたかった。…言ったら雨雲が去ったかのように何かすっきりとした気分になった。

『おう！！…あつたりめーよ！！』

また光に救われたって思い、少し笑えてきた。

ピー！と審判が笛を鳴らし試合開始。今の事で俺達のやる気や優勝への意識は改めて強くなったが、それで流れが変わる事はなく、1vs5とあれから立て続けに点を取られた。…でももお二度とあきらめたりしない！！

相手のサーブはまた俺の所に来た。実を言うと、相手の最初のサーブからずっと俺が狙われていて、もはや必然的に思えるようになってきた。

威力より正確性を重視しているサーブだけに、慣れればどおってこゝと無い。冷静に判断し、誰にボールを出すかなども考えて動けるようになってきた。

光がフロント側に居ないときはとりあえずセッターに！俺はキキにボールを回し、キキのトスで羽樹がアタックした。

少し、ジャンプが早かったのかボールの的を捕らえられず威力はあまりでてなかった。

ピーー！！

相手のまさかのお見合い。思わぬ展開でサーブ権と要約2点目をGETした。

『よっしゃー！！今ので流れが変わったでー！！』

光の発言に皆は大きく頷いた。

ローテーションして羽樹のサーブ。ボールを自分の身長くらい高く投げジャンプサーブ。

バン！

バン！

バン！

と全く相手は触れる事が出来ず、ものの1分くらいで3点をとってしまった。

5vs5

要約並んだ。が、毎回長いラリーをしてただけに、残り時間はもあまりない。

今度はキキのサーブ。キキは羽樹とは違い確実性のあるサーブを入れた。

ゆるい球なのに相手の反応はあまりよくなかった。

相手も触れたには触れたのだが何かぎこちなく、重心が定まらないのか、最後に腕だけ大きく動かして強引に取りに行ってるような…俺には何してるんだろぅ？？？疲れたのかな？？程度にしか分らなかった。

相手はキキのサーブを1打で返してしまい、こっちでボールを処理し、五右衛門のスパイクで逆転。

6vs5！！

運が良かったとばかり思っていた俺をよそに羽樹と光はキキに『ナイスサーブー！』と良い。キキもブイサインで応答した。

この後のサーブに関しても同じで、キキのゆるいサーブに大して、

敵はミスを連発。

結局残りのサーブで2点取ってしまった。

8VS5!!

ココに来て俺のサーブ。流れも運もこっちにある今、俺も一回くらいバシッつと決めたいと思い、あまりやった事の無いジャンプサーブ!!

『ヨッシャアア!!もお一点プラスするぜ!!!』

バシッ!!!!ボールを光の顔と思い全力で振り切り凄いい音が鳴った。

流石男つてだけの事はあつて威力も速さも羽樹の倍近く、例えて言うなら…メジャーリーガーの投手が時速160キロくらいの球を投げ空振りで見事キャッチャーミットに突き刺さったかのようにネットに突き刺さった。

『…』

『…』

ピー!!…っけ…所詮コレは現実…願ったり思ったりしたところでドラマや漫画みたいには上手くいくはずねえよな…

半分開き直ってる俺に、今度は本当に周りの視線が痛かった。場外からも無数の視線の針でチクチクと刺されている気がした。

しぶしぶ、場外に転がっていったボールを自分で取りに行き相手選手に渡した。

相手が構えた時…ピーピーピーと試合終了の合図がなり、最後はちよつと集中が途切れたが俺達は決勝への切符を手に入れた。

最後はちよつとぐだつてしまふ結果になったが、試合終了でそんな事は一瞬で忘れ去られ、俺達は抱き合つて喜びを分かち合った。

クラスの奴らも一斉にコートに入ってきて皆で一勝を喜びあった。

正直勝てると思って居なかった所を羽樹とキキに救われた。

キキが代表で報告に行っている間にキキのサーブの事を光に聞いたら、あれは無回転のブレ球サーブだった。そうそう打てる球じゃない結構難しいらしい。一体羽樹やキキは中学校時代どれくらいの成

績を残してきたのだろう。そんな事を思いながらひとまず決勝に備えてキキの帰りを待ちながら木陰に固まって座っていた。

『おまたせえ。決勝は15分後で相手は2組らしいよ!!』

『お疲れ!! 2組かぁ。奴らの成績はやっぱり全勝??』

『うん。クラス対抗の時から全く負けてなくて、しかもさっきの試合でも余裕勝ちだったみたいだよ...』

『せやなあ。さっき岡田がゆうとったんねやけど、2連続試合やのにボロ勝ちやつたらしいわぁ』

『強そうだな。でもまあ勝てるよな!!』

『当然や!!』

『だな!!』

今は、考え込むより前向きに突っ走った方が良い。誰もがそう思っていた。

俺達は少しだけ作戦を立てた。作戦と言っても試合の流れ的に効率が良いのを選んだ。

まず最初にサーブの上手い、羽樹 キキ 光の順番にサーブが回るようにして、一気に点差を広げようって言う作戦だ。

相手は強い上に俺達より人数が多い。それを考えるとまともにやり合ったら、厳しい展開になるかもしれない。

そこで点差が広がったらある程度時間を稼ぐ事にした、サーブは普通に打つのではなく、俺と五右衛門に関しては天井サーブ。

天井サーブとはアンダーハンドで高く打ち上げるサーブの事で普通よりほんの少しだが敵が触るのは遅くなる。そして今回の試合は外で行われているだけに太陽光の影響もあって目くらましにもなって一石二鳥のサーブだ。

とりあえず俺達は勝つ! あの手この手を使って...

『ただいまより、決勝戦を開始したいと思います。一年生も2、3年生同様、決勝は外で行われますので速やかに移動してください。』

勝っても負けても悔いの残らない試合にしましょう。それでは決勝に残った代表のチームはコートに集合してください。』

『フウ…よし行こか！』

キキに言われ全員でコートまで向かった。そこにはクラスの奴らは当然、他のクラスの奴らも集まっていた、若干興味無く来てない連中も居たが観客は200人以上だった。俺達が5人つて事もあり、俺達よりの応援者の方が多かった。とは言っても真剣に応援してる奴らは各々のクラスくらいでそれ以外はどっちが勝つのだらうって野次馬連中だ。

『えーこれより、3年生の決勝戦を行います。ルールは先ほどとは違い、時間が5分多い25点先取の20分です、なお長時間になるので10分たった時点でタイムアウトを入れますので水を補給してください。それではリーダーの方は握手し、サーブ権を決めてください。』

コイントスの結果は俺達だった。…よし！！これでさっきの作戦が有効になる可能性が出てきた！！…

『それでは4組のサーブ先取で試合を開始します。礼ッ！』

『（オネガーシャース！！！！！！）』

皆ポジションに付き、羽樹はサーブの位置に付き、ボールをバウンドさせ、審判の合図を待っている。

ピーッ！！！！

合図と共にボールを高く投げ、ジャンプサーブを打った。さっきより、綺麗なうち方で完璧なサーブだった。

『ナイスサーッ』

光の声も観客の声には勝てずあまり響かなかった。

ボールは相手の人と人とのを狙っており、何とも取りにくい良い狙い場所だ。

『俺が行く！！』

相手の一人が叫び、体制を崩しながら羽樹のサーブでのポイントを阻止した。

ボールは高く上がり、倒れてる味方をまたぐ様に飛び越え場外へと飛んだボールを必死で追いかけて、コート無いに戻した。

アタックで返す事は出来なかったが、羽樹のジャンプサーブが初めて止められこつち側としては同様が隠せない。

『皆気持ち切り替えなアガンで！！！！』

光の声で皆冷静になった。まだまだこつちが押している事には変わらない。

ふわりと上がったボールの落下点に行き、俺は光にパスを出した。

『行くぞ！！光！！』

『おう！！』

俺の出したボールは綺麗に光にわたり、光は「優馬！！そっちもどすで！！」と良い。五右衛門への合図だなとわかった。

俺は俺でバックアタックを演じなければならない。軽く走り、光のトスに合わせて飛んだ。

それより少し遅めに五右衛門がとび、敵の意表をついた。

敵は俺の攻撃と信じ、ややコート後ろ寄りで構えていた。五右衛門へのトスだと相手が気づいたときには五右衛門はスパイクを綺麗にきめていた。

先制点GET！！

羽樹のサーブが止められた時は本当にどおなるかとおもったよ。何がともあれとりあえず1vs0作戦どおりとは行かないが、先制点を入れることが出来たのは大きな達成だ。

『よっしゃよっしゃ！！今のええ感じやったぞ！！！！』

『おう！！！！』

さっきまでの緊張は嘘の様に晴れ、何だか楽しい気分になっていた。再び羽樹のサーブ。

さっき同様、今回もかなりのキレがある。応援してくれてるクラスの奴らも、当然俺達も、さっき止められたのはまぐれだ！！今回は止められるはず無い。

って思っていたに違いない。あの凄いサーブを見たら誰もがその思うだろう。

が…またもや止められた。

今度は以前の様にバランスを崩す事も無く、大きい音を立ててしっかりとレシーブした。

…マジかよ…

流石の光も驚きの表情が溢れていた。

敵はそのまま上手くボールを自分のものにし、俺らの穴…5人故の穴…中央…を的確に狙ってきた。1vs1。

『悪い！！わいがカバーせなあかなんだ！！中央狙いはセッターが少し下がって対応せな…』

『ドンマイドンマイ！！』

誰も、お前をせめたりしねーよっと。仲間は何論、場外からもドンマイの声が聞こえた。

サーブ権を失い、点差も0になり、俺達の作戦とは程遠い結果になってきた。

『サーブイツポーン』

敵陣から気合の声が聞こえるや否や、死守する体制にこっちも気合を入れた。

敵のサーブも威力が無いわけでは無いが羽樹ほどではなかった。

ボールは俺の方に来て、【よし！これなら上手く光に送れる！】と思った瞬間。

『優馬！！その球ブレるで！！！！』

光の音がボールがブレ出すより早く耳に入った。

え？？…でも頭ではボールがブレるまでに理解する事は出来なかった。

やばい！！…野球のフォークボールっていうのかな？ボールは行き成り降下し軌道を変えた。

とつさに反応して、何とかボールをそのまま地面に落とすって事はしなかったけど、ボールは後ろの方に飛んで行き、流石にアウト…

1vs2。逆転されてしまった。

『気にするな！！最初から分かっていたら何とかなる！！』

五右衛門の言うとおり。最初から分かっていたら取れない球じゃない

い！！

内心不安はあったが弱気は付け込まれてだた狙われ的にされるだけ……今は空元気で空自信でも相手にビビって無いって事を精一杯努力するしかない。

情緒不安定の俺達を待つてくれるはずも無く、試合は進んだ。

またしても、無回転サーブで今度は羽樹の方に飛んでいった。羽樹は軽く体を横にずらし、横向きにそのまま敵に返す様にブレ球処理をした。

『ナアイス！！OKOK！それで良いで！！』

敵陣に帰ったボールはすぐ様こつちに戻ってきた。凄い音のスパイクとなって。

スパイクは五右衛門のブロックによって何とか阻止されたが、ボールが場外に落ちてしまい、結局敵の追加点。

1vs3。

こつちがミスをしてるわけでもなく、それぞれ良い動きをしているのだが紙一重の差で敵に点を持つていかれる。

実力は均衡：それぞれ一人一人の差は無いだけに、俺らが一人少ないと言う事が決勝に来てかなり響いてきた。

敵のサーブは羽樹やキキにも引けを取らず、何とかしのいでラリー戦に持ち込んでも穴を付かれたり、戦術で一步相手が上回るなどと点差は縮まる事無く開くだけだった。『まだ15分あるお前らなら逆転できるぞ！！』と誰かが言っているのが耳に入り、時計を見てみると試合開始から5分がたっていた。

まだ5分？…異常に長く感じる…もおかれこれ20〜30分くらいプレイしてるよな…

ピー！！

試合の流れは一向に変わる事無く、一方通行の道にいるかの様に相手からの攻撃が雨の様に降り注ぎ、俺達はそれをただどれだけ長い間耐えられるか…

そんな感じで試合は1vs7になっていた。

『フウ！！どないしたん！？元氣のおなつとるやんけ！！』

状況的に光が言うのも分かるが、逆に元氣がなくなるのも無理はない。

耐えて…耐えて…耐えて…負ける。これの繰り返しだもん。

相手のサーバーが代わり、いきなりゆるゆるのサーブが飛んできた。あ？…ついに目まいまでしてきたかと思ったが、実際にゆるゆるの誰でも取れるボールだった。

チャンス到来！！！！

みんなの視線が一気に集まり、相手の一人を確認したのち互いに顔をあわせ小さくうなずいた。

穴…大穴発見！！！！

『光！！行くぞ！！！！』

『よっしゃこいや！！待ちくたびれたで！！』

声を出してなかったのは精々2分くらいだが、何時間ぶりに声をだしただろう…そんな気がした。

この千載一遇のチャンスを誰も見逃さなかった。

砂漠で迷子になり、絶望で頭を抱えた俺達の目の前にオアシスが見えた！！

光は俺からのボールが来る前に【キキいくで！！】と叫んだ。自分で打つ合図だ。

俺はいつも以上に丁寧に、なるべく高めに光にボールを回した。

光はキキの方を向き、若干早く飛び、トスの体制からパシッとさつき見つけた大穴さんの横に叩き落とした。

ピー！！2vs7。

要約俺達の追加点…長かった、遠かった、でも何とかたどり着けた一方通行越え。

相手は相手に【ドンマイ気にするな】と肩を叩いて励ましあい、早くも意識を切り替えていた。

サーブ権が変わり、キキのサーブ。フロント側には俺、五右衛門、光と攻撃型2枚目の作戦実行だ！

え？作戦は1つじゃなかったのかって？

いやいや、頭脳派の光君がもしもの時を考えないわけないでしょうに。
約15分前。

：『サーブ先制点及び時間稼ぎ作戦がもし失敗に終わった時の事も
考えといた方がええ！！』：

：『いやいや、羽樹やキキにいたっては誰も止められんでしょ！！』

：『そお信じとるけどな、作戦はただやねんしもお一通りくらい用意
しといて損はない！！』：

：『じゃあどんな提案があるの？？』：

：『クイック攻撃や！！』：

：『ふうん。それなら別にネット側に男子じゃ無くてでもできるんじ
やない？？』：

：『ちやうんや、殆ど合図なしのクイック攻撃や！！』：

：『俺達が男やでとかそんなんでこの策を言つとるんや無い！！ゆ
わば、いっつも金魚の糞みたいに一緒におった俺達やでできるんや。

』：

：『キモ』：

この後合図決めみたいのは無く…マジでぶっつけ本番となった。

まさか本当に合図なしで出来るのかな？？不安はあったが俺達三人
なら何か出来る気がした。

ピーっとなり。

キキは当然大穴さんを狙い、それを察したベテラン君がカバーのつ
もりか…もお打ち返す体制の整った大穴さんに向かってダッシュし
た。

ベテラン君も頑張りもむなしく、大穴さんは飛んできたボールをオ
ーバーハンドでポーンとそのままこっちに返してきた。

彼女の落ち込み様からすると恐らく、返してきたじゃなく、味方に
パスしたつもりがこっちのコートに入ってしまったが正しいだろう。
やわらかいボールが来て最上無二のチャンスがまたも到来した。

羽樹はそのボールを光へと回し、俺と五右衛門は光からどんなパス

…合図…が来るんだろつと見逃さないように見ていた。

『42!』

光はそお言つた気がした。

最初のトスは多分だけど俺に向かつて出されたと思う…

が…何??何??何??何??何なのこれ!!!?

42!?!あれが合図??…それとも合図無し!?!…見落とし!?
速攻に打つ球??時間を空けて打つ球??…とりあえず俺に出さ
れたトスには間違いなさそうだし、頂点を捕らえて打つ事にした。

…【あ!?!?!光が言いたかつたのはそおいう事か!!!】…

『球技大会！！（後）』

もお2年も前の事。

1年の球技大会の前日、俺と五右衛門は光から色々なコツを教えてもらっていた。

『お前らホンマにスパイスのタイミングへたやのお！！』…

『だからお前にコツみたいのを教えてくれってたのんでんじゃねーか』…

『良いか！？大体お前らセンスないねん！！』…

『好き放題言いやがって…教える自信ねえなら他あたるぞ！！』…

『まあワイがおしえちやるわ。教えたるっーかセッターからのトスを見ていつ飛ばば良いかをまず判断する事やそれは自分の練習次第で！！』…

『わいが中学の時の顧問は色々な作戦を教えてくれはった。一番印象にのこつとるのは数字トスや。』…

『あ？何だそれ。』…

『Aクイツク、Bクイツク分かるよな？？』…

『Aが速攻でBが遅め？』…

『まあ本来の意味はちゃうねんけどまあそれでええわ。AやBクイツクを使えこなせたらかなり良い攻撃になるねんな』…

『ふうん。じゃあそれ教えてくれよ』…

『そのつもりや！！お前ら俺らが今から言う数字の意味考えてくれ。』…

『21と32と64、12と78と46と13この違い分かるか』

…

『んー10の位の数字と1の位の数字の大きさか？？』…

『流石は数学トップクラスの優馬やな！！当たり前や！！』…

『それを利用するんや！1の位のガ小さかったらBで1の位のガ大きかったらAや。』…

光が何も説明しなかったのも俺らにしか出来ないって言ったのも納得できた。

これを教えるのに恐らく5分10分では到底無理だ。それに、俺達が忘れてたら多分無駄に想いださせなくなかったんだろう。

言えば薄ら覚えで何となく分かる分かると言って説明する時間が無いままゆえに適当に懐かしいなあゝって気持ちで終わって試合で混乱を招く結果になる。…もし忘れてたなら作戦なんて無しでガチで戦うつもりだったのだろう。

【42…Bクイック…】

俺と五右衛門が理解しているA、Bクイックの意味のは恐らく普通のルールとは違っている…光から以前指摘を受けた。

【…Aクイックはセッターのほぼ真上のレフト側からの攻撃、BクイックはAクイックよりレフト側に離れたところ。Cクイックはセッターほぼ真上のライト側からの攻撃で、DクイックはCクイックよりライト側に離れたところからのスパイク。…】

…が、ぶっちゃけると初心者には意味不明で…Aが速攻Bが遅い…こっちのが分かりやすいって全く聞かなかったことも今になって想いだした。

光のトスを見て俺は、ボールが頂上手前に来ると飛ぶふりをし、相手のブロックが飛んだのを確認し、俺も飛んだ。

バン！！！！これが俺の中でのBクイック！実際では一人時間差っていうのかな？まあなんでもいいや。

久しぶりに気持ちよく決めることが出来た。スパイクを綺麗に決めた事より、その後の光とのハイタッチの方が気持ちよかった。

3vs7。

『ナイスナイス！！』と飛び交う中キキはサーブのポジションについて、合図を待っていた。

ピ！！となると同時にクイックサーブであってるのかな？？とにかくベテラン君のカバーに入る前に大穴さんに速攻でサーブを打ちつけた。

もおベテラン君はカバーをしに走ったりしなかった。彼女がこぼしたボールをカバーする側に回ったのだ。

そんな祈りが届いたのか大穴さんのはじいたボールはベテラン君の付近に飛んできた。

すかさずボールの落下点に入り、2打目でもお完全に立て直したが、後ろから飛んでくるボールに合わせるのだから、以前みたいにキラのあるスパイクが打てていない。

当然俺達もらくに処理できた。キキがアンダーで光につなぎ、光は『29!!』と言い。

ポンと俺に出した。すぐさまジャンプし、ジャンプした瞬間くらいに叩き付け、これまたかつこよく決まった。

『シャアア!!』とついつい吠えてしまい、応援してる奴らも盛り上がった。

4vs7。

あと三点の所まで来た。

キキも流れをつかみたい一身で最後のサーブも大穴さんを狙った。

コントロール重視にしすぎたせいか、威力がさつより少なかった。

流石にこれには大穴さんも綺麗とはとても言えないフォームでセッターにボールをつないだ。

セッターからトスが出され、相手にしても久しぶりのアタックチャンスだった。

五右衛門がブロックに入り、他の4人は下で待機した。敵は五右衛門のブロックごとぶつ飛ばす勢いで強引にスパイクを放った。

ボールは五右衛門の腕からすり抜け一直線に地面を目指した。

と!!羽樹がダイブし、ボールの命を救った。

球技大会で女の子がダイブする姿を見たことがあるだろうか：俺も光も若干心配だったが、このボールだけは殺せないと思い、羽樹のボールを生きたまま相手に返した。

軽いたまになってしまったが、死なせてサーブ権と一緒に渡すよりはずつと良い。

『ブロック3枚はるで！』と光からボソツと言われ、トスが上ると五右衛門に近づき3人でブロックを張った。

[illegible]

「タイムアウトです。少し水分補給をしてください。なお、コート
無いからはです中で飲んでください。応援している皆さんも選手に
は近寄らないでください。」

「大分流れがこっちにきたけどまだ負けてるねえ」

『これから無いか！！今ままでは相手の調査や！！穴も見つかったし、これからバンバン攻めるで！！』

『誰がヒカチンやねん！それだけはやめて』

『まあこのままでは相手も終わらんと思うし、こっちも気合いれてかないかな!』』

「だな！！」

「あ、五右衛門作戦の事分かってる???」

『おう！お前らのやり取りってか光が数字言ってるので思いだしたわ。』

『OK！じゃあ確認するで！！一の位がでかい時は！？』

『（A）』

羽樹とキキはハテナ顔だったが俺達はばっちりわかっていた。2年前のあの時に戻ったみたいに繊細に…

『よっしゃ！！問題ないな！！じゃあソロソロ、ポジション戻るで！！』

光と同時に審判からの試合再開の合図がでた。

各々のポジションに着き、光は大穴さん目指してジャンプサーブを打った。

バアン！！！！とものすごい音が鳴り、大穴さんは倒れた。

『お、おい…大丈夫かいな！？？』

光が心配して駆け寄り、鼻血が出て再起不能状態だった。

『大丈夫！！大丈夫！！』

と2組の先生は言っていたがあんまり大丈夫そうじゃなかった。大穴さんは本部へと運ばれ、人数が一人減り俺らと同じ人数になった。本当に優勝できるかもしれない！！同人数になった事で誰もが優勝を意識した。

が…それは反対だった。光が大穴さんを消滅させたおかげで相手には穴が無くなり、大穴さんから点数を稼いでいた俺達からしたら、最悪の展開。

乾坤一擲：光のサーブは大博打となってしまった。

試合再開で光はさっきと同じジャンプサーブを打ったが苦勞しながらも相手は確実に受け、2打目はトスでつないでスパイクを打ってきた。

手のうちようが無いくらい鋭い所を突かれて一点…取られてしまった。

6 vs 8。残り時間8分。

2点差で前半に比べれば全然望みはありそうだが、俺らの周りにず

つと嫌な雰囲気の流れていた。

相手のサーブになり、意識をボールに集中させた。

相手もジャンプサーブで俺達の息の根を止めに来た。

サーブは光が受けたがタイミングが合わずれた所に飛んでしまった。五右衛門が追いかけてコート内にもどし、俺が確実に相手のコートに戻した。

休む暇…体制を整える時間も与えられず相手はすぐに攻撃を仕掛けてきた。

俺と羽樹がブロックに飛んで、光がダイブし、キキがダイブし、五右衛門が走り、守りオンリー状態になった。

ついには相手も決めれる所でも決めようとせず、ただただ長い、長いラリー…いや、また耐えるだけの一通攻撃が始まった。

光もキキも必死で「落とすもんか」とボールに食らい付き、流れた球を俺達が必死でカバーした。

点差が動かず何往復ラリーが続いただろう…10?…20?…30?…実際は4回くらいだったが一瞬発に筋肉を動かす動作の連発でもおボールを追いたくないと…体は悲鳴を上げていた。

5往復目のラリーでついに相手はしとめにきた。光の足元に鋭いボールぶち込み…両手を高々と挙げ優勝宣言をした。

6vs9…

また振り出し…相手は容赦なく穴である中央にサーブを打ってきた。
【しまった!!!】

中央のボールはセッターが取る役…俺はボールを目で追い、届け…!!!と精一杯手を伸ばした…

『危ない!!!』

『ウアアア!!!!!!』

俺では無理だろうと判断した光が、カバーに入っていた事に俺が気が付いた時にはもお最悪の状態だった。

ボールしか見てなかった俺は光の膝に顔面を強打し、大量の鼻血が出た。それに対し光は膝を押さえ倒れた。

審判が中止するかと促してきたが俺も光も中断なんてする気はさらさら無く、試合を続行した。

体操服は血で染まったが元々毛細血管が強かった俺は出るだけ出たらピタリととまった。

光は足を引きずる仕草をみせたが問題ないの一点張りであきらめる事だけはしなかった。

今のサーブは当然決まり、6vs10とまた点差が出来てきた。残り5分強。

【チクシヨーーーー!!】

心の中で思いつきり叫んで、俺はポジションに戻った。

『…ばれ!!』

ん??何か聞こえたように感じた。観客が大声で応援しているのだから当然かもしれないが…

『…優馬!!…』

え!?確かに聞こえた。周りを見ると五右衛門達も誰かを探してるみたいだった。

『タカハシイイ!!!!優勝するんじゃないのかアアア!!!!』
班員とクラスメイトが一斉に声の方をみた。

斉藤が叫んでいた。『!!!!!!』皆が斉藤に注目している中、班員だけは一瞬で斉藤から目を離しすぐ横の小さい子に目が行った。

『カオリン…』

『キキチャン!!羽チャン!!光!!優馬!!五右衛門!!頑張れエエ!!』

斉藤の馬鹿でかい声に消されかけていたが、斉藤の馬鹿でかい声なんかよりも俺たちの胸にはカオリンの声のが大きく響いていた。

松葉杖を使い、ぎこちなくトコトコとコートに近づき、応援席の最前列に座った。

今すぐにもカオリンのそばに行き、大丈夫??痛くない??頑張っ
て決勝まで来たぜ!!など聞きたいことや聞かせたいことが山ほどある。

近くに来て気が付いたのか、俺達のドロドロでボロボロな姿を見てカオリンは号泣した。

俺達はカオリンの気持ちは言われなくても分かっていた。

「『私のせいで…私が怪我なんかしたから…皆に迷惑までかけたのに私は何もしてやれない…』」正確じゃないかも知れないけどそんなような事思ってたんだろ??

「カオリンのせいでボロボロなんじゃないし、むしろカオリンのおかげでココまで真剣に頑張れたんだぞ!!安心して応援してくれ!!勝ったら打ち上げするぞ!!だから顔を上げてしっかり見ろ!!」

と自分で想像したカオリンの思いに心で応答した。

ピ。ピ。ピ!!

「4組!!4組代表!!試合再開しますよ!!!」

審判の『K・Y』な発言で俺達は我に帰った。皆、カオリンの登場で動揺していた。そして、諦めかけていた優勝の二文字をもお一度想いだした。

「すいません。大丈夫です。」

とキキが審判に答え、皆が真剣な眼差しに変わった。今の空き時間で少しだけど、体力も戻り俄然、闘志が燃えてきた。

6vs10。残り5分。

泣いても笑ってもこのコートで優勝を賭けて戦えるのはあと5分。

泥だらけになったって良い…

また鼻血が出たって良い…

酸欠でぶっ倒れたって良い…

腕が真っ赤にはれ上がったって良い…

足が壊れても走ったって良い…

俺達全員、5分…あと5分だけ本気で頑張ろうと誓った。

そんな思いが届いたのか、カオリンも顔を挙げ、喉が壊れそうなくらい声を出して応援してくれた。一人一人の名前を呼んで…

相手がサーブを先ほど同様、穴の中央を狙ってきた。俺だ!!!

光も俺を信じ、その後のカバーだけを考え一步も動かなかった。

ボールは意識があるかのように俺から逃げ、地面に吸い寄せられる。笑う膝を無視して落下点に飛び込みギリギリでボールと地面を引き離すことに成功した。

真上に上がったボールは「ワイが上げるで!!!」と光が五右衛門にトスを上げる。

「28や!」

「おう。」【A!!】

高く上がっていたボールを絶妙にいなし、五右衛門に軽くトスを上げた。

トスがあがった瞬間：光の手ごと引きちぎる勢いでバーン!!と爆発するような音が鳴り、ピーっと甲高い音が鳴った。

入った：綺麗に入った：7vs10。残り3分弱。

ワアアア!!と場外も盛り上がり。一点追加を一緒になつて喜んでくれた。カオリンだけは真剣な表情で俺達と一緒に闘ってくれていた。

サーブ権が入れ替わり、五右衛門のサーブ。

サーブミスだけは許されない。ここで3点取って同点にしたいところ。

もおジャンプする事もままならないのか、いつもジャンプサーブをしていた五右衛門がただサーブを打つだけの弱いサーブだった。流石に死闘を共にしてきた相手も疲れはピーク。ヘナチヨコなサーブにも少しながら苦戦していた。

動けるだけの力は残っており、ココは是が非でも逃げ切りたいとスパイクを打ってきた。

バン!!

キキは飛び込み、何とかセーブしたが、飛び込みの連続でキキの足はすり傷で血と砂でボロボロだった。

痙攣する足を引きずるように落下点に光が入り、必死の思いで「31」と俺に告げ、トスを上げた。

【B】と頭で確認し、絶対決める！！と言い聞かせ、ジャンプのフエイントをかけようとした時、ガクガクと貧乏ゆすりでもしているかの様に足が震え、その場に崩れた。【マジで頼む！！動いてくれ！！】あざ笑うかの様に俺の思いを体は無視し、ゆっくりと落ちるボールをただ目で追うしか出来なかった。

そんな俺を飛び越えるかのように羽樹が食らい付き、ギリギリのところドスにあわせる事が出来たが、極度の疲労で飛躍力の減った羽樹の足は俺の肩に引っかかり、横転するように羽樹は転がった。それでも、相手の意表を付いて何とか相手側の地面にボールを落とすことが出来た。

8 v s 10。残り2分弱。

何度も審判が中止するか？と聞いてきたがありがた迷惑とは正にこのこと。誰も試合の中断を申し出る者はおらず、試合続行。

激痛が走る足首：笑う膝：震える太腿：苦しい…でも…いや、だからこそ…諦められない！！負けたとしても諦めて負けるのだけは絶対に嫌だ！！

五右衛門の2本目のサーブ。腕に力が入らない状態でのサーブは、ネットギリギリを通過し、絶妙な位置に落ちた。

相手もこれにはどおすることも出来ず、あっけなくボールは地面を転がった。

予想外の追加点で9 v s 10。残り1分半。

五右衛門最後のサーブ。またしても力の無いサーブ。

相手も2度同じミスはせず、最後の力でボールを返してきた。

羽樹とキキでブロックに入ったがボールはブロックの横を抜け、光の1メートル手前に落ちようとしていた。

【よっしゃ…これとって同点や！！…それにしても何ちゅう距離や…】

たった1メートル距離がの永遠不変の距離に感じる。

ダイブというより倒れこむように光はボールを捕らえ、五右衛門がそのボールを死なせるもんかと気力と精神力で動き、トスを上げよ

うと俺を見た。

【優馬！！死んでも決めるよ！！！！】俺にははつきりそお聞こえた。

立っているのが精一杯の俺に容赦なく五右衛門からのトスが出た。

【ああ。死んでも決める！！】五右衛門に硬く約束し、最後の意地で動いた。

かつこよくスパイクなんて出来ない…でもこれだけは入れてやる。

実践躬行：口先だけではいけない、まず行動せよ。

地を蹴っている感触の無い足で落下点に入り、ジャンプできた…そのまま真下に叩き落とすように、相手のコートにはば垂直に落とした。

『オーバーネットだろ！！！！』

と言う相手の声が耳に入り、恐る恐る審判を見た。

ピー！！と笛が鳴り、得点表がペラツつとめくられた。俺らの追加点だ。

10vs10。

『（ウォットシャー！！！！）』

同点！！追いついた！！並んだ！！後一つで逆転！！優勝出来る！！！！

【《ふおおおお。面白い奴らじゃ。もう一点だけ動けるようにしてやるよ。》】

と神の御告げがあつたかの様に、後一点で逆転できると思うと力がわいてきた。

みんなの目にもさつきより輝きが戻っていた。

残り45秒。俺のサーブ。

的確に相手のコートにだけ入れることを考え、俺は慎重にサーブした。

『ナイスサーブや！！！！』

『ナイスー！！』

決して良いサーブでは無かったが声を出すのもしんどい仲間がナイ

スと叫んでくれた。

ボールは相手の中央に行き、冷静に対処してきた。スパイクで終わるほど相手にも体力が残っておらず、2本目でこっちに返してきた。『よっしゃ！！ワイが行くで！！』

汗だくの光が落下点に入り、それを羽樹につないで、羽樹からキキ貰い相手のコートに放り込んだ。

もおバレーというより、玉突き状態だった。

ビイイイイイ！！と激しい音が鳴り、『ラストイッポーーン』と審判が告げた。

同点の今、落とした方が負け…

時間切れのブザーが鳴ると相手も気力でしとめに来た。

とココに来てスパイク…そんなこと誰も思っはずもなく、ノーブロツク。好きな所に打ち落とせる。

中央！？角！？

バン！！と相手のピストルのようなスパイクが放たれ、自らピストルの的になる様に五右衛門が飛びこんだ。

『ウオオオオ！！頼む！！！！』

五右衛門の声が響きわたるほど観客は見入っており、少数しか声を出していなかった。

30センチで届く距離…

【五右衛門なら出来るさ！！！！】

【五右衛門！われのとりえわ運動神経やろが！！】

【五右衛門頑張れ…】

全力を尽くしボールに触れた五右衛門は本当にピストルで撃たれたかのように倒れこんだ。

ボールは後ろに飛び、光が追う。

『任せろや…』

光が五右衛門に【よおやった。ありがとう！絶対殺させへん！】と言うかの様に五右衛門の球を追いかけた。

【俺のダイブを無駄にしたらしくぞ！！】

【お前はいつだって俺達に何でもやれる！　そお思わせてくれたよな！】

【光頑張れ…】

皆の思いに答えたいと光は必死でボールに追いついた。コートからわずか3メートルくらい離れた場所。

「も無理や…誰でもええから返してくれ！」

と言、コート内にボールを戻した。

誰でも良い……と言ったわりにはボールは俺の方に飛んできた。5歩前へ行けば落地点。

【頼む！！頼む！！頼む！！動いてくれ！！】

200kgくらいあるんじゃないかと思う足を、一歩一歩だしてる間にも光からのボールは距離を縮めてくる。

一歩前までの足とは別の足みたいに一歩一歩どんどん重さが倍になっていくように感じた。

『優馬頑張れ！』とカオリンやクラスの奴らの声が聞こえているよな三つ目聞こえているような…

モウロウ意識が朦朧とする中光のくれたボールだけは目を離さなかった。全てがスローモーションに思えた。

観客の声も聞こえない……

ボールは静止しているような……

究極に眠い……

頭が重い……

地面に引つ張られる様にゴロリと倒れそ……ドタツ……！！！！！！……
天を扇いだ……

その瞬間今までコマ送りだった映像が再生ボタンを【ポチッ】っと
 されたかのように普段のスピードで動き出した。

ボン・ボン・ボ・・・

ボールは俺の横に落ちた……

バイー！！！！！！

試合終了の合図：

勝ったのか??…

負けたのか??…

キキ・羽樹・光・五右衛門・カオリン…両手で頭を押さえ肩を震えさせている…

相手はコートで抱き合って喜んでいる…

そっか…負けたのか…負けた…

もおすこし踏ん張って立って居られたら…

ボールだけでも返していれば…

…たら

…れば

…たら

…れば

やり切れない思いが一気にこみ上げてきた…

血が出るほど下唇を噛み締め、泣いた…

生まれたての赤子に負けないくらい…

『和茶との出会い』

『優馬おはよう！！御疲れ様。』

どれくらいの間寝ていただろう…

俺達は試合が終わり、負けた現実を受け止められず泣きじゃくっていた。

そんな俺達の悲しみを無視し、表彰式及び閉会式が始まった。負けたとは言え一応準優勝。この糞だらいい中、表彰式には出ないといけない。

そお考えるとだるさがどつと押し上げてきた。

校長…体育委員…生徒会長…やたらダラダラと長話…もお何時間…何日…立ち続けてるんだろ…

【ああ…】

ふと目が覚めると保健室に居た。

『優馬おはよう！！御疲れ様。』

『カオリン！？あれ？？閉会式は？？』

『ええ！？閉会式の最中に優馬気絶しちゃって保健室に運ばれたんだよ！？』

『ああ…覚えてねーや…』

『今他の皆もぐっすり寝てる。ほら！』

カオリンの指差す方向は夕日が眩しくすぐには誰が何処に寝ているか分からなかったが、次第に目慣れって言うのかな？

目が明るさに慣れてきて、キキ。羽樹。光。がベットに寝ていた。

『あれ…？？五右衛門は？？』

『五右衛門も寝てるよ。ほらそっちで。』

どおやら保健室にはベットが4つしか置いてなく、五右衛門はソファーに窮屈そうに丸くなって寝ていた。

『叩かれた夜は寝やすい…まさに今日みたいな日の事やな』

『それ…意味ちがくない？？？』

『え？違うの！？』

『他人に害を与えるよりは、自分が害を受ける方が、心安らかでいられるということ！！これが本来の意味。』

『ふうん。』

カオリンに説明されてもいまいちピンと来なかった。

…5分くらい沈黙が続いた。

一度二人きりの状態で沈黙になると何か話し出しづらいのは俺だけだろうか！？

何か話そう話そうと思って喉に言葉がひっかかって中々でないんだよね。

まあこれは誰にでも言え…

『ねえねえ。そおいえばさあ。』

俺だけのようだ…

『ん？？』

『皆起きたら良い喫茶店あるから皆で一緒に行かない！？』

『お！良いね！あ…デモ…優勝できなくてホントごめんな…約束したのに…』

『え！？優勝したじゃん！！』

『は！？』

『準優勝でも優勝は優勝だ！3位だったらダメだけどね！ちゃんと約束守ってくれたじゃん。』

『…』

何か…泣きそうになったから…とつさに布団を頭からかぶってしまった。

『え”！！？どおしたの！！？』

何か変な事言ったあ！？優馬！！優馬！！と布団に丸かった俺をカオリンはゆすりだした。

『眠い！！あと1分寝かせて！！』

この時の1分は10秒くらいに感じた。

『1分たったよー！！』

布団から勢い良くでて「ふああ、まだ寝たりんなあ」と言い、出てもないあくびをし、体を伸ばした。

「目充血してるけど大丈夫！？眠いなら寝てていいよ??」

「…もお平気。それより足怪我してるのに喫茶店なんていけるの??」

「優馬がまた後ろに乗せてくれるでしょ??」

「…」

喫茶店について色々聞いているうちにキキ・光・羽樹・五右衛門と皆が起き上がり、起き上がった順にカオリンに謝っていた。

約束を果たせなかった事を…

カオリンは一人一人に「準　優勝　してくれてありがとう。」と言った。

キキと羽樹はカオリンをギュツと抱き寄るといった反応を見せたが男性陣は俺と全く同じ反応してた事に赤面する一方笑えてきた。

とりあえず皆起きた事でさっきまで話していた喫茶店の事を皆に相談する事にした。

「そおいえばさあ。カオリンがオススメの喫茶店あるって言うてんだけど…」

「ああああ。そうそう。あのね。今日今からその喫茶店行かない?あ…皆が疲れてるなら今度でも良いけど」

「おいおい!そんな意味不明な説明じゃ。謎過ぎるぞ!」

「優馬に同感!」

「わいも」

「あたしも」

「私も」

皆から集中砲火を浴び、一瞬ひるんだカオリンだったが、可愛らしい口をパクパク動かせて、皆に説明した…説明しまくった。

「ふうん。で!??」　光

「で?」　羽樹

「で?」　キキ

『ワンモアー!!』 五右衛門

見るに耐えなく俺が説明することにした。

『まあ簡単に言つとさ。その喫茶店にさ6人専用の席があるらしいんよ。その店変わつててさ、その席だけ月学制で3000円払うといつでも行つて良くて、ジュース飲み放題でさ。まあ頻繁に出入りするぶんにはお得らしいわ。それで力オリンはそのオーナーと知り合いらしくてさ。高校の間思い出を作る場としてその喫茶店を使いたいらしいよ。』

『ふうん。で!?!』 光

『で?!』 羽樹

『で?!』 キキ

『ワンモアー!!』 五右衛門

『...』

【「テメラアアア」って光に飛びついてヘッドロック!!

【「わるいわるいギブやギブ!!」と苦しんでる光をほどいてやり、少しして何故か皆で爆笑した。

結局:『騒いでるくらい元気ならもお帰りなさい!!』と保健室のおばちゃんにどやされ、シーンとした廊下をカツカツと歩き、自転車置き場に集合した。

『んで、結局どないするんや!?!その喫茶店俺は全然かまへんで!?!』

『ああ、俺も全然良いよ。6人で3000円だったら一人月500円でモミホでしょ!?!』

結局何だかんだ言つていくんだよね。

それなら最初から素直に賛成せーちゅーに!!と心で思いながらもまあこれが俺達の飽きない楽しさなのかも:と勝手に納得した。

『じゃあ五右衛門!力オリン足怪我してるから後ろ乗せたつてな!

!』

『おう!つて何!?!』

『決まりや!!五右衛門がんばりいや!』

『五め衛門：五右衛門。乗って言い??』

『ごめも：ああ良いよ。乗れ乗れ。』

『ゴメモオン：！カオリンナビ付きだし、先頭走ってよお』

『ウツセエ：！』

とカオリンナビを頼りにチャリを走らせること1時間：1時間：！
！?

『ちょ：！こんなに遠いんか??!??』

『薫姉さん：！頼むでホンマ：！ワイら死んでまうで??』

『ん：。間違えたかも：！じゃあとりあえず。戻って：！（爆）』

言われるがまま五右衛門は運転し、俺らも五右衛門の後を追いか
続けた。戻りに戻って40分：！

『ウオオ：！』と勇往邁進する五右衛門。

『ストー：！』

俺達は一軒の家ともレストランとも喫茶店とも小屋とも言えぬ建物
の横に止まった。

屋根：屋根に問題あり：！と誰もが思った。

『なんで屋根だけ草できてんねん：！』

『いやいや、あれ草が生え散らかしてるんでしょ：！』

『あれ草で出来てるんだよ：！?』

『（なにいいいい：！）』

『嘘ッ』

『（（帰れ：！））』

光が草で出来てるって言ってもおかしくなくらい屋根一面草のよ
うなものが生えていた。

オーナーの趣味なのか放置していたら悲惨な結果になってしまっ
たのか：

無用の長物とはまさにこのことを言っただな：と国語の復習が出来
た。

でもまあ、レンガで造られており、入り口も綺麗で、洒落たオリジ
ナル喫茶店って感じだった。

早く早くと急かすカオリンを待たせるのもかわいそうだし、とりあえず、中に入ってみることにした。

入り口の純白なドアには 和茶 という掛札が掛けられていた。

『IN 和茶6人席』

『マスターあー。こんにちはあ。』

『おう！薫！その子らがいつも話してるダチ公！友達の皆さんか！？』

『うんうん！！』

景気良くマスターとカオリンがルンルントークをしてる間に会話の疑問点を五右衛門にぶちまけた。

『…おい、今いつも話してるっていったよな…』

『ああ…言ったな。』

『いつもの様に来てる店をココまで迷うか！？…』

『まあカオリンなら…』

『だな…』

『お待ちせー！紹介遅れたけどマスターの岩田さん！！岩田さんって言うのと嫌がるからマスターって呼んであげてね それと、もおお金は払ってあるから今日からあそこがあたしらの特等席！！！！』

ビシッ！！と小さな手で自信満々に指した場所は、丸いテーブルのいかにも喫茶店ポイ場所ではなく…部屋だった！！

『え！？』

『ん！？』

『は！？』

『あそこ！？部屋じゃん！！個室じゃん！！』

『だよお いい感じでしょ！？ 中にはちゃんと机もあるから場所決めようね』

予想外もいいところ。個室が月3000円で貸切！？ジュースも飲み放題で！？…ありえない！！…あの部屋ゴミ置き場とかなんじゃ…誰もが不安を抱えられるだけ抱えて、カオリンの言うがままに部屋へと足を進めた。

『じゃあん！！！！！！！！』

『（オオオオ！！）』

ついつい、5人とも声を上げてしまった。ゴミ置き場なんてとんでもない：6人には少し狭いが、とてもセンスの良い部屋だった。

INアジアン！？って感じ？！

真つ白な壁と2メートルくらいの丸い窓、ガラスが見えないくらい綺麗で透き通っている。

そして床はシミの無い畳、ほのかに畳のにおいが部屋中に感じ、何ともいえない癒しのにおい。

唯一の家具ヒノキの丸い机。真ん中においてあるだけ！！！（え！！？）

つて言ってもとてつもなく落ち着く、凄い良い空間だった。ますます3千円ってありんでしょ！！

『光ちよつと良いか！？』

『ん？あ？？なんや？？』

光を呼び出し、他の4人を部屋に残し、外に出た。

『あれ3千円ってかなり怪しくないか！？』

『ああ。わいもそれおもつとったわ。裏があって後々とてつもない請求とかがくるんじゃないかねえかってな。』

『推測じゃあ分からんし、マスターに聞いてみるか。』

『せやな。』

マスターを呼び、俺達は色々な疑問点をぶつけた。

『あの、ちよつと聞きたい事あるんすけど良いすかね！？』

『おう！！なんでも聞いてくれい！！』

『あの部屋：本当は月いくらなんですか！？ジュースとか貸切とかで月3000円は破格すぎじゃないですか！？』

おんどれはアホか！！と光に叩かれた。どやらあまりにもストレートに聞きすぎたらしい。じゃあお前が聞けよ！！つてね。

『ブヒヤブヒヤブヒヤブヒヤ！！』

『！！！！！！』

突然の大声の笑い！？吠え！？喘ぎ！？良く分からないマスターの

行動に空いた口がふさがらなかった。

『おおおう！そんなビビるな！！笑っただけやないか！！』
どおやら笑いらしい。

『あ…はい。』

『あの部屋薫は月3000円っていつとったんか！？あそこは月18000円だぞ！！』

『（エエエ！！！！！！！！）』

『まあ薫自身は3000円って信じこんどるし、あながち間違いでも無いけどな！18000円ってえのは一般の客の場合だ！！』

『え！？』

『分からののか…お前らアホやる！！ブヒャブヒャブヒャブヒャ！！』

お前がだろ！！！！って二人で突っ込みたかったが、流石に初対面で年上の大人…まあココは耐えて…

『おい！！突っ込まんかいッ！！』

どないやねん！！！！って二人で突っ込みたかったが、またまた堪えて冷静に聞いた。

『えつと、ちよつとどゆことすか！？』

『薫は俺の甥っ子や！！あ…姪っ子や！！可愛い姪からお金なんてとれんやろ！！だから薫には6人で3000円だ！！！！って言うてあるんだ！！！！』

金とってんじゃん！！！！って突っ込みどころ満載のオッサンにいい加減…持病の突っ込みたい病が騒ぎ出した。

『そうなんすか。まさか俺らは一般料金…一人当たり3000円すか！？』

『当然だろ！！払え！はよ払え！3000円！！』
…』

この糞イカレマスターこんなボツタ店二度ときーひんわ！！！！つと光が言う3秒前！！

『ブヒャブヒャブヒャブヒャ！！嘘！！嘘！！お前らの事は薫から

よお聞いとる！！めちやめちや仲ええらしいな！！薫の親友は俺の親友！！お前らも只に決まっとるやる！！」

ですよねええ！！つと言いたかったが礼儀正しく礼を言った。

「え！？本当にいいんすか！？ありがとうございます」

「ま！！お前らが払いたいなら俺は貰い受けるぞ！！」

またまたあ堪忍してや　！！つといきなり慣れ慣れしくなった俺達に「お前らはそっちの方が似あつとる！！遠慮なんてスナナ！！」と寛大な心で迎えてくれた。

これからヨロシクな！！つと岩の厚くそれでいて暖かい手を俺達に差し出し、少し照れくさかったが俺も光もギュツつと握手した。

「（ヨロシクお願いします！！）」

「おう！！」

五右衛門たちの待つ部屋に戻ると、なにやら机に紙を広げ、ミーティング！？のような事をしていた。

「おまたくなにしてん！？」

「おかえりい。ちよつとこの部屋ね殺風景じゃん！？自由に使つて良いらしいから、家具とか持ち込んで住みやすくしたいなつて。」

羽樹の意見に賛成でもなければ反対でもなかった。

「まあ俺はシンプルで良いと思うけど、色々揃えたいなら計画的にやればいいんじゃない？？」

「せやな。一編にいろいろなもの持ち運ぶと店側にも迷惑かかるしのお」

俺達も加わつて、丸いヒノキの机を囲んで一枚の紙に色々な意見を出した。

「TVほしー！！」　羽樹

「なんでやねん！！家ちやうで！！？」

「エへ」

「冷蔵庫置きたい！」　キキ

「家ちやうちゅーに！！何冷やすねん飲み物ならあるやないか！！」
「テへ」

『ベッドほしい』 カオリン

『（却下）』

『グス…』

流石にカオリンには光意外も反対した。

『あのなあ！ココは隠れ家みたいなもんやし、強いては他人の家を借りとるんやで！？TVだの冷蔵庫だの…ありえへんやん！？何かさあもつと別のものにしょーや。』

『ものって言う物や無いけど掛け軸掛けたいな。俺…洪すぎ！？』

『いや、わいは全然ええで！！』

『それなら文字は自分達で書こ！？』

『羽ちゃんに賛成！！』

『私も。』

あれ！？思ったよりも批判が無いことに拍子抜けしたが、全員賛成で意外にも俺の意見が通った。

『TVがダメなら…小さめの本棚欲しいかな』

『ええやん。ええやん。本棚に日記だのココで練った計画ノートとか入れとこうや！！あと…教科書も』

こーしてとりあえず2品置く事にした。

『棚はなけど、掛け軸の新しいのならあるぞ！！！！』

盗み聞きしてたマスターがいきなり輪に加わって、新しい掛け軸を持ってきてくれた。

『おおきにな！！マスター。』

『おう！お前らは俺の家族みたいなもんや！！何でも力になるで！！』

何を書こうかな…と軽く始まった話し合いだったが、とんでもなく迷いに迷った。

3年4組7班参上！！…ありえねー。

7人にして1人！！…くせー。

ド素人が考えとつても永遠におわらへんわ！！と光がかばんから世界の偉人 THE 名言集 という本を取り出した。

やった。』

とかばんからもう一冊めちやめちや似た本を取り出した。

『えへへ』と照れる光に皆で大笑いし、マスターも独特のブヒャブヒャブヒャブヒャ！！と言う笑い声を誰も居ない店内に響かせた。

『8時半か！！時間も時間だし今日はこの辺で帰れ！！毎日来てもいいし、普通の土日なら泊まっていつでも良いでも今日は球技大会だったんだろ！？早めに休んで体を癒して明日にでもまた来い！！！月曜は休みなんだろ！！』

マスターに言われ球技大会を思いだし、どつと疲労と樽さが襲ってきた。

ソロソロ帰ろう！！

俺らがこれからもお世話になりますと6人で頭をさげ、店を出ようとした時…

『おう！！コレコレ！！一応コレもつとけや！！あそこの部屋の鍵や！！6つある！！一人一個や！！』

そう言いマスターは俺達に【和茶6人席】と書かれたキーホルダー付きの鍵を俺達にくれた。

『大・暴・露・大・会』

時は休む事を知らず：一步一步常に進み続ける。

今日という日、今という時間：

一秒一秒が最初で最後：

もお二度と全てが同じ状況なんて存在しない：

そんな事を考えさせられる意味深な夢を見ている俺。

【チュンチュン】と小鳥の囀りで：はなく目覚ましの【ジリリリリ】という激しい轟音で意味深な夢からも開放され、目が覚めた。

一週間続いた梅雨も今ではすっかり終わり、キラキラと元気な太陽の朝日が眩しい6月10日：時の記念日：が祝日ではない。

そう、六月は年間、12個の月の中で唯一祝日が無い月。水無月：ではなく俺らの間では祝無月で通っている。

え！？8月も祝日は無いぞって！？いやいや、だって8月は夏休みじゃん。平日も祝日も休日も関係ないサマーバケーション！！

つーわけで、高校生の俺達にとっては祝日が無いのは6月だけとなる。実に萎える。

習慣病の様に布団からでて、ギャツビーで顔を洗い、めざましTVを見ながら朝食をたべ、クリアクリーンで歯を磨き、『行ってくるねー』と家族に言い玄関を開ける。

次はなんだっけ！？

あ！そうそう、俺が家を出ると必ず吠えてくる（俺だけに：）隣の家の犬。

バクウエル！！

キャンキャンなく可愛い犬とは程遠く、グルルルルと常に牙を出し、鳴き方だってワンワンを通り越してもはやウオンウオンに聞こえる次第だ。

そんな狂犬慣れしている俺は、平然と家を出た。

『ヤッポー！！』『ウッス！！』

『うるせえ！！バクウエル！！！！じゃないね……』

突然の非日常的瞬間。羽樹！？と五右衛門！？

『ん！？今日学校だろ！？お前ら二人でなにしてんの！？まさか……朝帰り！？！？』

『ドキ！！！！』

『変なりアクションすな！！勘違いされちゃうじゃん！！』

悪ふざけする五右衛門を叩き、これまでの過程を説明する羽樹。

『……という訳なの』

『ほうほう。要するに……』

昨日の夜親戚のおばさんの家に泊まった羽樹は、そのおばさんの子供、春香と話しているうちに春香と五右衛門が同じ小学校と言う情報を入力。

『へーじゃあ五右衛門もこの家の近くに住んでるんだ。』とあっさり理解。

翌日の朝、つまり今日。羽樹は五右衛門に電話し、近くに居るから学校一緒に行こうと伝える。

五右衛門も断る理由もなく、いつもの俺との待ち合わせ場所を伝え、そこに来いと言う。

五右衛門はいつも何故か俺より30分くらい前に来ており、ずっと待っている。

羽樹にも当然、自分（五右衛門）の集合時間を伝えている。

早！！！！と思いつつも羽樹も五右衛門同様、俺の来る30分前に到着。

『優馬は30分後くらいにくるよーっ』とその場で聞かされ『化粧も、髪の毛の手入れも、色々短縮して急いだのに！！』と激怒する羽樹。

『え？？いつも通り可愛いから全然気が付かなかった』と五右衛門の軽すぎる言葉に激怒すると思いきや、『えへへ。そう？』とアホ丸出しに許す。

気分良好 とは言え、元々待つことの苦手な羽樹。

『優馬の家も知りたいし、迎えに行こ』と五右衛門に提案。が名案になり、今、俺の目の前に居ると言う非日常的瞬間にたどり着くまでの過程を聞かされたのだった。

『そゆこと 五右衛門と優馬って意外と家近いんだね。』

『まあお前らに比べたら一番近いけどチャリで15分かかるぞ!？』

『えー。近いやあん。うちと同じ中学のキキとカオリンでも20分くらいかかるのに。』

『そんなにかかるんだ!！』

と実は班員（親友）のプライベートをあまり知らない俺達。

親友とはいえ男女のうすうす壁みたいのでプライベートとかにはあんまり聞いたりしなかった故、2ヶ月以上たった今でもこのしまつ。

これじゃあいかん!！と思い、今日の学校帰りにでも、和茶にて暴露大会!！を提案しようと思った。

とりあえず、学校に行かねばと、世間話をしながら学校へ向かった。

キンコーンカーンコーン!！

始業の鐘…じゃなくて終業の鐘。

『で、今から和茶で暴露大会するの???』

『おう!何か俺らもお2ヶ月もたってるのに、男女間ではお互いのプライベートって殆ど無知じゃんね。それを今日!！皆で暴露しようって思ってたさ。どお?？』

『えー。プライベート侵害やあん』

『賛成!！!』

『わいも賛成や!！』

流石は光と五右衛門!！キキの反対そんな意見を押しのけグッジョブ。

『よーし。賛成意見しか出てないし。今からいつも通り和茶に集合

「！！」

「はあい」

カオリンは相変わらず天然で可愛く返事してくれた。
ブツブツブツとキキと羽樹の憎悪を無視し、俺達は和茶に向かった。

今更だが、和茶には学校から約10分で付く距離にある。初日に何で1時間40分もかかったのか不思議でしようがないが、まあカオリ…その辺は放置しよう。

あの日以来、和茶には殆ど毎日顔を出すようになり、マスターの「赤字」に大貢献している。

最近では店の手伝いを無給料でしたり、学校の連中に和茶の宣伝をしたりと、黒字にも大貢献していた。

イーブンイーブンって事だな。

「おう！！お前ら今日も来たのか！！！ブハハハハ！！」

ブハハハハ！？ちょっと前までは、ブヒヤブヒヤブヒヤブヒヤ！！という笑い方だったが俺たちが指導し、調教し、何とかまともな笑い方になった。

それも黒字貢献の一部だよな。

「ちやあつす。マスター。」

「今日も世話んなるで！！コーラたのむわ」

「あたしはオレンジジュース。」

「あたしも」

まあこんな感じで、すっかり我が家気分になっていた。

俺達専用の部屋。和茶6人席も結構住みやすい空間になってきたんだ。あの後、色々あって何気にホワイトボードとか付いちゃってたりしてるけど…これが意外に役立つんだよね。ほらっ。

大・暴・露・大・会

【ルール】

質問した内容には絶対に答える！！

男女交互に質問する。
嘘厳禁。

光が大きくホワイトボードに書き、皆が拍手。キキも羽樹も公開内容は漏らさないなら…と言う事で乗り気になってくれた。

『じゃあわいから女子に質問や！！！！』

『はい』

『うん！！』

『OK！！』

『よっしゃ！光！！秘密あばいたれ！！』

『任せろや！！とっておきがあるんや！！』

ニヤリと笑い、親指をピンツと立て決めポーズを見せてきた。

流石にこれには俺も五右衛門も期待が胸いっぱいに広がり、ドキドキしていた。

『ほないくで！！！！女子ってオナニーはどのくらいしてるんですか！？』

『プチ・暴・露・大・会（前）』

一瞬にして空気が空気が凍りついた。いや、凍りついたなんてもんじゃなかった。

光のともない質問に俺も五右衛門も流石に、20秒くらい方針状態だった。

光にとつてのその20秒はとてつもなく長く、2時間くらいの拷問に感じ、地獄を見たわ…と嘆いていた。

カオリンを除く、女子二人の鬼にこれでもかってボコスカに蹴られ、殴られ…光の顔は原型をとどめてなかった。

『さあて ちよつとルール変更したから皆ボードに注目！！！！』

ぷち・暴・露・大・会

【ルール】

質問した内容には絶対に答える！！

質問内容を書き、それを一つの箱に入れる。（注：いかれた内容は即フルボッコ）

男女交互に質問する。（注：質問した内容は箱から引いた物を採用）

箱から引いた質問の記述者の名前は伏せる事。（注：いかれた内容の場合は名乗る事）

嘘厳禁。

んー。微妙に付け加えられているのと注意書きが妙に気になるところだ。

『皆も理解した所で質問内容を各自5つ、5枚の紙に書いてこの箱に挿入してね』

キキに渡された紙に、羽樹に言われるがまま、5つの質問を書いた。

俺の質問内容は…内緒で

最後に箱に挿入したのは、他でもない光だった。まあ…当然って言えば当然だけど。

光の挿入で全員の質問、計30個の質問が出来た。

この箱を2週回して各自2回ずつ質問するという内容だ。

質問内容と回答はボードに記述される。

『それじゃあ、わたしから引くね』

最初に引くのはキキ。

デパートのくじ引きをする5歳児のように目をキラキラとさせて、箱に手をつ突っ込んで選んでいた。

『これだ!!』

キキが勢い良く取り出した紙には…

【皆の趣味!!】

と書かれていた。暴露大会って言うのかなこれ…

とりあえず皆がそれぞれ自分の趣味を一つ答えた。

答えるたびにキキがボードに書き出した。

趣味

キキ：映画鑑賞

羽樹：読書

カオリン：生け花

五右衛門：スポーツ全般

優馬：海外ドラマ鑑賞

光：天体観測

しよべエエエ!!…なんつうか、ねえっ。

今日、この日の目的は暴露大会で、あって合コンではない。

趣味など普段学校でもどこでも疑問に思ったときに聞ける。

わざわざこんな大げさに集合して語り合う事でもない。俺から言い

出した事もあって、一回目の質問無いようにうんざりしていた。酒が入って、酔って勢いでしか離せないような事…それが今日の目的だったのに。

このままグダグダくだらない質問で終わるより…と思いある提案をした。

『ちよつとさあ。これって何か暴露大会っぽくない！？』

『え？』

『こんなさあ、趣味だの、好きな食べ物だの、特技だの…そんなのいつでも聞けるしさ。』

『せやせや！！わいの質問くらいは答えなあかんわな。』

『いやいや。あれは流石にプライバシーのかけらも無いしさ、度が超えてるっーか。』

内心、ちよつと気になったり、答えて欲しかったりしてたけど、ココで光に賛成して、セクシャルハラスメント的質問を再開しようなど言い出したら、女子達が『帰る』と言い出しそうな…いや、必ず言い出して、その後はもおグクシャク…なんて結果になりかねないよって、下心は封印。

寝る前にでも想像してればよし！！

『うんうん！！光の質問は確かにちよつと問題あったけどさ。まあちよい、あんまり人には言えないような…まあ言いたくない事は無理しなくていいけど…』

五右衛門も俺に賛成してくれて、一時的に場の空気が固まった。沈黙ってやつ…

『分かった！！でもワイセツ的な質問は無しネ！！』

と沈黙を破って最初に話したのは、光の質問に一番激を飛ばしていた羽樹だった。

『よし！！キキもカオリンもそれで良い！？ちよつとベビイな内容の質問にしても！！』

『あたしは良いよ！！』

『私もワイセツ的な事じゃなかったら極力答えるネ』

『よっしゃー！よっしゃー！じゃあさっきの質問にはワビを入れる
！！無神経な質問ですまんのお。堪忍してくれや。』

と光も謝り場の空気も和んで、再開した。

『じゃあまたわいが仕切るな！！今、思いついたんだけど、質問内容
は一つにせんか！？質問じゃないけど、各々一番聞きたい事をその
場でわいから時計回りに質問する。もち、変な質問はなしや！！
分かったか五右衛門！！』

五右衛門は乗り突っ込みをすっかり忘れ、白い目で光を見た。

『OK！！何度も何度も紙に書いてやるのめんどいしね。じゃあ光
質問してよ』

『よっしゃー！！今までに一人でも異性と付き合った事ある！？これ
くらいはセーフラインやろ！？』

光の目は俺に向けられ『はよおセーフゆえや！！』と声に出さず
とも何となく分かった。

『まあいいんじゃない？？ちなみに俺は…こいつらのせいで一人だ
け！！中学の3年以来ご無沙汰…』

『ええ！！そなの！！？意外やん。』

羽樹に驚かれ、これは…優馬みたいな子が今まで一人しか付き合っ
て無い何て…と言うほめ言葉なのか！？と内心ドキとしたが、そ
の後に続くキキの言葉を聞いて、苦笑した。

『もお高3なのね…』

『そーいったんなや。わいも、一人やで！！優馬と同じで中3の時
に一人、まあその子も付き合ったつーか登下校一緒にしただけの仲
や！！』

『それでも付き合っただけ全然ましやん！！俺は…0…この質問が
来たとき泣きそうやったわ…』

『おい！！！！』

と俺と光から鋭い突っ込みが入った。

『やめろ！！！！！！言つな！！！！言つたら…』

『ああ！？われえ暴露大会やねんで！？ゆうたら？？しばくか！？』
『言ったら…泣く…』

五右衛門のチワワの様に可愛い瞳を無視し、俺と光は坦々と語りだした。

(ええええええ!!!(

力オリンまでもが驚き、女子達は普段から大きい瞳を目玉が落ちそうなくらい大きく開けて驚いた。

「五右衛門：小沢さんと昔付き合ってたの！！？」

小沢聡子：覚えていたんだろうか…キモ子だよ！！キモ子！！五右衛門が早とちりで高2の時に付き合う事になった子ね…

『いや……まあ……その……ね……』

『どのくらい付き合ったの？？』

『ちあ…』

「なんで別れたの!？」

『さあ…』

「どこまでやっちゃったの!?!?」

『さあ……』

女子達は興味深深に一方的に聞きまくり、もお質問攻めから10分がたった。

こいつら…今は可愛いけど、40歳になったらその辺のオバハンみたいになるんだろうな…と光も俺もがっくりに来ていた。

『はいはいはい！！とりあえず男子は全員答えたし、次は女子達の番やぜ！！』

最初はニヤニヤと光と一緒にみていたがあまりにも可愛そうだったし、まあ一応親友だし、救つてやった。

『せやで！！五右衛門のへの質問はこれにて終了や！！それにお前
らもワイセツ的発言してたで！？彼氏とは何処までやったの！？と
かこれからの質問で出てきたらちゃんと答えれるんか！？』

光の仕返し交じりの正論な意見に女子達は：興味心を抑え、光の質問に答えた。

『私は3人かなあ：中3に一人、高1で2人。高1に最初に付き合
った子とはすぐ終わっちゃってさ。その後もお一人付き合っただ
けど、去年の秋に終わっちゃった。以上！！！』

とキキが意外にも詳しく教えてくれて、ちよつとびっくり。羽樹が
キキに続くように答えた。

『うちも3人。キキと全く同じ感じだよ。うちの場合は冬までもっ
たけど、振られちゃってね。酷く落ち込んだけど今は立ち直って彼
氏募集中！！！！以上！！！！』

『（おおお！！！！）』

男子に質問タイムを与えずカオリンも答えた。

『あたしは五右衛門と一緒に0人だよ』

『（ええええエエエエエエエエ！！！！）』

声が裏返ってしまった。

『まじで！？』

『つてか五右衛門0人やないし！！』

『いや、俺は0だ！！カオリン仲間やな！！』

『だねえ』

『カオリンいままで、色々告られてたけど全部断ってたしね。』

『うんうん。めっちゃ中学でも高校でも告って来る子多かったよね。』

『

『え？？ちゅー事はキキとか羽樹は告白受けた事ないんか！？』

『まさか！？もお18歳なるんだよ！？告白受けたこと無い子なん
て居るの！？』

『私はこれまでに7人くらいかな？？羽ちゃんも同じくらいだよね
！？カオリンは20人くらいだと思っよあ。光んたあは！？』

カオリンの20人と言う数字に驚く隙も与えてもらえず、羽樹とキ
キのコンビプレイに答えるしか道はなかった。

『0人ですが何か！？』

『光同様。0人ですが何か！？』

『同じく0人！！！！』

五右衛門だけ自身満々に答えた。が…無視。

『プチ・暴・露・大・会（中）』

『ごめんごめん。ちよつと言ひ方悪かつたね』

俺達全員（一人嘘）誰からも告白されたこと無い、哀れな連中にキキと羽樹から謝られた…何かむなしいね。

どおやら恋愛経験、人気度、は当然の様に女子達の方が格段に先輩らしい。そんなのはルックスで誰もが一目瞭然だが、何かちよつと価値観の違いって言うのかな…少しだけ寂しい感じになった。

『あー！でもさー！告白されてないのに付き合つた経験あるってことはさ。告白してOKだったって事だよな！？それってすごいじゃん！！ね』

謝罪の次は慰め…『ネッ』と羽樹からキキにバトンが渡され、

『うんうん！！あたし告白とかしたことないし…勇氣あるって思う。それに成功したんだもん本当に凄いと思うよ。』

キキは相変わらずポーカーフェイスで、本音なのか羽樹同様慰めなのかよく分からない。

流石のカオリンもなんとも言えないこの変な空気を嫌になつたらしい。

『ねえねえ。次は優馬の質問だよな 光の質問には皆答えたし、優馬質問してよ』

『え！？あ…ああ。んー。じゃあ現在好きな人つて居る！？憧れとかじゃなくて恋愛対象でね！！』

【やつちまった。恋愛がらみの事なんてもお聞きなくなつたのに、カオリンのいきなりの振りにとっさに変な事聞いてしまった。】

『ちなみに。俺は今居ないけど、高校卒業するまでにはちゃんとした恋愛してみたいかな！！』

【おいおいおい、何言つてんだ俺は…】
声に出しての自問自答。それもかなりの早口で、坦々と自分だけ語

ってしまった。

『わいは一応おるで！！まあせやかて、脈無しもええとこやけどな！！！！アハハハ……』

『俺は、優馬と同じで探し中やなあ。まあこつちも優馬と一緒にんだけど俺も高校卒までには彼女作って同じ大学いきてえな！！』

『あんた、大学なんて行けないでしょ。あほだし』

『ほつとけ！！お前はおるんかおらんのか言え！！』

『うちは……内緒　はだめだね。居るって言えば居るよ。でも恋愛的に好きなのか、人？友達？として好きなのか分からないけど。』

『私も羽ちゃんと一緒に気になってる子は居るけどこれが恋愛感情なのかは微妙やね。』

意外にも皆あつさり答えてくれて、心臓バクバクさせていた自分が恥ずかしくなった。

【高3だもん……好きな子の語り合い何て恥ずかしがる歳じゃねえよな……】

『あたしは好きな子いるよ』

『（（お”！？））』

今まで恋愛とは無関係っていうか20人もの狼（男）をことごとく断り続けたカオリンに好きな人！？

カオリンのともんでもない発言に俺達男子は勿論、キキや羽樹までもが驚いた。

『優馬』

『来た！！！！！！俺の時代！！！！』

【神よ……俺は……一生カオリン、いや薫を大切にすると誓います。絶対にしあわ……】

『と……光と……五右衛門の事めっちゃ好きやに』

【……】

最初に優馬って名前出た時は神に一生カオリンを大切にすると誓ったのに……

放心状態の俺を見て皆、笑い転げていた。

『アハハ　うちも優馬と光と五右衛門の事めっちゃすきやで』
羽樹がカオリンの頭をナデナデしながら、可愛いなあと頬擦りしていた。

…優馬の質問終了…

『おっす！！！差し入れもって来たぞ！！！皆で食え！！！』

マスターがジュースとお菓子の差し入れを持ってきてくれた。すっかり・6・人・の世界に入っていた俺達はマスターの入室で現実に戻った。

外はすっかり暗くなり、さっきまで夕日が差し込んでレンガ色だった部屋が、いつの間にか電気の明かりの白い部屋に戻っていた。

『おまえら、盛り上がるのいいが、時間とかは気にしろよ！！！俺だってこんな事言いたかないが、補導されたりしたらこの店にはもおこれなくなるぞ！！！そしたら俺も寂しいし、嫌だ。だから次の日に学校ある時は時間を気にしろ！！！次の日が休みのときは両親に連絡さえ入れてれば泊まっていつて朝まで騒いでたって良い！！』
マスターに言われて時計を見たら21時を回っていた。流石にこれには俺達もびつくりした。

『まあ22時にはちゃんと帰るんだぞ！！それまでに菓子食って、飲みもん飲んで、話をまとめろ！！明日は金曜だし、明日ならいつまでも話せるしな！！』

『あいよ！！！』

光が軽く返事し、マスターはまた店に戻っていった。

『つてかもお9時かいな！！めっちゃはやいのお！！』

『な！！俺もびびったわ。』

マスターにも迷惑はかけたくないし、和茶にこれなくなるのも嫌だったのもあり、今日は素直に帰宅し、明日は泊まりの予定で話し合う事になった。

野郎同士で泊まる事も結構珍しいのに異性と泊まるなんて産まれて初めてで今の段階から遠足まえの小学生のように胸がドキドキしてやまなかった。

俺、五右衛門、光は最も正常な成人男子である。

俺達じゃなくてもこんな異例事態に遭遇したら世界中の男子は夢を描くに違いない。

ココで6人で寝るのかな！？…妄想は無限に広がる。

全てのパターン、状況、時にはそのパターン事の会話内容まで想像する…完全に俺達は妄想天国状態になっていた。

ありえない…ありえなすぎる…っと冷静に気持ちは違う方向に向けたが、下半身だけは言う事を聞かず、少しの間立ち上がることができなかった。

『なにしてんの！？明日、お泊りでゆっくりできるんだし、今日のところは早く帰ろうよ！！マスターに叱られるよ！？』

『わっかた分かった！！ちよつと先行つてくれ！！』

女子達に先に部屋を出てもらい、ほつと一安心。

『この変体どもが！！』

『われもじゃろ！！』

蛙や虫の泣き声に迎えられ、10分遅れて俺達も外にでた。

結構田舎だけに外灯も少なく、一面真っ暗だった。

無数の星や月明かりなどの自然光源によるスポットライトを浴び、変体丸出しのの気持ち落落着かせるために深呼吸をした。

『じゃあ帰るか！！女子送ってかんで平気か？？夜道苦手ならワイらが付きそうで！？』

『平気平気殆ど3人帰り道同じ出しさ。』

『了解！！ほな皆きいつけてな！！』

『またね』

俺は五右衛門と二人で明日の壮大な変体話をしながら帰宅した。

『それにしてもさ、あしたって同じ部屋にねんのかな！？』

『あー俺もそれ考えてたわ。』

『同じ部屋なら部屋で俺としては嬉しいけど…かなりせまくねーか！？』

『まあなあ。部屋同じならかなり隣接するぜ!!』

『そりや最高だわな!!』

俺は夜が好きだ。何だか素直な気分になる。

暗くて周りがあんまり見えないせいか安心出来る。

とくにこの時期は暑くも無く寒くも無く、気候的にも最高だ。

俺達は家の近くまで来ると川原に自転車停めて、少し話した。

『お前さあ、さっき彼女作って同じ大学行きたいっていったよな
く大学ってどこか行きたい所あるんか!?』

『まあよ』

お互い沈黙の間は石を拾っては投げを繰り返していた。

『どこ!?』

『ん!...ああ。決まってるような言い方で言っただけで行きたい大学
はどこでもよくてさ、まあ一人暮らしして知らない土地に行ってみ
たいってのが希望かな...』

『ふうん。』

『お前はどおなんよ!?』

『おれかく俺は全然なにも考えてねーや。』

『ふうん。』

仲の良い奴と居る時は盛り上がる時は凄い盛り上がるけど、意外と
沈黙も結構あったりするんだよね。

普段一緒に居るせいか話す事もないのもあるし、慣れてるせいで無
駄に気を使わなくてすむのかな。

家族と居る時に会話を気にして、自分から沢山話しかけるって事が
ないみたいだな...

『おい!!俺さマジで彼女作るわ!!』

『は!?』

五右衛門のいきなりかつ大胆な発言に少々戸惑った。

『つくるってお前まだ好きな奴もいねーんだろ!?』

『ああ。今はな!!でもさ、俺らって何かふしぎじゃねえか!?』

『なにが??』

『俺らの班よ』

『俺らの班の何が不思議なの？』

『他の班ってさ、まあ班内での会話が無いわけじゃないけど俺らみたいに仲良くねえじゃんね。』

『んーまあそれは単に俺らの班員が気があってるんだろ？』

『それ！！！』

『は！？』

五右衛門が何が言いたいのか全く分からず、少々混乱ぎみだった。

『俺さ！！あの3人の誰かと付き合っは！！』

『え？？あの3人ってだれよ』

『羽樹、キキ、カオリン』

『はあ！？…マジに言ってるの！？』

『おう！！お前はあの3人じゃいやか？？』

『嫌とかじゃなくてさ、あいつらルックスも良いし明るいしさ、他の男がほっとかへんって。俺らには友達…親友までが限界だな。』

『まあなあ。確かにそれはあるけどさ…まっお前は指くわえてみとけや！！』

『あいあい。で誰かあてはあるんか！？』

『いや、まだ今は友達としかみてねえしさ。そのうち変わってくるだろ、男女間での友情は何とかってよく言っしな！！』

『ハハハ！！まあがんばれ！！』

五右衛門は五右衛門で前進するらしい。

そもそも、五右衛門は大学に一緒に行きたいって言ってたけど、光ほどではないが、キキ、カオリン、羽樹、3人とも頭は結構良いし、俺なら頑張れば何とかなるかもしれないけど…体育系の五右衛門がねえ…

俺はそこが少し、いやかなり心配だった。

明日の準備もあるし、俺達はソロソロ自宅に帰る事にした。

『開けて悔しき玉手箱』

『優馬あ！！！優馬あ！！！起きなさい！！！！優馬あ！？今日学校あるんでしょ！？』

目覚ましの【ジリリリリ】という音で…は無く、【優馬アアア】と叫ぶ母のスクリーンで目が覚めた。

良く見るとまだ6時半…どおりで目覚ましがならないわけだ。

【ふああ】とアクビをし、再び布団にもぐり、むにやむにやと布団の気持ち良さを実感していると、ダダダダダともの凄い音と振動で起き上がった。

ドンドン！！ガチャ！！

ノックの返事をする間もなく、母が部屋に飛び込んできた。

『優馬！！！！あんた！！今日、五右衛門君たちと泊まる準備あるから早めに起こしてほしかったんじゃないの！？』

朝から母の怒鳴り声…本当に鬱になる。

『ああそおだった。じゃあ準備するから出てって。』

うるせーと反撃する気力も無く、頼むから黙って退出してくれ…それだけだった。

【歯ブラシ、着替え、下着、財布、携帯、…】

とりあえずいつもより大きな目のカバンに入れ、準備終了。

6時45分。

いつもどおり起きてても全然間に合ったな…と後悔した頃には目がパッチリ覚めていた。

昨日の夜は、色々な事を考えて…勿論ムフフな事も含めてね…寝付けないと思い、母に起こしてくれるように頼んだのだ。

ところがどっこい、布団に入って3分弱で寝てしまった。いつもより早く寝たくらいだ。

母に頼まなければ…30分…1時間は多く寝れたのに…とちゃっちい思考回路を働かせながら、とりあえず朝の日常習慣を済ませ五右

衛門の待つ集合場所に向かった。

3年目にして初。五右衛門より早く集合場所に到着。3分くらい待つと五右衛門が来た。

『え！！？なんでお前がいんの！？』

『おは』

五右衛門は時間を1時間間違えたのではないかと、携帯を取り出し、時間をチェック。

『7時15分だよな？？？』

『今日はまあ…ゆうならば遠足前の早起きって奴よ！！！！』

『キモ。小学生か』

『ダハハハハ。ちゃうわ！！糞ババアが起こしに来て、いつもより早く起きたんだわ！！』

『要するに遠足前に『お母さん、明日は遠足だから、早く起こしてね。』っていう小学生だったんだろ！？』

『…』

『ぶー！！キモ！！！！今日の夜のネタ…いや学校ついたら即やな！！！！』

『つけ。勝手にせえ！！』

学校につくなり、五右衛門は俺の話を報告。

五右衛門は必死に有る事無い事完全に作り話で、実話のエスカレーターverを皆に熱烈的に語った。

キキと羽樹は苦笑…頼むからそんな目で俺を見ないでくれ。

カオリンは良く分かってない様子…実に可愛い。

光にいたっては爆笑され『お前死んだ方がええぞ！！キモ過ぎる！！』と連呼…お前が死ぬ。

朝、母親に怒鳴られ…学校ではレディーには苦笑され、親友からは死んだ方が良いとまで言われた俺って一体…

『土屋！！うるさいぞ！！』

と斉藤の声に救われた。

始まったかと思っただらもお学校は終わっており、また今日も一日中

寝ていた。

過眠症なのでは無いかと…少々自分の体を心配しつつも周りを見る
や否や安心して眠りに付くのである。

今日みたいな金曜日は絶好の睡眠日和でね…

今日学校に言ったら明日から休み！！今日くらいは頑張るぞ！！
なんて、俺も昔は思ってたよ。金曜が3回訪れて終了したけど…

キンコンカンコンコン！！

不思議なもんでね…学校が終わると凄い目が覚めるんだよ。充電完
了！！みたいな！？

俺達は学校が終わると同時に、和茶へと向かった。

いつもなら学校から10分で付く道のりを今日は6分で付いた。最
短記録だ。

6月上旬…中旬…なのに夏日の暑さの中、立ちこぎでダッシュした
だけに到着し自転車を停めると風を切る事も無く、無風の状態にな
り今までずっと息を止めて我慢していた子が無理になり【ぶはぁ】
と吐き出すように額、首、背中から汗が噴出した。

この暑さがエアコンのカンカンに効いた部屋に入った時の感動を倍
にする。

早速涼しい店内を目指し、ペタペタと汗で学生服が足にまとわりつ
き何とも不快な状態で右左右右と足を前にだす。

… CLOSE …
最初に目に泊まったのが5つのスペルから出来ている英語の文字だ
った。

店内の快適な涼しさとは別の涼しさがそこにはあった。

『え！？今日やすみなんか！？』

あれだけ期待してただけに俺達の落ち込みは半端なかった。

駄目…拒否…却下…

状況を体が受け入れようとせず、 CLOSE という札のかかつ

た純白のドアの前で座り込んでいた。

と言うより、何かすぐ帰れず座り込むしかなかった。

10分：20分：30分：

夕暮れ時は30分で結構風景がかわるもんでね、真昼から一気に夕方
方に太陽が滑り落ちた。

6人で座り込むには少々狭い空間だったが、広い部屋なのに身を寄せ
合うカップルの様に何か悪い気分はしなかった。

学校で放課後まで話していた生徒達の帰宅ラッシュ：俺達の前を自
転車で通りすぎていく。

和茶の前の道を通りすぎる度にこっちを向いて、珍獣の塊でも見る
ように不思議そうな眼差しだけ残して通り過ぎていく。

俺達は誰も何も言わず、ただ座っていた。

明らかに店は閉まっている、掛札まで出ているくらいだ。きっとマ
スターも急用が出来て今日は休みにするしかなかったのだろう。

それは、分かっているけど：

青春期の子供って複雑でさ、大人の事情があるんだって分かってて
もこうゆう時ってなかなか受け入れられないもんで：

デートでデイズニールランドに行く予定だった日に豪雨に襲われるみ
たいな？？

歩いていてタンスの角に小指をぶつけて歯を食いしばるしか選択し
がないみたいなの？？

暑いのに夏の太陽は容赦なく平然と俺達に日を当て、俺達は肌を焦
がすしかないみたいなの？？

当たり所の無い：というか、誰にこのイライラ当たれば良いのか分
からない状況？？

大人から：というか第三者からみたらそんな事でイライラしてるな
よ！！って叱られるかもしれないけどさ：

天国から地獄って言ったら大げさだけど、いきなりの期待破棄に『
また今度にするか！！』なんて冷静な判断は俺達には出来なかった。
30分が40分になり40分が50分になりとうとう座り込んでだ

れも口を開く事無く1時間になった時、痺れを切らして声をだしたのは光だった。

『帰りますか…』

『そやな。』

と膝をポンと叩いて立ち上がり、いつもより重いカバンがまたむなしい…

俺、光、五右衛門、キキ、羽樹と順番に立ち上がり帰ろうとしたがカオリンだけが立たなかった。

『カオリン帰るでえ』

『やだ！！今日みんなで泊まるもん！！』

流石にいつもならこの発言も可愛なあつと一言で終わるけど、今日は場が悪かった。ただのわがままな発言にしか聞こえてこなかった。

『あ？？何ゆーとんねや！もお十分待ったや無いか！！』

『でも…』

『光、ちよつと言いきついでよ！！』

羽樹がカオリンをかばうと、光とは思えないような鋭利な目を羽樹に向けて言い放った。

『きつつーゆわな、このノータリンの天然ツ子にはなんぼやさしゅーゆつても伝わらん』

パン！！！！

とキキの平手が光の頬を桃色に染めた。

『何するんじゃワレ！！！！』

『あんただけ帰れば…』

と光に負けてないくらい冷たい目と言葉で光を両手で突き放した。

『後悔は美德の春』

キキに胸を押され、わいは大きいため息だけついて、背を向けた。

『優馬、五右衛門わりいな。わい帰るわ。』

『ちよ、おい、待てつて。』

優馬達は迷いに迷った結果、わいに付いて来てくれた、男女対立。わいは優馬と五右衛門と一緒に和茶を離れ、キキと羽樹は力オリンと一緒に和茶に残った。

今日の朝：つてゆうより、1時間半前はこないな結果になるつては思いもしなかった。

わい達はとりあえずこの場を離れる。

つてゆう目的でチャリンコを転がし、ねきのコンビニによって飲み物をこおて、和茶で散々座り込んだけど、ここでもまた座り込んだ。

『ありがとうございましたあ』と女性店員の声が外まで聞こえにくる。

そのたびに力オリン達の事を思い出したのはわいだけえとちゃうやろな。

『光：どおしたん？？お前らしくなくなかったか？？』

座り込んでまた沈黙つてのはもお耐えられなかったんやろな：優馬はちびつとした疑問をわいにぶつけてきたっちゅうわけや。

わいはなあんも返事できなかった。

何やてゆーたらええんや？？

自分でもわからへんのや…

何であないな言い方してまったんや…

キキに叩かれてもしかあないわな…

わいは優馬からの問いかけも忘れて、ひたすらお天道様を眺めてばーつと一人で考えとつた。

『優馬と同じで俺も全くわからんぞ？？なんでお前：あんなに怒ったんや？？？』

今度は五右衛門：なんか返事せないかんって思い

『戻りたかったら戻ってええで。わいは別に自分らに付いて来いなんてゆーてへんしな。それにまだあいつらも帰ってへんやる。』

最低最悪の返事や：ごつつ心配してくれとるのは分かつとるんやけど…

少しの考える時間も無く、

『いや、俺はお前に付き合うぞ？？』

『俺も。』

お前さえいやじゃなかったらな。優馬と五右衛門が声を合わせて二ヤッと笑ってわいに言い放った。

わいも素直な気持ちを優馬達に伝えようって思い、まず謝った。

『ワイのせいで自分らまで、あいつ等と気まずい関係にしてかんんな。』

『俺らは全然良いけどさ。光：お前の身勝手な怒りであんな事言っただなら皆に謝った方が良いぞ。』

『そうやな。お前に理由あつてあんな風にいったなら俺達がきくしよ。』

優馬達の本音：ワイを思つての言葉に涙が噴出しそうだったが、齒を食いしばって堪えた。

【だめや…溢れる…】

と、とつさに【ふあああ】っとアクビしたふりで、マジ泣きだけは、ばれない用：下手に工夫したけど…

『泣くなつて！！』

と五右衛門の言葉に：張り詰めていたものが破裂し、声を出さずにポタポタと涙だけ落とした。

今になって、キキに叩かれた頬が痛む。

その痛みに比例して、心臓を氷の手で握られたように、胸が苦しくなった。

気持ちを落ち着かせるために、深呼吸した。

『大丈夫か！？』

『おうおう！わいはもお大丈夫や！！』

『そっか！なら安心やわ！！』

『ワンワン。泣き出したときは恥ずかしくてお前置いてどっか移動しようかと思っただわ！！』

『わいなら即移動したで！？自分らの優しさのガ恥ずかしいわ！！』

ダハハハ！！

【久しぶりにわろたなあ。】そない気がした。

笑いもおさまり、わいはさつき決めた事を話す事にした。

『なあちよつと聞いてくれや』

『ん？？』

『このさい何でも聞くから言っただけでいいぞ！！』

…サンキューな…

あんな…

カオリン達はまだ和茶で座り込みを続けていた。

私も羽ちゃんもカオリンも何も話さないまま時間だけが過ぎていた。

【光にあんな態度とって、光がカオリンにとった行動より酷かったかもしれないなあ…】

私は自分の行動と皆の行動を思い出し、自分の中で整理しようと思っただ。

が…いつの間にか過去を振り返っていたの。

私が初めて人を叩いたのは小学生の時だったかな。

お母さんに買ってもらったハンカチを確か…そうそう、隣に座ってた勇次くんは貸してあげたんだよね。

なんで貸したんだっけ？…あ…給食の時にお茶をこぼして…それでだ。

洗って返してくれるって言ったから、その日は一日かしてあげただよね。

でも…

次の日学校で返ってきたのは、私の貸してあげたハンカチじゃなかったんだ。

え？…これ違うよって言ったなら、勇次くんは…少しだけ時間かかるからそれまでコレ使ってて…って言ったよね。

私はてつきり…無くしたり、破れちゃったりしたのを誤魔化されてるって思っちゃってさ。

いきなり、明日返すって言ったじゃん！！今すぐ返して！！って怒鳴りつけたよね…

勇次くんは一週間以内には返せるから待っててよ…って言ったけど私はそれから一週間ずつと無視したよね…

消しゴム貸してって話しかけられても…

勉強や当番の事を聞かれても…

私が口を開いたのは一週間後だったよね…ハンカチ返せて…

勇次くんは必死で謝って、間に合わなかったから…明日には絶対持つて来るって言ったよね…

そんな勇次くんを無視して…泣きながら泥棒って連呼して頭を何度も叩いちゃったよね…

その日の夜…たしか12時過ぎくらいだったかな…私は寝てて翌朝、聞かされたただだったんだけど…

お母さん言うには…

深夜12くらいに一人で来て、

『本当にごめんなさい。キキさんのハンカチを借りてクリーニングに出して…それで…それで…』

ここで勇次くんは大泣きしちゃったんだってね…

『クリ・クリ…クリーニング屋が…ツク…昨日休みで…それ…その…その事をキキさ…ツク…キキさんに伝えたら…』

ここでもお何を言ってるか分からなくなっ、お母さんがゆっくり

で良いから落ち着いてから話ししてって言ったんだよね…

『キキさんのハンカチを借りてクリーニングに出して、昨日返す予定だったんだけど、クリーニングのお店が昨日やってなくて、それで今日返す約束をまもれませんでした。ごめんなさい。それで、学校終わってからクリーニングのお店に取りに行って届けにきました。約束守れなくてごめんなさいってキキさんに伝えてください。』

って小学生とは思えないくらいしっかりした口調で言ったんだってね…

その事を聞いた時、沢山ないで、これからはもお絶対に人を叩いたりはしないって誓ったよね…

次の日学校で謝ろうって思ったけど…学校ではもお話も何もしてくれなくなっただよね…

辛かったよ…

光ともこんな形で終わっちゃったのかな…

私の目から頬を通して涙が上から下へと流れ落ちた。

キキどおしたの!?

と心配してくれる羽ちゃんの言葉に、私の雨は小雨から…大雨になり…豪雨になった。

なんであんな事しちゃったんだろう…

光が羽ちゃんやカオリンに酷い事言っただから光が悪いんだよ…

そおじゃないでしょ、私が光の意見も聞かずに叩いちゃったんじゃない…

光がそれだけの事したんだから当然だよ…

……………

光の頬を桃色に染めた凶器、私の右手が小刻みに震えだした。

自問自答から自己嫌悪し自縄自縛…私を縛りつけ、動く事が出来なかった。

遠くの方で誰かが私を呼んでる気がする…

誰だろう…光かな…光…ごめん…

『キイキ！！！』

『キキちゃん！！！！』

呼んでも一点だけ見つめて全く動かなかった私の頭をポンッと羽子ヤンが優しく叩いた。

ゆっくり振り向いた私の泪と鼻水でぐちゃぐちゃになった顔を羽子ヤンは優しくハンカチで拭いてくれた。

『キキ大丈夫？？どおしたの？？』

『キキちゃん……』

羽子ヤンとカオリンの優しい言葉に、今感じている私の全てを話す事にした。

あのね……

『光 of past』(前書き)

あのな…と

光は優馬達に誰にも話した事の無かった自分の過去を語りだした。

『光 of past』

あんな…わい…ほんまは…ほんまは関西弁やないねん。

『（（は！？））』

俺達が驚いたのは、じゃあ何故今は関西弁風に話しているのか…それを聞かされた時だった。

まず最初に思ったのが、『フィクション！？！』

とても光がそんな体験をしてるとは今まで2年と数ヶ月つるんで来てそんな風に思ったことが…考えた事が無かった。

…光は小学校3年生の時にいじめにあっていたらしい。まだ体も出来上がっていない小学校3年生には…知識も少ない…限度を知らない…小学生の度が過ぎたいじめは過酷なもんだっただらしい。…それと…もう一つ…

1999年5月12日（水）

「おはよ！！光！！今日はサッカーせえへんか！？！」

『おう！！俺の学校のグラウンドに集合で良い！？』

「よし！！決まりやな！！」

『じゃあ学校終わってから、着替えて集合！！』

「OK！！来るのが遅かった方がジューズおごりな！！」

この頃俺には、友人と呼べる存在が少なかった。少ない友人の中でも一番仲が良かったのは幸一だった。

幸一の誕生日は12月25日、クリスマス！！血液型はB型。

光は…周りの子達は彼のことを、**銭形**と呼んでいた。当然苗字は銭形ではない。

ルパン三世の【とつつあん】こと、**銭形幸一**。

名前と誕生日と血液型が一緒と言う理由で銭形と呼ばれていた。

いかにも小学生がつけそうな典型的なあだ名である。

幸一もルパン三世は好きで、銭形と言う愛称も気に入っていたので問題は無い。

実を言うと銭形とは同じ小学校ではない。

家、5軒違いで北小学校と中小学校と別の小学校に通っていた。

家が近所って事は変わりなく、ゲームしたり、遊びに行ったりして、二人で遊ぶ時間が多かった。

『カカカカ!! お前の負け!! 今日もうジュースGET!!』

「カー!! 光には、かなわんな…」

30戦2敗。俺は小学校の時から競いごとには強かった。

この日は銭形と二人だけのサッカー(って言うのかな?)をして帰りに賭けのジュースをおごってもらい、俺は友人が少なくなつて、こいつだけ居れば楽しくやっていける。

例えば学校であんな事をされても…

俺は学校ではNo.1の嫌われ者!!…とまではいかないがクラスでNo.1は間違いなく俺だろう。

銭形: 別の小学校の奴とばかり遊んでいた俺は自分と同じ学校の生徒との付き合いは良くなかった。

2年生まではそれなりに友達もチラホラいて、遊びの誘いも少なからずあった。

が: 3年生になり、誘いも減り:…無くなり:…誘っても遊んでもらえなくなり:…クラスNo.1になった。

俺も頑固で、わざわざ遊んでくれたの、仲良くしてくれだの、媚びるのは願ひ下げだった。

遊んでくれない奴はそれで良い、嫌う奴は好きに嫌えば良い。

そんな強がつてる俺をクラスの奴らはうざったかつたんだろうな。

クラスからの集団無視:…その次は:…

私物を隠され、汚され、破壊され:…その次は:…その次は:…

と、どんどんエスカレートし、物理的ダメージまで与えられるようになった。

「ん？自分その傷どないしたん？切れてへん？」

『カカカ！！図工の時に切ってさ！めっちゃめっちゃ痛かったわー。銭形も切ってみるか！？』

「どないやねん！！勘弁してや、せやかて気いつけや！！大怪我したら洒落になれへんで！！」

『お前に心配されるようじゃ俺もまだまだやな…』

まだまだ、と言うよりこいつにだけは《いじめ》の事を知ってほしくなかった。

心配かけなくなかったし、いじめられてるって分かって、態度が変わってくるかもしれないって言うのが怖かった。

1999年10月25日(月)

とうとうこの時が来た。来てしまった。

一ヶ月くらい前から銭形は少しずつ、気が付き始めた。

「友達とプロレスでもしたんか？？」『おう！！まあ苦戦したけど俺が勝った！！』「ダハハハ！！流石や」

「誰かと喧嘩したんか？？」『おう！！まあ苦戦したけど俺が勝った！！』「ダハハハ！！流石や」

・
・
・

「お前いじめられてる??」『おう！！まあ苦戦してるけど俺が勝つ！！』

いつもみたいな銭形の笑い声は聞けなかった。

焦った俺は必死で『いじめって言うても…』と付け加えた。

『いじめって言うても、単なる嫌がらせだけで俺自身大して気にしてないし、テレビとかでやってるような残酷なもんじゃないから全然平気!!』

「いつから??」

『え??』

「いつからいじめにおおとるんや?」

『3年の頭くらい…長期戦やな!!ハハハ』

「だれや!？」

『ん??』

「誰にやられとるんや?」

『まあクラスのやたら体格良い馬鹿な佐藤とか言う奴が主犯だけど!!それがさ、名前同様、嫌がらせも砂糖みたいに甘くてさ。ぬるいぬるい。やり返したら俺のほが悪者になりかねんわ。カカカ』

「ハハハハ!!なっさけないやつちゃのお!!それでお前体中に傷おおてるんか!!」

『ハハハ!戦に傷は付きものだ!!』

俺はこの時に気が付くべきだったんだ。

まだ小学生の俺の思考回路では銭形の考えてることなんて分からなかった。変な心配は解けたと思ったんだ。

『光 of past2』

1999年11月25日（木）

この日は、体育館裏と言うありきたりな場所に呼ばれて、佐藤とその不愉快な仲間に腹を数十発と顔を数発殴られた。

いじめって言うか、もおサンドバックのおもちやにされていた。

佐藤達にとってコレは日常でもはや罪意識や罪悪感なんて無くなっていた。

罪悪感?? そんなものは最初から無かったかもしれないな。

今日だって友達を誘うように、『おう!! 土屋、今日の放課後ちょっと体育館とまで来てくれ!!』って誘われた。

日に日に増える傷に両親にもバレ、学校に講義や、いじめ主犯の親、本人にまで会いに行き、結果…悪化。

これ以上、口出しするのはやめたと俺が頼むと『転校するか??』とまで話は進んでいた。

この状況は打破したかった…でも俺は転校だけはしたくなかった…銭形…あいつとだけは離れたくない。

1999年12月20日（月）

俺にとって忘れられない日。

今日は5日後にひかえた銭形の誕生日プレゼントを買おうと、何故か銭形と一緒に出かけていた。

普通こおゆうのは本人以外の友達と行くべきけどさ…俺…この時期には友達なんて居なかったしさ…

当然の様に銭形からも突っ込みが入った。

「何で俺が自分の誕生日プレゼントと一緒に選ばなあかんねん!!」

『そおゆうなつて!!』

取り合えず、誘いには成功。とは言っても付いてくるだけで選ぶのは俺だ。

実を言うと、俺はもお銭形にあげるプレゼントを決めていた。さらに実を言うともお予約まで取ってあった。

今日はその予約した品を取りに行くんだ。

『ちよつとココで待つて!!』

とおもちや売り場の前で銭形を待たせて、俺は予約の品を取りにいった。

「6800円になります クリスマス用に包みますか?? +200円ですけど」

『お願いします!! 包んでください!!』…誕生日なんだけど…まあいいか。

『かしこまりました では7000円になります 少々お待ちください』

軽く会釈した店員は、冬っぽい真っ白な質の良い紙にクリスマスリースのモコモコとしたシールを貼って俺に渡した。

当然値段は知っていたが財布からお金を出す時に「やっぱり高え!!」とちよつと躊躇した。

この時の俺のお小遣いは月2000円…単純計算でも3ヶ月分以上になる。お金を払う時に手が震えたよ…

でも…俺のたつた一人の友達だ…って思うだけで全然お金なんか惜しくなくなった。

『ありがとうございます またのご来店を心よりお待ちし…』

最後まで聞かずに銭形の所に急いで戻った。

『ごめん!! お待たせ!!』

「おつせー…うお!! でけえ!! 何こおたん!？」

『ハハハハ!! あと5日後な!!…うッ…』

突然の吐き気、とっさに銭形にプレゼントの包みを渡し、トイレまで走ったが、店内で嘔吐…

輪を描くように人だかりができ、駆けつけた銭形が人の壁を突き破って俺の背中をさすってくれた。

数秒後に店員も来て、医務室に運ばれた。

2、30分休憩したら、気分は大分良くなってきた。

『（ご迷惑をおかけしました。）』

と深々と銭形二人で頭を下げ、医務室をでて、そのまま近所の公園に足を運んだ。

少し錆付いたブランコに座わり、少しの間何も言わずに、揺れていた。

「どないしたん?? マジで言ってくれや…」

と銭形が首の骨が折れたかのようにガクンといきなり頭を落とし、泣いた…

銭形…友達の泣く姿を見るのは…初めてだった。銭形が泣き止むのを待ち、話をした。

『ごめん…今日さ…給食の時にさ…』

「うん」

『俺が…俺が給食を貰いに行こうとしたら佐藤に呼ばれてさ…』

「うん」

『お前の給食はこれだから残さず食べたらもお殴らない…って言うてさ…』

「うん」

『俺に…1週間前の牛乳と、1週間前のパンを渡してきてさ…食べるッって』

「…」

『パンなのにカチカチでさ…所々にカビがあつてさ…』

「…」

『でもコレさえ食べれば…銭形にも心配がけなくてすむし…』

「ボケが!!!」

といい銭形は立ち上がり、俺の前にきてブランコから突き落とし、フザケルナ!!!って一発だけ顔を殴った。

佐藤の10倍：100倍：1000倍：それくらい身に染みる一発だった。

銭形はそのままブランコに戻り、俺も泥を払いブランコに座った。

『銭形…』

「あ??」

『親も…先生も…誰に助けを求めてもいじめは終わらなかった…』

「聞いてへんで…」

『え??』

「俺は聞いてないゆうてんねや。」

歯を食いしばって…食いしばって…食いしばって…必死で堪えていた涙が…

殴られても、変な物食わされても…地に付く事のなかった涙が…俺の顔に2本の滝を作って流れ落ちた。

目は開けられない…開けると滝の勢いを強めてしまう…

呼吸もままならない状態で、銭形に言った。

『銭形…助けて…』

「親とか先生に助けを求めるのもええけどさ…」

『うん…』

銭形はムスツとしていた表情を緩め、100満点の笑顔で…「まず俺やろが！」

目を開けてないのに、俺の顔に出来た滝は勢いを増し、枯れるまで止まらなくなった。

心で何回くらい言っただろう…ありがとう…ごめん…ありがとう…って

泣きじゃくってる俺を置いて銭形がどっかに行ったのに気が付いたのは、涙が止まり目を開けたときだった。

『銭形…???』

俺は、充血した目をしっかり開け、枯れるほど声をだし、銭形を探し回った。

ふと頭を過ぎったのは佐藤だった…もしかしたら…

俺は佐藤が不愉快な仲間とよく行っているゲームセンターに向かった。

さっきと見た光景…人だかり…

ノーストップで走ってきて張り裂けそうな心臓…本当に張り裂けるかと思ったのは、人だかりの男の人が移動した時だった。

嘘だろ…

銭形の遺体…

その横には佐藤の遺体…

周りには不愉快な仲間達がぐったりとした佐藤の体を揺すっていた。

俺の2分後くらいに救急車が到着し、銭形と佐藤の遺体はタンカで車に乗せられ病院に運ばれた。

早すぎる展開にわけが分からなかった俺は、救急車に書いてあった

森山総合病院 という病院をただただ目指した。

死んでないよな?…

おい!! 銭形…死んで無いつて言えよ!!!

心でずっと同じ事を質問しながら、1時間走り続けて要約病院に着いた。

『あッ…あッ…』

声が出ない…

「光ちゃん?…」

俺の名前を呼ばれ、振り向くと銭形のおばさんが居た。

「あらあら…ふたりして 怪・我 して…光ちゃんはまだ見てもらってないの??…」

俺にはおばさんの言葉で安心し、その場に崩れ落ちた。

1999年12月21日(火)

病院独特の変なにおい、それに比べて真っ白な綺麗な布団は落ち着くにおいがする。

「いつまで寝とんねん！！光！！光！！」

『銭形！！！！！！』

「シッ！！ここは病院やねんで？？もつと静かにせえ！あと…勝ったで！！」

『え？？』

「佐藤とか言うデブにさ！！勝ったから、もお奴も手出してこんぞ！！」

『は？？』

「まあええわ！！けどありやお前では無理やわな！！ハハハ」

銭形の話によると、俺をいじめた奴を全員しばく予定だったらしいが、よく見てみると周りに5人も仲間がいて、流石に全員しばくのは無理と判断し、佐藤とタイマンで勝つたらしい。

『…』

「なんや！礼も無しかいな！！ごつつ痛い思いまでしたんやで！？

…まあお前の方が痛そうやけど…」

『…』

「足いたないか！？ボロボロやないかい。公園から裸足でココまで走ってくるアホお前意外にいてるか！？」

『…』

「そおいえば、俺、アメリカいくねん。おつとうの仕事の都合でな！！」

『…』

「アメリカにはごつついギャング仰山おるやろ！？あのデブにも勝てへんなんだらアメリカで何か生きてられへんで！！自分の実力テストのついでに光の敵もとつといたったんや！！」

『…』

「泣いてばっかおらんと何かゆえや！！」

『サンキューな…』

「まずそれやろが!!」

『（ハハハハハハハ）』

2000年6月11日（日）

結局あれ依頼いじめは本当に無くなり次第に友達も出来始めてきた。
でも俺は銭形がアメリカに行く事になり転校する事にした。

この日は銭形がアメリカに行く日だった。

「ほな光!!!元気でやれや!!!…わいがアメリカから帰ってきた
時…18歳になる…8年後には、そのだっさい標準語やのおて関西
弁話せるようにしとけや。」

『おう!!!お前こそ英語ばかりで日本語忘れんなよ!!!』

「ほなッ!!!」

『またッ!!!』

もお永遠の別れてわけじゃないし、挨拶はいつもとかわらず、
またな…で別れた。

光は部屋に入り…少し微笑み…

銭形は車に入り…少し微笑み…

絶対また会えます様に…と神様をお願いした。

『キキ of past』(前書き)

あのね…と

キキは羽樹達に誰にも話した事の無かった自分の過去を語りだした。

『キキ of past』

あのね…私…大切な人に…もお絶対…って約束したんだ…

と…羽ちゃんとかオリンに勇次くんの話をした。

『それでキキは勇次くんとはそれっきりの!?』

ん…

次の日学校で謝ろうって思ったけど、何日か来なかったね…学校に来た時は…

『勇次くん!!おはよ!!最近学校に来てなったね!!この前は…』

「なあ!!達也!!今日一緒にゲームしない!？」

「お!勇次じゃん!!久しぶりやな!!いいね!いいね!勇次ん家でやる??」

「おうおう!!」

「あ…でも久しぶりに皆でサッカーしない!?お前が衰えて無いかチエックするためにさ!!」

「アハハ、ないない。サッカー俺上手すぎるからさ、もおやらない事にしたんだわ!!」

「言ってる。じゃあゲームな!!」

「おう…」

…

私はハンカチのお礼と、理由も聞かずに叩いたり怒ったりしてごめんなさい…って謝りたかった。

『ねえねえ。勇次くん』

「…」

『ねえねえ。』

「ごめん…授業中だし…後にして…」

『あ…ごめん…』

休み時間になっても私との話を避けるように友達の所にいつちやっ
たんだよね。

私は、仲の良かった友達に勇次くん嫌われちゃった…ってついつ
い相談しちゃった。

ちなみにコレは間違い。勇次くん嫌われる様な事しちゃった。っ
てのは正解。

友達は、私の味方してくれて勇次くん色々言っ…余計に陰悪な
雰囲気になったんだよね。

次の時間勇次くんからいきなり小さい声で話しかけられた。

「何で俺が悪者になってるの??さっきキキさんの友達から色々言
われたんだけど…」

『え??』

「ハンカチはもお返したんだしさ…これ以上色々言っの辞めてくれ
ない??…こんな事なら借りなければ良かったよ…本気でね」

『ごめん…』

勇次くんは、自分の机をガツと横にずらし、私の机と少しだけ間を
空けた。

【もお話しかけるな…】そお言われてる気がした。

次第に私は…

何でこんなに怒るんだろう??…

そもそも、貸したものを返してって言うのは間違ってる事なの??…
自分が返すって言った日に学校に持ってこなくて私が怒って叩いた

りしても、持ってこなかった悪いんじゃないの??…

大体、クリーニングって意味わかんない…たががハンカチでさ…
根本的に捻くれてるんだよ…

私こそこんな人にハンカチ何て貸すんじゃないかった…

友達に色々思ったことをぶちまけていた。勇次くんが近くに居ようと関係なく…

1週間くらいたち、私はもお勇次くんの事何てどおでも良かった。どおでも良いを通り越して隣の席なのがしんどくなっていた。

周りから…先生からも注意を受けるほど机を離したりしたんだ。人が通れるくらいに…

『だって、勇次くんの隣に居ると性格悪いのが移っちゃうもん!!』

…
『だって、勇次くんの近くに居ると私まで約束破る子になっちゃうもん!!』…

『だって、勇次くんが近寄るなって最初に机はなしたんだもん!!』

…
だって…だって…だって…

毎回の様に言い訳を考えては、でかい声でクラスに聞こえる様に言い、顔を伏せて泣いたふりをした。

『だって、あの子何か嫌だもん…』…友達と話してる時だった。

勇次くんの友達が来て、呼ばれた。

「お前に勇次が何かしたのか??借りたハンカチだって返しただろ??少し遅れたくらいで…自分のやった事は棚に上げてさ…喚くなよ。お前男子の間ではマジで性格悪いって有名だぞ。今俺がこおやつて話してるだけで俺が嫌われかねないくらいにな…これ以上勇次

の事悪く言ったらお前の事も言うからな、俺はお前みたいに嘘じゃなくて本当の事を…じゃっ」

一方的に言われ、私が反論する時間も与えてくれなかった。

【自分のやった事は棚に上げてさ…喚くなよ。】コレだけははつきりと聞き取れた。と言うか頭から離れなかった。

…私のしたこと???なにそれ!??

…ああ返すのが遅かったから叩いた事か…

…もしかしたら、最近色々言ってる事かな!??

…どっちにしても、別に良いや…

この時の気持ちはあまり覚えてないけど…多分こんな感じで自分に非は無いって思っていたことは絶対だよな。

…でも、やっぱり何か気になる…もし私が悪いなら反省しないと…

なんて事はこれっぽちも思ってたなかった。

…そんなくだらない事!??ってその位なら別に言いふらしてくれて良いよ!…っと言い返してやりたかった。

私は、子悪魔の形相でさっきの昼休み時間に話した松田くんに直接聞きにいった。

『私のした事って酷い事だったの…??』んなわけないよね。

『私全然自分に心当たり無くて…』どおせ叩いたとかでしょ!??

『もし、私が悪いなら謝らないといけないし…』謝る理由なんて無いけどな

『だから教えて!!!松田君や勇次くんに謝るために。』あんたや勇次くんをもっと陥れるために。

「ちよつと来い…」

『うん…』

昼休みの図書館…殆どの生徒がグラウンドにボールを持って遊びに出る時間帯。

図書室には、私立の中学にむけて勉強している高学年の先輩が3人と図書当番の人が2人居るだけだった。

静かで、古本の匂いがして、中には鼻がツンとくるような酸っぱい本のエリアもあった。

「これは俺と勇次しか知らない事で先生も知らない。んで勇次はお前にはつていうか誰にも言うなつて言ってる。」

『ふうん。』 叩いた事や暴言を言った事なら皆知ってると思うんだけど…

「さつきは皆に言いふらすつて言っただけど…出来れば俺も言いたくないんだよ…」

『で、内容はなに???』 はやくいつてよね

「お前、勇次を前叩いたろ…」

『うん。勇次くんが約束守ってくれなかったからね…あのハンカチ私にとつて凄く大切なハンカチだったし…それで…』

ふつ。やっぱり叩いた事じゃん。あー、心配して損した。無いとは思ってたけど、弱み握られたら嫌だったし…

「うんうん。わかるよ。勇次も俺もお前に悪意が合ったわけじゃないって分かってるから、誰にも言わなかったんだよ。勇次がまあ大好きなサッカー出来なくなつたつて事…」

『え!!!!!!?』 え!!!!!!?

心の声そのまま口に出た。

『キキ of past 2』(前書き)

勇次くんの友達、松田君によって衝撃的な事実を聞かされ、困惑しているキキ。

『キキ of past 2』

「嘘じゃねーよ。アイツお前に叩かれて尻餅ついた時に足首ひねったんよ。それだけなら捻挫くらいですんだんだけど…あのアホ我慢してさ、その場で痛いって保健室でも病院でも行けばよかったんだけど…それでさ、あいつ…お前との約束守るためにお前の家に3時間掛けて行ったんだわ、親の帰り待ってたらクリーニング店閉まって本当に約束破る事になるからな。それで次の日、異常に腫れてさ。流石に母さんと病院行っただけで言ってたよ。そしたら、靱帯切れて、本当に昨日は歩けたんですか！？って医者も驚いてたらしい。それで少しすれば治りますが…スポーツは無理ですね。特にサッカーやラグビーそー言った類のものは絶対やめてくださいって言われたんだってさ。…」

この後も昼休み中、松田くんの話は続いたけど、全く覚えてない。話してる最中に、本当に泣き出しちゃって…
どおすれば良いのか全く分からなくなっ…

私は、この日の放課後、勇次くんを呼び出した。恐喝とかじゃなく、勿論話し合うためにね。

当然の様に勇次くんは拒否反応をみせたけど、お願い！！と何度も頼んで、渋々OKをもらったんだよね。

そして放課後。勇次くんの手を引き昼休みに松田君と話した図書室にむかった。

「いきなり、なに！？悪口とか嫌がらせならソロソロ辞めてほしいんだけど…」

『本当にごめん！！！！！！』ただ謝った。理由も何もいわず先にまず謝った。頭を深く下げて。

「え!？」私からの久しぶりの謝罪の言葉に勇次くんは凄い驚いたよね。

『今までの嫌がらせだとか悪口、あれは勇次くんにも嫌われたって思っで、それで…何で謝りたいのに無視するんだろ…なんで…なんで…って考えてるうちにね、悪い方にばかり考えちゃって…』

「言い訳したいの?？」

勇次くんの目は凍りついたように冷たく、見てるだけで震えて泣き出しそうだった。

『違っ!…言い訳してるように聞こえたならごめん。今日松田君と話して…』

冷め切った目で私をじつと見て、「でっ!？」。

真っ黒な尖った目からは怒りが感じられる。

今更なんだ…??

松田から聞いたから同情か??…

散々、人をゴミみたいに扱って許してほしい??ふざけるな…

そお返事が返ってきそうで怖かった…でも…

『もお大好きなサッカーできないんだってね…全部聞いたよ。松田君は言えないって言っでたけど私が強引に…』

「君はいつもそおだね。嫌がる相手を強引に…今だっで」

『…』

「はあ…なんで泣くのかな??泣きたいのは俺だよ…」

『そっだよね…』

「もお良いよ、許してあげる。」

『え!??』

「悪口とかさ嫌がらせした事はもお良いよ。これからしないなら、過ぎたことだしさ。」

1ヶ月ぶりくらいに勇次くんの笑顔を見た気がした。作り笑いかもしれないど…でも…足の事は…許してくれるはずないよね…

『ありがと…もお絶対しない…』

自己弁解するわけじゃないけど、元々私は、勇次くんの事を悪く思
ってなかった。というより、無視されてムカついてた。ただそれだ
けだった。

話したい…仲良くしたい…その気持ちが全然伝わらなくて気持ちが
分かってもらえなくて…上手く行かない事にイライラしてた。

本当に馬鹿な子だよ。今、昔の私に話しかければなら、あんたの
イライラは勇次くんの事が好きだからなんだよって伝えたのになあ。
「じゃあこれからは仲良くしような。」

その言葉につい私は聞いてしまった。

『でも、足の事は許してくれてないの???仲良くしてくれるの?
?』

「え???」

『足怪我したから、無視とかしてたんだよね??』

「うう…」

『はじめから、足が原因で無視してたって分かってたら…』

「嫌がらせとかしなかった??それってまた言い訳??」

『違う!』

「嘘嘘」と本日2回目の笑顔をくれた、作り笑いじゃない…と思う。
「俺、キキさんの事好きだったの。話しかけられるたびに、あせつ
てさ…それが原因で無視してるように見えちゃったのかも…」

『何言ってるの???』本気で意味が分からなかった。

「…まあ良いや…でも足が原因で無視とか冷たくしたわけじゃない
から…」

『でも…好きだったら、何で机はなしたり…冷たく接したりしたの
??嫌いだからそおしたんでしょ??』

「しるか…」

『…』

「俺は…キキさんのせいでスポーツできなくなっただって思ってる
から、その事ではキキさんに対して謝ってほしいとか思ってる
松田に口止めたのも…何ていうか…ね…心配かけたくなかったん

だよ…それだけ。」

『和…輪…羽…私も勇次くんの事好きだよ…』

「意味不明…それこそ、え”???”でしょ…それこそ…好きだったら、何で机はなしたり…冷たく接したりしたの??嫌いだからそおしたんでしょ???”ってそのまま返したくなるわ…」

『同感。』

「アハハハハ」

『アハッ』

お互い意味不明すぎて笑えてきた。でもその意味不明なおかげで私たちは打ち解ける事が出来た。

小学生って…単純だよな…つきさつきまでは犬猿だったのに。

「でも、もお人を叩いたりしたらいかんよ??…」

『うん 分かった分かった』

「真剣に聞けよ!!!」

私は凄いびっくりした。親父の雷…その意味が分かった気がした。

「人を傷つけると相手も、自分も傷つく…だからさ…そんなこともおしないって約束して。」

『うん…』

「絶対だよ??…」

『絶対!』

勇次くんとはこれ以上、仲良くなる事はなかった。勿論嫌がらせはすることは無かったけど…

今思うと私の小学校時代ってミスばかりだな…

初恋の子を傷つけ…将来を奪い…それで自分を傷つけ…

でも…良いんだ…最後に太陽に向かって笑う向日葵みたいな笑顔を私にくれたもんね

ありがとう…そして約束をまもれなくてごめんなさい…

『合縁キキ縁』

『キキ…若干痴話話に聞こえてつまらない部分もあったけど…それは置いて…自分も悪いって思ってるならさ…光に謝ろ…』

『ウンウン、あたしのために怒ってくれたのは嬉しいけど…それでキキちゃんが悲しんでたらやっぱり辛いよ…ちゃんと謝れば天国の勇次くんも許してくれるよ…絶対…』

キキはまだ少し残っている涙を拭き、少し笑って答えた。

『アハハ。そだね。また同じ間違えを何回も繰り返しちゃだめだね。叩いてギクシャクしたら小学校の頃と何も変わってない事になっちゃうしね…それと…勇次くんは生きてるから…ねッ！…！…！』

目は鋭くカオリンに向けられた。

『ギャ。ごめん！…』

『じゃあ。光たちでも探しに行こうか。』

『うん』

…

『え！？…ってことはお前…今日じゃねえの！？銭形とか言う奴が帰国する日って…』

『せやで…』

『おいおい！！良いのかよ…会わなくてさ。』

『いや、わいもな…幸一君、明日帰ってくるよ、っていきなり昨日の夜オカンから聞かされてな、一瞬…幸一って誰や！？思ったけど…まあすぐ思い出したわ。せやかてワイにとっては自分らも大切な親友やんな…』

『だからか…』

要約、光があんなにもイライラしてたか分かった…

『せや、ワイとしては今日の泊まりが無いなら無いではよお帰って

な、銭形に会いに行きたかってん。でも…カオリンには酷い事言うてこのままじゃあかんって思ってる。会いに行くしてもその後やなつて…」

『その後の説明は俺達がしとくから、謝ったらすぐに行ってやれ！』

『おう！！ほんまおおきに！！』

まだ和茶に居ると良いな！！と自転車を走らせ、和茶へと向かった。

…

少し風も出てきて雲行きも怪しくなってきた。と思つたら直後、額にポツと1滴落ちた。

『うへへ雨降ってきたぞ…』

『え！？マジ？？』

『やつかいな雨やのへもおちよびつと空気よめや。』

ポツポツと小雨の中和茶に少し服を濡らしたが、自転車で10分を着いた。

『キキイ、羽樹へ、カオリン』

俺と五右衛門は、早いとこ光を親友に合わせてあげたい一心で一生懸命探した。

和茶には居ない…取り合えずTELしてみても…トゥルルルトウルルル…となり続けるだけで出なかった。

『電話にでへんって事は移動中やで…チャリンコは置いてあるけど、ここにおらんのは間違いない。周り探すで』

和茶の周りの道や、近くの店にも行ったりした…が何処にも居なかった。

結局和茶で立ち往生するしかない状態に、光はまたイライラと頭に血が上りだした。

ちよつと頭冷やすと言い、雨にうたれに屋根の外に出て、和茶の前の道でもしかしたらソロソロ戻るかもしれないと左右見ながら立っていた。

俺も五右衛門も…光に何度もお前は先に帰って良いぞって言ったけど、光はそれはあかん！！の一点張りだった。

ガチャ。

！！！！

『優馬！？と五右衛門！？』

和茶の中から羽樹が出てきた。電気も付いてなかったし、居る事なんて想像もつかなかった。

とてつもなく驚き腰を抜かしそうだった。あまりの驚きに声が出なかった…

『羽樹！！！！マジでビビったわ…中にいたん！？』

『うんうん。光は！？』

俺は親指をクイツと光のほうに向け、『あそこで女子の帰りを待ってる』と伝えた。

『え！！びしょ濡れじゃん。』

『悪いけどさ…裏からでて今帰ってきたみたいに光の所に行ってやつてくれない！？』

『うん…カオリンとキキも連れて出るね…』

『サンキュ…』

数分後、光が嬉しそうに俺たちを呼んだ。

『優馬！！！！五右衛門！！！！はよ来い！！』

羽樹達だな…と五右衛門を顔をあわせ笑い、すぐに駆けつけた。

『帰ってきたか！？』

『おうおう！！キキ！！羽樹！！カオリン！！遅いやないかい！！ホンマ心配したで！！！！濡れてるやないか…』

『光…』

キキは泣き出し、俺も貰い泣きしそうだった。

五右衛門が、たまたまをよそおい、和茶が空いてる事に気が付いた……ふりをした。

『うお！！鍵……かかってねえやん！！』

『……』

『……』

下手すぎる……やばいなこれは……

『マジか！！！！五右衛門やるやないかい！！こーゆうときホンマたよりになるわー！！』

『……』

『……』

取り合えず俺達も、喜んだふりをして、皆中に入った。

『まずゆわせてくれ、皆……ホンマすまんかった。ワイが取り乱して、カオリンに酷い事ゆーてもおた。羽樹やキキにも……それに優馬や五右衛門にもえらい迷惑かけてもおた。ホンマすまんかった。』

光はグツと目を閉じ、頭を上げなかった。光に続いて声を出したの
はキキだった。

『私もごめんなさい。特に光にはあやまらいといけないって思ってる。だから光……顔上げて……』

キキの涙声に、光はゆっくりと頭を上げ、キキを見た。と同時にキキは光の胸に飛び込み、もお絶対離さない！！ってくらい強くギュツと腰に手をまわし……『ごめん……光……ごめんね……本当にごめん……』と泣いているキキに光は動揺していた。

『おいおい……どないしたん！？大丈夫か？……なんでワイにあやまんねん！？……キキは何も悪い事してないやないか？……謝るのはワイのほうやで！？……』

『私……私……光を叩いた……』

『はあ？……そんなもん当たり前のことやないかい！！……んな事で

あやまらんでええ!!」

『光…良いから聞いてあげて…』と羽樹に言われ、俺も五右衛門も光も訳の分からないまま、キキの話を聞いた。

『あのね…』

キキは俺達にも昔の事を話してくれた。

『そかそか…でもな…ワイを叩いたのは正解やで?…あのまま見てみぬふりしとったら…それこそ力オリンにあやまらなあかんで!…コレは一方的に暴力ふるつとるんとちゃう…せやから、やっぱりあやまらんでもええ。なつ。』

と光にしては珍しく優しい言葉をかけてやり、キキの頭をなでていた。

【ん!?!】

一瞬光と目が合い、ニヤリと笑った気がした…まあ気のせいだろう…この時、五右衛門も俺と同じ事を考えていた。

光は、じゃあ俺の話も聞いてくれ…と俺と五右衛門に話した事をそのまま包み隠さず全部話した。

いじめられてた事も…親友がアメリカに行き、今日戻ってきている事も…

『せやから、悪いけど、わいはソロソロ銭形に会いにおもてる。皆にはホンマすまん気持ちでいっぱいや…でも…ホンマに大切な奴何や…分かってほしい…』

当然、誰も反対はしなかった。むしろ早く会いに行つてあげてって気持ちでいっぱいだった。

『おおきに!!ホンマありがとうな。じゃあわいは行くわ。』

『おう、銭形にヨロシクな!!』

『僕はおいじめられてないよって言つとけよ!!』

『カカカ、キキ…ええか!?ワイソロソロいくで!?!』

と光が言つと、

和茶に入ってから約30分くらいずっと抱きついてた事に今の今まで気が付いてなかったらしく、

キキは今日の夕日の様に顔を真っ赤にして、凄い勢いで離れた。

『い…いつてらしゃい。』

『（（アハハハハ））』

キキの慌てようと、片言の日本語に、キキ意外は皆笑えた。

『ほな、また明日な!!』

『おう!!』

『うん!!』

光はびしょびしょのまま外にでて、ドアをガタンと閉め…ガチャつとまた開け、一言だけ言ってまたガタンと閉めた。

『ちなみに…キキはCカップ!!…ワイの好みやで!!』

『Eyes of the heart』

光がとんでもない事を言い残し、キキを落ち着かせるのに20分ほどかった。

『キキちゃんって光の事が好きだったんだね??全然気が付かなかった』

『え!?!』

『マジ!?!』

流石に力オリンの読み間違いでしょ…ってか読み間違いであつてくれ…と思つたが

『ないないない!?!好きじゃない!?!』

結構冷静なキキの慌てように4人とも確信した。俺と五右衛門にとつてはとても残念な確信である。

『へーキキが光ねえええ』

羽樹にいたつてはもおキキの口から聞いたような言い方でキキをからかいだした。

『羽ちゃんまで!?!違つてば…さっきは…その…ねッ…あれだよ…あの…その…』

『アハハハ!?!キキちゃんやっぱり光の事好きなんだー』

『かーなんで光なのかね…俺でしょ!?!』

皆で決めつけ、キキの顔はまたもや熟れ熟れの桃みたいにピンク色にほてっていた。

『何やねん!?!キキ、わいのことすきやないんかい…ワイはごつつキキの事すきやのになあ…』

キキはビクつとおろしていた頭を上げ、『ちが…』

声の主は鼻をつまんだ五右衛門だった。関西弁風に光の真似をしていた。

ヒューヒューと五右衛門がうなり、キキの照れていて可愛かったピンク色の顔は、溶岩のごとく赤に変わり、今にも噴火しそうだった。

『まつ！いいんじゃない！？』

『うんうん！あたしも光に気が無かったら応援するよ』

『しゃーなーなあ。気に入らんけど正直に言えば…』

『うちも、キキの味方だよ』

噴火しそびれた、キキは大きなため息…一息をつき、話し出した。

『本当に…すきとかじゃない…と思う…けど…』

『けど！？』

『けどお！？』

『光の事は…光を叩いた時からずっと頭から離れない…これって好きってことなの！？たんに光を叩いた事で大切な友達が居なくなるって思っただけじゃないかな？？』

微妙…！！凄い微妙な感じだった。キキの言い分も一理あるし、でも…あの30分にわたる抱きつきシーンは…いつたい！？

『ふう~~~~ん』

俺のちょっとした揺るぎとは裏腹に羽樹にはまだ確信の気持ちがあるようだ。

『友達ねえ…光…！！ギョツ…！』

五右衛門もやっぱり、あの抱きつきシーンが気になるようだ。

『えーだってキキちゃん自分で光好きって言ってたじゃん？？』

『え”！？』

『何イ!!?』

『わあお!!』

『光たちを探しに行つて、雨降つてきたから、ココに戻つてきたじやんね。それからキキちゃんと羽チャンは少し疲れて寝ちゃった時、あたしは眠れなくて寝転んでたけど起きてたの。それで…キキちゃんは寝言?…かな?…?それで光…光…つてずつと言つてたから、キキちゃん光が大好きだね?…?て寝てるキキチャンに聞いたら…うん…好きつて言つてたよ』

カオリンのお世辞でも上手いとは言えない演説が終わり、俺達はマジでキキは寝言で言つていたものだと思つた…がこれはカオリンの大嘘。

カオリンのカマ賭けにまんまとはめられ、キキは落ち着かない様子だつたけど…認めた。

昨日までは好意をもつてなかつたとしても、今日は誰の目から見ても好意むき出しだつたしな…実に不愉快極まりない。

雨は大降りになり、たまに雷が閃光と豪快な音が聞こえた。風もそれなりに風力があり、窓から見る雨は斜めに降つていた。

自然の音意外何も聞こえない空間にキキの声はやけに響いた。

『自分でも…少し不思議だけど…多分…好きなの…かな…』

途切れ途切れの言葉には何となく重みを感じられた。

少し、空気が重くなつたところにキキは『でもね…』と付け加えた。

『でもね…昔、付き合つてた子達とは何か、違う感情なの…楽しいから一緒に居たいとか…そんなんじゃない…ホントわかんないけど…』

戸惑うキキに自分でも不思議だつたが臭過ぎる…そしてべた過ぎる…言葉をかけてしまった。

『それが恋なんじゃないのかな…』

人が人を好きになる。恋をする…

俺は昔、本気で好きになった女性が居た。勿論その人とは親密な関係にはならなかったが…俺の一方的な片思いって奴だ。

当時俺は高校1年だった。五右衛門や光だつて知っているし、相談もしたりした。

自分の事なのに、何せ本気で人を好きになると言う事は初めての事だったし、良く分からなかった。

その子が他の子と仲良くしてると、胸が苦しくなった。

俺に話しかけて来た時は目まいがするくらいで、会話は片言、相手の顔なんて見れたもんじゃない。

一人で居る時は特に思い出していた。たった一回の会話を何千回も…

この時はコレが【恋】だという事は全く気が付いてなく、光と五右衛門に教えられて要約気が付いたくらいだ。

ネット、携帯、雑誌、TV、時には国語辞典で【恋愛】、【恋】、などの項目を調べたりして、自分の気持ち理解できた気がした。今でも忘れられないのはロミオとジュリエットで有名なウィリアム・シェイクスピアの言葉だ。

【恋は目で見ずに心で見ろ。だから絵にかいたキューピットは翼を持つが盲目で、恋の神の心には分別がまったくなく、翼があつて目のないことは、せつかちで無鉄砲なしるしだ。そして、選択がいつも間違いがちだから、恋の神は子供だといわれている。】

難しく…深い言葉は、頭の悪い俺には殆どが理解できなかった…でも…恋は目で見ずに心で見ろ。この一言は凄く理解…そして共感できた。

他人の恋なら目でも見る事ができる…

イチャイチャと肩を寄せ合い幸せそうにしているカップル…

友人が好きな人を前に力チ力チになってる様子…

知り合いじゃなくても、恋をしてるなって目で見れば何となくわかる。

けど…自分はどうかろう…

好きな人に対する苦しいような思い…

好きな人が話しかけてくれる嬉しさ、緊張、戸惑い…

告白し交際できるようになった時の、喜び、幸福…

振られた時の、悲しさ、寂しさ、切なさ…

自分の気持ち、思い、感情、それは他人には目で見えても自分の目には映らない。

だから恋は目で見るとじゃなく心で見ると彼に共感できた。

頭の悪い俺だ…天才的な彼の考えとは全く違ってるかもしれないけど…自分なりの解釈で俺は俺の中でそう信じている。

恋は目で見ずに心で見ろ…

『 Star Festival 』

『七夕とゆうたら、織姫と彦星の伝説が有名やねんな。』
『うんうん』

『織姫星はこと座の「ベガ」で、夏彦星はわし座の「アルタイル」の事や。』

『へえ全然知らなかった…』

『ちなみに2つの星は15光年離れとるんやで!!』

『15光年ってなに!?!』

『光の速さでも15年かかるって事や!!』

『お前の足で15年!?!』

『どないやねん!!五右衛門はだまツとれ!!』

『1年に1回、会いに行くのも大変な距離やね…』

『せやでえ。』

『7月7日に降る雨を「さいるいう催涙雨」とゆうてな、織姫と彦星が流す雨…と伝えられとるんや』

『毎年毎年会えるとは限らないもんね…光の速さでも15年に1回…』

『何か…切ないなあ』

『近年の台湾ではな、七夕をバレンタインデーと同様に男女がプレゼントを交換やる日とされてるんやで!!織姫と彦星の神話を考えると、バレンタインデー以上にプレゼント交換に適した記念日と思うねんけどな…』

『じゃあ今日は皆でプレゼント交換だね』

『え” -!!!』

そう！今日は7月7日！！七夕…最高気温が…

25 以上の場合、夏日…

30 以上の場合、真夏日…

35 以上の場合、猛暑日…

一日の最低気温が25 を下回らない場合は熱帯夜と言う知識を最近手に入れた。

そして今日は猛暑日…気温35 以上のエアコン無しでは生きられないような暑さだった…追い討ちをかけるかのごとく、雨まで降り出した…

今は、学校が終わって、いつもの6人で和茶に涼みに来て七夕の話をしていた所なんだよね。

光の話によると、七夕に降る雨は催涙雨とか言ってたけど…本当なのかな…

この雨が…織姫、彦星の涙だと何だか…ねえ。

俺達は今から急遽プレゼント交換のために一人1000円までのプレゼントを用意する事になった。

この暑さ…そしてこの催涙雨…今日だけは和茶でのんびりとしたかった…

光の無駄すぎる蘊蓄と、カオリンの無邪気な乙女心のせいで俺は今、ショッピングモールに向かって歩いて…36 もある濡れた道を…

地面からは鼻に付くような匂い…

耳に付くグアグアと蛙の鳴く声…

頭にくる…俺と相合傘している五右衛門…

『つーか何でお前傘ねーんだよ！！！！朝は傘持ってただろ！！！！』

『いやあ、教室に忘れてさ、どおせ和茶に寄ると思ったから一本くらい余分にあるかなって…面目ない…』

今回のプレゼント交換の買出しはペアで3組に分かれて行われた…あのバカップルに気を利かせてな。

バカップルと言うのは当然、光とキキだ。

結局キキが光に告白し、光も勿論OK!!

キキはめっちゃめっちゃ喜んでいたが、俺と五右衛門は100%OKだろうと思っていた。

『なんてったってめっちゃ可愛いもんな…』

『ああ。マジで光がうらやましいわ…キキなら性格もすんげー良いしな…』

と毎日の様に俺と五右衛門は愚痴をこぼしあい、今日もキキと光を話題にしながらショッピングモールへと向かった。

『くあ!!涼しいな!!』

『やべえ。マジ生き返るわあ』

歩く事30分：ショッピングモールに到着。俺は左半分、五右衛門は右半分、雨に濡れてTシャツの色が変色していた。

俺と五右衛門は自販機に直行し、取り合えず一服した。

『プレゼントって…何を買えばいいんだ!?しかも1000円って…』

俺は五右衛門の言葉になんて返事して良いのかわからず、『さあ…』と軽く答えた。

『まあ取り合えず、俺雑貨売り場でも見てくるわ。30分後にまたココ集合な!!』

五右衛門は俺の返事を待たずさっさと買い物に出かけた。ああ見えて意外と買い物好きな乙女チックな所があるのが…まあいいか。取り合えず俺は、まあプレゼントは決めてある。ビーサンこと、ビ

ーチサンダル！！

時期、値段、手軽さ、どれをとっても完璧だ。

一つ言うならば、プレゼントは誰に送るのかはクジで決めるらしく、男にあげるのか女にあげるのかはまだ不明…

自分の名前を引いたら戻すというルールだったので、確立的に女物のビーサンを買うことにした。

『いらつしやいませ！！』と女性店員に声をかけられた。

『ビーチサンダルは何処にありますか！？』

『彼女さんへのプレゼントですか！？』

『え…ええまあ』嘘をついた。

この店は女性物の靴類しか置いてなく、女性のペアが2組ほどとカップルが1組居た。男だけできているのはどおやら俺だけみたいだ。女性店員はニコニコと笑い、ビーサンのコーナーに案内してくれた。

『オススメとかってありますか！？』

『そおですねえ。年齢にもよるんですけど、高校生くらいの方ですとこちらが一番売れてます』

とんでもなく派手だった…コレがビーサン！？

花なのか、果物なのか良く分からない柄に、鼻緒には小さな薔薇の花が沢山ついてた…

【へえ…最近の女の子はこんなはいてるんだ…】女性交際暦が乏しい俺には女の子の普段着を見る機会があまりなかった。

【えー！！めっちゃ高い！！ビーサンって980円とかで売ってんじゃないの！？】どの値札にも3980円とかかれており、色々な値札を見てもやっぱり3980円だった。

女性店員はあれこれ、サンダルの説明をしてくる。彼女はどんな子ですか！？とついには俺の架空の彼女の事まで質問してきた。

取り合えず、キキ、カオリン、羽樹を思い浮かべて、適当に答えた。

『えっと、皆大体系長は160くらいで体系は細身です、二人は髪の毛を染めてて、一人は黒です。』…何言ってるんだ俺…

『え！？彼女さん…沢山いらっしゃるんですね…』と苦笑し、少し冷めた目で見られた。

『あ…いや、その、今の彼女は、一人です！！』…ありえない、死にたい…

『明るい感じの子です！？』

『あ。はい！』…取り合えず全員に当てはまる質問で助かった…

『これなんてどうでしょう！？』

女性店員に進められたのはさっきの一番売れているものではなく、下地は白一色、鼻緒は黒と何ともシンプルな感じのビーサンだった。良く見るとヒールまでついている。産まれて初めてヒール付きビーチサンダルという物を見た。値段は勿論3980円…

『彼女のプレゼントって言っちゃったしな…』もしここで俺がもつと安いありませんか！？何て聞いたら…

【えええ。彼女さんへのプレゼントなんですよね！？…3980円もだせないんですか！！？…】なんて心では思うに違いない…

妄想…俺の悪い癖でもある。

【すいません、他の店も見てみます。彼女のプレゼントなもので、色々選びたくて。アハハハハ】よしコレでいこう！！

『あの…』

『あ！こちらになさいますか！？』

『あ…はい、それで。』

もお駄目だ…諦めよう…財布には4030円…なんとか買える。

【捨てるわけじゃないんだ！！大親友、もしくは大親友+大親友の彼女にあげるかもしれないんだ！！そお考えるとたかが3980円じゃないか！！男ならビシッと！！】ポジティブに考えれるのは俺のいいところでもあった。

『ありがとうございます またお越しくださいます。』

【本当の彼女と一緒にきまあす…】と呟き、五右衛門との待ち合わせである自販機にもどった。

『 Star Festival 』

『おう!!お前なにかったん!?!』

五右衛門はもお買い終わって待っていた。

『あービールサンよビールサン。』

『え!?!1000円以内で買ったん!?!子供用じゃねーのそれ!?!』

流石は五右衛門! 買い物好きなだけあって最近のスリッパは1000円では買えない事を知っていた。

『3980...』

『は!?!』

『3980円した...』

『うっ...』

この、世間から見たら普通...俺からしたら超高級のビールサンを買うことになった過程を話した。

『そ...そうか...まあ飲めや。』

『おう...さんきゅー。』

今の俺にはジューズを買うお金がない...財布をどれだけ振っても10円玉が5枚落ちてくるだけだ。

『ただいまあゝ』

『優馬、五右衛門。遅かったやんけ。』

『俺ら歩きで行ってたからさ...』

『めっちゃ遅いから心配したよー』

『わるいわるい。連絡入れればよかったな。』

俺達が和茶に戻った頃にはもおクジの準備などができていて、今すぐにも交換会が開始できる状態だった。

『よっしゃ!!ほな、みんな揃った所で早速、順番にクジでも引き

『きもいつちゅーねん!!』

皆が引きまくる中五右衛門だけは良かったなあと安堵の笑みを浮かべてくれた。

『光の言う通り…コレは捨てた方が良くかも…』

『けしからん!!…ブラジャーと胸の間にでも挟んで大切に大切に保管してくれいっ!!…』決まった…と思ったが…

俺の言葉に羽樹は本気で捨てようとしたので、慌ててとめた。

『次は優馬だよ』

『あ!!俺も貰えるのか!!』羽樹にあげる事の幸せさですっかりプレゼント交換会の趣旨を忘れていた。

俺は何でも良いやって感じで、一番上の紙をさつと引いた。

『なんと!!コレは…当たりです!!羽樹ことうちからのプレゼントです!!』

『（おお!!）』

と皆、歓喜の声を上げていたが、どお考えても一番当たりは俺の紙だろ。と思っていた。

【まてよ…コレは…俺と羽樹のマンツーマン交換!!…】

俺の中では催涙雨も晴天に晴れ上がっていた。

『イエーイ!!』と数秒遅れて喜び、当然流された…

取り合えず全員引き終わった事で各々の紙を見せ合った。ボードに書き込んだ。

カオリン 光

羽樹 優馬

優馬 羽樹

キキ 五右衛門

光 カオリン

五右衛門 キキ

なんとまあ。すごい結果になった、各々が異性に上げると言っ…ま

さに七夕万歳って気分だった。

『ほな、気になるプレゼント公開するでえ！！まずはカオリン！！わいのあげたものを！！』

『これです…』

『（うあ…ひで…）』

オロナミンCの6本入りの奴…しかも1本飲んであるため正確には5本…

『キキ！！あんたやっぱり光とは別れた方が良いんじゃない？』

『うん…考えてみる…』

『どないやねん！！！確かに一本のんだんは謝る！！せやかてそんな酷いもんやないとちゃうか！？』

『…』

『すまん…カオリン…わいが悪かった。どおしてもオロナミンCのみたくて。よし！！！気を取り直して次のプレゼントの公表や！！』
光は一刻も早く、自分のプレゼントの話題を変えたく、次の公表者羽樹にピンと右手を伸ばし、人差し指を向けた。

完全に空気を沈んでいたが、俺としては結構良い空気だった。これだけ落ちてくれれば普通でも目立つ俺のプレゼントをさらに引き立ててくれる。

『え…ツと。優馬からのプレゼントなんだけど…』【あれ…何かあまり喜んでないような…気のせいかな…】

『カカカ！！あかんあかん！！期待してたなら羽樹が悪いわ。優馬のプレゼントなんてワイのより酷いで！！その辺で組んできた水道水でも渡されたか！？』

『んなわけねーだろ！！羽樹、気に入らなかった！？』

『うーん。コレ優馬プレゼント間違えてないかな！？』

『え！？マジで！？』【あの店員…まさか、間違えて変な靴入れたりしてないよな…】

『ビーサンなんだけど、コレって他の子へのプレゼントやない！？彼女とか！！』

『ないない。優馬に彼女なんておれへんで！？』

『うん！それが俺のプレゼント！！』

『え！？まじ！？』

さつきまで不安そうだった羽樹が雨の後の花の様に、輝きだした。

羽樹の反応にキキ、カオリン、光と、俺の渡した紙袋を覗き込んだ。

『（（えー！！！！））』

『何コレ！！めっちゃいいやん！！』

『いいなあ〜オロナミンCと交換しない！？？』

『気に入ってくれた！？羽樹のサイズに合ってるの良いけど。俺…選んでる最中にさ、織姫と彦星の気持ち考えててさ。それで、今日は雨できつと会えなくて泣いてるんだろうなって…だからさ！！この行事もふざけてオロナミンCとか買うのは酷いなって思ってたさ…有り金4000円しかなかったけど殆ど使い果たして、買ったんだけど。会えなくて泣いてる、二人の気持ち考えたら当然じゃないかな！？』

『やばい…かつこよすぎた…』

若干ナルシストな発言になったけど、七夕って事もあるし、ロマンチストだと思ってくれるだろうと熱烈的に語った。

『すごい…』

とまず褒めてくれたのはカオリン、それに続いて羽樹、キキも褒めてくれた。羽樹にいたってはクジで俺の名前を引いたことを本当に喜んでるように感じた。俺の鼻はぐんぐん伸び、天狗状態になっていた。有頂天外だったかな…まったくまには良いよな。

次ぎ次ぎ！！と光が不機嫌に言い放ち、俺は羽樹に貰ったものを皆に見せた。

羽樹から貰ったのは蝶の模様にスモークがかかった小さいビンの香水だった。

予算的に小さいのしか買えなかった…と微笑んだ羽樹は普段から可愛いのだが今日は妙に可愛く感じた。

次ぎ！！次ぎ！！次ぎ！！と自分より下のプレゼントは無いのか！！と光は公表を急かした。

最後の五右衛門まで公表が終わり、結局光に劣る品は存在しなかった。…当然といえば当然だな。

わいわいと意外と楽しかったプレゼント交換会はアツと言う間だったが、それなりに時間はたっておりもお20時半で外も暗くなっていた。

窓の外を見ると催涙雨もいつの間にか上がっていた。

『織姫ちゃんも泣き止んだね』とカオリンの言葉に皆頷き、俺達は帰宅の準備をして、和茶を一步出た。

織姫の涙が星に変わり、流星は『七夕』と思えるほどの星空だった。
『めっちゃ星でてるで…』

『うん』『だな！』『マジですげな！！』『おおおお』『すごい…』

丸い丸い月のと無数の星は、ついつい見とれてしまうほどの迫力と美しさがあった。七夕といったらやっぱり短冊に願い事だよねっと羽樹が言い出し、その場でノートに願い事を書き、和茶の庭にある細い木に掛けた。見た目はとても短冊とはいいづらいけど、俺達にとっては立派な短冊だった。

『なあ織姫たちって今日は会えたと思うか??』

『会えなかったから泣いてたんじゃない???』

『だな。多分会えなかったんだろ。』

『せやなあ。今日が晴天やったら話は別やねんけどな…』

『催涙雨振ってたしね…』

『んー。でもさー!!もしかしたら、無いと思うけど…』

『何やねん!!じれったい!!はよゆわんかい!!』

『俺の想像だけどさー!!もしかしたら今日は15年ぶりくらいに会えて嬉しくて泣いてたのかもしれないなって思ってたさー!!』

『((…))』

『優馬もたまにはええ事ゆうな!!』

『((アハハハハハ))』

皆も俺の意見に同感だったみたいだ。と言うか、何か嬉しくて泣いたんだって思ったかったのかもしれない。

七夕伝説が人の考えた伝説なら、やっぱり幸せであってほしい…

『また、やろうな!! S t a r F e s t i v a l 』

『アイノコクハク！？』

今日は8月1日。8（パ）1（イ）の日＝牌の日！！…麻雀の日！！
あまり有名ではないため、ご存知で無い方も多数いるだろう。日本
では語呂合わせで　　の日と付いている日が沢山ある。

今日はそのうちの一つ麻雀の日だ！！

期末テストも無事ではなかったが一応終わり、7月中に補習授業も
受け、俺と五右衛門にとっては今日が夏休み初日と感じる。

Summer vacation！！高校最後の夏休みを補習授業
で潰した事には涙がでる…

いつもの目覚ましのセットと解除し忘れた俺は、午前7時と言う驚
異的な速さで目を覚ました。

ジイジイと鳴くセミは本当に耳に付く…

セミ言う昆虫がもし、冬に鳴く昆虫だったらあの暑苦しいと感じて
いる鳴き声は、寒く感じるのだろうか…？

などとくだらない事を考えながら、再び眠った。…があまりの暑さ
に二度寝は不可！！

起床5分で暇になった俺は、手当たり次第電話してみた。

『おう！！五右衛門！！おきてたのか！？』

『寝むい…じゃっ』

ツーツーツー…

『おう！！光！！暇か！？』

『暇や無いわボケ！！…寝る』

ツーツーツー…

『おう！！カオリン！？今何してんの！？』

『ん…誰え？…ムニヤムニヤ…』

『俺俺、優馬。メモリ入ってるだろ！？』

ツーツーツー…

『おう！！羽樹！！切るな！！』

『はあ！？』

『いや…さっきから一言、言つと切られてたもんで…』

『ふうん。で！？何！？…』

やつと会話のラリーが続いたと思つたら羽樹はかなり不機嫌な様子…

『いや…忙しそうだな…またで良いや…』

『え！？別に忙しくないよ！！勝手に決めないで！！…で…何か用！？』

『いや…暇かな…って思つてさ…俺は暇だから…』

『で！？』

『その…ええつと…羽樹も暇なら遊ばないかな！？…って…他の奴ら寝てるみたいだし…』

『ふうん！！要するに見事皆に断られて、残りに残った残飯のうちと遊びたいと言つわけ！？』

『ちやうちやう！！メモリの上から順番にかけたただだからさ！！それにキキにはまだかけてないし！！最後ではないよ！！』

『ふうん。そりゃキキは光の彼女だからそんなに簡単に誘わないでしょ…』

夏休み初日の午前7時から友達に怒られてる…マジで鬱になりそうだ…

『優馬！！…ちょっと聞してる！？』

『うんうん…聞いてるよお』

『聞いてたら返事くらいしてよ！！こっちはっかり話して馬鹿みたいじゃん！！うちも暇だから相手してあげる！！1時間後に和茶！またね！！』

『え！？一時間後って！！』

ツーツーツー…

1時間後に和茶…家からだとは自転車で20分かかる。要するに長くても40分で準備しなければならない…

起きてすぐ電話を手当たり次第かけてる最中だった俺は、まだパンツ一丁で寝起き同然…

残り時間30分で、風呂、歯磨き、準備…やばい！！

意外にも俺は風呂が大好き。湯船でボーっとしたりするのがたまらなく好きだ。

しかし今日は湯船に入るところか、お湯を入れることすら無理な状況だ…。

10分で風呂を出て、10分で髪を乾かし、3分で歯を磨き、10分で準備…

残り時間27分。何とか間に合う安堵の息をつき、ほっと胸をなでおろした。

ゆっくりとは言っていないが、それなりにのんびりと急ぐ事も無く普段のペースで自転車を走らせた。

和茶に近づくにつれ、羽樹がおおきていることに気が付いた。

『おまたせえ』

『5分前か…でも遅い！！5分も待ったよ…』

『わるいわるい…』

どおやらまだ不機嫌のようだ…と言うか、俺は何しに来たんだ！？確かに暇だったから、羽樹には電話した。…が、あまりに不機嫌で話しなんて出来たんもんじゃないかった。

それに、羽樹と遊ぶって何して遊ぶんだ！？…こんな不機嫌な状態で…

俺は女の子と二人きりで休日を過ごすなんてのはいまだかつて1度としてない！！

中学の時付き合った子は居たけど、登下校や昼休みに少し話す程度だったし…不機嫌な羽樹に対して何を話して言いか分からず黙っていた。

俺が、何を言っても気にさわりどおせこつ酷くどやされるのが落ちだ…と考えた。

それは少しは効果を発揮したが、逆に無言過ぎるとイライラしだすのもで、羽樹は『なんで話さないの！！！！？…クドクド…何か話してよ！！』とまあ20分以上は永遠に怒鳴り散らかしていた。とは言うものの、何を話して言いか分からない。ふと目に留まったのは七夕にあげた、ビーサンだった。

『おー！！ビーサン使ってくれてるんだ。何か嬉しいな』
満開の作り笑顔で羽樹に放った。

『あッ、うん。』
俯きちよつと恥ずかしそうに答えた。

『羽樹は俺の事どお思ってる！？』
話す話題も考え中だし、ちよつとした素朴な疑問を聞いてみた。
そもそも、女友達が居ないわけではないが、ココまで仲良くなった女友達は羽樹、キキ、カオリンが初めてだった。
単純に向こうが俺達の事をどお思ってるのか気になった。
それにお互いの親友同士が付き合ってるしな…。

『えッ！！…何言ってるの！？…何でいきなりそんな事聞くの！？…』

『んーちよつと気になってさ。』

『うちの答えは何か意味があるの!?!』

『そりゃあるさ!?!!』

この時俺は…いや俺達ほとんどない勘違いをしていた。まあお互いの心の会話はきつとこうなるだろう。

『えッ!?!…何言ってるの!?!…何でいきなりそんな事聞くの!?!?…』

【え!?!もしかして優馬ってうちに気があるの!?!?】

『んーちよつと気になってさ。』

【俺には良く怒るしさ、俺以外の4人と仲が良いから俺とも仕方なくつるんでるのになって…まあこんな事言えないけど…!?!】

『うちの答えは何か意味があるの!?!?』

【え!?!?もしかしてうちが好きだよって言ったら告白とかしてくれるのかな!?!?!?!】

『そりゃあるさ!?!!』

【まあもし嫌いなら俺はなるべく羽樹とは関わらないように…しないな…残念だけど…!?!】

とまあこんな感じだろう。この後の会話で俺はハッとお互いの会話がずれているのではない出した。

『ええつと…その…んーと…』

【どおしよう!?!…いきなり過ぎるよ!?!それに優馬はうちの事好きなのかな!?!?…!?!】

『おいおい、そんなに悩む事かよ！！』

【うへー言いつらいつて事はやっぱり俺の考えの中かな…】

『あたりまえじゃん！！』

【逆に悩まないわけ無いじゃん！！】

『そっかあ…』

【当たり前なのかよ！！的中じゃん…】

『あのさ…逆に優馬はうちの事どおもってるの！？』

【取り合えず…優馬の考えを…ちゃんと口から…聞きたいな】

『俺は、羽樹の事好きやを！？』

【あれ！？…羽樹も俺と同じ事で悩んでたのかな！？】

『え！！！！ちょ…本当に！？』

【嘘でしょ！？からかってないよね！？】

『は！？、嘘なわけないやん！！嫌いだったら暇でもTELして遊びたい何ておもわねーよ』

【羽樹にしては珍しく神経質になってるな…まあ俺は本当に嫌いじゃないし、嘘は言ってないけどな】

『ちよつとだけ考えさせて！！！！』

【やばい！！やばい！！やばい！！やばい！！どおするの！？うちは付き合つの！？優馬と！？どおしよう！！！！】

『うん…良いけど…もし嫌ならそお言ってくれれば…』

【嫌でも流石に言いつらいんだろっな…】

『嫌じゃない！……優馬の事は好き！！』

【やば……言っちゃった……】

『オー！！そつか！！良かったあー！！なあんだ！！早く言ってよ駄目かと思っただやん！！』

【ほおお。安心や……】

『う……うん……ヨロシクね！！！！』

【もお良いや！！どおにでもなっちゃえ！！】

『おう！！宜しく！！』

【宜しくて何か不思議だけど……俺の中の誤解は解けたし……宜しくでも間違ってないか！！】

『優馬が……彼氏かあ……何か不思議だなあ……』

【でも、何か楽しそう】

『うんうん。やっぱり不思議だよな』

【って！！！！えええッ！！！！？今……彼氏とか言わなかった！！！！？】

『愛の告白!!』

雲ひとつ無い晴天。

太陽で暑く眩しい和茶の庭。

7月にかけて短冊はマスターがゴミと勘違いし、いつの間にか捨てられていて、今は掛かってない。

変わりに2匹の小鳥が枝の上でイチャイチャしている。一羽が飛び立つともお一羽も後を追うように飛び立った。

『これからどおする!?!』

つい30分前までは怒り狂っていた羽樹も今では何か楽しそうに『今日は天気が良くて気持ちいい』だの『夏は皆で海行きたいね!!』だのいつもの羽樹に戻っていた。で、今日はどおするの?:俺が聞きたいところだ。

『んー...一つ聞いていい!?!』

『ん??.いいよ』

『今、俺は羽樹の彼氏なの!?!』

『え!?!...ちがうの!?!』

そう!俺は自分でも知らないうちに自分の口から羽樹に愛の告白とやらをしていたらしい。

そおゆうことなら、あれだけ悩んでいたのも何となく分かる気がする。

嬉しくないのか!?!と聞かれたらそりゃ嬉しい!!とは言うものの...

『えつと...本当に俺が彼氏で良いの!?!』

『ええ!?!何を今更...』

『んー。何か想像が付かなくてさ。だって俺だよ!?!俺が羽樹だよ

！？』

『うん。で！？』

『何か…羽樹ならもつと良い男だつて沢山寄ってくるんじゃないかな…って…その…何だ…』

ブツブツと俺が一人で言っていると、クスクスと笑い、羽樹は

『優馬と居ると楽しいし、うちがイライラしてる時でもちゃんと話は聞いてくれるし、何て言えば良いのか分からないし…最初は戸惑ったけど…今は後悔してない！！』
と言ってくれた。

無理！！今、俺が…『えつとさ…何か勘違いしてるようだから言うけど…俺が好きって言ったのは友達としてで…コレからよろしくつても…』何てナイフを突きつけられていても言えない！！

それに俺は羽樹に気が無いわけではない…羽樹は3人の中でも俺に一番近い気がした…と言うか気が合う！？

だから、俺にとってはこの状況は美味し過ぎる…ありえない状況…

でも…本当に良いのかな！？

羽樹を可愛い高校生とすると俺は精々ブルドック…クラス…釣り合わない…

友達としてワイワイ騒いでる時は緊張とか何もなかったけど…

俺も知らないうちに彼女に…そんな事あるか！？

夢のようだ…夢の……よう！？

ああ。

そうかコレはきつと夢だ…夢の中では幸せで起きたら現実に叩き落される、ゆわいる寝起き悪夢ってやつだ…ブツブツ…

ボカ!!

『いつて!!!』

『もお!!何一人でブツブツ言ってるの!?!』

『今、若干…頭部に刺激が走ったんだけど…俺はベットから落ちたのかな…』

『はア!?!…あああ…先が思いやられるなあ…』

頭部の刺激…

不機嫌になる…現実ばい羽樹の表情…

…

現実だ…!!

俺は羽樹の彼氏なんだ!!!

嬉しいような…嬉しいような…嬉しいような…嬉しいような…嬉しい
いんじゃないか!!

でも…

『羽樹ッ!!!』

『はい!!!』

羽樹は俺の裏返った大きい声に、ビクッと背筋を伸ばした。

『俺には色々頼りない部分もあるし、ルックスだって良くない、頭
だって光に劣るし、運動は五右衛門に劣る…何もとりえが無いって

言つと自虐的な言い方になるかも知れないけど…コレは事実、でも
もお一つ、誰にも負けない事実もある！！…コレから羽樹を大切に
思つて、1分でも多く笑顔で居られるように…色々楽しい思い出と
か作りたいて思う…それで…もし良かったら…俺と付き合つて欲
しい！！」

明らかに変な発言だけど、俺としてはトどおしても適当に付き合う
のは嫌だった。

羽樹に申し訳ない、知らないうちに彼氏になってました。そんなの
人としておかと思う。

だから…タイミング的には意味不明だけど、今を逃したらダラダラ
と彼氏気取りで付き合うことになりそうだったから…

俺としては初めて、羽樹としては2回目の告白をした。

『え！？うん…いいよ さっき答えたつもりだったんだけど…伝わ
つてなかったかな！？アハハ』

当然っていったら当然な結果かもしれないが…

ちゃんと自分の意思で気持ちを伝え…それで彼女になってくれると
言つ…スッキリした…それ以上に嬉しくて…嬉しくて…叫びたかつ
た。

2008年8月1日金曜日…午前10時22分…俺に高校生活で初
めての彼女が出来た…

俺達人間には、諦めなくちゃ…悟らなくてはいけない状況つてのが
ある…

どれだけ俺が人を愛したからつてその人が必ずしも俺の所に来てく
れることなんて無い…むしろ好きな子…気になつてる子も…好きで

いてくれてて、相思相愛って言うパターンのが稀…

俺に欲しい物があってそれが欲しいんだって願って頑張っても…必ずしも俺の手に入るなんて事は無い…むしろ手に入るケースのが稀…

そう。諦めは肝心。

無理なんだと考え、悟らなければならない…

行動せず後悔するより…行動して後悔するほうが良いと言う事を良く耳にする…

けど…

それは難しい…

それにやっぱり失敗すれば自分が傷つく…苦しく…辛い…

だから、悟る…諦める…

俺は、心では羽樹が好きでも、無理だ…諦めるんだ…

今の状況もままならなくなるぞ…

友達で居られるだけでも幸運だよ…と考えていた。

でも…

俺の考えは間違ってた…

自分への自信のなさがそんな思考を生み出したんだ…

人生は何が起こるか分からない…

1時間前には想像も出来なかった事が毎日の様に起こっている…

1時間前は友達と楽しく騒いでたサラリーマンも…1時間後は交通

事故を起こし、殺人犯になつてゐるかもしれない…

1時間前は意識がなく植物状態だった子が…一時間後には意識を取り戻し、親子で話しているかもしれない…

1時間前は羽樹に怒鳴られ急いで準備し、自転車を転がしてた俺も今は…

うん。人生…何でも起こりうるだよな…

人生って…と考えようとした時、むうっと膨れ上がった顔と、開いているのか開いてないのか分からないくらい細められた目ですつと見ている羽樹に気が付き、ドキつとした。

『妄想…してるでしょ…』

『してな…くもない…』

『えつちな事考えてたんでしょ…』

『アホか!!人生について…』

『ふうん…それにしても…あついねえ!!』

『だな…川でも行くか』

『賛成え』

『ってか…今朝はなんで不機嫌だったの!?!』

『…内緒』

『IN 羽樹家』

暑い…もの凄く暑い…死んでしまうのではと思わせる程暑い…そんな中、俺は羽樹を荷台に乗せ川を目指した。

太陽の光が向かい風となり、セミの鳴き声は呪文に感じられ…俺の体力をドンドン奪った…

しかし…！！！！俺は背中に全神経を集中させた…死の淵から這い上がるために…

荷台に乗っている羽樹がギュッと抱きしめると…かすかに感じられる胸の膨らみ…全回復！！

まっ！！コレでこそ正常な男よ…！！！！俺は決して変体じゃないと、気合の入る下半身を言い聞かせ…川に着いた。

『川が…カラだ…』

『無いね…水…』

透き通った水…丸い石がコロコロと流れに逆らわず上流から下流へと転がっている…浅瀬には子供達がお父さん、お母さんと一緒に水を冷たがり遊んでいる。橋から飛び降り、スリルを楽しむ大学生…冷たい水を服をぬらしながらかけあう俺と羽樹…暑い日に冷たい水…それは…キラキラと太陽光を跳ね返す逆露天風呂…！！

乾ききつて、100歳の老人でも目を凝らす事なく見える川底…急激の干上がりで、逃げ遅れた魚の死骸…それを残酷に突つく鳥の群れ…そんな鳥には気がつかずタダタダ走る、甲子園を目指した長袖

長ズボンの野球部員…それは…自然サウナ。

川に水が入っているのと入っていないのではこんなに違う物なのか…

そして現実の後者。

『優馬あ…暑い…』

『うん…』

この場に居ては俺たちまで干からびてしまつと思い、取り合えずコンビニで涼んで、飲み物でも買って午後から何するかを話す事にした。

『うあ…!!!!』

とコンビニに着くなり、羽樹は声を上げた…俺には何も心当たりが無かったが…

『なに!!??どおしたの!?!』

『うーん…』

と羽樹は少し顔が赤かった…

『顔…赤いぞ!?!…早く店はいろっぜ』

『背中…』

『背中!?!』

『背中…見てみ…』と恥ずかしそうに手鏡を渡してきた。

『うあ…なにこれ…何でココだけ濡れてるの!?!何かしたっけ?!』
と俺が体制を捻りやつとの思いで見たのは、背中に丸く着いた跡だった。

『多分…うちの胸で…そこだけ汗かいたんだよ…』
『アハハハハ！…！そんな事か！…！』

俺に釣られたか、羽樹も苦笑し、一先ずコンビニで汗が引くまで雑誌コーナーで本でも見ながら休んだ。

店内は涼しく、10分ほどで汗が引いた。

ジュースを買い、店内で座りこれからどおするかを話した。

高校生は…実に不便…

色々と遊んだりしたいのに車が無いのだから…何処に行くにも熱い思いして自転車を転がすか、時間に囚われてお金まで掛かる電車で移動するか…コレくらいしか移動手段が無い…

原付バイク…それも…俺の行っている学校では禁止だった…

要するに小学生から唯一進歩したといったら車輪がでかくなり沢山こがなくても進むという事だけだ…

『うちに来る！？』

『え！？良いの！？今日付き合ったばかりだよ！？』

『それこそ、え！？だよ！…！』

『そおゆうもんなのか…』

所々で今までホントに女性との関わりが無かったんだな…と思える場面がある…

と言う事で、俺は羽樹の家に行く事にした。取り合えず羽樹の自転車を取りに和茶に戻って、それから…あの超絶な橋を渡って羽樹家だ。

二人で話しながら走っていたせいか、羽樹の家が以前より大分近く感じた。

橋も知らぬ間に上り、知らぬ間に下っていたので体力的にも全く疲れなかった。

羽樹に言われ、羽樹の自転車の横に並べるように停めた。

『ようこそ我が家へ！！アハハ』

『邪魔しまあす。』

初めて女の子の家に上がった。

シャンプーなのか香水なのか良く分からないが妙に良い匂いがしたような気がした。

玄関には羽樹の靴の他に2足あったので、お姉さんと母親が居るのだろうつと少し緊張した。

靴棚は白く、花が飾っており、何というか凄く綺麗だ。

『こんにちは！お友達！？』

羽樹のお母上登場…いや、あれは姉だ！！！前回見ておいて良かったとほっと一息入れた。

『んーん、彼氏だよ』

と言う羽樹の言葉にドキツとした！！

『どうも、はじめまして、羽樹さんのお姉さんですね。羽樹さんの彼氏を勤めさせていただいております、高橋優馬と申します。今後長い付き…』

ボコ！！

イテ！！いきなり羽樹さん…羽樹に殴られ怯んだ。

『アハハハ 気持ち悪い説明は良いから…それに姉貴じゃなくて、この人はお母さんだから…』

『ええ！！マジすか！？』

足の爪先から髪の毛の髪先までゆっくりと目をスライドさせて凝視した。コレが…今年18歳の娘を持つ母親…いや！！！姉さんも居

るんだ！！！！ありえない、うちのお袋が醜すぎる…

ウフフ と絵になるような微笑で俺を迎え入れてくれ、俺はそのまま羽樹の部屋へと案内された。

ちよつとした螺旋状の階段を上って左側の部屋が羽樹の部屋だった。

ガチャ。『お邪魔しますです…』

部屋に一歩足を踏み入れると、かすかに香水の匂いがした…

壁は白に近いピンク色で、ドアと対角の壁には窓があり、さっきまで浴びていた太陽光が入り込んでいた。

日差しを避けるようにベットが置かれてあった。床につくほどの布団シーツは手形が残るのではないかと思われるほど厚みがあった。

枕元には、小型のライトスタンドが着いており、その横には今、呼んでいると思われる小説らしき物が置かれてあった。

今まで、見たものを忘れさせるくらいインパクトがあったのは、小説の横に置かれた２リットルのペットボトルだった。２本も…

中には水が入っており、俺は寝る前に筋トレでもしているのかと思った。

ドアの左側にはメタラックが置かれており、友人との写真、ＣＤコンポ、液晶ＴＶ、ＤＶＤ、ＣＤなどが綺麗に整頓され、置かれていた。

写真はキキもカオリンも写っていた。…何気に気になる、羽樹と俺の知らない男のツーショット…

ＤＶＤは主にジブリ…ＣＤは洋楽のアルバムが殆どだった。洋楽に関しては何枚は俺の持っているＣＤがあり、話のネタに出来そうだと思った。

右側には等身大サイズの鏡と衣類が入っているとされるクローゼット。小説、雑誌、漫画の並んだ本棚が置いてあった。

鏡には俺の姿が映っていた…少し恥ずかしい…

クローゼットの中には下着も入っているのだろうか、少しながら想像もしたが、ニヤケ顔になるとまずいので頭から即消去した。

『なにボーッと突っ立ってんの?! エアコンつけたしドア閉めてよ』
羽樹の声で我にかえるまでは異世界にでも居たかと思えるほど、新鮮な空間だった。

『あ!! 悪い悪い。それにしても綺麗な部屋だな…』
『え!? そうかな!?』

羽樹に言われるがまま、腰をおろした。羽樹は『着替えてくるからちょっと待ってて』と言い、部屋を出て行った。

チャンス!! ！とさっきまで気になっていた羽樹と男のツーショット写真を丸めてゴミ箱に捨て、そのままベットにダイブ!!
羽樹の香りとリンスと思われる匂いが舞い上がった。枕を抱きしめゴロゴロとベットを転がり、ピタッと止まった目の先には『立ち入り禁止』『開けるべからず』と書かれているようなクローゼットがあった。

そのまま直立し、クローゼットへと足を忍ばせた。
両開きのドアを開けるとズラーツと並んだ服がかけられていた。
眼内に埋め込まれた、暗視スコープをフル活用し、半身大サイズのタンスを発見した…

物理的に聞こえるくらいの心音を無視し、そのタンスに手を伸ばした。

一段目：【ツチ】ハンカチなどが綺麗に入っていた。

二段目：【くツ】靴下が色分けされて入っていた。

【ココかア!!!!】と三段目を開けようとしたとき、ガチャ!!!!
『お待たせえ!!!!』と声が聞こえ、俺の妄想タイムも終了した。

『Night Park』

『コレ！！お母さんが食べてって』

『お！！ありがと！！』

羽樹がもってきたのはまだ暖かいクッキーと、よく冷えた紅茶だった。

エアコンも大分効いてきて、居心地の良い環境が完璧なまでに整った。が…何か妙に気まずい気がする。

普段は何気なく話せていた会話が、詰まり無愛想な返事になってしまっ…

【光やキキはどんな会話をしてるんだろう…】

【光の事だし、二人の時でも上手く盛り上げてるんだろうなあ…】と俺が、考え込むと時間が止まったように沈黙の時間が流れた。

【このままではまずい…】と思い、ふと頭に浮かんだ疑問をぶつけてみた。

『ねえ！羽樹はなんで俺と付き合う気になったの！？』

『え！？うーん…興味が合ったからかな…趣味とかもうちと優馬って近いじゃん！？それで付き合ってみたら楽しいかなって思ってた残念ながらまだ好きにはなってますん 少し一緒に居て、恋人として見れなかったら別れると思うし、好きになっ…たらこのままずっと一緒に居るんじゃないかな？？』

『ほう…』

恋愛に疎い俺は付き合うとはお互いが好きで成立するもんだと思っ…ていたけど、羽樹の言うとおり、好きじゃなくても興味が合っ…て一緒にいて楽しければ自然と好意が持ててくるって考えもあるんだなと少し関心した。

『でええええも！！こんな調子じゃっあ好きになる所か興醒めも良いとこだね…』

『ええええ！！』

『だって…友達で居た時のガちゃんとか話できてたし…』と羽樹が少し残念そうに顔を俯けた。

『ちよつと…正直言つて、俺…女の子の部屋来るのとか初めてで…落ち着かないって言うか…慣れてないと言うか…これから期待して…！』

こつゆう言い訳じみた事は得意である…嘘つきにならないために今後頑張らなくてはならんが…

『えー…初めての彼女ではないでしょ！？』

『んー。中学の時に付き合った子は居たけど、登下校一緒にしたり、昼休み話したりするくらいで、休日に二人つきりで遊ぶなんて無かったから…こおゆう付き合いは初めてだな…』

『もしかして…童貞！？』と羽樹に白い目で見つめられた。

『…ほつとけ…』

『18歳で！？…』

『うるせえ…羽樹は処女じゃないん？…』

『勿論！！…秘密です！！…』

『なんだそれ!!』

『（ハハハハハ）』

対角に向かい合うように座って、距離を感じられたが、話が盛り上がったたり、アルバムを見せてもらったたりしているうちに次第に隔てていた壁も壊れて、腕がぶつかってくるくらいの距離でも普通に話せるようになっていた。

エロトークから始まり、音楽の話題になり、高校1年、2年の出来事を話し合ったり、いつものメンバーの過去を教えあったり…話をしているだけなのに…とてつもなく楽しく幸せに思えた。夢の中に居るような…

『羽樹〜羽樹〜』

羽樹の母の声で夢から現実に戻ったら昼間だったのが夜になっていた。

『はあい!!』

『ごめん!ちよつと待っててね』

『おう!』

羽樹が部屋をでて階段を下りる足音が聞こえた。

『ふう…』

長い間夢の世界に居たせい…いきなり現実に連れ戻されたせいなのか…凄いため息がでた。

ダダダダと今度は階段を上がってくる音が聞こえ、何故か背筋を伸ばし、姿勢を整えた。

『ごめん!おまたせ!』

『何だったの!?!』

『ご飯どおするって聞かれたから、出かける予定って答えちゃった』
『アハハハ。そんな予定あったっけ！？』

『無いけど、もお外もあんまり暑くないしどこか行こうよ』
『OK』

最初の印象はどんな時でも大切だ…と思い、伸ばしても落ちるはずのない服のしわをピツピツと伸ばし、『紅茶とクッキーご馳走様でした。お邪魔しました。』と苦笑する羽樹を背に礼儀正しく羽樹の母に伝え、深く会釈して家を出た。

『もお！！何かキャラがく無い！？』

『最初の印象って大事だしさ！！羽樹に好かれてても羽樹の家族に嫌われてたらお互い嫌やん！？』

『まあ…それもそっか』

外はすっかり暗くなり電灯が道を照らしていた。電灯には無数の小さい虫が集り、光の屑が飛び散っているようにも見えた。

自転車を引きずり、会話の続きをしながら、コンビ二でおにぎりを買い、近くの公園で腰を下ろした。

電灯の光も無い公園は月明かりだけが俺らを照らしていた。

夜の道をトボトボと20分近くかけて歩いただけの事もあり、目は闇に慣れ、暗くても近くに居れば相手の顔くらいは確認できた。

『なあ…一つ聞いていい！？』

『まみ！？』口にご飯を含んでいた羽樹は少し濁らせて答えた。

『話してる間の時間がめっちゃ早く感じたんだけど…あれって俺だけ！？』

『あー、うちもめっちゃ早く感じたよ！？楽しかった証拠やない！？』

『そっかあ』

いつもより空気がおいしい…

いつもより夜星が輝いて見える…

いつもより虫の鳴き声が綺麗に聞こえる…

いつもより胸が高鳴り生を感じる…

羽樹と居るとそんなふうに思えた。

『人を好きになるって不思議だよな…』

『うん』

『今日付き合ったばかりなのにこのままずっと一緒に入れる気がする…』

『うん』

『たまには喧嘩したりとかもするのかな…』

『うん』

『そおやって色々な思い出を作っていきたいな…』

『うん』

『機会があつたらあいつらにも報告しないとな…』

『うん』

『さつきから』うん』ばかりだな…』

『うん』

『…』

羽樹は星空を仰ぎただただうんうんと少し微笑んで答えるだけだっ

た。

普段なら、「聞いてる!？」って突っかかる所だが、可愛いなアツと頭を撫でたくなるのはきつと好きだからなんだろうなと少しからず頬を赤めた。

『今日の朝は俺が羽樹を怖がって、羽樹は俺にイライラしてたんだよな…』

『うん…ってそれ言わないの』

結局この日はずーつと話詰めだった。普段無口でない俺でも1年分くらいは話した気がした。来週当たりに皆で出かけようって最後の最後に提案した意外は特に何の会話したのか部分的にしか覚えてないけど…幸せな時間だった事ははつきりと覚えてる。

俺は以前TVかネットか忘れてしまったが、誰かがこんな事を言っていたのを思い出した…

『人が人を好きになるというのは理屈じゃなくて感情だ。頭じゃなくて心だ。だから好きになろうとしても好きになれないこともあるし好きにならないようにしていても想いはとめられない…』

今日はその言葉が心身納得できる一日だった。

公園についてどれくらいの時間が立ったんだろう…夏夜の月が、ゆらんと揺れて二人だけの公園のブランコ横に浮かんでいた。

銀と黒との公園に、程良くほんのり漂う時が月に揺らいた歴史の銀と、夜の上擦る伝承黒を蝉の鼓動に合わせるように、幽かにふるんと混ぜていた…

柔らかな風に逆らう事無く流れる羽樹の髪は月の光を満遍なく受け、

気持ち良さそう…

またね …と別れたのは午後23時を回っていた。

『T・T・S・計・画』

2008年8月8日：スマイル記念日：がととてもとても笑える気温じゃない事は重々承知。

熱帯夜で夜もエアコン無しでは1時間で目が覚めてしまっほどの暑さだ。

どこが立秋だ：どう考えても真夏の真夏：ソロソロ、立春、立夏、立秋、立冬、を変えた方が良いのでは無いかとお偉いさん方に提案したい所だ。

ジイジイと鳴く蝉に耳をやられ、太陽の日差しに顔を焼かれ、飛び逝く体内の水分不足に喉を嚔らされ、汗だけで起床した。

エアコンのつけっぱなしは体に悪いと聞いていたので、俺は寝る前いエアコンを切って就寝：故に6時間の睡眠時間無いに10回は暑さで起きる事になった。

よって寝不足。

眠い目をゴシゴシと幼稚園児の様に擦り、今年になって若干落ちた視力をフル活用し、カレンダーを見た。

『金曜日…か…ふあ…！！』

アクビの途中で目がパッチリと覚めた。8月8日（金）の欄には大きく赤ペンで【旅行】と羽樹の字で書かれていたからである。

いつの間に！！と言う疑問は少しからずあったが、そんな疑問よりすっかり忘れていた！！と言う焦りのほうが多く、俺は風呂場へと足を走らせた。

元々、今日の日の旅行は俺：正確には俺と羽樹が言い出した事なのだが、提案者の俺がすっかり忘れていた…

急がねば！！と焦りながら体を洗うが、焦りすぎで逆に汗ばみ、風呂から出て何かべつとりとしている気がしたのは気のせいだろうか…

ここからは俺のくだらない日常を早送りにしただけなので、皆さんには少し過去の話でも聞いてもらおう事にしよう。

先週、俺と羽樹が付き合うことになったのは皆さんもご存知だと思う。

隠すつもりも無ければ、否定する気も無い、俺としては是非皆さんにも知ってもらいたいくらいだ。

俺の高校初めての自慢の彼女なのだから。

付き合った翌日、俺は和茶に全員集合と言うメールを送信した。

勿論、羽樹との事を打ち明けるために…

時は遡る事、約一週間…8月2日。

午前11時。全員集合と同時に、俺と羽樹はホワイトボードの前に並んで立った。

不思議そうに、ポカンと皆が見つめる中、最初に口を開いたのは俺…

『えーこの度は、ベラボーに暑い中お集まりいただき、真に感謝いたします。本日収集のメールをだしましたのは、皆さんにお知らせが合つての事です…』

何故羽樹が隣に立ってんの！？

お知らせくらいメールで言えよ！！

などの罵声は略して、俺は坦々と話続けた。

『私こと、高橋優馬と隣に立っている女性こと、白鳥羽樹は昨日より交際することになりました！！皆さんには色々ご迷惑や、お世

話になると思いますが、長い目で見て、応援していただきたいと思
ってるしだいあります。』

『と言う訳なのであります！！』

俺と羽樹の告知は無事に終了…するはずも無かった。

少しの間沈黙が流れ、光は五右衛門、キキはカオリンとそれぞれが
顔を合わせ、キョトンとしていた。

俺も逆の立場で、五右衛門とカオリンが付き合うことになりました。
と報告を受けたら恐らく彼らと同じような反応をしたらろう。

俺も羽樹も皆が声を発するまで、しばしの休憩…休めの姿勢で待機
した。

状況把握が一番早かったのは、キキでも光でも五右衛門でもなく、
あのトロトロとしたカオリンだった。

『え〜っと。オメデトウ！！だよね？？』

あまりにもシーンとした空間にカオリンの言葉は疑問的になってい
た。

カオリンの発言で五右衛門、光、キキ、も何となく理解…と言った
雰囲気だった…と一斉に疑問系の言葉を発しだした。

『え！？何で！？』…何でって言われても。

『いつから！？！』…昨日だってば。

『いままでずっと好きだったの！？！？』…そ、それは。

とまあ約30分にわたり質問攻めにあい多少覚悟はしていた俺も羽
樹もくたくだった。

冷やかされるまで落ち着いた頃には昼を回っていた。

マスターに軽い昼食：サンドウィッチセットを頼み、俺と羽樹は再びホワイトボードの前に立った。

『え！？まだあるんかいな！？』

そう！！皆に集まってももらったのはむしろこの為。

『あのさ、昨日羽樹と話しててさ、高校最後の夏休みだし、6人でどこかに旅行、旅、何でも良いから思い出を作りに出かけませんか？！？』

こちらの告知、いや、提案にはすぐさま皆同意してくれた。羽樹と『よし！』とハイタッチ風に手を鳴らし、皆の座っているちゃぶ台の輪に加わり、予定、計画などを立てる事にした。

『おう！サンドウィッチできたど！！』と言うマスターの声も耳に入らないくらいワイワイと盛り上がった。

マスターは顔に似合わず気の聞く人で、俺らの楽しんでる中を割っては入ってはいけまいと、サンドウィッチをドアの前に置いて、そそくさと退散した。

チツチツチツ、ゴーン！！ウップウップ！！と部屋に掛けられた鳩時計が豪快に鳴り響き16時をお知らせした：そして決定！！

俺達は静岡巡りに富士山、樹海、（まあこの辺は興味本意で…）そして伊豆の海、熱海の温泉。

キキは持ち前の記述能力を生かし、ホワイトボードにまとめだした。

【 TTS計画!! 】

【Travels To Shizuoka】

・お小遣いは各自自由

・おやつは荷物にならない程度に

（注）バナナはおやつではない、腐る恐れがあるので絶対に持って来るな!!

・時間厳守

・靴は動きやすい物にする、ヒール系厳禁（女性用）

・携帯電話は必ず持参

e t c
...

円陣を組んで、『この約束は必ず守り楽しい旅行にしよう!!』『おオ!!』と誓って一週間後の今、俺は既に集合時間30分遅れてに家を出た...

家のドアを開けるとバジバジバジと玄関に止まっていた一匹の蝉が壁に体当たりを繰り返しながら飛びたった。

一歩外に出ると、家の中の蒸し暑さとは別の熱帯地獄がモワモワとアスファルトから透明の煙の様な気体を放ちながら待っていた。

直射日光こと、太陽の日差しの雨。

自転車を右、左、右、左、と足を動かすたびに顔、背中、腹部から本当に雨に濡れたように汗が噴きだした。

温泉のサウナ顔負けの自然サウナの中、俺は一秒でも遅刻を早めねば…と、ひたすらペダルを踏み続けた。

予定では和茶で待ち合わせ…その後、マスターの家（実家）に向かい送ってもらう事になっている。

携帯の時計が一分、また一分と時が流れることに焦りが増し、今朝、トイレに行き忘れた付けが回ってきた。

俺には、焦りや緊張すると尿意が近くなるという症状がある。チクショー…と心で叫びながらコンビニを素通りした。

もはや、体内の汗、というか水分が無になり和茶が見えた頃には目まいがし、視界が危うかった。

そんな危うい目にもハッキリと5人の塊が目映った。

良かった…すまない…良かった…やばい…と安堵と不安の気持ちが俺の心でキャッチボールを始めた。

キャッチボールの結果は…

『悪い、遅くなった（激汗！！）』

『優馬、おっせーぞ！！ジューズくらいおこれ！！』

『そうだそうだー！！』

『おう！！本当に悪かった。快くおごらせてくれい』

俺の中でのキャッチボールの答えはそうでた…否。そうであつて欲しかった。

和茶に着き、皆が停めてある自転車の横に俺の愛車をそつと置き、皆の元へとフラフラ足に鞭打って駆け寄った。

さて、1000回近く繰り返した、キャッチボールの結果は当りなのか…期待と不安が入り混じる中、俺は5人のバッター目掛けて直球勝負で妄想どおりの言葉を投げ放った。

『悪い、遅くなった（激汗！！）』

【カキーン！！カキーン！！カキーン！！カキーン！！カキーン！！ボデッ！！】
バシッ！！ビシッ！！ブシッ！！ベシッ！！…ポコッ！！

俺の投げた球はキャッチャーミットにおさまること無く、ガラガラ
の客席までホームランを放たれた。
カオリンだけはピッチャーゴロで伝説的な、5連続ホームランは免
れたが、言うまでも無くゴロを拾う気力など残っていなかった。

打順はこおだった。

光、五右衛門、羽樹、キキ、そしてカオリン。

俺の妄想ではホームランと言う清しい表現で記されていたが、現実
はちがう…俺がホームランの音を想像する度に、俺の頭は新人自

衛隊の如くテキパキと、はたまた、横断歩道を渡ろうとする小学生のように右！！左！！右！！左！！と反意識的に動かされた。

頬には季節的にまだ早すぎる綺麗な紅葉が咲き誇っていた。右に2つ、左に2つ。

非紳士的…非乙女的…暴力的な4人に比べ、聖母力オリン様は優しく俺のフラフラの頭をポコと叩くだけだった。

『本当に…申し訳ない…』…我、コレにて切腹す…と冗談を付け加える余裕など微塵もなく、ひたすら、和茶の通りに額をこすりつけるだけだった。

忌々しいの太陽様は先ほどの説明より、はるかに勢いを増し、俺のこすりつけるアスファルトの温度を上げに上げた。

鉄板の如く熱いアスファルトは俺の額に5つめの紅葉…否。でかい根性焼きの刻印を刻もうとしていた。

『ねえ。もおいしいんじゃない！？優馬が可哀相…』【何！？】

誰だろう…罪深き俺を救ってくれる御方は…と皆にばれない程度にポタポタと涙した…

罪深き俺を救ってくれる御方は、俺に『さあ立ち上がれ』と言わんばかりにゴットハンド差し出してくれた。

逆光で顔を確認できぬまま、あまりの嬉しさに、罪深き俺を救ってくれる御方に抱きついた。

こんな、罪深き俺を救ってくれる御方は…羽樹しか居ない！！確信

していた。

『う…優馬…』

『羽樹…暑い中待たせてごめんな…皆も本当にすまない…』

俺は涙したことを隠すべく目をギュツと瞑り、ギュツと抱きしめ謝り続けた。

『まあ…わいはもお許しとるけど…』

『うん…私も謝ってもらったし良いよー』

『俺も…』

『あはひもお…』

『…』

妙に羽樹がもがいていると思い、皆の許しと比例し乾いていった涙目をそおつと空けた。

…あれ???…何故羽樹が俺の胸の中と五右衛門の横と二人居るのだ…??

…あれ???…さっきまで怒り狂っていた皆が、許してくれたと同時に何をニヤニヤしれおられるのだ…??

…あれ???…俺に優しく可愛らしいパンチをおみまいしてくれた薫こと、カオリンは何処にいったのだ…??

俺のフラフラの頭の中がクエッションマークで埋め尽くされようとした時、罪深き俺を救ってくれる御方が羽樹では無く、カオリンだと言つ事に気がついた…

と同時に全てのピースがそろいパズルが完成…

と同時に暑苦しそうにカオリンが俺の腕の中から解き放たれた…

と同時に五右衛門の横に居た羽樹が一步一步俺に近づき、今度こそ5つめの紅葉…否。今度こそ本当のホームラン…ゲーパンチが俺の誇らしい鼻に直撃…殴り飛ばすと言う乱暴な言葉が現実になった瞬間だった。

体重60キロはあるだろう俺の体は、小さい缶コーヒーの缶くらいの細い腕によって宙を舞う事になった。

アスファルトへの着地は見事に失敗、

ゲレゲラと腹を抱えて笑う五右衛門、光に怒りを感じる余裕も無く、『羽樹…すまねえ』と良い、涙しながら気絶した。

『愛車 エルグランドでTTS!!』

ガタガタガタ…キューー!!ピタ!!

ココは何処…私はだーれ…と気がついた俺。

何処からともなく皆の笑い声が聞こえてくる…

【ああ。そうか…俺は我が愛しの彼女…羽樹によって殴り飛ばされ、硬く熱いアスファルトに頭を叩き付け、ただでさえ少ない能をばら撒いて、死んだのか…何たる結末…死してなお皆の笑い声が聞けるとは…ありがたや。ありがたや。】

とブツブツ心で呪文の様に唱えている時に、ドン!!と言う大きな振動でココは現実だという事に気がついた。

【ココはマスターの車の中か…むう…何か柔らかくて気持ちがいい…】と俺は顔を猫の様に椅子にこすりつけた。

『コラ!!動くな!!くすぐったいでしょ!!』

つと羽樹の声にビクリと上半身を起こし、キョロキョロと周りを見回した。

【ああ…椅子じゃなくて、羽樹の太ももだったのか…何たる失態…気がつくべきでは無かった…】と俺はまたもや羽樹の太もも目指し、軽く目をつむり、体を倒した。

ドカ!!!

『イッテ!!!!!!』

これまた、何たる仕打ち…起きたならちゃんと座りなさい!!と羽樹はこともあるうことか、膝を突きたて、俺が幸せそうに倒れる顔

に、ニーキックをかましたのだ。

ガハハハ！、アハハハハハ！と5人の大爆笑に鼻を押さえながらVサインを出し、涙目ながら、ニイッと笑って見せた。

『おう！優馬！！起きたか！！？もおすぐ着くからなあ！！』

いつもながら元気なマスターに言われ、俺はかれこれ4〜5時間くらい眠っていたのか…と腕を抱えて、考えた。

『お前が羽樹に叩かれて、気絶したからあの後大変だったんだぞ！！』

と言う五右衛門の話に耳を向けた。

あれは…叩かれたと言う優しいレベルのパンチではなかったぞと、後でこっそり五右衛門と光に通知した。

『羽ちゃん！！やばいよ！！』…そう。これは今から約5時間前に遡る。

羽樹に殴ぐり飛ばされた俺は、皆さんも知っての通り、と言うか情けない事に気絶をしてしまった。

『知らないから！！』と涙声で羽樹は必死に声を出し、俺を放置したまま、和茶の玄関に座り込んだ。

キキはマスターにすぐさま電話し、『いつになったらくるんだー！！』と豪快に出たマスターを無視し、状況を説明した。

光、五右衛門に肩を借り、ズルズルと両足を引きずりながら、和茶の日陰の庭に運ばれた。

5センチくらいに切りそろえられた、ふわふわとした芝生は、天気の良い日には日陰だけに、最高のベットだったに違いない。

サラサラとした湿気0%の風が、俺の疲れきった全身に癒しを与えてくれただろう。

日陰になっていた芝生は、さっきまで転がっていたアスファルトに比べ、ひんやりと若干冷たく、感じられただろう。

10数分し、マスターの愛車、エルグランドが玄関横付けで停められた。

『をい！！何してんだ！！？優馬は無事なのか！！？医者はあるのか！！？』と次ぎ次ぎ5人はマスターの質問攻めに対し、皆は『全ては優馬が悪い！！』と口を揃えて良い。

『ふむ。そうか。じゃあ仕方ないな。』とマスターもあっさりと納得しやがった。

マスターに言われキキの呼んだ医者は、5分くらいで到着した。

『ん~~~~。こ...これは...』

『やばいんですか...』と敬語で訊くマスター。

『どないなってるねん。頼むわ。大丈夫なんやろ！？』光も真剣に訊く。

五右衛門、キキも光に続いて、大丈夫ですよね！？...と訊き、医者...は口を開いた。

『ふむ…大丈夫、大丈夫ではないの問題ではなく…彼は眠っているだけです…よって貴方方の問には大丈夫とお答えしましょう。』…まずココで俺の顔中にある打撲に気がついて欲しかったのだが…。

医者の冷静かつ沈着な態度、さらに俺がただ寝ているだけと知った皆の衆は俺を叩き起こそうとしたらしいが、医者の言葉に羽樹が泣いて喜び、本当に良かった。ごめんね。ごめんね。と抱きついたらしい。

それには、皆もお手上げで流石に叩き起こす気にはならなかったと光氏は言う。

俺としては、お金を出してでも是非見たかった光景だから残念で仕方ない。

結局俺は、単なる熱射病、脱水症状、【ツポイ】だけで、特に問題は無いらしく、そのままマスターの愛車で、静岡を目指す事になった。

一方、皆（羽樹を除く）が眠っている俺を起そうとすると羽樹はそれを死守したらしい。

勿論、五右衛門と光から俺を守ったのである。

こんな流れで、先ほど自力で目覚めるまでの4〜5時間という長い時間、俺の睡眠は羽樹に守られ、今に至ると言うわけである。

『そっかぁ…羽樹…ありがとな…！』とマジマジとお礼を言い。『うちも、叩いてごめん…』と羽樹もフカブカと頭を下げた。

まあまあ、お二人さん、コレにて一件落着と行こうではないかと五右衛門が俺と羽樹の肩をポンと叩き、仲直りが完了した。

どうしてココまで揺れるのだろうと皆、マスターの愛車エルグランドを疑問、不思議に思いながらもエアコンさえあればどうって事無かった。

高速はお金がかかるから下道でいくぞ！と言うマスターの言葉に、反対できるはずもなく、田舎道を軽快に走らせていた。

俺が気がついた時には既にIN SHIZUKAで茶畑、緑が美しい山々が窓の外にいくつも視界に飛び込んできた。

誰も居ない、と言うのは嘘になるが、道は車一つ走っておらず、老人達がMY畑を赤色のデカイ機械に座りタバコをふかしているくらいだった。

俺達の故郷も、十分田舎だったが、ココはそんな俺達から見ても素晴らしいくらい緑に恵まれていた。青々とした空は普段より涼しそうにおもえ、その空を鳥達が競い合うように先回している。

『ああ…すばらしい…』と光が標準語になってしまうのも分かる気がした。

そうそう、肝心な目的地だが、俺達は（野郎どもの要望…）富士の樹海を是非見てみたいと言う事で、辞めた方が良く…俺も昔…大学の頃、連れと見に行ったが…とマスターの不吉な助言にも俺達は聞く耳持たずで、あそこではふざけたりするな…それが守れるなら連れつつてやらん事もない…と最後の御告げを気持ち半分で大きくうなずき、GOGO…！と最初の目的地は富士の樹海に決定した。

学生時代マスターは二度とあそこには近寄らないと、固く誓った故、近くの銭湯で待っているから、見学が終わったら電話して来いとの事だった。

女性陣もマスターと一緒に待っていると主張したが、そんな意見は受け付けません！！」と断固拒否し、結局、我々6人で行く事になった。

『ふう！！着いたぞ！！…あそこに見えるのが富士の樹海…俺はその辺のジムか銭湯で待つてゐるからなるべく早く連絡よこせよ！！』

分かりました…とキキだけが丁寧に応答し、マスターは俺達を下ろして、そそくさと逃げ出すように、その場を離れていった。

『よっしゃ！！…意外にあつとゆうまやったのー！！優馬のおかげで薄暗くて結果オーライやな！！』

本当は3時くらいの到着予定だったが、そのの3時間半遅れで、時計の針は6時半をさしていた。
夏の6時半なんて明るいもんなのだが、光の言うように、何となく薄暗くどんよりとしていた。

『うう…なんか怖い…』

『ね…』

『うん…』

と女性達は乙女声を上げ、3人で寄り添って歩いていた。

『樹海探索にいざ出陣！！…』と五右衛門のでかい声により、ガサガサと樹海へと最初の一步を踏み出した。

『Woodland』

8月8日：午後18時38分：

五右衛門の掛け声と共に樹海へと足を踏み入れた俺達。

樹海の外も薄暗かったが、樹海の中はもお夜みたいに暗く、懐中電灯無しでは危なげだった。

ジメジメと湿度は高く、周りの木々が『入ってはいけない』と言わんばかりにガサガサと風に乗り揺れている。

『何だあれ！！』と先頭の五右衛門が不気味な真っ黒な看板を発見した。

『命は親から頂いた大切なもの…もう一度静かに両親、兄弟、子供のことを考えてみましょう…一人で悩まず相談して下さい…うげ、こんなのあるんだ…』

『うむ。自殺の名所やからな。あっても不思議やないな。』

光は冷静に判断していたが、女性達はまだ入り口にもかかわらず早くも撤退の声を上げていた。

実は、俺も心では撤退の声を上げていた。

五右衛門、光と並ぶように先頭で進みその後ろを俺、女性達は3人4脚でもしているかのように、綺麗に寄り添い歩いていた。

2〜3分くらい進むと、今度は変な箱があった。例えるなら郵便箱みたいなもんだ。

色は郵便箱とは正反対で白色の箱に赤い文字だった。

【自殺防止呼びかけ箱】

と書かれた箱は酷く汚れており、蛾の死体や、コガネムシの死体が周りにばら撒かれるように落ちていた。

箱の中には数枚、呼びかけの言葉を書いた手紙が入っていた。

見た感じ紙は持参の様だ。ピンク色の紙、白色の紙、黒色の紙と色々な紙に書かれていた。

意外にもキキが『私も何か書く!!』と言い出し、小さいカバンから手帳を取り出し、最後のページをビリッと豪快に破りった。

『光う。ちよつと懐中電灯当てて』

『あいよつ。』

【あるがままの自分を認め、受け入れ、愛することができてはじめて、人生の何もかもがうまく行き始める。だから諦めないでください。】

『おお!! いい言葉や!!』と皆から歓声を受け、キキは少し恥ずかしそうに頭をポリポリとかいた。

『…だから諦めないでください。以外【ルーズ・ヘイ】の言葉やんけ…』

光の厳しさ溢れる言葉を無視するように、『さあ、ドンドン行くぞ!!』と五右衛門が一瞬氷かけた空気を溶かし、再び前進しだした。

ここは本当に日本なのだろうか…そんな風に思えるらい静かで、異様な雰囲気放っていた。

歩きに歩く事、30分。いつしか、男女別々に進んでいたのが、【

光とキキ】、【俺と羽樹】、【五右衛門とカオリン】とペアになって歩いていた。

『この辺…なんか怪しいな』

大きな林道を歩いていたら時に不意に五右衛門が言つと目の前に地雷でもあつたかの様に皆が足を止めた。

…頼むからそんなこと言わないでくださいよ…

靈感も持ち合わせている五右衛門の発言に流石の俺も光も不気味なムードに気圧され少々怖かった。

『ちよつとこの辺見てみようぜ！』と五右衛門の意見に皆は大反対だった。

五右衛門が言い出したのは林道を離れ、樹海の中（道の無い場所）へ探検したいと言い出したのだ。

『あかんあかん！！正直ゆーて怖いってのもあるけど、実際問題危ないの方が正しい！！』

『うんうん。あたしは怖いのが120%だけど、光の言つとおり迷つたりしたら危ないよ…』

光、カオリンがごもつともな理由を述べ五右衛門の好奇心を抑えようとしたが、ふむ。じゃあコレがあれば良いな！！と言い、皆に口―プを見せた。

『なしてそんなもん持つてんねん！！』

『ハハハ！！こんな事もあるつかと持つてきて正解だったな！！』

『
...』

五右衛門は大樹にロープをくくり付け、早くいくぞーと林道を逸れて奥の樹海へと入っていった。

一応安全のため、光とキキがロープを結んだ地点で待機。他の4人は死地へと向かった…

『皆大丈夫かなあ』キキの目には若干涙が浮かんでいるようだ。『大丈夫や大丈夫！！五右衛門も優馬も居てるしな！！それにキキにはワイがついとる！！安心してええで！！』

ありがと…とキキは大樹の下にしゃがみこんだ。

ええねん…と光もキキを元気付けキキに寄り添うように腰を下ろした。

一方俺達4人は樹海の奥へと進んだわけだが、林道ですら不気味だったのがココは不気味を通り越して恐怖すら感じられた。

道じゃないだけに土が柔らかくて穴が一杯開いている…迷い込ませようとするように木が沢山立っており、酷く歩きづらい。

俺は羽樹の手を、五右衛門は力オリンの手をしっかりと握り、一步一步慎重に先を進んだ。

『誰がこの穴掘ったのかな…』

『さあ、掘ったんじゃないくて木が根こそぎなくなったのかも…』

『アハハ 宇宙人の仕業！？…宇宙人というよりお化けの方かもしれないね』

『ダハハ、違いねえ!!』

さっきまでビクビクとしていたカオリンとは思えないほど、呑気な会話を五右衛門と仲睦まじそうに話しておられるではないか…

『五右衛門とカオリンって仲良かったんだっけ!?』

俺は二人には聞こえないくらい小声で羽樹に聞いてみた。

『んー。仲が良いのかは見れば分かるけど…ココだけの話、カオリは五右衛門に興味あんのよ』

『なんと!!』…なんと…んと…と…

羽樹からのいきなりの告知に驚きのあまり、声を出してしまった。

五右衛門とカオリンがビクツツツツツ!!と振り向いた。

悪い悪いと謝罪すると、驚かすな阿呆…と頭を叩かれた。

イテ…と思いながらも五右衛門とカオリンの事を考えていた。

【五右衛門はこの事を知らない…知ったらきつと喜ぶと思うが…】
まあ俺の口から伝える事ではないなと思い、カオリンがいつか勇気をだし、伝えるだろうと、密かなエールを送った。

光達と離れ、道の無い樹海を彷徨い続けていると、途中ロープが絡まって使い物にならなくなった…

無理も無い…訳も分からず、グルグルと彷徨ってきたのだから。

さて、ロープと辿って光とキキの元へと帰りますか…と提案しようとした時、

『じゃあ優馬と羽樹とカオリンはここで待っていてくれ!!』
『は!?!』 『へ!?!』 『え!?!』

五右衛門はココからは一人で行くと言い出した。

『…別れ…』

『いやいやいやいや！！五右衛門君！！流石にソロソロ戻った方がよいぞ！！光達も心配してると思うし…』

との俺の忠告にも『頼む！！』と一向に引こうとはせず、仕方なく早めに戻って来いよ…とだけ言い残し、俺と羽樹はロープの頭を持ち、その場で待機した。

懐中電灯の光と、声が届く範囲にて五右衛門とカオリンは奥に進んだ。

そう！実はカオリンも着いて行ってしまったのである…

俺と羽樹が仕方ないなあと諦めた時でも、カオリンは五右衛門に行かないで！！と泣きそうな眼差しを送り続けていた。

にも関わらず、ごめんなあ…せつかくココまで来たし、もお少しみたいんよ…カオリンもくるか！？と五右衛門の発言に、俺も羽樹も『阿呆…』とため息をついたが、カオリンは『一緒に行って良いの！！？？』と何故か嬉しそうにしていた。

『恋ですなあ』

『ええ。恋ですね』

と懐中電灯を手に薄気味悪い中、五右衛門とカオリンの帰りを待った。

『大丈夫かな…五右衛門とカオリン、それと光とキキ…』

『光組は大丈夫だろ…でも五右衛門組は心配だな…』

『だねえ…二人とも少しって言うてたけどかなり奥まで入ってるね、うちのの懐中電灯の光届いてるかなあ』

『まあ俺達もココを離れるわけにはいかないし、無事であることを祈るしかないな。』

俺は、弱弱しく答え、羽樹は俯いてしまった。

『五右衛門さああん！！大丈夫ですかああああ？？』
と俺が叫ぶと、五右衛門から、応答があった。

『ああ……つきこ……ど……おお……の果てに……』
と五右衛門とカオリンの歌声が聞こえてきた。

『B・Zかよ……』
小さく舌打ちする俺を見てか、五右衛門達が問題なさそうだからか、羽樹は顔をあげてクスクスと笑った。つられて俺も笑ってしまった。

五右衛門も怖いのだろうか…歌いながら探索しているようだった。

15分くらいすると2人が帰ってきた。

『優馬あああ…ちょっと…やばかった』

五右衛門は鼻穴を大きく広げ、ぜえぜえと過呼吸状態だった。五右衛門の背中にはカオリンがランドセルの様にくっついていた。

『お帰り！！大丈夫だった！？どおかしたんか！？』

二人の様子から少々不安になりながらも、訊いてみた。

『歩いている途中、”五右衛門さ〜ん”ってどこから声かけられた』

『……………』

俺は羽樹と顔を合わせ震える五右衛門とカオリンには申し訳ないが必死で歯を食いしばり笑いを堪えた…

五右衛門は俺の声に歌で応答したのではなく怖くなって歌いだしたのだった。

『いやあ、最初、カオリンかな？って後ろを見たんだけど、カオリンは俺の横に居たし…よくよく考えると、聞いたことのない男の声だった…』

ブツと羽樹が思わず、口から息を漏らすと同時に俺は深いため息を吐いた。

【毎日毎日3年間ずっと聞いている声なのですが…】と言いたくてたまらなかったが、カオリンの言葉に絶句し、少し震えた。

『あ…あたしも子供笑い声…と泣き声…が…聞こえた…』

カオリンの震えかすれた声に五右衛門は『大丈夫、大丈夫』肩に乗った小さな頭をよしよしと撫でていた。

『え…カオリン…マジ！？』

カオリンは小さく頷き、多分、泣いたのだろーうと思われるような鼻声で、『うん…耳を塞いでもずっと聞こえてきた…』と言った。

棒立ち状態の俺の腕をギュツよ羽樹がつかみ、胸元に引き寄せた。

その手は、小刻みに震え、羽樹の顔は蒼白く、いまにも泣き出しそうな面だった。

光とキキの場所に戻るためロープを巻き取るように、進みだした。

『イヤアアアアアア！！！！！』

『！！！！！！！！』

突然の羽樹の馬鹿でかい悲鳴に俺も五右衛門も、本気で心臓が止まるかと思った。

『だ…だ…だれか…だれか居る…』

カタカタと歯を鳴らし、詰まる声で言った羽樹は震えているのが目に見えて分かるほど震えていた。

『だれも居ないから大丈夫だよ…』と伝えても、羽樹はしゃがみこんで目を閉じ、耳を塞いでいた。

俺が肩にポンと手を置いただけで、ビクっとし、怖がっていた。

『おんぶしてあげるから、背中に乗りな。』と、いつになく優しい言葉をかけると2回ほど頷いて、背中にへばりついた。

ギューッとひつつかれるのは幸せに感じたが、状況が状況だけに素直に喜べなかった。

五右衛門と俺は、何も言葉を交わさず、ただただ光達の待つ、林道の大樹を目指した。

流石に、洒落になってなかった。

イツテ：小さな小枝が地面から剥き出しになっており、ジーパン越しに俺の足をつついてきた。

『五右衛門：ストップ：ちょっとズボンに枝が引っかかった。』

ボロボロのジーパンに絡むように刺さった枝を、イライラする思いで、強引に引き離すとビリッ…とジーパンは甲高い悲鳴をあげた…

【くう…ダメージのジーパンなんか履いて来るんじゃない…】

『スマン！！お待たせ。』と顔を上げると五右衛門とカオリンの姿は無かった。

俺の背中であぐらをかいていた羽樹を起こし、状況を全て説明した。

『ズボンに引っかかった枝をはずしてる間に五右衛門とカオリンが消えていた』…と。そのまま。

『うううう…』と羽樹が両目に涙を溜めだすのを見て、胸がズキツツと痛んだ。

『取り合えず…ロープを辿って光とキキのところに行こう！！五右衛門達もきつと先に行ったんだと思う…』

と、羽樹だけでなく自分にも言い聞かせるように言った。

『暗中模索 光／嬉紀』

4人とも遅いなアと私は光の少し汗ばんだ服の袖をクイクイっと引っ張った。その度に頭をよしよしと撫でてもらえて少し幸せに思えた。

光に身を任せ、頭を光の肩に乗せ、私は目を閉じた。『イヤアアアアアアアア！！！！！』と羽ちゃんと思われる叫びが唐突に私の耳を駆け抜け、体勢を戻し、光に訊いた。

『ネエ！！今の羽ちゃんの声じゃなかった！！！？？』

『ああ、羽樹の叫びやったとおもう…』

私達は、このとき移動するべきでは無かった…

私と光は、何かあったんだと思い、羽ちゃん達を探しにピンっと張ったロープを辿って4人の所へと進みだした。

『ねえ…光う…まだかな…？？』

『もおすぐやろ…』

私は何度か光にまだかまだかと尋ねたが、光にも分かるはずも無く、ひたすら、ロープだけを辿って、穴だらけの足場の悪い土の上を歩き続けた。

『え！！！！？…』

『おいおい…どないなってんねん…』

私達がロープを辿って、着いた先は変な小屋のような…家のような…ボロボロになった廃墟だった。

草木が周り一面に生い茂って、玄関と思われる入り口に続く階段には虫の死骸が無数に散らばっていた。虫の死骸を避けるように爪先で階段を上り、家に入ろうとする彼氏：

私が、やめようよ…怖い…と言ってみたが、『この中に皆が居てるんかもしれへんやろ、そばに居るから行くで』と言い結局…湿った異臭を放つ家のドアをあけた。

『優馬あ、五右衛門、羽樹ちゃん…カオリさん…いますかあ…』
ドアを開け、真っ暗な闇に小声で光は4人の名前を呼んでいたが、当然返事は返ってこなかった。

懐中電灯で部屋の中を照らしてみると壁は落書きだらけだった…

【来世は幸せになれますように…】

【この部屋…臭うよお…！】

【2000年7月21日、T・K参上…！】

など他にも色々と落書きがあつたが、死に関する話題は意外に少なく、〇〇参上などと私達同様、見学者のふざけた落書きが殆どだった。

『光う…居ないと思うし、やっぱり戻ろうよ…』

私の声は家の中でピンボールの様に反射し、声は響き渡った。

『せやかて、ロープはココに縛られとったんやし、居てへんはずないやろ…』

と私を入り口のドアの前に待つてるように言い、懐中電灯を手に一歩一歩、照らしながら中へと入っていった。

ガッガガンツ！！

『キヤア！！』

『ウオオ！！』

私も光も悲鳴をあげ、光は一旦、ドアの前まで戻ってきた。
心なしか少し安心し、私は光に寄り添った。

所々崩壊していて、床はボロボロ、私の体重（内緒だけど）です
らギイギイと驚張りなのかと思わせるような崩壊ぶりだった…
霊の心配より命の心配をした方が懸命な気がするのは私だけかな…

『霊の心配より命の心配をした方がええな…』

光も全く同じ事を考えていた事に、アハ と笑う状況ではないけど、
ついつい笑ってしまった。

『私も全く同じ事思ってた』

『カカカッ！！』って笑い事ちゃうで！！もお少して落下死しかけ
たツちゅーに…』

とか言いながらも引き返さず、結局中に進んでいくんだもん…ホン
ト男って阿呆だ。

でも、そこが少しかつこよく思えちゃう私は、もっと阿呆かも…エ
へへ…

私が心でぼやいているうちに、光は足場の良さそうな所を2〜3回、
爪先でツンツンと確認しながら、奥に進んで行った。

光が足を止め、懐中電灯を一点に向けていた。

どおしたの??…と少し前のめりになり、光に声をかけた。

『こ…これは……………エロ本!!!!(爆)』

『…』

エロ本を発見し、こともあるうことが、彼女の私の目の前で少し興奮気味の彼氏をに前言撤回し、心で…阿呆!阿呆!阿呆!阿呆!と何度も叫んだ。

『せやかて、何故にこないな廃墟に大量のエロ本が廃棄してあんなや…??』

『知りません!』と強く即答し、こんな光見てられない…と視線を樹海に向けた。

【入ってからどれくらい立ったんだろうなあ…マスター心配してるかな…そりゃ心配してるよね…怒られるのかな…そりゃ怒られるよね…】

ハッと何呑気な事を考えているんだと頭をポコポコと叩いていると、階段に散らばった虫の死骸が目に入り、視線を再び光に戻した。

!!!!!!

私はびっくりした…と言うか、軽く引いた…

何故なら私の彼氏こと、土屋光はこんな状況にも関わらず、ボロボロの床の上に堂々と胡坐をかき、さつき発見した、廃棄されたエロ本を読みふけていた…の。

その光景に、私の頭からは恐怖がシャボン玉の様にフツと消え、【怒】の一文字で埋め尽くされていた。

足場も確認せず、ドカドカとよそ様の家に土足で侵入し、懐中電灯で、本を照らし、フムフムとエロ本を読んでいる、光の後ろに着いた。

『なんしようと！？今の状況分かつちる！？』

怒りのあまり、我をすれた私は、つつい隠しに隠してきた方言が出てしまった…

ジュワーっと炭酸飲料水の様に頭に血が上って生きたのか…私は今までに無いくらい赤面した。

『え！？…博多…弁…です？？』

光も方言…本来の標準語で応答し、怒りで埋め尽くされた頭は一転し、恥ずかしい思いでいっぱいだった。

『そ…そんな事より…な…なんでこんな時に変な本…読んでの…！…！』

私は噛み噛みながらも光に伝えた。

『は…！？…こんなところで真剣にエロ本何か読むかい…！あほちゃうか…』

むむむ…と込上げてくる怒りを制御し、『じゃあ何してるの？？』と光の横にしゃがみこみ、どお見てもエロ本と思われる本を覗き込んだ。

『やっぱりただのエロ本じゃん…』

『ワイも、最初はそお思ってたな、一回手に取ったが直ぐ捨てたんや。』

汚かったしな…」

『でも、今も読んでたじゃん…』

『おう、客観的に見たら読んでた事になるな。実際中也確認してたしな。でもコレ見てみいや』

私は靴をズリズリと滑らせ、光のひつつき、誇りや煤で真っ黒になった光の指元を『まあ少し懐中電灯あててえ』と言いながら凝視した。

『2022年…2月22日発売…え!?!』

本のタイトル、予定日、作品関係、色々な点で私も中身を見てみたけど(光よりしつかりと…)どうやら2022年2月22日というのはこのボロボロになった本が発売された日のようだ。

こっちもみてみい。と光に言われ、私は周りの数冊の本の発売された日を見てみた。

2022年1月23日

2021年12月21日

2022年3月23日

この本はたまたま222…と2が重なっていたけど、単なる日付じやん…と少し拍子抜けって感じだった。

その事を光に打ち明けると、『はあ!?!』と馬鹿にされたように笑われた。

むう。つと頬を膨らませ、じゃあ何が疑問なの!?!と光に訊き、私はギョツと目を見開いてしばらくの間、光のそばから離れる事ができなかった。

222のと連なっている事はそもそも何の関係もなく、この廃墟に
廃棄されボロボロになった本は今より、14年も未来の本だった。

『暗中模索 五右衛門、薫』

あれ…あたし、寝ちゃったのかな…
五右衛門がおんぶしてくれてるんだ…

もお少しこのまま五右衛門の背中の上で寝ていたいな…と思いつながら、汗だくで息をハアハアと荒げている五右衛門を見て、チヨンチヨンつと五右衛門の頬を突付いた。

『あー！カオリン！起きたのか。大丈夫か！？』

どお見ても五右衛門の方が大丈夫ではなさそうなのに、あたしの心配をしてくれて、少し涙腺が緩んだ。

『うん。もお大丈夫だから、自分で歩くよ…』

おんぶしてくれてありがとう、っと少し微笑んで軽く会釈した。

いえいえ、そんな気になさらくとも…と五右衛門は汗でぐっしょり濡れた髪を研ぐように頭をかいた。

五右衛門に下ろされ、久しぶりに自分の足で立った気がし、立ち眩みのような感じでフラフラっと体が流れた。

『やつぱりまだ、万全じゃないじゃん…気にせず乗った乗った』と五右衛門が再び、屈んで自分の背中をポンポンと叩いた。

気持ちちは、乗りたい。でも、それはただの甘えになっちゃう。っと、自分に言い聞かせ。

足場が不安定だっただけ 体調は大丈夫だよ とニコっと笑って、五右衛門の背中をポンっと押した。

『ねえねえ、羽チャンと優馬は??』

『え??さっきまで直ぐ後ろに居たけど!!!!??居ない??...な。』

申し訳ないと五右衛門は、矢印の様に目を瞑り、周りを見渡し、優馬あつ、羽樹ううつと大きい声で叫びだした。

でも、反応が無く、あたしと五右衛門はまず光達に合流しようと、唯一の頼みの綱であるロープの先に進んだ。

むむ??こんな場所通ったかな??...んーでもあの木には見覚え有るような...

自問自答を繰り返し、あたしはただ、五右衛門の作ってくれる道をトコトコと追いかけた。

『オー!!もお直ぐ林道にでれるぞ!!』と五右衛門が大きな大木をカツカツと足で蹴っていた。

『ほらコレ』と五右衛門が蹴っている先を見ると白色の紙が丸められて捨てられてあった。

『なあにコレ...』とあたしは徐に、丸くなった紙を広い、ガサガサと音を立てながら、中を確認しギョツとした。

【自殺は、自分を殺す事です。自分も人間です。人殺しは罪です。考え直しましょう。】

と綺麗な字で書かれていた。

【自殺防止呼びかけ箱】の中にあつた紙だ…

正直、馬鹿！！阿呆！！と五右衛門を叱りたかったけど、状況的にそれはあたしの中で必然的に優先順位を下げた。

その代りについて言ったら変かもしれないけど、完全にロックオンされていた、あたしから五右衛門へのlove arrowは少しながら照準があわなくなった。

恐怖、不安、疲労、そして自分の恋、色々な事で頭が破裂しちゃいそうだった。

『ふう！！着いたぞ！！』

と五右衛門が袖で額を擦って大きく一息ついた。

林道でも決して足場は良いとは言えないけど、獣道に比べたら砂利道とアスファルトロードくらいの違いだった。

『はあ…疲れた…』

とあたしはロープのくくりつけられた大樹に持たれて、しゃがみこんだ。

『光〜キキ〜』と五右衛門は懐中電灯の明かりを360度クルリと辺りにばら撒き、キヨロキヨロと顔を動かしながら光達を探していた。

ううう。本当にあたし達大丈夫なのかな…と顔を俯けポタポタと自分では洩らすことの出来ない、涙を地面に打ち付けた。

『カオリン！！カオリン！！』と呼ぶ五右衛門の声にぐちゃぐちゃ

になった顔を隠すようにポケットにあったハンカチを当てて、顔を上げた。

『なあにい……』

『ちよつとコレ見てくれ』

『ぎゃー!!』

五右衛門はあたしの顔の上に乗せてあったハンカチをシュッとテールブルクロス抜きでもするようにあっさりとはずしてしまった。

あわわ、あわわ、鋭月の明かりに照らされる顔を泥まみれの手で隠すと、そんな手で顔触ったら汚れるだろ、つとさつきとったあたしのハンカチで顔を拭いてくれた。

『アリガト……』ってなんか違う気がする。とか思いながらも、なるべく顔を隠すように五右衛門が握っていた紙に視線を移した。

『また、防止箱から持ってきたやつ……??』

と今度は完全にロックオンをはずそうとした時、ちがう、多分キキの字だと思う。と言われ五右衛門の額とあたしの額が合わさるくらいまで近づき二人でキキの置手紙をみた。

【先ほど、羽ちゃんの叫びが聞こえました。ひょっとしたら私の勘違いかもしれませんが。でもやっぱり心配なので、光と二人でロープを辿って4人を探す事にします。もし、入れ違いでこの場所に帰ってコレを発見した時は、ココで待っていてください。私達も20〜30分でもどります。】

内容を見て、五右衛門と目を合わせた。

『あの、叫び聞こえたんだ…取り合えず、少しだけ待ってみるか…』
と五右衛門から提案され、あたしは小さく頷き、大樹の下で恐怖の象徴とも言えるような鋭く尖った月を見上げていた。

『なあ、カオリンは、何で男と付き合わないの？？前に沢山告白はされてるって言うてたのに。』

と五右衛門からいきなり現実的な会話が飛んできて、あたしは混乱して『い…今は好きな人が居るから。』とこともあることが五右衛門に言っちゃった。

『ふむ。そうか…前までは男に興味とかなかったの？？？』

『うううん。そんなとこだね』

どうやら、好きな人が居ると言う点についてはあまり突っ込まれなかった事に安堵の息をもらしていると、『で！？今の好きな人って！？』と不意打ちが入って再び赤面し黙り込んだ。

『言いたくないなら、言わなくても良いよ。…俺は今はまだ好きな人は居ないし、教えあうって訳にもいかんしな』

ガハハハハと笑う五右衛門をじっと見つめて居たけど、『好きな人が居ない』と言う言葉に、良かった…でもあたしの事も好きではないんだ…と嬉しいような悲しいようなで、またまた、俯いた。

『うーん。おそいな。ココについてからももお10分くらい経つし、羽樹が叫んでからもお30分は余裕で経ってるだろ。。。』

よつこらせ、と五右衛門が立ち上がると、『探しにいこーぜ』と手を伸ばしてきた。

行きたくない…疲れた…行きたくない…足が痛い…行きたくない…歩けない…

でも『だね』と言ってしまっただよね。

あたしが渋々立ち上がると、今度は五右衛門が座っていた。どおしたの??行かないの??と訊くと、『乗れ!』とデジャブでも見てるかのように背中をポンポンと叩いていた。

潤んだ瞳を隠すように五右衛門の背中に抱きつき、お願いします。おう!!と会話を交わし、ロープを辿って五右衛門は前進した。

『ねえ。五右衛門』

『ん!?!』

『…なんでもない』

『…』

あたしは、ギュッと五右衛門の背中にひつつき、上を見上げて、月に願った。

prays for the achievement of
his first love…

『暗中模索 優馬 羽樹』

歩いても歩いても永遠とロープは続く気がした。

月明かりと懷中電灯の光意外、私の視界を広げるものは無い。

大量の木々に阻まれ、月からの光も私達を照らすのを困難とする状況だった。

本当に死んでしまうのでは…

コレが樹海…迷い込んだらもお抜けられない。

鏡の迷路とかとは違う何かを感じていた。

まるで、違う世界に居るような…

優馬が少し休憩する？と声をかけてきたけど、私は首を縦には振らなかった…振れなかったのかな。

私達が光と離れて、ロープが途切れるまでにこんなにも歩いただろうか…と過去の風景や、仕草を思い出してみたりもしたけど、直ぐにあの恐ろしい顔が頭に浮かんできて…私の思考をさえぎった。

優馬とも無言の時間が続き、ただただ歩くだけの状態に、ちよつとした物音にもビクビクしながら、私の精神はおボロボロだった。

『羽樹！！！！羽樹！！！！ネエ！！！！』

優馬が声をかけてきたとき私は優馬の太もみに頭を乗せていた。

『あれ？？うち…どおしたの？？』

『さっき倒れたんだよ…ココからは俺がおぶってやるから、少し寝たほうが良い。もお体力の限界だろ…』

ああ…男って生き物は凄いな…と今まで思った事も無い事を想い、その瞬間優馬と目がつたので、ドキツとしながらも、なんだか、久しぶりに優馬がかっこよく見えた気がした。

『ありがとッ』とにつこり微笑むと優馬も笑みで応答してくれ、私は遠慮なく優馬の背中を借りた。

優馬の背中中は少し汗臭い、それにベタベタしてる、太ってないからだと思うけど優馬の背中中は硬くごつごつとしてる…でも、凄く居心地が良かった。安心して、凄く眠い時にふかふかのベットにダイブしたみたい。

『こえもおおん!!』

ウトウトともお後1分もあれば気持ちよく眠れるという時に、耳元で優馬の大きな声が鳴り響いた。

『もお!!うるさいな…びっくりするじゃん…』

アハハハと笑う優馬に私もついつい釣られて笑ってしまった。

優馬の声は結局木々に遮られたのか五右衛門達からの返事の声は聞こえてこなかった。

目的に向かって草木を分けながら、ひたすら進んでいた。

こうゆづのを敢為邁往^{カンイマイオウ}って言うのかな…
いやいや、勇往邁進^{ユウオウマイシン}でしょ…

と何気ない会話を交わしていた。

『それにしても、しんどい…羽樹…まさか太ったか!?!』
『ばーか。』

『こりゃ、光達のことに着いたらそれなりのご褒美を頂こうかしら。』
『アハハハ。じゃあ今ご褒美あげる。』

と言ひ私は優馬の頬に唇を押し付けた。
優馬への初めての頬へのキスは塩と土の味で…なんとも芳しくない匂いがした…甘いキスよりこっちの方が意外と一生忘れないかもね…と心で少し笑い、顔を肩の上に戻した。

『や…やばい…下半身が…』

と言う、アホ彼の下半身にグーパンチをおみまいし、狼が鳴いたかのような雄たけびをあげ、その場で崩れるようにしゃがみ込んだ。

『だ…大丈夫…??』

『だ…だめ…大丈夫では無いけど…ついたぞ…』

私は崩れた優馬を起こして、大樹にもたれさせ、周りにキキやカオリンの姿が無いが四方八方、見回した。

『あー!』と優馬の足元に何か落ちているを見つけ、手に取った。

『コレ。カオリンのハンカチだ…』
『え!?!』

優馬も重たそうに体をこちらに寄せ、【薫】と書かれたハンカチ見た。

『ねえ、羽樹、その紙は何???』と言う優馬の言葉に視線を下に落とすと、4つにおられた手帳の切れ端の様なものが落ちていた。

何だろうと、中を見てみると、キキの字で私達を探しに行くという事が書かれていた。

『あ〜...』

と私にさっぱり意味が分からなかったけど、優馬は何か全てを悟ったように大きくため息を吐いた。

私は自分なりに頭の中を整理した。

まず…

光とキキはココで待っている間に私の声が聞こえて皆が心配になって、ロープを辿って皆の元へと歩んだ。この時点で私達より先に進んでいたカオリン達にキキ達は合流していても良いはず。

まさか当然のように合流していて、4人だけで帰宅した…とは到底思えない。

だとすると…

行動順としては多分こうじゃないかな…キキ達が私達を探しにココをでて、カオリン達がココに戻った時には既に誰も居ず、この手紙だけが残っていた。せっかく戻ってこれたのに、とカオリンが泣き出し、顔を拭くため取り出したハンカチをいつもの天然ツプリでしまつのを忘れていた。その時に五右衛門から戻って皆を探そうと言われ、『はあい』とか可愛い声을あげて付いて行った。そして、再びだれも居なくなつたこの場所に私と優馬が到着し、カオリン達同様この手紙を発見した。。。

でも…なんで、合流をしなかったんだろう…これだけが私の思考を遮り、これ以上考える事を許してくれなかった。

やっぱり…わかんないや…

胡坐で座り、腕を組み、『うむうむ…』と呪文をみたいに唸っていた。

『あ…』何気なく声を出した時にピーンと閃き、それから一人で私同様、頭の整理をしていたらしい。

どおやら頭の整理も終わったようだね。さあ聞かせてください。あなたの考えを。

私の心を見透かすように、いきなり優馬が話し出した時は心底驚いた。

『俺達、このでっかい木にロープ結んで、中に入って行っただけじゃん。』

トントんとロープのくくりつけて有る大樹をノックするようにたたきながら言った。

うんうん、と相槌を返すと、『コレを見て!!』ともっていた懐中電灯を光を木のロープの結び目のところまで運んだ。

『うちのロープだよな??』

それがどおかしたの??と聞くと、やっぱり!!と少し険しい表情になり、『じゃあコレは??』と優馬は明かりを少し高い位置に移動させた。

『え！？』

『なっ！！！？』

犯人はこれだよ…と優馬は自信満々に答えた。

優馬の照らしている光の先には、私達のロープと同じロープがあった。

正確に説明すると、現在優馬が照らしているロープが私達のもので、最初に私が間違えたのが、知らないロープ。

『多分、俺達より前に来客者が居たんだな。そして、この大樹にロープを縛って、俺達みたいにズカズカと興味本位で中に入っていたんだと思う。見た感じ結び目とかかなり汚れてるし、相当前のロープだろうな。10年くらい…もったかも…。』

こんな偶然ってあるのかな…と足の先から頭の先までブルッと震えるように寒気が走った。

何だか優馬と少しでも離れているのが怖くなり、私は優馬に近づき、手を握った。

それに優馬も答えて握り返してくれると、『それでさ…』と話を続けた。

『それでさ、心配になった光達はこっちの違うロープを辿って行っただんだと思う。五右衛門達はココまで理解して違うロープを辿ったのか、偶然間違えたのかは分からないけど、光達と同じロープを辿って進んだ。…だから俺達に会う事が無かったんだと思う…』

『凄い…』と私は無意識的に声をもらした。え？なにが？と優馬が訊いてきた。

『優馬、頭良いじゃん！！少し…かなり見直したよ 何か、これからまた樹海に入らなくちゃいけないくて不安でいっぱいだったけど、少し安心した 優馬が一緒に良かった 』

恥ずかしい気持ちも包み隠さず全て打ち明けると、ありがとう！！俺も羽樹と一緒に良かった。 と言い、私達は再び樹海に足を踏み入れた。

優馬の予想には凄い納得いくものがあつたけど、外まで戻ってマスタ―や警察に言った方が良かったのでは無いか…もしかしたらんでもない一六勝負にでてしまったのでは…と一步一步奥に進むに比例して、私の不安は膨らみ始めた。

『廃墟 光・嬉紀』（前書き）

ロープを頼りに4人を追ってきた光とキキは、不気味な廃墟に着いた。ココに皆居るのだろうか？と思いつつも、家の中に入る。そこは床はボロボロ、壁には大量の落書き、廃棄された工口本があった。

しかし、そのボロボロの工口本は…

『廃墟 光・嬉紀』

『14年前の本なの!!!?…じゃなくて14年後の本なの!?!』

キキの反応も当然の反応やな、と思いながらもワイ自身、正直どおゆう事なんか全くわからなかった。

なして、こないな廃墟にエロ本が大量廃棄してあるんや…それに、なして発売の日付が未来やねん。

一番重要なんは、他の4人は何処におんねや…

14年後の本なんて凄く興味がある。。。

キキが来る前に少し見た感じだと、14年後でも現在とさほど変わりはなさそうだ。

携帯電話だけは今より大分小型サイズに描かれていた。

もお少し見たい…がなしてエロ本やねん!!!

わいは…わいは…ただ調べただけなのに…嫌でも息子が反応してまうやないか…!!

クソッ!!!男っちゅー生きもんはなんちゅー阿呆なんや。阿呆!!!
タワケ!!!とワイは自分の髪の毛を貪るようにかき混ぜた。

むむ…までよ…

せや、仏様は大体男や、中には女の仏様も居てるかもしれへんが…
そんな事はどおでもええ、肝心なのは無の心や、下心、欲に囚われない無の心や!!!

ワイは目を閉じ、合掌するように手のひらを合わせた。

胡坐で座っていた足を組みなおし、足でも合掌するように足の裏を

合わせた。

肺一杯になるまで、ゆっくりと自然の空気を取り入れ…むふッ、大量の水コリを吸い込みむせそうになるのを寛大な精神で耐え、精神を統一し、瞑想した。

ワイは無や…女の裸が何や、Hシーンが何や、無になって自分の追及すべき点だけを見ればええんや。

カーッ！！！！！

と心で叫び、目を限界まで見開いて、本を眺めた。

ウオ…何やねんこの部屋…ホコリまみれで…クソツイテエ…目開けすぎ注意の札だしとけや…ボケエ

ブツブツと精神統一にも瞑想にも失敗し、ワイは悟りを開く事ができひんかった。

『聞いている！？…』

とふとキキの声が耳に入ってきて、もお諦めるしかないという事を悟った。

『え？ああ。すまんすまん。考え事してたんや。で何やった？？』

『もお！この本…』

『あーせやせや、キキは床の脆くない所でその本調べといてや。ワイは他にも何か無いか少し見てみるわ』

結局14年後のエロ本はキキに頼んで、ワイは他にも何か変わった

物はないか探す事にした。

ひでえなあ。床抜けてるやんけ。

ん??

廃墟には地下があった。下はコンクリートで作られて、ベットと冷蔵庫らしきものとなにやら大量のビンが並べてあった。

覗くのをやめ、一階のフロアを懐中電灯で周りをくまなく見渡して見ると、2階もあるらしい。

足場を確認しつつ、階段を1歩、2歩、3歩と忍び足でそーっと2階を目指した。

4歩目を踏み出そうとして、ワイは足を止めた。

4段目は階段ではなく、くもの巣だった。

ひゃあ、あぶねえ。と3段目に立ち、上を懐中電灯で見ようと試みたが、どおやらそれは無理な課題だったらしい。

キキのところに戻り、部屋の状況を説明した。

『このボロ小屋、2階もあるけど、階段が壊れてて上れそうにない。地下には何とか降りれそうだけど、降りたら上がれんのかな…』

と状況報告をすると、キキはキョトンとずっとワイの顔を見ていた。

『ん??どおかしたか??』

『光が…標準語で話すの久しぶり…初めて聞いたかも…』

まあワイかて家では標準語ではなしてんねやけどな!!だから、今標準語で話せて言われても普通に話せるよ???とワイの奇妙な

話し方に、関西風の話方だと怖そうで、標準語の方の光は優しそうと言われたので、ワイはキキと二人の時は標準語で話事にした。

『別室あるんだあ。私も発見したよ。ほらココ、この名前見たこと有るでしょ?』

と言われ、目を細めて見てみると、え!?!?!と心底驚いた。

『こいつって、ワイらのクラスに居る…上坂里香…か!?!』

『多分、里香ちゃんだとおもうよ。…』

ワイが見たヌード写真の横には香里と書かれた名前があった。でも顔が全然変わってないので直ぐに分かった。

14年後って事は…と計算しただけでも気持ち悪くなるような歳のヌード写真じゃん…と思ったのと、32歳でもこんなに綺麗な体してるのか…と感心する俺の下心が騒ぎ出した。

『今は胸小さいけど、5年後にはこんなにでかくなるんだね…私もなるかな…』

とキキがもらった言葉をワイは聞き逃さなかった。取り合えず、フオローを入れるべく、もお十分綺麗なスタイルしてるじゃん!?!と褒め、続けて、今5年後って言わなかった?!?!と訊いた。

『ああ。そうそう。ほら、2013年。ネ。他にも色々あるみたいだけど、一番未来のは22年だねえ。それと過去の本は無いみたいだよ。』

ほうほう。よく調べたな。偉いぞ!?!とよしよしと褒めて、ワイも

もああかん…ワイも震えがとまらへん。

ガタガタと笑う膝、カタカタと笑う顎、何がそんなに笑えるのか、理解不能の身体を最後の力で抑え、

『何やあ……！！クソツたれが……！！』

と訳もわからず腹の底から吠えた。

…

同時に音は止み、先ほど同様シーンとした空気が流れた。

あまりの静けさにワイとキキの心音がやけにうるさく感じた。

舞ったホコリの群れが、床を目指し、ゆっくりと着地しようとしている。

キキも恐る恐るドアに視線をやると、

トントントン！！

トントントントントントン！！

とさつきとは打って変わって今度は優しい音をでドアが鳴きだした。

キキはすぐさま目を閉じ再びワイの胸の中に顔を隠した。

ガチャ。ギイイイイイイイイイ！！

と言う耳に残る音と共にドアは開かれた。

『廃墟 五右衛門 薫』（前書き）

やっとの想いで光達の待つ、ロープのくくりつけた大樹まで辿りついたが、一枚の紙だけが残っており、そこには光達の姿は無かった。紙の内容を理解し、五右衛門と薫は光達を探すため、再びロープを辿って樹海の中へと進んでいった。

『廃墟 五右衛門 薫』

むむ…

俺が、この道はさつきとは違う道だと分かったのは、自殺防止の呼びかけの手紙がいくら進んでも落ちてなかった事で気がついた。

WHY…

ロープは横にある…けどさつきまで俺達を通っていた道ではない…

夏の生ぬるい風が汗だくの髪の毛を駆け抜けけると、同時にもの凄い恐怖と不安が湧き上がってきた。

背中で幸せそうに眠る力オリンを起こして、話をしたい気分だった。一人でこんな道を進んでいたら頭がおかしくなってしまうそうだったからだ。

けど…スースーと寝息を立てて眠る力オリンを俺は起こす事が出来なかった。

話し相手が欲しい…一人では不安で怖い…

でも…力オリンは幸せな気分浸っている、そんな力オリンも俺と同じ死地に戻すなんてあまりにも可哀相だ。

クソオ…

込上げてくる涙を拭う事無く、俺はひたすら前進するしかなかった。

ロープの1メートル先は闇に飲まれ、確認する事が出来ない。足元と前方には十分に注意を払って進んでいると、気のせいだろうか…やけに虫の死骸が目立つようになってきた。

5センチくらいあるだろうと思われるデカイ蜘蛛…

15センチくらいの蛾…

コガネムシ、蝉、カブトムシ…多数の昆虫達の死骸が俺を案内している感じにも思えた。

『ご…ごめんなさい…寝ちゃった…』と起きたカオリンの言葉にもビクつと体は反応した。

『お…おう！！ゆつくり寝てて良いんだぞ！！』と起きてくれてありがたうと思いながらも強がってしまう自分が居た。

『うん。大丈夫、あたしも歩くからおろして』と、しゃがみこみゆつくりとカオリンを地面に下ろした。

ギヤアッと虫の死骸を見てカオリンは俺に飛びついてきた。…ウオ！！！！

さ…最悪だ…

カオリンが飛びついた衝撃で、しゃがんでいた体勢から、背中をボンと押されたような感じになり、両手を地面に思いつきりたたきつけるように…

右手で、蝉を…左手でモスラ級の蛾を…見事にプレスしたのだ。

ごめん、大丈夫…と言ったカオリンの言葉にも怒りを感じるほどに…死ぬほど恐ろしい体験だった…

寒気と共に、狂った獣の様に鳥肌が立った。

綺麗とはとても言えない土で手を洗い、何とかあのグチョつとした感じは御払いできた。

『あれ??? ココって前と全然違う道じゃない???』

『うん。俺もよく分からのんだけど、明らかに別の場所だと思う。』

怖くなったのか、カオリンは俺の手をギュツつと握って、少し幸せに思いながらも、こんな汚い手を握らせてて良いのだろうか…左手は…モスラ…

俺は、罪悪感を感じながらも、カオリンの右手を離さなかった。

死骸とロープを辿って、進んでいると、大きな壁にぶち当たった。

なにこれえ…とカオリンの言葉に、俺もなんだこれ…と目を見開いた。

壊れた家???…でも流石に誰も住んでいる気配は感じられなかった。

入ってみると、カオリンの手を引いたが、胸を打ちぬかれるような可愛い上目遣いで『こわい…』と言われ、取り合えず入るのをやめた。

じゃあまず家の周りから調べてみよっか。と提案し、家の周囲を調べる事にした。

玄関へと続く階段は酷いありさまで、死骸が圧縮されたように固まっていた。何匹かつぶれている死体もある…

階段の脇には、階段を囲うように草達が生い茂っていた。

気持ち悪いね…と言うカオリンに正に同感と大きく頷いた。

家の東側に回ると、大きな彫刻のような…墓石のような…訳の分からん物体が置いてあり、なにやら文字が書かれていた。

【どうだ妹と二人暮らし、どうだいもつととうもろこし】

【正解を入力せよ…】

何だコレ。と石の前にカオリンと二人で並んでしゃがみこんだ。

『入力しろって書いてあるけど…』

『うぬ、これに問題文なのか?? コレの言葉の意味が理解不能すぎる…』

大きな石の前にはパソコン用のキーボードが置かれており、コレを使って入力するのだろうか…と少し首を傾げた。

電源はつながっていないし、モニターすらない…ただ答えと思われるボタンを押せと??

くだらねーと想いさつさと他の場所を見に行こう。と立ち上がろうとすると、カオリンがズボンを引っ張り、もおっ少しだけ考えようよ…と言いつ出した。

しかたないなあともう一度腰をおろし、座禅を組んみ、両手の人差し指を舐め、その指で頭にクルクル輪を描き、その手を股間の前に持っていていき、両手で丸みの帯びた をつくり目を閉じた。

そう!!俺はあの有名な一休さんの如く、考えた。

どうだ妹と二人暮らし…これはどおゆう事なんだ…???妹と二人

で住む感想を聞いているのか??…何だか色々とめんどくさそうだが…むむ!!! もしやこの【妹】というのは別に血のつながりのある妹とは限らないではないか。義理の妹にしても、妹と思っている存在の事なのかもしれない…
ふむ…待てよ…何か例はないのか…

閉じていた目を少し開けると典型的な名探偵のTVの主演のように、手を口に当て、考えているカオリンの姿が飛び込んできた。

ビビビビビビビビ!!と頭の中を電撃が通過した。

家に帰ると『おかえりい』とカオリン（妹）が待っている…

『ねえねえ、お兄ちゃん今日は一緒にお風呂入る』と俺の背中を揺するカオリン（妹）…

夜中に俺が自分の部屋で寝ていると、そつと俺の布団にもぐりこんで『こわいから一緒に寝て良い??グスン…』と涙を溜めるカオリン（妹）…

『今日はねえ。トウモロコシが安かったから買ってきたよ!!』
と晩飯にトウモロコシを出してくれる…カオ…ん???

トウモロコシ??…トウモロコシ…

【どうだいもつととうもろこし】…【どうだい??もつと、トウモロコシ】

カオリンのような可愛い妹と二人暮らし…

そんな可愛い妹から、トウモロコシ（俺の大好物）をもつといかが??と進められる…

ポクポクポクポクポクポクポクポクポクチーン!!!!

『分かった！！！！』

『え！！？ほんと！？』

『ああ！！これで間違いない！！！』

カオリンも考えるのを止め、俺をじつと見つめ、目をキラキラとさせていた。

入力するぞ…ウン！！

俺は自信満々に、コードレス状態…いや…電気レス状態のキーボードに打ち込んだ。

【S・I・A・W・A・S・E】

『幸せ？？？って入力したんだよね？？？』

『おう！！！！』

何も…起こらない…

…なんだよ…正解か不正解か教えてくれてもいいじゃねーか！！！！と石を蹴飛ばした…

その時、『うッ…』家の中から一つの光が俺とカオリンの顔を撫でるように通り過ぎた。

不正解と思ったが、やはり正解だったのかもしれないと、カオリンと目を合わせた。

『いま、何か家の中で光ったよな？！？』

『うん！！！！』

俺の正解にカオリンも驚きを隠せない様子で、家の中に入って何が起きたのか確認したい！！と言いつ出した。

すぐさま玄関に向かい、死体の山を踏みつけ、階段を上った。

ガッ！！

ん？？何だこのドア、鍵かかってんのかな？？とドアノブをまわして押しても引いても動かなかった。

『え？？開かないの？？』とカオリンも心配そうにこちらを伺ってきた。

ドンッドンッドンッドンッ！！
ドンッドンッドンッドンッ！！

ぶち破ってやるって勢いで俺はドアをドンッドンッと叩いた。

うう…とカオリンは耳を塞いでいた。

『何だコレ…まじであかねー…』

いまにも壊れそうなボロボロのドアなのに押しても引いても叩いてもびくともしなかった。

俺はその辺に落ちていた角材のような物を拾ってきて、角材でドアを再び叩いた。

ドンッドンッドンッドンッ！！
ドンッドンッドンッドンッ！！

『○ あ!!!!!!!!!! × !!!!!!!』

もお一発と振りかぶった時、中から何か声が聞こえてきた。ドキつとし、のけぞり、カオリンに訊いた。

『い…今、家の中から何か聞こえたよ…ね??.』
『う…うん…』

俺が、叩いた事に後悔していると、カオリンがトントンとノックをしだした、『誰かいるんですか??』と言おうとするカオリンの口を手で閉じて、『やめたほうが良いかも…』とカオリンに

もしかしたら…かもしれない…と少し大げさに伝え、そそくさと立ち去ろうとした時、

ガチャ。ギイイイイイ

と何故か勝手にドアが嫌な音をあげながら開いた。

『廃墟 優馬 羽樹』（前書き）

4人が待っていると思われた大樹には誰も居なかった。

キキの置手紙と、カオリンのハンカチ、そして2本のロープ。

全てをパズルのピースとして考えだした、優馬と羽樹。

優馬の閃きによって導き出された答え。その答えを信じ、二人は4人を追った。

『廃墟 優馬 羽樹』

凸凹とした二度目の死地が再び俺達の体力を食らい尽くしてきた。羽樹から戻って警察に言ってからまた探しに来ようと何度も言われたが、俺は羽樹を説得し、進み続けた。他の4人が心配でたまらなかったんだ。

木々の擦れ合う音と、虫の鳴き声それだけが耳でリピートされた。羽樹との会話はいつの間になくなっていった。

何か話しないと…と思うのだが、喉で声が引っかかり、声がでくれなかった。

ちらちらと羽樹を見るが、目が合うと避けるように回避してしまっていた。

バサバサバサ！！クアクアクアア！！

つと日本のカラスとは思えないほどに大きなカラスが木々を掻き分け飛び立った。

『キャッ』と羽樹が悲鳴を上げた転ぶように尻餅をついた時に要約喉に詰まっていた声があふれ出した。

『大丈夫！？怪我とか無いか？？』

『うん…びっくりした…』

若干湿っぽい土をポンポンとズボンから払い、恥ずかしそうに『アハハ』と笑う羽樹を見て、少し心が癒された。

長かった無言の時間も幕を閉じ、思いつく限り二人で話題を考え話しながら進んだ。

『なんだあれ…』

『虫…??』

『うん…でも殆ど死んでるな…』

『うん…気持ち悪い…』

『確かに…』

『インセクト・コープス・ロードだね…』

何それ??と阿呆な俺が訊くと、虫の死体の道となんともグロテスクな返事がきた。

歩くにつれ虫の量は増え続けた。

虫の死骸に混じれて五右衛門達の死体も落ちてたら嫌だなって冗談をかます俺に、羽樹は痛いくらいの視線をぶつけてきた。

すいません。。っと頭を下げ、再び沈黙に戻ってしまった。

【ああ…何やってんだ、俺は…】と後悔をしていると、ヒューっと俺の体を風が突き抜けた。

ブルブルツツと尿意が襲ってきた。【こ…こんな時に…】

出来るだけ我慢をして歩いていたが、尿意が近づくにつれ、足をクネクネとトイレを我慢している小学生のように、歩いている俺に羽樹は心配の声をかけてきた。

『どおしたの???何か歩き方変だよ??足痛いなら少しやすも!』

『い、いや。痛いとかじゃないんだけど…』

『けど???』

『その…あの…、お手洗いにいきとおございまして…』

あんまり離れないでね…しばしお待ちを…と声を交わし、俺は直ぐ横の木を背にし、羽樹から見えない場所で用をたした。

ジヨジヨジヨっと地面に当たる尿が少し恥ずかしく、豪快に振り回して、音の鳴らないように辺りに満遍なくばらまいた。

【真に申し訳ない…お願いですので呪わないでください…】と何度も呟き、チャックを閉め、羽樹の所に戻ろうとした時、俺の目に変なものが写った。

何だあれ…と懷中電灯を向け、光を当てた。

表紙に【樹海生活】と書かれた本のような、ノートのような、兎に角ボロボロの紙の集合体があった。

それを拾い、羽樹の所へ戻った。

『お待ちせー!』

『おそーい!!』

こんなのが落ちててさ…とさっき拾った本みたいなものを見せた。

『何コレ…汚い…ってか辺なの拾ってこないでよ…』と捨てようとする手をバシっとつかみ、ちょ!ちょっと待て!とページをめくって見せた。

【樹海生活】

1 ページ目

2月12日。

月夜の晩、ドーンというすさまじい音と共に私の家の前に大きな墓石が落ちてきた。

私は、隕石か何かかと思い、家に落ちなくて良かったと、胸を撫で下ろした。

2ページ目

2月13日

雨の日。私はいつもどおり食料を集めに虫たちを探していた。今日も大量と気分良く家に帰ると昨日落ちてきた石が雨に打たれ、若干綺麗になっているのに気がついた。意外と良いインテリアになるかも…と少しにやけた。

3ページ目

2月14日

一般の人達にとってはバレンタインデー。私は、昨日の前に落ちてきた石を磨く事にした。

自前のタワシと貴重な水分をフルに活用し、半日かけて泥や苔を落とした。

すると、変な文字が書かれていることに気がついた。

【どうだ妹と二人暮らし、どうだいもつととうもろこし】

それはいくら擦っても落ちる事は無かった。

4ページ目

2月15日

星の見える夜、私は部屋の掃除をした。客人なんて来ないし、掃除をすることに特に意味は無いが、いらぬ物を外に運び出した。

ふと、私の目に降ってきた石が写った。四角い石が私にはパソコンのモニターに見えた。

ガラクタの山からパソコンのキーボードを取り出し、石の前に置き、

意味不明の文字の横に、

【正解を入力せよ…】を油性マジックで書き記した。ますます謎めいた石に一人で力カ力カと笑い、私は少しテンションがあがった。

と最後のページまでびっしりと毎日の日記が書き記されていた。

最初の4ページは、しっかりと目を通したが、5ページ目からはパラパラとめくるだけで最後までめくりきった。

4ページだけしか見てないが、書き主は阿呆だ…と思った。

空から石が降ってきた???

虫を食ってる?!?

石に落書きして笑ってる!?

阿呆意外何者でも無いと確信した。

羽樹と顔を合わせ、少し笑えて来た。日記帳というよりネタ帳みたいだね…と言う羽樹に俺は大きく頷いた。

俺はそのネタ帳（樹海生活）をポイとその辺に捨て、さてもおひと歩きするか。と羽樹の手を握った。

ドンツドンツドンツドンツ!!!

ドンツドンツドンツドンツ!!!

と突然何処からとも無く音が聞こえてきた。

なんの音!?!と羽樹が声を震わせて訊いてきたが、訊きたいのは俺も同じである…

音はロープの先から、聞こえてきた…

怖い気持ちも無かったわけでは無いが、恐怖より興味ってね。
足早にロープを辿って、音の下を目指した。

ロープの切れ目は意外とすぐだった。大きな木にくくりつけられて
おり、目の前にはボロボロの家があった。

なんだこのボロ小屋…と思い、家に近づこうとすると『シ！！！』
と羽樹に口を押さえられ、木の陰へと引っ張られた。

『な、何！？どおしたの！？』

『だ…誰か居た…』

『え？？…』

羽樹は指を震わせその場所を指した。

目を凝らしてみると、人影が二つあった…大きいのと小さいの
…顔までは暗くてはつきりと見えなかった。

きつと五右衛門達だ…と羽樹に小声で伝え。

恐る恐る、近寄った。

『…出会い…』

を残し一人で二つの影に近寄った。

一緒に行く！！一人にしないで…と言われ少し迷ったが、こんな森の中であの影が人じゃなく獣だったらと考えるとやっぱり連れて行けなかった。

忍び足で少しずつ距離をつめ、家の入り口と思われる所に立っている。

大きい方がドアをドンドンと叩いている…

ノックしているようにも見えるが…
獣がドアをぶち破ろうとしているようにも見えた。

巨大な雲が通りすぎ、月が顔をだし、辺りを月光で照らし、全てを映し出した。

生い茂った草木…大量の死骸…とても大きな石…いまにも崩れそうな家…そしてドアを叩く二人。

『五右衛門！！！！』俺は小声で呼びかけた。

五右衛門とカオリンはビクツツと頭を四方に振り、キョロキョロと辺りを見回していた。

五右衛門達と分かり、俺は羽樹の元へと戻った。

五右衛門達だったよ！！と伝えると、羽樹は、良かった…と大きく

息をし、ポトリと涙を落とした。

ゴシゴシと目を擦って、無理に涙を止め、深呼吸して落ち着かせ、五右衛門達の元へと向かった。

さっきまでキヨロキヨロと辺りを警戒していた五右衛門達の視線が一箇所に注目していた。

家の中だ。叩いていたドアが壊れたのかな…??

虫の死骸を出来るだけ踏まないよう、ゆっくりと進んだ。

『光!!!キキ!!!』と五右衛門が家の中に向かって叫んだ時は、ドキツとしたが、状況が飲み込めてくるにつれ、俺も羽樹も笑みで溢れていた。

虫の死骸などお構い無しに、大地を駆ける馬の様に走り出した。

『五右衛門!!!光!!!』

『キキ!!!薫!!!』

『優馬!!!』『羽樹!!!』

と俺達は要約合流する事が出来た。おお良かった良かったと野郎共と抱き合い、少し落ち着いた所でみんなの話を聞くことにした。

家の中に6人にいるといった床が抜けるか分からない…とキキから恐ろしいことを聞かされ、俺達はずり橋でも渡るようにそおつと外に出た。

正直な所今すぐにも帰りたかったが疲労のせい、体が言う事を

聞かず、下ろした腰を上げようとしなかった。

こんな場所やからこそ、焦りはあかん！！疲れた時は休んだ方がええ。と言う光の言葉に皆賛成し、家の横の比較的綺麗な場所で話した。

誰からから話そうかと迷いもなく光が話した。

『コレ見てくれ！！』

『え…』 キキ以外の4人は皆同じ反応だった。光は輪になって座った俺達の中心にエロ本をだしたのだ。

『コレ見てなんか思ったことあらへんか？？おかしいことか、変わったところ！！』

と真面目に問う光に『お前が一番おかしいし、変わってる…』と綺麗に皆揃って同じ返事をした。

『皆の意見聞きたいと思うかもだけど、やっぱり先に説明した方が
良いよ』

とキキが光に言うと、うむ、せやな。と頷き本の右上を人差し指でトントントンと叩いて、『ココや』。

【2019年12月11日：第23号発売】

正直ただの印刷ミスか、こうゆう表紙にただけだろっと思った。

『まあ…そら、そお簡単には信じんわな…』と光は一人で家に戻り何冊かエロ本を抱えて戻ってきた。

『全部見てみいや！！』と豪快にばらまいた。

【2022年2月22日：第2号発売】
【2012年8月16日：第13号発売】
【2009年5月1日：第23号発売】
【2018年1月31日：第5号発売】
【2008年8月18日：第29号発売】

皆が言葉をなくし、光に注目した。ついさっき見つけた、これを見るまではワイも少しからず疑ってたんや。と最後の本を指差した。

『うお！！』と五右衛門が真っ先に声を上げた。俺も続いて『あ…』と声を出してしまった。

『せや！！3日前に発売されたエロ本の次巻や！！』

嫌ああな視線を感じながらもパラパラとめくって中身を確認した。見事…恐ろしくボロボロでパリパリになった本は次ぎ発売される本だった。

つて事は…コレは14年後なの！！？とカオリンが一冊手に取り目を大きく開けて光に訊いた。

『そおゆうことになるな…』と目を閉じ、頷いて少し沈黙が訪れた。

各々の横に置いた6つの懐中電灯の光が天を照らし、中和するように月の光と交じり合っていた。

柔らかい風が俺達を包み、異次元に連れて行かれるような。

いや、もお既に別の世界に居るのかもしれない…

未来の本…本！？

ちよつと良いか！？と俺は沈黙を破り話し出した。

『さつき羽樹と一緒にココに向かつてる時に変な本があったんだけど…本というより日記帳かな…虫を食って、樹海で生活してたみたい。本の題名も樹海生活って書かれてて、それってもしかしてココに住んでたのかな???』

『その本ってどこにあるんや???』と光に訊かれ、少し俯いて、気味が悪かったから捨ててきた…とチラツと光に視線をやると、今すぐとって来いといわんばかりの表情で俺をにらんでいた。

『はあ、すぐ近くだしちよっと取ってくるわ。』と言い、俺は来た道を少し戻り、本を探した。

確かこの辺のはずだけど…

ガザッと虫達にいちいちビクビクしながら、宝物でも探すように必死になって探した。

お!! あった。あった。と本を手にとると。
本の下から大量のムカデ類の虫がワサワサとでてきて声を上げてひっくり返った。

正直言つて…俺は虫が凄く苦手だ…見てるだけで寒気がする…

本も見つかったし、早いところ光達の下に戻ろうとした時、目の前に同じ本が落ちているのを発見した。

あれ??? 2冊目の日記帳かな…中を見てみると、前に見たのと全く同じ文だった。

今発見したのが俺が先ほど捨てた本で、ムカデたちの家となっていた本の方が2冊目の本みたいだ。

足早に皆の元へ戻り、『おまたせ!!』と声をかけた。

『お帰り』と言う皆の手元には光が持ってきたエロ本があった。どおやら俺を待つ間読んでいたらしい…なんとも異様な光景に、少しだけ可笑しくなった。

『はい、これ』と二冊の本を出すと、一冊じゃなかった??と羽樹から横槍が入り、少し恥ずかしい体験談を話し、2冊目をGETした事を話した。

この本の内容を見て、五右衛門とカオリンが顔を合わせ、叫んだ。

『え!!!!!!!!!!』『マジカヨ!!!!!!!!!!』

ビクツつと四人の視線が二人に向けられ、この日記に出てくる石、直ぐそこにあるぞ!!つと五右衛門が興奮しながら言った。

嘘だろ…と思いながらも全員でその石の前に座り、日記の内容と照らしあわすように眺めた。

『一緒…やな…』と光が言い、俺もあまりにも書かれたとおりの姿で置かれてある石に言葉をなくした。

『dance in the dark』

【どうだ妹と二人暮らし、どうだいもつととうもろこし】

【正解を入力せよ…】

そして、その石の前にはエスケープのキーが壊れた、キーボードが置いてあった。

もお何があだか訳が分からなくなた。

空から降ってきた変な文字の刻まれた石、未来のエロ本、樹海生活と書かれた日記帳。

全部を照らし合わせると、こうゆうことになる。

恐らく、世間が嫌になった一人の人間が人気の無い樹海で生活を始めた。

食料に困ったその人は手当たり次第に食べる物を探し、拳句の果てにはその辺の虫を食うようになった。

そんな毎日を日記に記していた。

そして、宿は今ココにあるボロ小屋、その人が自分で立てたのか、元々あったのかは不明。

ある日、文字の刻まれた大きな石が空から降ってきて、家の横にめり込むように落ちた。

未来のエロ本は恐らくその人のだろう…故に男性。

2本目のロープは樹海から出て外界（俺達の住む社会）に行くための目印だろう。ゴミでもあさるのだろう…

俺なりに頭の中で整理した。でも二つばかり気になる事があった。

『降ってきた石に刻まれた文字…未来の本…』と光が呟いた。

俺も同感だった…恐らく皆もこの二つの事が、あまりに非現実的でファンタスティックに感じているだろう。どれだけ考えても、何も俺達は検討が着かなかった。

『ねえねえ…気になると思っけど…ソロソロ戻らない???…凄く怖い…』

とカオリンがいまにも泣き出しそうなかすれた声で呟いた。

その言葉に、何時だろうと時計をみたら、23時25分…11時半だった。

マスターも流石に心配してると思うし、うちも怖いし、ソロソロ帰ったほうが良いかもねっとな羽樹も言い加えると、そうだなっとな皆納得し、俺達は帰る事にした。

ロープを辿って一列に並び、ゆっくりと林道をめざした。

林道までの道のりは永遠不変エイエンフヘンに感じた。

歩いても歩いてもいつまでも変わらぬ風景は、精神的にも肉体的にも限界を超えていた俺達にとっては、苦痛意外何者でもなかった。

『まだ…かな…』とキキが途切れ途切れに言うと、すぐさま光はあと少しや頑張ろうな!!と励ました。

俺も何気なく羽樹を気にしていたが、フラフラといつ倒れても不思議ではない足取りだった。

カオリンは五右衛門と手を繋いでこんな状況なのに一人だけ幸せそうにしていた。

先頭を歩いていた光は数分に一回休憩を挟んで歩いた。

ロープの括り付けられている大樹が目に入った時には本当に涙が出るかと思った。

皆で大樹を守るようにもたれて座り込み『疲れたあ…』と大きく一息ついた。

10分の休憩を挟んで『よっしゃ帰るか!!』と光が元気に言うのと、俺達も少しだけ元気になれた気がした。

自殺防止の呼びかけ箱を通り過ぎた時五右衛門とカオリンがなにやら変な紙を入れているのを目撃し、俺は少し感心した。

出口を目指し、一步一步足を前へだしていると、一筋の光明が俺達をライトアップした。

光に目慣れしてないせいか、太陽の光を目の前で見てるように眩しかった。

『マスター…??』

マスターのエルグランドが俺達をにらめ付けるようにハイビームで照らしていた。

俺達の姿を確認すると、マスターは車から降りて、こっちに来た。

『マスター…今電話しよう思ってたんやけど…もおきとつたん?』
と光がマスターに問いかけてもマスターは無言だった。

『マスター…おそくなってごめんね…』と言うカオリンの言葉にも
無言だった。

むしろ、しっかり握られた五右衛門とカオリンの手をみて眉間の皺
がピクッと動いたようにも思えた。

『マスター…大丈夫???どおしたの??』と羽樹が話しかけても
やっぱり何も言わなかった。

マスターが何も言わない事で俺達まで無言になった。
ふと、なにやら気配を感じ、俯けていた頭をあげると、俺の頭に雷
が落ちた。

ドガッ!…!!

あまりの衝撃に声すらでず、ただその場に頭を抱えて崩れ落ちた。

隣に居た光が『ドガッ!…!!』と言う頭蓋骨が粉碎したような音
を上げて俺同様頭を抱えて崩れ落ちた。

ドガッ!…!!ドガッ!…!!ドガッ!…!!ドガッ!…!!

次ぎ次ぎと頭を抱えて崩れ落ち。

俺達全員が座り込んだ。

『バカヤロオオオオオオオオ!…!!』

とマスターがゴリラの様に吠え、要約マスターに叩かれたのだと知った。

マスターは男女関係なく6人の頭に6発、全力で拳骨を食らわし、吠えたのだ。

『どれだけ心配したと思ってんだ！！！！何時から待ってると思っ
てんだ！！！！』

叫びすぎでもはや日本語に聞こえないくらいだったが、俺達はボタ
ボタと地面に涙を落とす事しかできなかった。

散々怒鳴り散らかし、最後に『でも…マジでお前ら全員無事で良かった…』とマスターがボタボタと涙を流すのを見て、俺は心の底から謝罪した。他の5人も同様に心から謝罪した。

こぼれた水を雑巾でふき取るようにマスターは涙を服の袖でふき取り、車にもどって変なバケツを6つ持ってきた。

一つだけもち、残りの5つを地面に置いて、俺の目の前に立った。

まさか…水でもぶっかけられるのでは…と思い、目を思いつきり閉じた。さぞ冷たかろう…

イデデデデデデデ！！！！

とバケツ一杯の塩を頭から豪快にかけられた。

『体中にこすり付けろ！！』とマスターは言うが、虫に刺された傷や、木に引っかかって出来た切り傷、体中に沁み、こすり付けるところかもがき苦しんだ。

いてーいてーと塩の海でもがく俺を見てマスターと5人は腹を抱えて笑っていた。

しかしその笑いは一人、また一人と、絶叫に変わり、最後にはマスターだけが腹を抱えて笑っていた。

6人が横一列にならんで深夜12時に樹海の前でバタバタと足を振り、手を振り、もがいている姿はブレイクダンスでもしているようで、それはそれは素晴らしい光景だったらしい。

闇夜のダンス…ダンスインザダーク…

『もおええやろー！！深夜でもやってる銭湯連れてってやるから車に乗れー！！』

と汗と土と虫と塩だらけの俺達を愛車に寄せ、マスターの友人の経営している銭湯…温泉に連れて行かれた。

何あの子達…臭い…汚い…気持ち悪い…

と温泉に着くなり白い目で見られ、この上なく恥ずかしく不名誉極まりない事態だった。

顔を赤く染め、犯罪者の様に頭を隠し、そそくさと男湯と女湯に分裂し、温泉へと逃げ込んだ。

ロビーには結構人が居たが、温泉には誰も居なく貸しきり状態だった。

服を脱ぐ時に、何匹もの虫がボタバタと落ち、その度に震え上がった。

五右衛門の頭から8センチくらいの巨大ムカデが飛んできた時には
その場で失禁してしまうのでは無いかと感じた次第だ。

股間も隠さずマッパになり、『はあああ……お疲れっす……』と光と五
右衛門と三人で、紙コップに水を入れ、乾杯し、腰に手を当て、一
気に飲み干した。

『温泉…男湯』

湯煙が俺達の生まれたままの姿を包み込み、全身の疲労を吸いとってくれるように感じた。

そのまま湯船に飛び込みたい気分だったが流石に泥まみれの体で飛び込むのは俺の善良な心が許さなかった。

光達との会話はやっぱりあの事に絞られた。

『なあ…どう思う?? 未来の本とか、空から降ってきた石とかさ。』
と五右衛門が言い出し、底からは川を下るように話は進んだ。

『ワイとしては、もお一回見に行きたいって思っとる。』

『また樹海にか??』

頭をゴシゴシと洗いながら光は軽く頷いた。

五右衛門と俺は顔を合せ、こいつの追求心は尋常じゃないな…と苦笑した。

『でも、もお一回行くって言っても女子達や、マスターがOKしてくれるとは思わんぞ??』

『せやな、やでワイら野郎だけでいくんや!!』

ザーッと泡を流すシャワーの音と、ジャグジーバスのブクブクと言う音だけになり、浴室はシーンとした空気になった。

勿論、俺も行きたくない。出来る事なら、この貴重な旅で羽樹との

時間を増やして親交を深め、我が家に帰宅したいところだ。

一番に洗い終わった俺は、そのまま湯船に行かず、浴室で一番静かなサウナ室に向かった。

入る前に持っていたタオルを水に付け、軽く絞って、冷たいタオルを持ってサウナ室に入った。

冷たいタオルはサウナ室で素晴らしく気持ちが良い。

タオルを頭に乗せ、豪快に股を開き、へたれきったマグナムを晒し、腕を組んで瞑想した。

キーっと言う音と共に冷たい空気が入ってきた。

片目を開けて確認すると、俺より立派なマグナムを所持した五右衛門だった。

【ふん。隠す事などせぬ。】と自分の大いなる意思とは裏腹に俺の膝はN極とS極の磁石の様にピタッとくっついた。同時に頭の上でくつろいでいたタオルは、丁度俺のマグナムが隠れる位置に飛び降りた。

五右衛門は頭にタオルを乗せ、マグナムを堂々と晒し、ドンと俺の横に座った。

『どおするよ！？』コレが最初にサウナ室に響いた言葉だった。

『何が？？』と俺は返したが、分かりきっていた。野郎だけでもう一回行くか？？と聞いているのだ。

『樹海よ樹海』と五右衛門は知っていたらろつと言いたげな答えっぷりだった。

『ああ…』と適当に流し、再び沈黙が流れるかと思った時、五右衛門が語りだした。

『俺は、行っても良いかなって思ってる。野郎だけ、俺達だけで行かならな！！また皆で行くってなると流石にそれは俺も反対だけど、女子がいないなら心配とかする必要ないし、正直言つて俺も光と同じくらい、本と石のことが気になってる。』

ふうん。っと鼻で答えると今度は本当に沈黙状態になった。

冷やしておいたタオルもお湯になり、体内からは汗が噴出し、ソロソロでた方が良いかな…と思った時、お先。っと五右衛門が立ち上がり、サウナ室を後にした。

『カー！！何で今のタイミングに出て行くかな…』と一人でぼやき、汗のしみこんだタオルを絞り、顔を拭き、よし！あと5分だけ粘ろうっと誓った。

考えたくないと思っただけでも、やっぱり俺も五右衛門、光同様に、本と石の事が気になった。

ああチクショー！！と頬をパンパンと叩き、マグナムを覆っていたタオルを手に取り、サウナ室をでた。

サウナ室の横にあったウォータークーラーで水分を補給し、爪先からゆっくりと水風呂に入った。

クウウウウ…冷たい…体が絞られるように凝縮されるのが手に取るように分かる。

15度という完全なる冷水に俺のマグナムも縮こまっていた。

ゆっく、頭の天辺までつかり、ゆっくり20秒数えた。

19 / 18 / 17 … 3 / 2 / 1 … ブファー！！！！

鯨が息継ぎをするように豪快に水しぶきを上げ、水風呂から飛び出た。

五右衛門と光が気持ち良さそうにジャグジーバスで寛いでいるのを発見し、直行した。

『よう！！』元気に声をかけて見たが…

『ん？？』と相変わらずテンションの低い返事が来た。

まあこの重い空気は俺が作ったみたいなものだしな…と納得し、『本と石』の話題を出した。

『明日、朝一で本と石の謎でも解きに行くか！！！！野郎だけで！！』と言った自分が恥ずかしくなるくらい声は響き渡った。

『おう！！！！』と光も五右衛門も俺の響き渡った声を掻き消すように返事し、皆で露天風呂へと向かった。

カー！！！！夏季でも露天風呂は最高だなー！！！！と光が言い、俺達も最高だー！！！！と夏の夜空に叫んだ。

『うるさあああい』と一つ隣の竹で出来た壁の向こうから聞き慣れたキュートな声が聞こえてきた。

『優馬氏、光氏…』と五右衛門があくどい目で俺達に訴えてきた。

俺も光もニヤリと笑い、無意識のうちに聞き手を前に出し、三人で手を合わせて、オー。っとやっていた。

作戦の指揮をとったのは他でも無い天才児光だった。作戦開始！！
…GO！！

『覗き』

番台に座ったオッサンのように一匹の鳥が男湯と女湯を仕切る竹の上に止まり、男湯をチラツと見て、女湯をジーッと見ていた。

憎たらしい鳥め…と思いながらも、俺達は俺達なりの閲覧方法で見学する事にした。

『誰か居てるのかあ??』と光が聞くとカオリンから返事が来た。

『あたしだけ居るよ』

『他の二人はもおでたの??』と五右衛門が聞くと、スチームルームにいったあつと返事が来た。

『じゃあワイらはソロソロでるわ ゆっくり休めよ』と光が言い放ち、ガラガラガラとドアを開け、ガラガラガラピシャ! !と少し大きさにドアを閉めた。

『ココからは小声で話すデ…』

光の第一作戦は、まず相手に俺達がお露天風呂には居ないと思わせる作戦。

出るでーっと言い、ドアを大きさに開け閉めし、本体は室内には戻らず、カオリンの頭の中の男子達が戻っただけ。

その証拠に、さっきまで静かだた、カオリンが鼻歌を鳴らし、あまり上手いと言い辛い歌声を披露していた。

『さあつて。ええ場所発見したで！』光の目が光沢を帯び、口は逆さにした『へ』の字の様にニヤリと笑った。

どれどれ…と俺も五右衛門も、サササと爪先移動で光のそばへと近寄った。

なんと！…最高のポジションだった。隙間無くなれられて居る竹が、ココだけは竹と竹が若干曲がり、数センチだけ隙間が出来ていた。

三人がみたらしだんこの様に縦に連なり、五右衛門のマグナムが俺の顔の横にあっても微動打にせず、ひたすら女体を捜した。

カオリンのほかにも女性はこちらホラと伺えた。こつちが貸しきり状態だけに女湯も貸切とばかり思っていた。

光が一時撤退の合図肩を三回叩くの動作をし、俺達に言った。

『やばいな…これは…犯罪やで…カオリンだけかと思ってたわ…』

ME TOO …と俺も五右衛門も少し躊躇した。

チラッと見たところ、カオリンを含む若い女性が3人くらいと老いた人が2人くらいだった。

少し悩んだが、もおおにでもなれ！！俺達はこの死地から脱出した勇者だ！！こんなくらいで怯むな！！と、皆決意し、再びだんごのように連結した。

光が直立、俺が立てひざ、五右衛門が和式うんこ座り、通称ヤンキ

―座りの体勢で凝視した。

夏の蝉たちが俺達の集中力を引き立て、闇が俺達の姿を隠蔽した。闇にライトアップされた女性達の生まれたての姿は、それはそれは美しく、老いた人をチラッと見たりし、脳を少し逆の刺激を与え冷静さを保った。

いまにも俺のマグナムが戦闘体勢になろうとしていた。

『うむ、素晴らしい光景じゃのお。目の補強になるわい。』

『ですよねえ』と相槌を打つと、俺の横にこれまでもなく老いたおっさんが立てひざで見学していた。

うお！！！！！！と叫びかけた声を殺し、ひたすら歯を噛み締め耐え、早急に一時撤退の合図を出した。

サササと爪先移動をし、一旦湯船に入り、『って！！オッサン誰！！』と即座に聞いた。勿論小声で。

『ホホホ。わしもちみらと同様、ただの工口いおっさんじゃ。』

ちみらって…突っ込みたかったが突っ込む気すら失せ、俺達は質問しまくった。

『おっさん、ええ歳して除きはあかんで！？』と言う光に、『ええ歳しとるから除くんじゃ』と堂々と言い。

こつちも除いていた身…何も言い返せなくなり、仕方なく、仲間に入れることにした。

頭は禿げ上がり、仙人かと思われるほどの立派な髭を生やし、何処からどおにても70歳は軽く超えていた…が心は青春時代の成年同様でおちやめな部分もあった。

追放…通報…されなかっただけでも俺達はラッキーだと、開き直り、今度はじいさんを含めた四人で拳を前に出し、オーっと誓った。

先ほどと同様に、じいさんは俺の横に立てひざで並んでいた。

じいさんの目はキラキラと頭に負けんくらいの輝きを出し、全てを録画するように真剣な眼差しで見つめた。

『うーやばー！40半ばと思われる見苦しい女体がこっちにくるで』
光が小声で叫んだ。

ドキッ！…や…やばい…四人の空気が止まり、じいさんにいたっては心臓まで止まりそうだった。

五右衛門が一番初めに動いた…

ヤンキー座りの大勢から足の筋肉と足のバネだけでバクチュウ（三回転ヒネリ）をして最後は足のバネをクッションにし、爪先をピンツと立て、飛び跳ねた魚が着水するより綺麗に、わずか50センチくらいの水深の風呂に音も立てずに温泉に飛び込んだ。神業だった…

人間、馬鹿力を発揮すると恐ろしいとは聞いたことがあったが、あれはありえないだろ…と、俺と光とじいさんは飛び出た目を元に戻しながら言った。

五右衛門はそのまま、音を立てずに湯から上がり、そそくさとドアを開けて室内に戻っていった。

裏切り者！…！…という憎悪が込上げてくるが、そうこうしている

うちにオバハンがドンドン近づいてきた。

今立ち上がると確実にばれる…【謝罪】、【逃走】、【三回転ヒネリ】どおするの俺！どおするのぉ！！…続きはWEBで…

つとCMのようにには終われないのが現実。

光も俺も何度も目を閉じては開け、を繰り返し、オバハンにレッツターンを祈ったがレッツゴーを貫き…謝るしかないな…と流石の光も諦めた。

『小僧…諦めるな』とじいさんが凜々しく勇ましく小声で呟き、ウインクをし、いきなりその場に横向きに倒れた。

『このくそじい！！』と俺は顔面を踏みつけてやろうと思ったが、光が何とかなるかもしれへん、と俺の怒りを抑えてくれた。

その数秒後、事態は起きた。

キヤー！！！！という姿とは似ても似つかぬ可愛らしい甲高い声をあげ、係員のひと、女風呂に居た人たちがゾロゾロと集まりだした。終わった…何もかも…と俺はポトリと憎たらしく寝転がったじいさんのボディー涙を落とした。

どおされました？…あ、あそこに覗きが…なんて会話してるのだろっ…と俺は体を震わせ、マップでタイホされるシーンを思い浮かべていた。

ガラガラガラ。つとドアの開く音と同時に、『何をしてるんだ！！』と警備員の人々が服を着たまま入ってきた。

明らかに、入浴しに来たのではない…この状況はサルでも分かる…

『す…す…すいま』

『ちよつと手伝つてくれ！！じいさんが倒れたんや！！』と光が目には涙を浮かべながら警備員の人に訴えた。

は？？？何を言ってるんだ？？そのじいはいは自ら…あ！！…まさか。俺はボ口を出さないために口にチャックをかけた。

『お前らそこで何してたんだ！！』と言う警備員に光は迷う事無く、

『こいつ（優馬）ともお一人の連れ（五右衛門）とこのじいさんと4人で風呂に入ってたらいきなりじいさんが倒れて、それでおぼれるとあかん思つて、外に連れ出したんや！！そこにおける連れがあら呼んだんちゃうんか！？』

と光は五右衛門を指差し、軽く合図を送った。【あわせる！！！】

みんなの視線が一気に五右衛門に注がれ、五右衛門は俺と光を見ながら、『俺が呼びにいくと外にでたら、いきなり警備員の人たちが入ってきたから、もお誰かが報告したんじゃないかと思つて。』と五右衛門も上手い事話をあわせた。

『奥さん、どおです？？本当に彼ら覗いてたんですか？？』と警備員は少し服に汗を滲ませさつき俺達を通報したオバハンに訊いた。

『確かに…その子達の横におじいさんが倒れてて…もしかしたら私の勘違いかしら。』と顔を真っ赤に染めて、恥ずかしそうに俯いた。

警備員の人は呆れたように、ため息をつき、俺達の元に駆け寄った。

『おじいさん。おじいさん。大丈夫ですか！？』と警備員はさつき

とは全然違う声で話しかけた。

『うううむっほんむっほん！』とじいさんは体を起こし、またやってしまったわい。っと笑った。

『この子達が覗きじゃと??今の今までわしと一緒に風呂で話したたがのお。この子達がおらなんだらわしは溺死しとった。ありがとなボーズ達。』と本日二回目の神業に俺は震えた。

警備員はニツコリと微笑み、俺達に謝罪し、戻っていき浴室は落ちて着きをとりのどした。

『ふううううう。マジで心臓が止まりかけた。』

『ちがいねえ…』

『うむ。。。』

俺達は完全に懲りた。全身の力が抜け、湯船に使った体を支える事すら出来ず、湯船の壁にもたれ、ぐったりとしていた。

こおゆうもんはな…とじいさんが語りだした。

『こおゆうもんはな、ええ歳になってからやるもんじゃ。お前らみたいにならうちは覗くなんてセコイ真似せんでも、おなごと遊ぶ機会など五万とあるじゃろ。堂々と見ればええんじゃ…いかなる場合にても、喜び大ければ大なるほど、それに先立つ苦しみもまた大なり…お前さんたちにはまだその苦しみは背負えん。』

ほおお。つと俺達はエンドレスな、じいさんの人生話を体がふやけきるまで聞き、いつしか1時間以上も、じいさんの話を聞いていた。

『じゃあな小僧。』つと肩にタオルをかけ、背中越しに手を上げ、ケツをプリプリと揺らしながら、マグナムをブルンブルンと像の鼻の様に揺らし、俺達を振り返る事無くじいさんは脱衣所ではなく、ガードレールのような仕切りをまたぎ、森の闇へと消えていった。

『WHY…』

『 明日に向け就寝 』

樹海に居る時に見た月是不気味さを引き立てていたが、露天風呂から見える月は美しく、綺麗な三日月は手を伸ばせば届くんじやないかと思わせるほど、大きかった。

そんな大きな月の美しさをさらに引き立てるのが澄んだ雲ひとつ無い夜空にある無数の星だ。

星とは何かご存知だろうか？

宝石？？ いやいや

先祖？？ いやいや

キラキラと輝く星は分かりやすく言うとな太陽なのだ。

そう。あまりに離れすぎていて、我々にはキラキラと小さく輝いているくらいにしか見えないのだ。

故に、あのキラキラと輝く星の周りにはこの地球同様にいくつもの惑星があると推測できる。

故に、宇宙人は存在する可能性が非常に高いと思われる。

故に、俺達同様、露天風呂につきり、ああ星は綺麗だ…と眺めている可能性だってあるのだ。

そんなことを考えながら、俺はブクブクと頭まで湯につかり、明日の朝野郎だけで行くの樹海の不安を消し去ろうとしていた。

ザザーっと湯を切り、立ち上がり、脱衣所に向かった。

光、五右衛門も俺に続くようにあがり、皆して巨大な鏡の前に座り、

ドライヤーで髪の毛をかわかした。

『あのじいさんマッパで何処いったんだろうなあ……』五右衛門が言い、『マジで上せて外で涼んどるんやろ』と光は笑いながら言った。ちがいねえな……と俺も五右衛門も笑い、髪の毛が乾いたのを確認し、体を拭いた。

『お！！！すげえ！』と光は一枚の紙を発見し俺らに公表した。

【なげぞー！！お前ら！！今日はココで泊まるから。ドロドロの服は着ず、その浴衣を着ろ！！】マスターからの置手紙だった。

クタクタに疲れていた俺達にとっては温泉付きホテルで泊まるのは最高の幸せだった。イエーイと3人でハイタッチを交わし、浴衣をバサツと羽織って、ギュッと帯を締めた。

最後に、カンカンに冷えたビール……じゃなくてコーヒー牛乳。

ピンク色のビニールをはずし、見慣れたマークのふたをポンっとなげ、キンッと乾杯し、腰に左手をそえ、若干反り返り、コーヒー牛乳を一気に飲み干し、『カーツツツツ……！うめえ……！』と目をギュッと閉じ、頭を2〜3回横に振る。という動作を3人とも綺麗に揃ってばっちりきめた。

流石に俺達が1時間半以上温泉に入っている間、マスターは友人と飲んだ暮れ、すっかりお休みモードだった。

一方女性方かというと、まだお風呂から出てない様子だ。流石に女

は長いな…と思い俺達はマスターに渡された鍵の部屋へと向かった。

809号と書かれた鍵に合う部屋は8階にあった。『809…ここやな。』がチャッと光がドアを開けると、和風の畳のなんともいえない香りとがクーラーの程よい冷たさの風に乗って俺達の鼻を刺激した。

目を閉じ、鼻から勢い良く吸い込みその香りを楽しみ、部屋の明かりをつけた。

『（（オー！！！！））』

真っ白なシーツの布団が3つ綺麗に並べられていた。うん。良い匂いだ…と枕に顔を擦りつけ、ほんの10秒で眠りにつけそうな気持ちよさだった。

いかんいかん！！こんな所で寝てしまつては時間がもったいない…眠い体を起こし、冷蔵庫に入っていたコーラを片手に、出窓の椅子に腰掛けた。

俺の前の椅子に光が腰掛けた。

五右衛門は睡魔にやられ、グーがグーガと健康に鼾をかいて綺麗に敷かれていた掛け布団をぐちゃぐちゃに丸め抱きかかえて眠っていた。

『光…ちよつと良いか??』

『なんや??』

『実は…』

『何！！マジか！！』

いや、まだ何も言っただろ…と本題を話した。

『カオリンさあ。どおやら五右衛門に恋してるみたいだぞ!!』

『は!?! ホンマか!?!』

飲もうとしていた缶コーヒーを机に置き、光は目を丸くして、驚いた。

『うむ。どおやらマジらしい…今日…いやもお日付変わったから昨日か、樹海でカオリンの様子みてて少し不思議に感じてな。羽樹にこっそり聞いてみたら片思い中みたいだそうだ。』

『ムムムム!! 3人の中でも格段にかわいらしいあのカオリンがよりによって3人の中で一番ぶっ細工な五右衛門に恋焦がれてんのか??!』

つとグイグイつと缶コーヒーを一気に飲み干した。

『うむうむ。それにな、カオリンが異性に恋をしたのは初めてらしい…』

なんと!!…と光は何も知らずに幸せそうに眠る五右衛門に空になった空き缶を投げつけた。

コーンと頭に直撃したが、五右衛門は少し寝返って頭をポリポリかくだけで、再び豪快に酄をかき、幸せそうに眠りに付いた。

『幸せものめ!! カオリンはえーよなあ。キキは、色々厳しいねん。』

ふむふむ、そうかお主も仲間よのお。と俯く光にポンと手を当て俺も羽樹の事を語りだした。

『羽樹も一緒にいて楽しいし、元気になれる…でも色々と厳しいんだよな。。。』

『ワイもキキとおっておもしろいんやけど…』

はあ…俺ら絶対に尻に敷かれるっばいよな…っと二人して大きな大きなため息を吐いた。

『せやかて、五右衛門はホンマに気づいてへんのか??今日ずっとふたりでおったんやろ??』と少し涙ぐんだ目を擦りながら光は再び五右衛門の話にもどした。

『いやあ。五右衛門さんも多分まさかカオリンが好きになってくれるなんて思っただけじゃないかな??俺が見てた感じだと…カオリンは相当べた惚れしてるぽいが…』

『五右衛門にはおしえたらへんのか??』という光の意見に俺は『カオリンの初恋だし、カオリンに任せよう』と言い、光もそうだな…と小さく頷いた。

ぼんやりと浮かぶ月を見ながら、久しぶりに光と語り合った。光と語り合ったというより、偉大なお月様に俺達の悩みを聞いてもらっていたのかもしれない。

静かに、何も言わずに聞いてくれるお月様は、時に流れ星を流し、返事をしてくれたりもした。

結局、最後には五右衛門とカオリンの話に戻っていた。

『まあ、五右衛門が相手ならカオリンも幸せになるだろ!!俺らの知らん奴よりは全然良いはずや!!』

『せやな！！』

光は立ち上がり五右衛門にぶつけた空き缶を拾ってゴミ箱にすて、明日早いしもお寝るで！！と布団にもぐりこんだ。

【俺も寝るかな…】と電気を消し、月明かりで眩しい出窓の襖を閉め、俺も就寝した。

明日も無事でありますように…おやすみなさい。

『カオリからカオリンへ』

ううう。上せちゃいそう…。

あたしってそんなに、長風呂するタイプじゃないんだよね…

キキちゃんも羽ちゃんも長すぎるよ…

ボコボコと酸素がマグマのようにあわ立っているジャグジーバスに3人で入っていたけど、キキちゃんと、羽ちゃんの長話&長風呂に着いていけなくなり、あたしは再び露天風呂に行った。

【もぉ！！！あの二人長い！！！！一人ででちゃおっかな！！】

ヒューッと夏なのに冷たい風が抜け、ブルブルつと強制的に体を振るわされた。

【さ…さむい…】

ガラガラつと中に戻ろうとすると、キキちゃんたちの主婦顔負けのスペシャルトークが耳に入り、仕切りをまたぐ事無くドアをしめた。仕方なく、露天風呂につかった。チラツと手を見ると、シワシワになり、ふやけていた。

『五右衛門、光、優馬…誰がいる??』…当然の様に返事は無かった…ってあたし何言ってるだろ！！つと少し頬を赤く染めた。

【はぁ…暇暇…】

空を見上げると沢山の星達が輝いていて、ほええつと遠い過去の記

憶がよみがえってきた。

キンコーンカーンコーン…

『カオリ！！今日部活はどおする！？』

『あーあたしはパスパス、ってかメンドクサイしもお行かない〜ってかあの先生うざいんだよね…キモイし臭いし…2年間我慢したけど、3年からは部活行かない！！』

そう…実はあたしはつい最近まで、こんなブリブリの可愛いかわりちゃんではなかった。

高校2年も終わり、留年する事もなく、3年に上がったあたしは、またまたキキちゃんと羽ちゃんと同じクラスで、少しほっとした。

『また一緒にのクラスだね！！』と羽ちゃんの言葉に皆で素直に喜んだ。

3年4組…か…男子の列をズラ〜っとざっと目を通した所、2年の時にあたしに付きまどってきた男子がいないことにさらにほっとした。

あたしは入学式の日を目立つように遅れてきた、田中洋介こと、五右衛門に一目ぼれしてしまったのだ…彼に続くように優馬と光も遅刻し、教室に入ってきたけど、あたしの目には五右衛門しか映っていなかった。

ポト…とくわえていたオレンジ色のペンが床に落ち、ハツと我に返った。

え！？まさかね…ほんの30分前まで男何てクソ食らえ！！って思

つてたあたしが、今日始めて会った子に恋を……？？

ないないない……っとセットした髪の毛がバサバサになるくらい頭を振り、深呼吸し、高まる心拍数を抑えた。

3人は遅れてきたこともあり、あたしより黒板に近い前の方の席に座った。

惚れてなんか無い……！……惚れてなんか無い……！……惚れてなんか無い……！！

何度も頭では、否定したが、あたしの視線は気がつくと彼をロックオンしていた。

『田中君と知り合い？？』と後ろに座っていたキキちゃんから小声で話しかけられた時は心臓が破裂してしまうのでは無いかと思うほどの心音が体中を駆け巡った。

ドクンッ……！ドクンッ……！ドクンッ……！ドクンッ……！！

『違う違う違う違う……！』と人生でこれ以上に無いくらい赤面していたあたしを見て、キキちゃんは目を細めてニヤニヤと笑い出した。

惚れてんだ……！！……の言葉を第三者から聞かされ、あたしの魂はどこへやら……意識が朦朧とし始めた……やっぱ、あたし、惚れてる……？？

今まで異性を好きになった事が無かったあたしは、高鳴る鼓動を直ぐには恋をしているんだと自覚する事が出来なかった。

ツンツンつとツ突つついてくるキキちゃんに、いつも通り反撃する事が出来ず、あたしは土偶の様に固まった。

キンコンカーンコン…と、鐘が鳴ると同時に、土偶の化した体を元に戻し、キキちゃん和羽ちゃんの腕を引つ張り、渡り廊下まで有無言わさず移動した。

『ハア…ハア…ちょ…ちょっとカオリ??…どおしたの??…』
何も知らない羽ちゃんは驚き、少しごめんなさいって気持ちだったにも関わらず『もお何も言わずに聞いて!!…』とあたしは強引に話し出した。

『あたし…恋しました…』

『え!?!?!?!?』と頗る驚く羽ちゃんと『やっぱり!!』と改めて納得するキキちゃんに細かく説明した。

つと言つても【一目ぼれしちゃった…】で全て終わりなんだけどね…

『と言う訳で…彼の情報色々教えて!!』つと少しだけ頬を赤くし、隠すように頭を下げてお願いした。

『えーどおしよっかなあ』と羽ちゃんもキキちゃんもからかってきたから、ついつい、キレそうになった。

…略…

ココであたしが言つた言葉を書き記しちゃうと印象が酷く崩れちゃうのご想像にお任せします

…略…

『冗談じゃん！！冗談！！勿論協力するよ！！』　つと二人とも快く引き受けてくれてほっとした。

入学式も終わり、休み時間になり、二人から彼の情報を色々と貰った。

『田中君って高橋君と土屋君とすっごい仲良いらしいよ！！』

『田中君って頭は良くないけど、運動神経はめっちゃ良いってさ！！』

『田中君って意外とモテてるみたいだよ、うちは全然タイプじゃなかったから少し驚き。』

『田中君って…』

最後にキキちゃんから放たれた言葉にあたしは絶望を感じた…最初の恋…実らない…恋だった…と涙腺を刺激し、涙が滝の様に流れ落ちた。

『ちょっとカオリ！！大丈夫？？』…大丈夫ではあるはずが無い…だって、今日芽を出したあたしの片思いが、ものの1時間で踏み潰されたのだから…

『カオリだって、女の子らしいとこいっぱいあるじゃん！！』…そう。最後にキキちゃんが言った言葉は…田中君って女の子らしい可愛らしい子がタイプみたい…これだ。

あたしは、自分で言うところさらに性格が悪いと叩かれるかもしれないけど…ルックスはそれなりに良いほうだと、自分でも感じている。現に高2の時には、色々な男から告白された。

でも…可愛らしさ…女の子っぱさ…つてのはあたしにはまるで無い…見た目は美人でも性格美人とは無縁だった…人生初の恋をした相手がよりによって性格美人…女の子がタイプだと聞かされた…

溢れ出す涙を自力で止めようとせず、いつそのまま、脱水で死んでしまえば良いとおもった。

泣きすぎで脱水で死ぬなんて阿呆の考える事…なんてことはあたしが一番理解していた。

恋が実らず泣いている子達の気持ちが今までは全く分からなかった…けど今なら痛いほど分かる気がした。

潤んだ瞳に眩しい太陽が中庭で座り込むあたしを見つめていた。

『変われば良いじゃん!!』…何を無責任な…人事だと思って!!この恩知らず!!!馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿!!とついには励ましてくれる羽ちゃん達にも八つ当たりした。

『そこを直すんでしょ!!あんたのが馬鹿だよ!!』とキキちゃんから片思いが崩壊したての女の子には痛すぎる厳しい言葉が飛んできた。

『うちらも協力するからさ!!』と今度は、優しい言葉飛んできて、思わず、抱き付き枯れかけた涙をまた噴水のように噴出して号泣し、変わるかな???…変わるかな???…と泣きじゃくった。

何の迷いもなく『大丈夫!!』と言ってくれる二人に背中を押され、あたしは恋して女らしく変わるんだ!!と決意した。

『カオリからカオリンへ』

キンコーンカーンコーン

『あ！！やば！！』

2時間目の授業の始まりの鐘がなり、あたし達は中庭から教室まで走り出した。

女らしくとは何ぞや…あたしはまずそこから考えなければならなかった。

キキチャンや羽チャンの言う女らしさってのは全然理解できなかった。

そもそも…言っちゃ悪いけど…あの二人も女らしいとは思えない…

冷静に考えれば考えるほど、憂鬱な気持ちになった。センチメンタル…

2時間目は役員決めらしいけど、今のあたしにはそんな事を考えるほど頭に余裕は無かった。

とか言いながらも『3人一緒なら何でも良い…』とちゃっかり、発言した。

結局あたしは、実行委員になっていた。

実行委員って何だろ?? まあ3人一緒なら別にどんなでもいっかつと再び女らしさについてあたしは思考をめぐらせた。

『高橋！！！！！』 『田中！！！！！！』 『土屋！！！！！！』 と言う先生の声が耳に入り、と言うのは嘘で『田中！！！！！！』と言う先生の言葉だけが耳に入り、呼ばれた3人よりあたしの方がびっくりした。

どうやら、あたしの恋をした殿方は相当、変わり者らしい…役員決めにも関わらず友達と話していて、忘れていたようだ…

でも、ちよつと笑えて来た。アハハハハと心の中で笑ったつもりが、表面上にも出てきて、ニヤケ顔になっていた。

先生が『残りは…実行委員！…実行委員！…実行委員！の3つだ！』と全部、実行委員じゃん！！と心で鋭く突っ込んだが、同時に疑問が浮かび上がった。

【実行委員？？】…あたしは何だっけ？？？… 【実行委員】、何だか似てる名前だなあ…ええええ！！

と羽チャンとキキチャンを振り返ると呆然と口を空けていたが、あたしを見るなりグツツと親指を立ててウインクしてきた。

あたし達3人もコレは想定外の事で、正直皆びっくりした。

神様はあたしと田中君を応援してくれているのかな…と少し嬉しくもなったが、ドクンドクンと心音が唸りだした。

全員の役員が決まった事で、先生は5分間の休憩をくれた。

あたしは、キキチャンと羽チャンの元へ行き、思いつく限りの女のこらしさを話した。

『今日からあたしの事はカオリンって呼んで！！！！』 『はい？』
『それからあたしは今日から少しの間ぶりっ子する！！！！』 『ほえ？』
『？』

『今までの過去のアクティブなあたしは消去して！！！！』 『えええええええ！！！！』

お願い！！とあたしは何度も頭を下げた。

顔を見合わせて呆然とする、二人も『分かったよ 協力する！！！！』と大きく頷いてくれた。

あっという間に5分が経ち、班決めに入った。

あたしは、ぶりっ子、ぶりっ子と呪文の様にブツブツと呟き、色々な想像をした。

先生が班決めについての話を始めた。…正直最初の方は全然聞いてなかったから覚えてない…あたしが覚えてるのは『実行委員』というキーワードがでてからの言葉だった。

『最後に実行委員の人は実行委員班として班を組んでもらうので班長だけ決める事！！質問は一切認めません！以上！』

この言葉に、一瞬、あたしの思考回路はショートしかけた…あわわ…あわわ…

今日出会い、今日恋し、今日同じ役員になり、今日同じ班になる…こんな事ありえない…

あたしは羽チャンとキキチャンの所に行き、心の準備が…と弱気に呟いた。

『何言つてんのー！！凄いラッキーじゃんー！！こんなチャンスめったに無いよー！』とキキちゃん。

『そうそうー！！役員も班も同じになれるなんて神様は力オリの見方だよー！』と羽チャン。

そおかなあ。。。っと自信無さげにあたしはチラッと班員となる男子を見た。

向こうは向こうで固まっております、こっちを見ているような感じがする…

田中君がチラッとこっちを見て一瞬視線が交じり合った。ボフ…っと言つ音を上げて、あたしの頭の中は真っ白になった。

『それでは行きますか』と羽チャンが男子の所に言つて自己紹介でもしようと言ひ出した。

『無理無理無理無理無理！！』と全否定したが、だあめ！覚悟を決めなさい と腕を引っ張られ、連れられていった。

男子がこちらに気がつき、キキチャンが最初に自己紹介を شدした。

『私は井上嬉紀。友達とかは皆キキと呼んでるけど好きに呼んで良いよ。よろしくね。』

【えええー！！全然キヤラちがくない！？】と驚いているうちに一瞬であたしの番が来た…

もお行くしかない！！とあたしは覚悟を決め、できる限りの表現で頑張った。

『あたしは内藤薫。キキと一緒に名前で呼んでくれて良いよ。カオルじゃなくてカオリね。皆カオリンって呼んでるしそおよんで！ヨロシクウ。』

やってしまった…

名前で呼んでくれて良いよ。と言ってるそばから皆カオリンって読んでるからそお呼んで…

これじゃあ可愛い以前にただの馬鹿じゃん…とウルウルと目を湿らせ、キキちゃんを見たけど、あたしに気がついてくれなかった。

この1時間くらいの間に積み上げてきた積み木の山が一気に崩れようとしていた。

質問タイムに入ってもあたしは、何も質問する事なくそしてされる事無く、ただただボーっとしていた。

ああ、何かだるい…はあ…と少しため息交じりに息を吐くと。カオリンは何歳なの？？と男子の誰かに聞かれた。

あたしはとつさに25歳と答えてしまった…実はコレはあたしの癖だった。歳を聞かれると25歳（女が一番綺麗な時期…と勝手に思ってるだけ）。

えーッと驚く男子に、嘘ですと言うとゲラゲラと笑われ、あたしの恋は終わったと思った。

…

あれから5ヶ月かぁ…すっかり天然キャラも定着してきたな…と空
に浮かぶ三日月を見上げ、温泉に涙を混ぜた。

『カオリンからカオリへ』

月から目を離し、大きな空をぐるりと一周見回した。
星の数に目がくらみそうだった。

パサパサパサつと一羽の鳥が横にある森から飛び出てきて、温泉を
チュポチュポと突付いて顔を突っ込んでいた。

少しするともお一羽やってきた。さっきのより一回りくらいデカイ…
少し怖いな…って気持ちもあったけど何故か動けなかった。

2羽は寄り添うように並んで、一緒に顔を突っ込んでブルブルと
振るえ、何事も無かったかのように一緒に夜空に飛び立った。

…こんな偽りの自分で良いのかな…と思うと涙がポタポタと落ち、
音も無く温泉に吸収されていった。

一番最初に恋したあたしが、いまだ全然発展なし、それに比べてキ
キちゃんや、羽ちゃんは…と思うとますます泣けてきた。

少ししたら、男子に対して苛立ちが湧き上がってきた。

『もお！！！大体さ！！活発な羽ちゃんとキキちゃんと一緒に天然
のおとなしいあたしが一緒に居るわけ無いじゃん！！！共通点全く
無いし、その辺を不思議に思っただけは感づいてよ！！！！鈍感すぎ
て嫌になる！！！！それに！！！！』

それに！！それに！！と天然キャラを演じてきた今までのストレス
が一気に噴出し、あたしの頭で愚痴の温泉が出来上がった。

『カオリン…』と言う声にドキッと首がつりそうなくらいの速さで振り向いた。

キキチャンと羽チャンか…ほっとすると力が抜けた。

『もお！！びつくりしたやん！！』とまだ残っていたストレスを二人にぶつけた。

ぶつけてる間、二人が何も反撃をしてこず、うんうん…と全部聞いてくれた事に今度は悲しみが溢れ出して来た。

『もおやだ…あたし、五右衛門諦める…このままじゃ自分がおかしくなっちゃいそう…』

結局この5ヶ月片思いを続けて何も出来なかったな…

やったと言えば自分を偽った事くらい…

『もお諦めるならさ、本当のカオリを見せてみたら???』と羽チャンが言つと、キキチャンも『それが良い!!』と決定事項の様にあたしの意見は無視で話を進めたした。

話し方がきこえない…何か怪しい…そんな雰囲気が漂っていた。女のカンって奴かな。

墓穴を掘ったな…!

二人の会話で『もしかしたら五右衛門の好みは元気な子だったのかもしれないし!!』と言う羽チャンの言葉があたしの耳でリープートされた。

あのさ…と二人の会話を強引に割った。

『一つ聞いて良いかな??? キキさん、羽さん』 『羽さんって…』

『正直に答えてね。あなた達のためにも…』 あたしの言葉に二人ともドキッとした表情を見せた。

『五右衛門のタイプってどおゆう子だっけ???』

『可愛らしい…子…』

『ホントに??』

『うん…』

『ホントに?? ホントに??』

『うん…』

『ホントに?? ホントに?? ホントに??』

『……ううん…』

『実は…あの時、すっかり五右衛門のタイプの人を聞くのを忘れて…それで…男子に一番人気ありそうなの…その…』

ごめん!…!…と二人が、お湯すれすれまで頭を下げて、謝った。

はあ…やっぱり…

このまま沈めてやろうかと思ったけど、気がつかなかったあたしも悪いし、それに自分の好きな相手を友達に調べさせたのも悪い…

と自分でも少し反省し、聞こえないくらい小さい声で『ごめんね…』とあたしも謝った。

下げっぱなしの二人の頭を『えい！！』と押し、二人はひっくり返った。

『アハハハハ！！これでいいよ』とニツコリ笑って許してあげた。

もし天然キャラだったせいで五右衛門に嫌われてたりでもしたら…こんなもんじゃすまなかったけどね　と付け加え、二人をギロリと久しぶりに目を細めにらめつけた。

『カロリー…だ…』

羽チャンの声であたしは心に引つかかっていた大きな塊がシューッと除呪されるようにすっきりした気分になった。

『ふにゅ…なんだか疲れた…』

露天風呂から上がり、室内のお風呂にも入る事無く脱衣所に向かった。

時計を見ると3時を回っていた…

『3時間以上入ってたなんて…』

『ホントだ…』

ドライヤーで頭を乾かし終わった頃には3時半を回っていた。

体脂肪計付きの体重計があったので、久しぶりに体重を量ってみた。

『42.1キロか…』

今日めっちゃ疲れたのにあんまり体重は減ってないな…それに何だ

かフル馬拉ソンの距離みたい…

羽チャンが乗ると44・3キロ…とでて、ニヤリと微笑むと、羽チャンは自分の胸を指差し、勝利の笑みを浮かべていた。

逃げるようにその場を立ち去り、100円で牛乳を購入し、グビグビと飲み干した。

『げ…』

すっかり忘れていた…服がベタベタ…それに凄い臭い…ロッカーのドアを開けたとたん凄い異臭がモアモアと漂い、塩と泥まみれの服を親指と人差し指でつまみ、羽チャン達に見せた…

『う…そお言えば、着替えマスターの車の中だよね…』

『はあ…』とため息をはいて、渋々気持ち悪い服を着ることにした。

汗で湿った服の袖を通すと、鳥肌が体中に出来、ぞつとした。

三人とも、気持ち悪い服を着終わって、脱衣所を出た。

『あれ??何これ…うちの名前が書いてある』

【女湯には入れないので入り口に置いておく。気がついたら着替えてその部屋で休むと良い。マスター】

浴衣と810号と書かれた鍵が置いてあった。

アハハハ…ハア…と空笑いからため息へと変わり、再び体を洗いにお風呂に入り、810号室に付いたのは4時を回っていた。

あたし達は明かりをつける事無く、倒れ込むように眠った。

【今日は本当に御疲れ様…バイバイ、カオリン】

『再び樹海へ…』

輝かしい太陽もまだ出てない午前5時…五右衛門によって俺は起こされた。

俺を起こし終わると今度は光を起こしに豪快に布団をめくり飛ばした。

『お前ら起きろ！！！！』

五右衛門のちょっとした起こり口調すら、眠気であまり聞こえなかった。

昨日あれだけ体力を消費した上、寝るのも24時を回っていたと言うのに、この男は…

『おい！！樹海いくんじゃねーのか！？』

ああ…そうか。今日は朝一で樹海に行くんだったな。。。

嫌がる体を無理に起こし、バスルームで顔を洗って、強引に眠気を吹っ飛ばした。

同様に光もフラフラと洗顔し、要約3人が目を覚ました。

『よっしゃ！！ほな少し集合や！！』

光と呼ばれ、オーシャンビューのテラスに集合し、朝日が昇るのを見ながら、作戦会議をした。

作戦会議とは名ばかりで、実の所は朝食をとって、絶景の海を眺めながら雑談しただけだ。

一応計画みたいなのは立てた。帰宅時間と飲み物は忘れるな。それだけだ。

では行こうか！！と五右衛門が張り切り口調で言い部屋を出た。

念のため俺は羽樹に『光達と散歩してくるね！！』とメールを入れておいた。

樹海からこの温泉までマスターの愛車で10分だったが、歩くとさまざまな距離に感じた。

『それにしても、遠いな…』

『だな…』

『せやな…』

徒歩でひたすら歩き続けること45分…要約俺達は樹海の入り口の駐車場に着いた。

駐車場の角にある、自販機でジュースを買い、三人とも一気に飲み干した。

『だあああ！！お疲れ！！！！』

『おう！！お疲れ！！』

『いやああ。疲れたな！！』

地面に座り込み、疲れた、疲れたと己の疲れを強調しあった。
整備されてるとはいえ山道の車道を1時間近く歩くのは本当にしん

どかった。

『さて、帰りますか!!!』

『（（おう!!!!））』

つてあほか!!

三人とも疲れた。帰りたい。で意見は一致していたが、ココまで来て引き返すことは出来なかった。

と言うか、体が樹海に吸い寄せられるようにも感じた。

林道ってこんなに短かった???と思うほど、ロープを括り付けた大樹は直ぐに姿を現した。

『ココやココ!!』

『意外と近かったな。』

『うむ。ココからがしんどいけどな...』

死地もこんなに短かった???女性陣がいないせいか、樹海の死地もスムーズに進むことができた。

変わりに女性の癒しが無くなり、疲労は蓄積されていた。

樹海に入って30分で俺達は昨日の小屋に着いた。

『樹海の中より、温泉から樹海までの道のりが長かったな...』五右衛門の呟きに、俺も光も【うむうむ】と大きく頷いた。

夜とは打って変わって明るい樹海は意外と良いところだなと感じた。虫の死骸は相変わらず大量にあるのが気になるが...

心地よい風が木々をすり抜け、俺達を癒してくれた。

『ん???…確かこの辺だったよな?』

『せやな…』

昨日俺達が家の外に持ち出した工口本などが綺麗さっぱりなくなっていた。

俺達の後に誰か来て持っていたのでは…?と五右衛門が言ったが、俺も光もそれは無いだろう…と無くなっている事に疑問を感じた。

『考えてもしょうがないな…無くなったもんは無くなったんや!!家の中にまだ残ってたしそっち見てくるわ』

んじゃ俺も…光が開き直って、家にある本を見に行くと、五右衛門も一緒についていった。

んじゃ俺も…と結局3人そろって家の中に入ることにした。

ギギギギギギつと嫌な音を立て、ドアは嫌そうに開いた。

おじゃましまあす…つと小さい声でささやき、俺達は中に入った。

ギイギイと一步一步、歩くたびに床が泣き、シーンとした空気を切り裂いた。

んあ???と言葉とは言い辛い声を上げたのは光だった。

『家の中にあるわ…』

はあ???…俺も五右衛門も何を言ってるんだ???とばかりに顔を合

わせ首を傾げた。

『せやから、昨日外に出したエロ本と、優馬が拾ってきた日記がここにあんなや。』

why:???

知るか…

『…地下…』

足場の良さそうな角に固まり、俺と光は昨日の日記を、五右衛門は家の中を見回った。

『おい、ココ二階もあるんだな…』

『せや、ちなみに地下もあるみたいやで』

へええつと五右衛門が二階に上がろうとすると、あかん！！！！やめとけ！！と光が叫んだ。

ガコンッ！！！！

『ウオツ！！！！こえ！！！！マジでビビッた。』

五右衛門が階段の一段目に足を乗せると、すさまじい音をあげて、階段はつぶれたのだ。

『せやからあかん、ゆーたのに…』

『おせーよ…』

結局2階にはもお上がる事は出来なくなった。

上げれるかもしれないが、命の保障は無い…そんなところに誰が上がる。

『なあなあ。ちょっと地下に降りてみんか？？？』

2階にあがるのが不可能になったことで五右衛門は地下を見ようと言い出した。

持っていた日記を床に置き、五右衛門が覗いている穴…床が抜けた場所までそろりそろりと歩みより、俺も光も覗き込んだ。

少しの沈黙が流れ、『（お前が行けよ…）』と俺と光が同時に五右衛門を見た。

『アホか！…ココは正々堂々ジャンケンだろ！…いまどき多数決何て嫌がらせも良いとこやわ！…』

五右衛門の意見に異議を唱える事もなく、ジャンケンで決める事にした。

『（最初はグー ジャンケン！！ポーン！！）』

五右衛門…チヨキ

光…チヨキ

俺…パー……………

よっしゃあ！！…つともの凄い勢いで喜ぶ二人を背に、俺は本気で泣きそうになった。

『3回勝負にしようぜ！！』と張り切って言うてみるが、五右衛門には懐中電灯を渡され、光からはコレ結び付けとけとロープを腰に巻かれた…

行ってきます…コレが俺の人生最後の言葉にならんことを祈りながら、穴から地下に向かった。

ロープを結びつけた柱がメキメキと嫌な音を立てるたびに、へし折れるのでは無いかと不安になった。

光達の姿が見えなくなると、毎秒1回くらいのペースで『おい。ちゃんと居るか??』と光達に問いかけた。

『おう!!居るから安心しろー』と返ってくると少しほっとしたが、直ぐに不安が勝り、再び問う。

時に二人が俺をからかって、返事をせず、無視した時には、大量の涙が溢れ出し、『おい!!!!!!光!!!!!!五右衛門!!!!!!』とやけにデカイ声で話しかけた。

カカカカつと上から笑い声が聞こえてくると、恐怖と寂しさと不安が全て怒りへと変わり、血管がはちきれそうにもなったりした。

『おう!!着いたぞ!!!!!!』と下から上を見ると光と五右衛門が覗いていた。

『何かあるか???』と五右衛門にきかれ、辺りをみわたした。

1階とは違って、地下は真っ暗で懐中電灯無しの裸眼では全くと言って良いほど何も見えなかった。

おまけに、空気が格段に悪い…大量の水コリを吸い込み、何度もむせあがった。

懐中電灯の光明が変なビンの行列を映しゾクゾクゾクつと体中が震え上がった。

『ああ。なんかあるな…』と小さく返事し、何があった???と聞かれるまで口を閉じた。

『虫の缶詰…ビン詰めがあるわ…芋虫、カブトムシ、ムカデ、Mr・G…』

『う…』と五右衛門達もそれを想像したのか、手で口を覆った。が、現実には想像をはるかに超えていた。

テレビで見るより生々しく、芋虫にいたっては、恐らく100匹くらい芋虫が一つのビンにまとめて入れられており、見るだけで恐怖を感じた。

そんな気色悪いビンが側面の棚にずらつとなれべて置いてあった。

ふと頭に浮かんだのは、日記に書かれていた、言葉だった。

【私はいつもどおり食料を集めに虫たちを探していた。】

うっ…と嘔吐しかける口元を手で押さえ、何とか正気を取り戻した。

家の前の階段に大量の虫の死骸があつたのは、ここの住人が食料（虫）を集めすぎて、瓶詰め状態で放置し、虫達が生きている間に食べきれず、死んだ虫たちをこのビンをぶちまけるように玄関にすてたのか…

と家の前の大量の虫の死骸と、この家を囲うように虫達の死骸がばら撒かれていたのが納得できた。風が何かで玄関から飛ばされたのだろう…

『他には何も無いか???』と五右衛門の無責任極まりない声が耳に入り、イライラしながらも地下の暗い部屋に懐中電灯の光をあてた。

これ以外には特に何もなさそうだ…

あるとしたら、冷蔵庫のような箱…こんな物を五右衛門達に報告するとたまたまや無責任極まりない言葉…開ける！！…つと言つ言葉が飛んでくる。

よって無視。

意外と広い地下をくまなく見渡し、ベットみたいな物があることを確認し報告した。

『それ以外は何も無いか???無いなら引き上げるぞ…』

『今すぐたのむ…』と返事し、五右衛門達がロープを引き出した。

凄いやつくり体が宙に浮かび、その間も懐中電灯で回りを見ていた。

え!!!!!!!!!!?何だ!!!!!!!!!!今の!?!?!?!?!

揺れる体を何とかバランスをとり、再び懐中電灯を向けた。

!!!!!!!!!!!!!!

『早く上げろつ!!!!!!!!!!!!!!』俺は産まれて初めて腹の底から声を出した。

『Grandpa』

真つ暗な倉庫のような地下室で俺が見たものは人間だった。

俺が向けた光で、眩しそうに眉間に皺をよせ、目を細めて、こちらを伺っているのだ。

バタバタともがき暴れる俺を、『動くな！動くな！』と五右衛門達は言うがそんな事不可能だろ。

俺だって、一刻も早く引き上げて欲しい、できれば二人がスムーズに引き上げれるように大人しくしていたいところだ。

けど…体が勝手に振るえ、脳は【早く脱出せよ】と命令を出し、手は無理やりにもロープを上ろうと俺の意思とは別に勝手に体がバタバタと暴れるのだからどうしようもない。

二人に引き上げてもらってからも俺の震えは少しの間止まることは無かった。

襲ってくるわけでもなく、ただじっとこっちを見つめていた死地の住人はどこか見覚えがあるような顔だった。

発汗は酷かったが振るえも大分おさまり、二人に兎に角一回外に出ようと、必死で声を出し家の外に出た。

大丈夫か???…

怪我でもしたか???…

お化けでも居たのか???…

色々な質問を二人はしてきたが、答えは全て『否』ふたりもまさかこんな所に人間が今も住んでいるなんて思いもしなかったんだろうな。

五右衛門に渡されたアクエリアスを一気に飲み干し、要約大きく深

呼吸が出来た。

『地下室に…人が居た…』

え！？つと当然の様に驚く二人に、どこかで見たことがあるような顔だったと付け加えた。

『人形の置物を人間と見間違えたんじゃないのか？？』とまだ信じきれない五右衛門が訊いて来た。

…そうかもしれない…けど、それは多分「俺の見間違いであって欲しい…』と言う俺の望みであって、恐らくあれは本物だろうと、俺は小さく顔を横に振った。

『まさか…死体やないよな？？…』と光も少し声を震わせて訊いて来た。

否…

『間違いなく生きてるな、俺の目と奴の目が合ったし…あれは死体じゃない…』力強く訴え、俺はそのまま大の字になって寝転がった。

何処で見たんだろうな…

確かに見覚えのある顔だったなあ…

綿菓子のような雲が軽快に青い空を風に乗りながら散歩し、それと同時に周りの木々が会釈するようにザワザワとお辞儀した。木に張り付いてニィニィと鳴いていたセミたちも大きな風と共に飛び立った。

俺の顔の横の雑草は飛ばされないように根に力を注いで踏ん張っていた。

野に咲く…花の様に…雨に打たれて…

野に咲く…花の様に…人を和やかにして…

何故か俺は、頭の中で【野に咲く花】を歌いだしていた。

恐怖の体験からまだ10分も経っていない無いつのに…何考えてんだ俺は…

そもそも、まだココは現場中の現場…家から外に出ただけで、あの家には謎の生命体が存在している…

こんな呑気に【野に咲く花】を熱唱している場合では無いではないか…

【野に咲く花】を歌いたい気持ちを押さえ、熱唱するのは温泉に戻ってからにしよう…と謎の誓いを立てた。

あ！！？…温泉…？？

何だっけ？？？…妙に温泉というフレーズが頭に引っかった。

なあ…と二人に昨日の温泉での出来事を聞いてみた。

『あ？？』

『何やねん、黙りだしたと思ったらいきなり昨日の温泉の事かい！』

『何か気になってさ…』 良いから細かく教えてくれと寝ていた体を

起こした。

『まあええけど、昨日マスターの知り合いの温泉に行つて、水を手に乾杯して、貸しきり状態の風呂に入ろうとして、服を脱いだる時に五右衛門の頭から大きいムカデが出てきて、心底ビビつて、そのあとに風呂で体洗つて、お前ら二人がサウナに入つて、その間ワイはジェットバスで寛いで、お前らがサウナから出てきたら皆で露天風呂行つて、露天風呂のつくりがうっすい竹の壁で出来とるに気がついたワイの提案で女風呂を覗くことになって、そっからはもおドンチャンさわぎで変なじいさんは出現しすわ、警備員はくるわ、』

待てー！ー！ーと光の長々しい演説を中断し、俺が戸惑いながら、言い放った。

『じいさんだ…』

『は？？？』と光も五右衛門も何を言い出すんだという表情を俺に向けてきた。

『地下室に居たの…温泉で俺らと一緒になつて覗いてたじいさんだわ…』

『（なに！？！？！？！？！）』

どこかで見たことがあると思つたらあのじいさんだつたとは…脳裏に焼きついたあの不気味な顔と温泉での陽気なじいさんの顔は同じ顔でも雰囲気の違いでパット見ただけでは同一人物とは思ひもしなかった。

俺は、あのじいさんと分かると安心感が湧き上がってきて、俺は光と五右衛門を置いて家に駆け出した。

待てよ！！と光も五右衛門も俺の後を追ひ、再び家の中に入った。

『じいさん…まだ居るか？？』と穴に向かって話しかけてみるが返事はなかった。

『やっぱりまちがえじゃねえのか？？』と言われると少々不安にもなる…

『いや、小僧。間違いでは無いぞ。』

穴からではなく、俺達の背後から声が聞こえ、ビクツと3人揃って穴に落ちかけた。

ふと後ろを見るとじいさんが勇ましい姿で立っていた。

『おー！！じいさん！！！！』

『小僧達じゃったのか…わしはてつきり樹海の見物者かと思ったぞ…あいつらは本当に不屈き者よ…』

俺達も見学者ですが…とは言わない方が良く、黙って三人で暗黙の了解を得た。

俺達は爺さんの話を聞くべく、外に出て、爺さんの取って置きの洞穴のような洞窟…のような奇妙な所に案内された。

期待と不安が高まる中、俺達は爺さんに着いて洞窟の奥の方へと進んでいった。

『Cave…』

最高のアウトドア日和

お天道様もテカテカといつもより綺麗に輝き、風も程よく、日光浴でもしながら一日過ごせそうな天気だ。

磯の香り。大地の香り、つつい鼻の穴を大きくして深呼吸したくなるような…

が俺達は今、外界とはまるで違う真つ暗な洞窟に居る。

『なあ。じいさん。ソロソロ何か話してくれよ。何も言わずに、ただちよつと着いて来いって言われるままこの懐中電灯無しでは歩けない変な洞窟まで連れてこられて…』

と五右衛門が言うと話最後まで聞かず、じいさんは『よし、ここじゃ。』と言い、少し湿った岩の上に腰掛けた。

『小僧。もお懐中電灯きつてええぞ。』

とりあえず言われるがまま明かりを消すと、一瞬にして、直ぐ隣にいる五右衛門や光の顔が見えなくなるほど暗くなった。

『小僧！！！すまんがもう一度明かりをくれ！！』

またもや言われるがまま明かりをつけると爺さんがマッチをジュバつと音をたて擦り火をつけた。その日を岩の上にあるろうそくに付け、辺りはろうそくの優しい光に包まれた。

『消して良いぞ。』

なんだこいつ！！！とイライラする気持ちを抑えながら、俺達もその場に座り込んだ。

『さて、なにから聞きたいかね。』

と言うじいさんに、光が即座に、質問を繰り出した。

『とりあえず1つ目の質問や、なして、こないな気味の悪い洞窟にきたんや??』

じいさんは少し黙り込み、それは後から教える。とだけ言い、それ以上は答えなかった。

『なんやそれ。まあええわ。次ぎの質問や、あんたはココ（樹海）で何してんねん??』

『生活じゃ。』

『は?!?あんた、現実逃避者か??』

『まあその辺は好きに解釈してくれてええ。わしはココで生活せなあかん理由があるんじゃ。』

『あそこのボロ小屋がじいさんのマイホームか??』

『そうじゃ。ボロ小屋って言うでない。』

『あの石は何や??それにあの未来の日付のエロ本、一番聞きたいのはこの二つや。』

光の質問にじいさんの寝てるような表情が一気に変わり、キリっとした、表情で答えだした。

「わしもその事を調べるためにかれこれ20年ここで住んどる。」

爺さんの話で色々と分かった事があった。
まず本名だ。

爺さんの本名は石田密造と言つらしい。

年齢は87歳で見た目異常にかなり老いた人のようだ。

そもそも、ココに住むきっかけになったのは、火事で家族が亡くなり、生涯孤独の一人身になってしまったことがきっかけらしい。

50年近く人生を共にしてきた最愛の女性…

色々と苦労をかけたが、立派に自立した自慢の息子……

そんな息子からの最高のプレゼントとも言える、仕草がとても可愛い孫……

火事という事故で、一瞬にして、大切な人達が消えてなくなってしまう...

そんな孤独すぎる毎日が苦痛で自殺するつもりで、何ももたずに樹海に飛び込み、結局死ねず今に至る……

と言うのは全て嘘らしい。

[illegible]

力力力と笑い、じいさんは話を続けた。

当時わしはまだピチピチの60代じゃった。

仲間内での老人軍団の旅行でわしらは熱海の温泉旅行へ行つたんじや。

わしも昔はやんちゃしててのお。色んなおなごを泣かして来たもんじや。

体力と知能とルックスには自信のあったワシは、仲間内でもリーダー的な存在じゃった。

熱海の温泉旅行も、無事に終了してのお、ワシらはそのまま富士山を見に行つたんじや。

『小僧、達磨山ってしつちよるか??』

知るはず無いだろうと首を横に振る俺達にじいさんは『ふむ』と頷き、『日本で一番綺麗に富士山が見える場所じゃ、小僧達も観光で静岡にきたなら是非行ってみるとええ。』と得意げに言い、『話そらすでない…』と謎めいた怒りを俺達にぶつけ、てめえが言い出したんだろ。…と言う気持ち堪えて、爺さんの話の続きに耳を傾けた。

達磨山からの富士山は話に聞く以上に絶景じゃったんじや。

残り少ない命尽きる前に日本一の山を是非間近で見たい、と言い出した不屈き者がおつてのお。

そのまま、ワシらは富士山の近くまで行つたんじや。

一人の阿呆が、『富士山には、死の樹海を通り抜けねば登る事すらできないんじや。皆の集心してかかれ。』と言いついての。。。

ワシらは無謀にも死の樹海を抜ける事にしたんじや。

ところがお、本当に樹海で迷ってしまったてな、老いた体には少し

の迷いが命取りになるんじゃ。

お天道様は意地悪でのお…ワシらが迷っているのを知っておるのにいきなり雨を降らせたんじゃ。

ワシらは少ない体力を振り絞って逃げるように雨宿りできる場所をさがしたんじゃよ。それで今居るこの洞窟にたどり着いたんじゃ。

最初は入り口で雨が止むのを待ってたんじゃがな、一向に止む気配が無かったもんで、ワシらは腰を下ろせる場所を探して、しばしの休息をとったんじゃ。

何時間くらいかの…。皆眠ってしまつてな、恐らく4～5時間くらいこの洞窟で雨宿りしてたんだわな。

起きた頃にはすっかり日が暮れてて雨も止んでおつたわ。

お終い。

『え????なんやねんそれ!!ワイの質問の答えに全くもつてなつてないやんけ。』

爺さんの話が終わるや否や光は鋭く突っ込み、怒りをあらわにした。

『ソロソロかのお…』

爺さんが光の怒を無視し、一人で呟き「小僧。ソロソロ外にでるぞ。」と言い俺達に有無言わずそそくさと歩き出した。

止むを得ず俺達もムシャクシャとした気持ちを引きずりながら、爺さんの後を追って歩いた。

『は！！！！？』 出口が見え、俺達三人は絶句し、口をポカンとあけ、何度も携帯の時間を確かめた。

『入ったのはまだ、午前中だったよな？？』 俺の言葉に光も五右衛門も大きく頷き、足を止めた。

爺さんだけが、何事もなかったかのようにタダタダ出口へと足を進めていた。

『何を突っ立っておるんじゃ。早くこっちに来い！！』

急に後ろから誰かに追われているような恐怖感に襲われ、俺達は足早に、外にでた。

『この洞窟は時忘れの洞窟じゃ……』

『でお出かけ』

ムニヤムニヤムニヤ…ハッ！！！！

『今何時！！！！！！』

『あ、薰おはよー。良く寝てたねえ。今は13時だよ 私と羽チャンは10時くらいに起きてさっきお風呂から戻ってきたとこ。』

『えっええ。なんで起こしてくれないの…あたしも一緒に朝風呂入りたかったのにいいい…』

『起こしたよ！！ほつぺたつねったり、乳首つまんだり』

なんと…その言われると何だか頬と胸の辺りがムズムズとしてきた。少し不貞腐れながらもあたしは、二人と一緒に昼食に行った。

『ってか何処に行くの？』寝起きで、顔を洗って歯を磨いて、服を着替えて、何も聞かずに二人についてきたので少々気になった。
『朝マスターから聞いたんだけど、近くに普通のファミレスとは違う美味しいファミレスあるらしいからそこに行こっかなって』

キキチャンも羽チャンも念入りに準備してただけあって、いつもの二人より数倍可愛く見えた。

あたしときたら…スッピンでにジーパン、Ｔシャツ…酷いなコレ…

羽チャン達と共にタクシーに乗り目的地に向かった。

目的地ってのが何処にあるのかも、あたしは知らないけど…

スカイブルーとは正に今日みたいな天気のことを言うのだろうかと、タクシーの窓を開けて海の上のある綺麗な空を眺めていた。

ゴゴゴゴゴと窓から磯の香りがする風が入り込んでくるのがたまらなく気持ち良い。

扇風機みたいにアアアアアアってやってみたけど上手く出来なかった…

それにしてもこの運転手結構飛ばすなあ。一体何キロ出してるんだろ…

覗いているのがばれない用に後ろからチラッと見てみた。

時速80キロ…

Dカップ…

ふと昔やっていたTV番組を思い出し。

たしか、時速80キロで車で走っている時に窓から手を出して、モミモミってやったらDカップのバストと同じような感触になる！！とか言ってたような…言ってなかったような…まあ只だしやってみよう

少しだけ手を出し、モミモミ…微妙。

自分の胸と比較しても良く分からない…というよりいまいちピンと来なかった…

『ちょっと…何やってんの??』とキキちゃんに聞かれ、心拍停止するかと思うほどびっくりした。

びっくりした事であたしはあることに気がついた。

【あたしってDカップも無いじゃん…】

Challenge Again

再び手を出し、今度は隣のキキちゃんの胸を鷺掴みにした。

お辞めなさい。とキキちゃんに頭はポカッと叩かれて、中断した。

【んー…少ししか確認できなかったからあんまり分からなかったけど…何となく似てる様な…まあいっか】

髪が豪快に風に洗われ、早30分が経っていた。

気がついたらバツバサ…

手クシではどおにもならないくらい爆発している事に気づいた頃には時既に遅し…

『これかぶつとき』、と言われキキちゃんに帽子を借りて、あたしの頭は何とか落ち着きを取り戻した。

そして目的地に着いた。

昼ごはんのつもりがすっかりおやつの間になっていた。

グウウウウとお腹が恥ずかしい泣き声をあげて、空腹を訴えてきた。

よくよく考えたら昨日の昼から…何も食べてなかったんだ…その考えると余計にお腹が空いて、目が回りそうだった。

『ココかな?..』

『場所的にはココだね…』

ううう。お腹を押さえ俯いていた顔を上げて、二人の見ているお店をみた。

『え！？ココ????この何処がファミレスなの！？！？』

『だよね…』

『うん…』

何処をどう見たらファミリレストランになるのだろう…見た目は完全に居酒屋でお店の入り口には暖簾までかかっていた。

こんな昼間からやってるのかな…と思いながらもあたし達はガラガララッとドアを開けた。

『つらつしやいませえええ！！！！』

『らつしやいませええ！！！！』

と店長が叫んで、バイト、店員が続くように叫んであたし達を迎え入れてくれた。

『3名さまで宜しいでしょうか！？』

『はい。』

『3名様ご案内です！！！！』

と店の奥の席へと連れて行かれた。

周りを見ると、居酒屋とは思えないほど若者で溢れていた。

客層は…確かにファミレスだ…

メニューになります！！っとこれまた元気な声で手渡され、三人でメニューを眺めた。

狂米 きやうまい
般若湯 はんにやとう
九献 くけん
大神酒 おおみき
豊神酒 とよみき
白酒 しろき
黒酒 くろき
三国一 さんごくいち
玄水 げんすい
一夜酒 ひとよざけ
硯水 けんすい
間水 けんすい
聖 ひじり
聖人 せいじん
霞 かすみ
賢人 けんじん
紅面 くめん
久志能加美久志 くしのかみくし
濁賢 だくけん
白玉 はくぎよく
金波 きんぱ
真一 しんいつ
白墮 はくた
玉友 ぎよくゆう
軟口湯 ななぐちとう
美禄 びろく
百薬長 ひやくやくのちやう

ずらーっと見たことも無い日本酒が書かれているかと思ったけど、
じっさいのメニューには全品ファミレスメニューみたいな安い単品
がずらーっと書かれていた。

『おおお ファミレスじゃん 美味しそう…』と羽ちゃんがジュー
つとよだれを飲み込み、メニューに釘付けになった。

あたしも、キキちゃんも負けじと食らい付き、メニューをみながら
注文もせず20分くらいが経ち、『お決まりでしょうか!?』とバ
イト君に声をかけられた…

『コレとコレとコレとコレとコレ!…!』

『あああとコレも!…!』

と自分達の食べたそうな物をひたすら指差して、女三人で食べると
は思えないほどの量を注文した。

『 でお出かけ 2nd 』

私達の注文した料理が次ぎ次ぎと運ばれてきた。

コーンスープに手羽先、薄焼きピザ。

野菜サラダにウィンナー、ペペロンチーノ。

他にもまだまだ沢山運ばれてきた。一つ一つ黙々とはなく話しながら食べていった。

『そー言えば羽チャンは何で優馬と付き合うことになったの???』
薫がコーンスープをジュルジュルとすすりながら羽ちゃんに聞いた。

『え!?!んー...』

『え!?!んー...ってあんたね。好きなんでしょ!?!』

『うん。まあ今は好きだけど、付き合いだしは何だか良く分かんなかったし。最初はお試し期間みたいだったかなあ』

ほうほう。なるほど。なるほど。と薫はいつも持ち歩いている手帳に書き記した。

『ちょっと!?!何かいてんの!?!』

『え!?!だって、あたし付き合ったこととか無いし...経験者の意見は素直に聞かないと...ね』

フフフと笑って、薫は再び続きを書き出した。

『で、キキはんは？？』とペンのキャップを咥えながら、もごもごと私に質問してきた。

『へ！？…私の場合はおお大体皆知ってるでしょ！？！？』

『じゃあ何で３人の中から光だったの！？そもそも別に３人の中から選ぶなんて決まりは無いわけだしさ。』

『まず、五右衛門は薫が狙ってたから無理だし…羽チャンは羽チャンで優馬の事結構気に入ってるような雰囲気出してたし…それでその二人とはあまり関わらないようにしてたら、必然的に光との時間が増えて、それでかな…３人の中から選ばなくても良いかも知れないけどやっぱり一緒に居る時間が長いと他の子達よりは親近感あるしね…』

って私なに長々と語ってんだろ。。。

ウインナーを刺したフォークを片手に、長々と語っている間、薫と羽チャンはスープを飲んだり、ピザを切ったりと…全く話を聞いてないように思えた。

『で！？』と薫が何に対しての『で！？』なのかこっちが疑問に思うような質問をしてきた。

『でってなにさ！！』本当に聞いてなかったのかな…と質問に質問で返した。

『で…それから光とは！？！？…って事じゃない？！』
『ほうほう』

羽チャンのフォローにピザを口いっぱい頬張りながら薫は頷いた。

別に…たいした事はしてないよ…とだけ答え、私もピザを食べた。

えーどこまでいったのさあ…

キスはしたの!?!?…

まさかもお肉体関係に!?!?…

と鋭い質問を繰り返して出てくる二人に『コーヒー取ってくる!』
と言ひ私は席を立った。

『あ!あたしオレンジジュース。』

『うちはグレープフルーツ!』

と結局3人分のドリンクを取りに行き、戻ったとたんにまたもや質問攻めにあつた。

はあ…なんでそこまで他人の事が気になるのかね…そつとしておいておくれよ…と言いたかった私だったが、ニヤニヤと憎たらしい二人にそんな同情を乞うようなセリフははけぬと、『キスはしたよ!』と答えた。

オー!…つと何がオーなのか分からなかったけど、少し私は照れた。

『DP!?!?』

『DPって!?!』

『ディイイプ!?!』

ディープキスっていつからDPって略すようになったんだ…それにディープキスの略なんだから普通はDKなのでは…とか思いながらも『まあそだね…』と隠しても直ぐ問われる事は先ほどの経験で特と身に沁みて分かったから、ありのまま答えた。

次の質問が来る前にと。私は『薫はどおなの！？これからどおするの！！？』と質問される前に質問した。

『え！？うううん…今日、二人で話してみる！！』

なんと…予想外の回答に私も羽ちゃんも食べようとしていたサラダを一旦小皿に戻した。

『え！？それってカオリンじゃなくてカオリで話すって事だよね？！？』

『そだよ。』

『いきなりでからかわれてるとか思ったりしないかな！？』

『ええ。そんなに変わってたくない！？可愛い子演じたとしてもあたしはあたしだし…』

いやいやいや、キャラが今とは全然違いますよ…多分びっくりするだろうな…五右衛門…あ、光や優馬もびっくりするだろうな…

『まずさ！！光と優馬にだけ言ってみたら！？！？』羽ちゃん。Nice Idea！！

『うんうんうん。それで優馬達に何気なく伝えてもらった方が良いと思うけど…』やだ！！…と言われる前に私もすぐさま賛成し、薫の言葉を奪った。

『んー。…でも…やっぱり自分で言いたいし、今日話するよ！！』と結局は『やだ！！』と変わらない答えだった。

『そっかぁ上手く行くと良いね』と羽ちゃんがグイッと親指を立

てて薫に微笑んだ。

私はと言うとやっぱり上手く行かない気がして…親友ながら少々不安を感じていた。

話しながらパクパクと注文した品と平らげて、案の定食べすぎて3人とも腹痛になった。

1時間くらい外の風に当たって、要約腹痛も落ち着きだした。

『ねえねえこの近くに神社あるみたいだし行ってみない!?』と羽ちゃんが

提案してきたので、

賛成 と節約のため、神社までは歩いて向かう事にした。

『でお出かけ 3rd』

節約と言う主旨で歩き出した私達だったけど、直ぐに疲れが溜まり、タクシー使おうよおと言う声も上がりだした。

『あんなに食べたんだし、運動しないと…』の一言で私たちは息を吹き返し、地獄の上り坂を母から貰った二本の足で歩ききった。

『着いたあ。地図だとこんなに近いのに…歩いてみると結構遠いね…って車で10分って書いてあるし…!!』

『阿呆…』

ハアハアと久しぶりに息切れするほど運動し、球技大会以来運動不足だったのかな…と少しお腹をつまんでみた…

今夜あたりから腹筋でもしようかしら…。

フジサンホンケウセンゲンタイシャ
富士山本宮浅間大社

んー…なんて読むのか分からないや…

この何たら神社には私たちの10倍以上のとてもなく大きな赤色の鳥居はついつい見上げてしまうほどの大きさだった。

その大きな鳥居をくぐって神社内へと足を踏み入れた。

中はとても広く、木々に囲まれてとても落ち着ける場所だった。

『おやおや、若い女性が見学とは珍しいですね…』

ココの住人かな？？私達の3倍、マスターの倍は歳を取られているのではと思うご老人が私たちに話しかけてきた。

『あ…いえ、近くまで来て、あの鳥居の大きさにびっくりしてちょっと寄ってみただけです。』

軽く会釈すると良かったら、ご紹介しましょうか！？とご老人はニツコリと笑って言うてくれた。

勿論お断り願いたい。

がせつかくのご老人の好意を踏みつける事など流石の私達もできず渋々にご老人にお願ひしますと再び頭を下げた。

『ここはお、摂社・末社あわせて1、300余社を超える浅間神社の総本宮なんじゃ。』

『そうなんですかあ』と言ってみるものの何のことやらさっぱり。

『富士山を御神体とする、本殿・拝殿・桜門などはなあ、徳川家康の建立寄進によるもののお、ほいでな、あそこに見える本殿と拝殿は重要文化財なんじゃぞ。』

『へえ。凄いですね』と薫もニコつと笑って答えたが恐らく私以上になんか無いですね…

『お嬢さん方は丁度間に来てしまいましたね…』

『はい？？間と言うと？？』

『毎年5月4日～6日にやぶさめ祭って言う祭りをやっておつてな、馬に乗りながら弓でパパパつと的を打ち抜くんじゃ。』

『おお』 以外にも羽チャンはこうゆう話は好きみたいらしい、私と薫は少し安心し、ほつと息を漏らした。

『それでな、11月3日～5日の秋祭りがあつてのお、これには10万人の人が訪れるじゃぞ。また来るようなら是非どちらかの祭りに参加しなされ。』

『はい！覚えておきますありがとうございます』と羽チャンが頭を下げたのをみて私も慌ててありがとうございますと頭を下げた。

『ああ、そうそう、境内には国指定特別天然記念物の「湧玉池」わくたまいけがあるんじゃ。お時間が御ありなら是非みてくるとええ。』と最後に言い残し、ニコニコとしながらご老人は去っていった。

『はあ…要約行ってくれたね…』

『だねえ…何か気疲れしたし…』

と私と薫が気だるげに話していると羽チャンは『うちこおゆうの好きなんだよね それにこの神社思い出した』と頭の引き出しを次から次へと空けだした。

ご老人よりは聞きやすかったけど流石に重々しい話で私も薫も頭がパンク寸前だった。

正面大鳥居から鏡池に至る約50メートルの参道を進み、羽チャン曰く楼門より入り参拝して湧玉池神田川沿いのふれあい広場へと私達は足を進めた。

この神社には沢山の桜の木が植えられていて、春には私も是非来てみたいなあと考えた。

羽チャンが言うには500本以上の桜の木が植えてあるらしい。

『建物はあんまり楽しくなかったけど、外の景色とかは凄いいねえ』
と薫の意見に私も同意だった。

これで桜が咲いていたら文句なしだなっと私もうんうんと頷いた。

羽チャンに案内され、東脇門を出ると平安朝の歌人平兼盛が「つかうべきかずにをとらん浅間なる御手洗川のそこにわく玉」と詠じた湧玉池があった。

この歌なのか詩なのか良くわからない言葉も、羽チャンが得意げに聞かせてくれた。

なんでそんな事知ってるの!?!と訊ねると日本人なら当然でしょ…と当たり前のように言われた。

普通の日本人はそんな事しりませんが…

『この池は富士山の雪解け水が何層にもなった溶岩の間を通り湧出するもので、特別天然記念物に指定されてるんだってさ』

そんな事…言われてもねえ…それが凄いいのか私には分からなかった。

神社をぐるりと一周、一休み以上の時間をかけて回った事もあり、いつの間にか、薄暗くさつきまで元氣だった太陽もソロソロ沈もうかなと、考え出している時間だった。

『ソロソロかえろつか 今日これからが勝負だしね!!薫!!』
と羽チャンが言うつと、あ!!...と思い出し急に緊張して硬くなつていた。

アハハハと私と羽チャンが笑うつと、小声で応援してね...と言つてる薫を見て、薫の本来の姿は実はカオリンのほうに近かったのではないかな???なんて思つたりもした。

『（勿論応援するよ）』と羽チャンと一緒に声をそろえて言うつと薫は『ありがと』とニコニコと笑つていた。

私達は夜の戦に向けて、タクシーを捕まえてマスターの待つ温泉へと戻つた。

長い道のりを眠り過し、『お客さんつきましたよ!!』と言う運転手の声で起こされ、ちよつと待つててください!!と私だけ降りてマスターを呼んできた。

『なんやなんや!!』と慌てて浴衣の前を結んで、二人の待つタクシーの所まで連れて行つた。

『お金...宜しく』と私達は、走つて温泉の女湯へと逃げ込んだ。

『ゴラアアアア!!』と追いかけてよとするマスターが熊みたに見えて本気で面白く凄く笑えた。

『お客さん!!!無賃乗車ですか!?!』

『あ...いや、今払います。いくらですか!?!』

『8790円で…』

『高…!…!…!』

『時忘れの洞窟』

すっかり暗くなった外に戸惑いながらもキョロキョロとあたりを見回しながら、歩き、爺さんの家であるボロ小屋に着いた。

ちよつとここで待つとれい。と言われそのまま例の石の前で俺達は爺さんを見送り、再び戻ってくるのを待っていた。

『どお思つよ…』

『どおつてお前…時忘れの洞窟とかありえねえだろ、非現実的すぎるし科学的にもおかしい…俺の尊敬するアルベルト・アインシュタインさんの相対性理論だろ。爺さんの話に夢中になってただけや…』

五右衛門の問いに俺も率直な感想を述べた。

『せやな、ホンマに時間を忘れてワイらも気がつかへんうちに爺さんの話に夢中になつとっただけかもしれへんな…』

『うむ、それしか考えられんだろ…あの謎めいた洞窟に入ったら勝手に時間が早送りされるなんてどお考えてもおかしいだろ…』

と俺達は戸惑いながらも【夢中になっていただけ…】と言ひ聞かせそれで納得しようとしていた。

『小僧、残念じゃがそれは違つぞ…ワシも昔はそお思つたんじゃがな…』と言ひながらランタンを片手に爺さんが戻ってきた。

ガチつと音をたてポワつと俺達の周りを優しい光が包んでくれた。

虫達がワサワサとランタンの光目掛けて集まってきた、大きな蛾を

一匹捕まえてむしゃくしゃと美味しそうに食う爺さんを見て、ゾクゾクつと3人とも震え上がった。

『おお、すまんすまん。あまり見慣れぬ光景で気持ち悪いって思うのも無理わないな。忝い（かたじけない）…』爺さんは手についた蛾のりんぷんをズボンでパツパとはらって、軽く頭を下げた。

『爺さん…唇に蛾の触角がついてるぞ…』つと五右衛門が言うと、『おっと、これまた失敬』と舌でペロリと当たり前の様にさらってご馳走様でした。とゲツプした。

『それはそうと、小僧達はまだあの時忘れの洞窟を信じてないようじゃな。時忘れの洞窟と言うのはワシがネーミングしただけで実際は只の洞窟じゃ。あの洞窟はな、死者の魂が通常には考えられないほど集まっておつての…樹海で自殺した寂しい死者が集う洞窟なんじゃ。』

怖い事と坦々と当たり前の様に言つてのける爺さんに俺達はいつになく真剣な表情で話を聞いた。

『ワシがさっきまでおつた、場所はその中でも霊が大量に集まる場所でな、気づいてたかもしれないが、あそこには壁に小さい穴が開いておつてな質量の無い霊達にとってはあそこが交差点の中央みたいなもんなんじゃよ。』

そんな事言われても…穴にも気がつかなかったし、今ままでそんな不気味なとこに居たと思うと恐怖で気絶してしまいそうになった。そんな俺達を無視し、爺さんは話を続けた。

『あそこの場所は時空間が歪むんじゃ、何年も前に死んだ人の霊、

最近死んだ人の、色々な種類の霊達があそこをに集まるもんだから恐らく、時間が狂ったんじやろうな。まあ現実的に考えてありえない事じゃからの。言葉では説明できん、小僧らを納得させるには体験させるのが一番じゃろ。」

そりやそうだ。そんな事を言われても、まず信じるはずがない。現に体験した俺達でも俄かには信じがたい内容だった。

『せやかて、爺さんはなして時間が歪んだって思うん！？ワイ達が言ってるみたいに単純に時間を忘れて夢中になってただけかもしれないで！？』

『うむ…そうじゃなあ。』と言い爺さんはランタンと一緒に持ってきた本を俺達の前にバサツつとだした。

光が最初に見つけたエロ本だった。

『これじゃ。コレには生が無い。夢中もクソもないじやろ。ワシだつてな、実体験をただけ繰り返しても信じれなかったんじや。ある日、ワシはあそこで1日過したらどおなるんだ！？と言う疑問きかられてな…愛読していた本を持って24時間こもったんじやよ。』

このあとは何となく爺さんの言わんとす事が分かった気がした。

『先週買った本が未来の日付に…いや、未来の本に変わったんじや。流石にワシもたまげたよ。我が家に帰って、その本を読もうと思つて家に帰ってみたんじや。すると一日しか経ってないのに家は崩壊状態、バリバリに割れた鏡に写る自分をみて開いた口がふさがらなかったよ…髭は伸び、ちゃんと白髪染めで黒くしていた髪の毛も真っ白になっておつてな…流石にどおしたものと2〜3日ほど寝込

んだわい。』

それだけ言つと爺さんは黙り俯いてしまった。俺達も爺さん同様しばし沈黙し、自分達の体は大丈夫だろうか…とキョロキョロと体中を見回した。

『心配せんでええ…小僧らがいってたのは20分〜30分じゃああその時間にしても精々半日つてとこじゃ。1時間以上あの中に居ると丸一日寝てないと言つ、疲労が後々襲ってくるがな…まあ問題ないわい。』

『それにしても何で霊が溜まると時間が狂うの!?呪われたりだとか、そお言つのならまだ納得もできるんだけど…』

『せやな、時空間を歪めるなんて話聞いたこともないで…』

『うむ、そもそも何であそこに霊が溜まつてゐるって爺さんは分かったんだ!?』

これこれ、ワシは聖徳太子じゃないんじや、質問は一人づつにしてくれ。と言つと、最初に発言した俺の質問から答えてくれた。

『まず、何故呪つたり襲つたりじゃなく、時間が歪むのか…小僧名前は!?』

『あ…優馬つす。高橋優馬。』

『優馬、呪うだの襲うだのそのような霊に対しての印象は何処から来たんじや??実体験ではなからう…』

『まあ…実体験ではないっすけど、TVやネットとかではそおゆう事を良く聞くから…ってか悪いイメージしか伝わってこないから…』

『ふむ。まあ人間と同じで霊にも色々、十人十色じゃなく十霊十色っていうのか。大きく分けると良い霊、悪い霊の二つにわかれるんじや。おぬしはもし幽霊に出くわしたらどう思う!?』

え！？と少し戸惑ったが、正直に怖い…恐怖を感じる…と答えた。

『じゃろ。それが悪いイメージを拡大的にしてるんじゃ。』

『は！？どついうことなん！？』

爺さんはふう…と大きくため息をはき、説明してくれた。

『小僧例えばな、このまま進むと土砂崩れにあつて地面が崩壊する…そんな道を走っていたとしよう。おぬしは土砂崩れが起こるなぞ、考えてもいないからそこを走つとるんじゃをな？？』

『まあそおですね。』

『そこに幽霊が現れたらどおする！？勿論、恐怖に駆られて逃げ出すじゃろ！？お主は幽霊がでて怖かった…でも実際はそれで土砂崩れからは助けられた…幽霊によつて命を救われた…』

『なるほど…でも…それが本当に助けられたか何てわからないつすよね？？』

『そうじゃな。だから考え方次第なんじゃ。世間の幽霊のイメージが凄いいい存在だったら幽霊を見ただけで幸せな気分になる…固定概念によつて悪い印象しかないんじゃ…』

なるほど…と何となく納得できた。爺さんはそれでな…と話を続けた。

『それでな、ココからはその小僧の質問にも答えることになる。』

良く聞いておくんじやよ。と爺さんは光を指差し、光は『はい。』と頷いた。

『結論から言おう。あそこに居る霊は悪い霊じゃ。と言うより寂しい霊の集まりなんじや。呪ったり、襲ったり、一瞬にして害を及ぼす事はせんがな。時間を歪める…と言うのは、わしらの命を吸つとるちゆうことなんじや。』

『幽霊は幽霊同士がお互い見えるわけじゃない。幽霊になつても見えるのは生きている人間だけだな。死んだからって死んだ人が見えるわけじゃないんじや。故に孤独。足もなく、体力もない幽霊は移動が殆ど不可能なんじや。だから一箇所にとどまるんじや。動けない…そして孤独。そんなところに人間が来る。』

『少しでも早く自分達と同じ世界に来て欲しいと思い、わしらの命を吸うんじや。だから小僧らが言うように呪い…と言っても間違いないかもな。』

と爺さんは坦々と語ってくれた。爺さんはちよつと失礼、と言い水筒のようなものに入った。水をがばがばと飲み、俺達にも飲むか！？と進めてきた。

喉がからからでは是非頂きたい。と思つたが、蛾をむしゃくしゃとうまそうに食っていた爺さんの水だ…飲みたいのを我慢して丁重にお断り申し上げた。

『Mystery』

時忘れの洞窟の正体は幽霊達の悪事だと聞かされ、爺さんが五右衛門の質問に答える前に少しの休憩に入った。

俺達は昼飯にと持ってきたおにぎりを食べ、流石に喉が渴いてしまったので、爺さんに水を貰う事にした。

『カカカ。心配せんでええ。コレは湧き水じゃ。ほれ、その』と俺達の不安そうな顔を見て、爺さんは笑いながら言い放った。

湧き水の場所を教えてもらうと、飲み干して空になったペットボトルを片手に、3人で水を入れにいった。

『なあ…さっきから変な感じがしてるのんはワイだけか!?!』と光が爺さんに聞こえないように小さい声で俺達に訊いた。

『いや、何かずっと、寒気がするって言うか…見られてるって言うか…』

『うむ、まあ一瞬にして半日くらいが進んだんだし体が違和感を感じるのも無理は無いかな…』

不安な思いを解消する事も、解消するすべも見つける事すら出来ず、水を汲み終わると爺さんの所まで戻った。

『じゃあソロソロ、お主の質問を答えようかの…』と爺さんは顎をクイツつと五右衛門に向け、語りだした。

五右衛門は畏まり、お願いしますと言い爺さんの話に耳を傾けた。

俺と光も同様に話を聞いた。

『結論から言うかのお。ワシが霊があの場所に溜まっていると言う事は知人から聞いた話なんじゃ。ワシにも昔は友人と呼べる仲間がおった。友人の中には霊感のつよいもんがおつてのお。』

『その霊感の強い友人って洞窟で俺達に話してた仲間の事なんすか！？』と五右衛門が話を割ってはいると、あの洞窟での話は単なる時間を稼ぐためのつくり話じゃ。とニヤニヤと笑い、再び話し出した。

『一人でこもるようになってどおしても分からなかった事は、さっきまでお主らが抱いていた疑問そのものじゃ。何故時が進むのか：という点は実験しても全くわからなんだ。そこでワシは依頼したんじゃ。樹海って言う事で霊が関係してるんじゃねえのかってのは何となくだったがお、まあ自分のカンを信じて霊感の強い友人に頼んであの洞窟を調査してもらったんじゃ。E M Fとか言う小型機械とか専門的な機械を使って本格的にな。で、結果は霊が大量に居るとの事じゃ。ワシも一日かけてその友人に色々な事を教えてもらったよ。さっきお前らに話した内容はその時教えてもらった事のまとめみたいなもんじゃ。ワシに霊感があったらのお。もっと詳しい話を聞かせてやれたんじゃが：いかんせん。ワシは全くといって良いほど霊感オンチじゃ。』

すまんのぉ。と俺達に小さく頭をさげ、爺さんの話は終了した。

まだ洞窟について訊きたい事が山ほどあったけど、俺達が次の質問に移った。

『あの…その石は？？？』と俺は爺さんの背後の空から降ってきた

と日記に記された石を指差し、爺さんに問いかけた。

『これか??』と爺さんはポンポンと叩いて、俺の方を見た。

俺は小さく頷き、『外に落ちていた日記には空から降ってきたと書かれてたんですけど…』と勝手に人様の日記を読んだ事を少々気まぐずいと思いながらも爺さんに聞いてみた。

『この石はワシにもわからんのじゃ。』

『え!?!でも空から降ってきたのは見てたんですよ!?!』

『いいや。みとらせん。さっき話したと思うが、わしが1日籠って出てきたら家がボロボロで自分自身も老けていたと言ったろう!?!』

ええ。と小さく頷き、そのまま俺は爺さんの話を聞いた。

『ワシは2、3日寝こんだあと、身の回りの物を色々調べてたんじや。見物者によって壁は落書きだらけ、家電製品も色々盗まれとつたわい。そして毎日つけていた日記帳じゃ。平常心を取り戻してわしの日課だった日記を書こうと思ってな、日記帳を開いたんじゃ。するとな、洞窟での勝手に過ぎてしまった月日もびっしりと日記が記されておったんじゃ。ワシの字でな。ここにある石はその時に記されていた一部でな。ワシも何故落ちてきたのかと言うのは全く分からんのじゃよ。』

爺さんは一通り話終わると腕を組んで、考え出した。少しすると『ああ。そうじゃそうじゃ。』と一言付け加えた。

『ちなみにワシは元々、昆虫を食う趣味があつたわけじゃないぞ。』

あの洞窟に籠ってからご飯が喉を通らなくなつてのお…それからと言つもの昆虫ばかりを食つようになつてしまつたんじゃない。」

ビクつとする俺達を見て、おぬしらはほんの少ししか入つとらん。大丈夫じゃ。とニコつとわらつて爺さんの話は終了した。

『何も小僧達の解決には繋がらなかったかもしれないがな、ワシかて全部把握しちよるわけじゃないんじゃない。忝い…もお遅い。ソロソロ帰りなさい。』

とそのまま、ランタンと俺達を残して家の中へと入つていった。

『なあ…爺さんもあ言つてるしソロソロ帰るか！？』

『せやかて…謎は残つたままやないかい。このまま帰つてもろくに眠れへんわ。』

『五右衛門は！？』

『俺か…俺は正直帰宅したいって気持ちもあるな…けど…光が言うみたいに気にならないって言つたら嘘になるけど…』

結局俺達は爺さんに言われるがまま直ぐに帰宅はせず、ランタンのキラキラと輝く光を見ながら、少し考え込んだ。

『なあ…その文字どおおもうよ。』最初に口を開いたのは五右衛門だった。

『俺はカオリンと一緒に初めて見つけたときは何のこつちや全く分からなくてそのまま感想をキーボードに打ち込んだんだけど…』

『キーボードつてあの爺さんが遊び心で置いた奴だろ?!?それも洞窟に籠っている間にさ…』

『ホンマに訳わからへんな…』

『で、五右衛門は何て打ち込んだん!?!』

『うーむ。S I A W A S E…』

『（は!?!）』

『幸せて打ち込んだ!?!だってさ、義理の妹と二人暮らしたしトウモロコシは俺の好物だし…でもあったと思ったんだけどな…』

『（（W H Y））』

『だってさ、入力が終わったとたんにその窓がピカ!?!って光ってさ…まあそれは結局光とキキの懐中電灯だったんだけどな…ハハハ…』

何言ってるんだこいつは…と俺は大きくため息を吐いて、石をじつと見つめ何か引かかるんだよな…と頭の中を整理していた。

『あ”!?!?!?!』

と光の大声に俺も五右衛門も心拍停止するかと思うほどびっくりした…。

『何や!?!?!うるせーな。』

『分かったかもしれへん!?!?!』

『Mystery』

ほんのりと明かりを放つランタンが光によって慌しく光粉をばら撒いた。

地面に置いてあったランタンを謎の石に近づけ、光は必死で文字を確認し、その文字列を地面に書き出した。

【どうだ妹と二人暮らし、どうだいもつとともろこし】

【どうだいもつとふたりくらし】

【どうだいもつとともろこし】

『これどお思う！？』と光は振り返り俺達に質問してきた。

『いや。ひらがなにしたのは分かるけどそれ以外は意味不明…』

『俺も五右衛門と同じくわかんね』

はあ…三人寄れば文殊の知恵とは嘘っぱちな。と言い放ち、再び一人で考え出した。

俺と五右衛門も必死で光の思考に追いつこうとしたが、いかんせん。そもそものIQが光とは天と地の差なのだから…

『俺らに出来る事は…』と五右衛門が言い出し、【何！…こいつまで理解しだったのか！？！】と一瞬ドキッとしたが、最後まで聞いて俺の胸の高鳴りも無駄だった。

『俺らに出来る事は光の邪魔をしないことくらいだな…』と自信満

々に五右衛門は言い放ち、よっこらせと胡坐をかいて座り込んでしまった。

少く光の手伝いをしたいと思ったが流石に無理そうだな、と俺も五右衛門の横に座り込み、天を仰いだ。

午前中は綺麗に輝いていたお天道様も、一瞬にして闇の覇者、お月様へと変わってしまったている事に今更ながら変な違和感を抱いた。

お月様を引き立てるように満遍なくばら撒かれた星達が丁寧な光を放っていた。

樹海の中だけに湿度が多く、ジメジメと体中をナメクジが這っているのでは…と思うくらいに気持ち悪い感じでたまらなかった。

真夏の夜に聞きたくないと言っても無理だろう。

方向感覚を奪うような蝉時雨がザーザーと鳴り響き、天を仰いで居ると目が回りそうになった。

『優馬!!五右衛門!!ちょっときてくれんか!?!』と光に呼ばれ再びよっこらせと立ち上がり、石に食らい着いている光の元へと歩み寄った。

『わかったんか!?!?!』と五右衛門が聞くと、たぶんな…と光もこっちを向いて座りなおした。

『まずな、実行する前にワイの結論を聞いてほしいねん。』

ふむふむ。と俺達は頷き、今日は話を聞いてばっかりの一日だな…

と思いつつも光の話に耳を傾けた。

『まずコレは隠語やねん。まあワイの予想やしな、絶対にあつてるとは言えへんけど多分当たつてると思うで。』

もったいぶらずに早く言えよ！！と俺と五右衛門で急かすと光はカカカと笑い説明してくれた。

『ワイの予想やけどコレは【灯台下暗し】って事やないか！？』

は！？といまいち理解できない俺達にまあ待てと光は話を続けた。

『どうだ妹と二人暮らし、どうだいもつと玉蜀黍。この二つの共通点を搾り出したら【灯台下暗し】になんねん。』

『まあそお言われると何となく二つとも【灯台下暗し】って諺に似てる気もするけど…それが何をいみしてんの！？？』と俺が聞こうと思った事を五右衛門が先に聞いてくれた。

『はあ…そもそも灯台下暗しって諺の意味はしつとるんか！？』

『まあ何となくだけど、灯台は周りを光で照らして自分の足元は暗いよつて意味だろ！？！？』

『ふむ、まあそれはそのままの意味だな。それは意味やないねん。単純に灯台下暗しつてのを長く言っただけや。本来の意味は身近な事情に疎いこと。これや。例えるなら、警察が犯人捜すために、色々な調査したりしてるとするだろ！？それで何日にもわたって調査したけど結局犯人は警察署ないのしかも自分の相棒でした。つてのが灯台下暗しつて事何や。』

『ほうほうほう。何となく分かったけど、なんでそんな事がココに書いてあるん?!?!』

俺も五右衛門とほぼ同時に理解し、五右衛門と全く疑問を抱いていた。灯台下暗しって意味は光の説明でよくわかったけど…なんでこんな石にそんな事が書いてあるのか!?!?

『さすがにはつきりとした事はワイもわからへん。この石はそもそもワイらやのおて爺さんへのメッセージやしな。爺さんの身近な所で何か変化があつたんやろな…』

『この謎を解いたら、もしかしたら除霊されて爺さんも若返るかもな』と五右衛門がゲラゲラと笑いながら言った。

『アホか!!そないなファンタスティックな事いまだき映画でもあらへんで!!』

『冗談だわ!!冗談!!流石にそんな事本気でおもってねえよ!!』

『五右衛門が言うとかマジで言ってるように聞こえるのは俺だけか?!?!?』

『いや、ワイもや。』

『何だそれ。言っとくけど俺はそんなに馬鹿じゃねえぞ!!光には言われてもじゃあないけど、優馬!お前には言われたくないね!!』

『なんと…』

俺と五右衛門がガヤガヤともめているのを光はどっちも同レベルやないか…とケラケラと笑いながら見ていた。

『うんこ…！しね…！』

『お前がうんこやる…！あほ…！』

『は…？じゃあ、おめえはうんこ以下やわ…！』

『あ…？俺がうんこ以下ならお前なんかウンコロスケだわ…！』

『ウンコロスケってなんじゃそれ…！まじでアホだろ…！』

とまあ自分でも恥ずかしくなるほど幼稚な言い争いをしていたわけで、光もあまりの幼稚さに呆れ、『どおでもええけどさ。とりあえず爺さんに聞きに行ってみいへんか！？』と俺と五右衛門の痴話喧嘩を止めてくれた。

うむ…そうだな…と俺達は爺さんの残していったランタンを手に取り、爺さんの住んでいるボロ小屋に行く事にした。

『Mystery参』

もおすっかり見慣れたボロ小屋だが、流石に友達の家を訪れるようには気軽に尋ねられない雰囲気がいっつも漂っていた。

玄関の階段にばら撒かれたように転がっていた虫の死骸を見ては爺さんの【Time for meal】が頭によぎってついつい口を手で塞いでしまった。

光は律儀にノックし『なんじゃ…』と言う返事を待ってから、ギギギギと言う耳に付くドアを開けた。

『（うお！）（）』

ドアを開けた瞬間に上から氷水が降ってきたかの様な驚きが襲ってきた。

ドアの数センチ前に爺さんが立っていたからだ。

『で…どっちがウンコロスケなんじゃ！？…気になって夜も寝られへんわ…』

『は！？…』

『いや、さっき外でお主ら二人で言い争っておったじゃろ…』

『（聞いてたのかよ！！そりゃこいつがウンコロスケだ）（）』

と見事にハモって互いが互いに指を指し合った。

カカカカカと大爆笑する爺さんをみて、余計にイライラが込上げてきた。

『まあええで。そんな事より爺さん、ちょっと聞きたい事あんなやけど良いか！？』

と光は冷静に物事を進めていった。

『ワシには時間の縛り何て無いしのお、ワシよりお主らは大丈夫なんか！？もお結構遅い時間じゃぞ。』

ふと携帯を見るともお23時を回っていた。

【うわ。マジかよ…もおこんな時間じゃん…】

『そおゆう事なら遠慮なく上がるで。』と光は土足のまま爺さんの家に入っていた。

『コレコレ。そんなとこ歩いちゃいかん。床がぬけるぞい。』

と爺さんの言葉に先に言ってくれよ！！と光は忍び足でこっちに戻ってきた。

『そこに地下の階段がある、地下で話を聞こう。』

地下室…俺にはあまり良い思い出がない…虫のビン詰…想像するだけで嘔吐しそうになった。

爺さんが先陣を切って俺達は爺さんの後ろに連なってコンクリートで出来た階段をカツカツと音を立てながら降りていった。

爺さんがパチッと電気を付け、驚きつついっい声を上げた。

綺麗に掃除された床はベージュ色のフローリングで、純白の壁にはアイドルのポスターが貼られており、角に置かれたメタブラックにはCDがずらりと五十音順に並べてあり、何といえは良いのだろうか…A型の大学生の部屋の様に文句の言い様の無いくらい綺麗な部屋だった。

『ここがワシの自慢のマイスイートルームじゃ。どうじゃ。』

『どうじゃって…爺さん…俺が上から降りた時はこんなに綺麗じゃなくなかった!?!?!』

『あーあれは倉庫じゃ。倉庫というより食料庫かのお。カカカカ。ちようど、ワシが朝飯の品を選んどったらおぬしらが来てのお狩人かと思つて、電気消して隠れとったんじゃわい。カカカカカ』

『…』

『それにしても、ホンマに綺麗な部屋やお。樹海に住む爺さんの部屋とは思えへんわ。』

『うぬ。俺の部屋より綺麗だぞ…』

五右衛門も光も、爺さんの綺麗な部屋を褒め、3人とも少しだけ安心し、腰を下ろした。

光は簡潔に石について説明し、爺さんに身近な事で何か無かったかと、訊いた。

『ムフフフ…』

『早くその心あたりのあるって事をおしえるよ!!』
イライラとした五右衛門が爺さんにつっかつかった。

『おっと、こりや失敬。当時の事思い出してたらのお女湯を覗いてた事を思い出してしまつてのお…ムフフフフ…ありや別嬪さんじゃつたのお…フフフフ。あう…想像しただけで下半身が…』

『うお…俺も…』

『ウオラ爺!!良いから早く言え!!』

と俺は爺さんと五右衛門を叩き、話を元に戻した。

『最近の若いもんは短気で困るわい。老人の娯楽をなんじゃとおもつとるんじゃ。全く…あれは1年くらい前のことじゃ。』

『長い夜の終』

『一年って…爺さんつい最近じゃねえかよ…』

『そうでもないわい。ワシがココに来た最初の頃じゃ。』

『え！？あんだ、20年近くココに住んでるんちゃうんかい！？！』

『ああ、世間的には20年、ワシの中ではまあざつと1年ちよいつてとこじゃ。…あの時忘れの洞窟のおかげでのお…』

『ああ…』

小僧ども…ソロソロ、聞いてくれるか？？とズズズつと暑いお茶を啜りながら俺達に問い、俺達も黙って頷いた。

『ワシがココに来てまだほんの1ヶ月くらいの時じゃった。ワシはいつも通り部屋の掃除をし、風呂に入って、樹海から近くのデパートへと買出しに行っていたんじゃ。まあわしかて最初から虫など食う趣味は無いんでね。買出しに行つて帰つてくると一匹の狐が倒れておつたんじゃ。』

『狩人にやられたみたいでのお…何発もの銃弾を受けて酷い怪我じやったんじゃ…ワシは直ぐに手当てした、幸い致命傷になるところには当たっていなくてな一月くらいでその狐は歩けるまで回復したんじゃ。ワシは獣医免許どころか、人間の手当てすらした事の無いワシだけにそんなに早く回復するとは思いませんかった。』

『狐と暮す一ヶ月間、ワシは愛着をもつてはいかんとは思つてたん

じゃがのお狐に名前までつけて可愛がったんじゃ。【ビーハイブ】それが狐の名前じゃ。」

『ビーハイブ！？？中々センスの良い名前だな…』とっさに五右衛門が呟いた。俺も爺さんにしては中々のネーミングセンスだと思いました。

俺はてっきり、コンタとかつけたもんだと思った。

『どごがやねん…悪趣味極まりないやんけ…』五右衛門の言葉に光の鋭い突込みが入った。

『爺さん、ビーハイブってどおせ蜂の巣の事ちゃうん！？ワイが思うに初めて発見した時に銃弾を浴びてのが理由やろ…』

『カカカカ、いかにも。』

良く分かったなと言わんばかりに爺さんは笑い、俺と五右衛門は前言撤回を言い放った。

すっかり冷めてしまったお茶で喉を潤わせ、爺さんは再び話し出した。

『ワシはビーハイブのおかげで久しぶりに寂しさとは無縁の生活が送れたんじゃ。出来る事ならこのままこいつと一緒に過したいと思ったりもしてしまったわい。それでも人間と野生の動物…』

『歩けるようにもなったし、辛い気持ちを押し殺して、ソロソロ仲間元へ帰れと野に帰してやったんじゃ。一ヶ月も一緒に居たんじやビーハイブもすっかりワシになつてのお。ワシが森へ帰れと言

っても言う事なぞ聞いちゃくれなかった。』

『ワシはビーハイブを家から離れた場所まで連れ出して置き去りにするなど、色々可哀相な事までしたが、結局何日かしたら戻ってきてしまったんじゃ。ワシは……』

カンペでも見ているのかと思うほどすらと話していた爺さんが、凍りついたように言葉を無くし黙り込んでしまった。

肩を小刻みに上下に揺らし、下げた顔は床と平行を保ったままだった。

俺達は顔を見合わせ、爺さんの様子を伺った。泣いているのか……な……？？？

『爺さん。大丈夫か？……』

爺さんの囁き声が狭い部屋に響き渡る中、光が心配の声をかけた。

『ああ……大丈夫じゃ。すまんのぉ……昔を……あの時の事を思い出してしまっただわい。……』

無理なら、もお話さなくて良いぞと言う五右衛門に、もお大丈夫じゃ。ブイイイイ。っと大きく鼻をかんで一息ついて話を始めた。

『ちつとも本当の家族の元へ帰ろうとしないビーハイブにワシは狩用の銃を向けたんじゃ。一月前の嫌な思い出が一気に蘇ったんじゃろうな。4本の足をガタガタ震わせて森の中へと消えていったよ。』

『ビーハイブと別れて数日後、ワシは悲惨な光景を目にしたんじゃ。

……ビーハイブが……ビーハイブが……。』

『（え??）』

ココから先は爺さんの声が涙で言葉になってなかったので、恐らくこお俺達に伝えたでは無いかと思われる事を俺が述べよう。

【爺さんが帰宅するとビーハイブが大怪我をして、家の前で倒れていたらしい。又怪我をすれば爺さんと一緒に居れると動物ながら考えたのか、爺さんに見放され家族を探している間に出来てしまった怪我なのかそれは爺さんも分からないままらしい。怪我が酷く爺さんが手当てをしても、ビーハイブは良くはならなかった。爺さんが発見したその日のうちにビーハイブは死んでしまったらしい。それを爺さんは自分のせいだと…

自分が殺したようなもんだと、ガキの様に泣きながら俺達に訴えてきた。長い人生に置いてあの日程、後悔した日は無い…と…】

爺さんが言うには、狐^{ビーハイブ}の死体は部屋の中にあるとの事だ。流石にコレには俺も五右衛門もそして光も声を出して驚いた。

俺達他人から見たら只の白骨体だが爺さんから見たらまだ、昔の可愛い狐^{ビーハイブ}なのだろう。死んでしまっても、埋葬や火葬はできなかつたらしい。

この言葉を訊いて、光がくらい着くように爺さんに質問した。

『なあ爺さん。あんたが昆虫食いだしたのはいつや??それと、時忘れの洞窟に一日籠ったって言うのもいつの話だ???そもそもあの洞窟が時忘れの洞窟だと言う事が確信できたのは狐^{ビーハイブ}が死んでからの事じゃないんかい??』

『…うむ。小僧の言うとおり、ビーハイブが死んでからじゃ。始め

に入った日は正直疲れて眠って時間を忘れてただけかもしれないの
お。それに今思うとあの中で何時間も寝てたはずなのに日付の変化
が今と比べて段違いじゃな…」

「爺さんのゆうとおり、あの洞窟は呪われてとるな。霊能力者が例
の緑茶だかしらねーが爺さんの友人の言ってた事も全て当てはまる
な…」

流石に頭の悪い俺にも五右衛門にも何となく光の言っている事が理
解できた。【恐らく狐の呪い】だろう…

「なあ爺さん。光の言いたい事わかるか?? 爺さんが子供の様に可
愛がつっていた狐…ビーハイブが死んでから色々な災難が続いてるん
だぜ?? その狐が爺さんを呪おうとしているのか… そんな事言わな
くても分かるよな。」

光るに続いて五右衛門が言い、それに続いて俺も話した。

「爺さん言ってたよな。時忘れの洞窟にいる霊は悪い霊じゃないと
…寂しいから死後の世界に誘っているんだと。ココが樹海って事も
あるし、俺達も爺さんの友達の霊能力者も自殺した人の霊だと思っ
たんだよ。でも全ての発端はビーセントじゃないか??」

「…ビーハイブじゃ…お前ら、ビーハイブを葬ってくれるか??
ワシが自分でやるのが一番良いのはわかつとる。けど…あんな姿に
なってもワシには今も動き出しそうで…とてもビーセントに火なぞ
つけれんのじゃ。」

「（（ビーハイブだろ!!））」

俺達は爺さんに案内され、狐^{ビーハイブ}の死体がある場所に移動した。

その場所は意外に近く、爺さんの本家とも言えるあのボロ小屋だった。

『この家の地下にビーハイブはおるんじゃ…お主は一回降りてきたじゃろう』と俺の方を指差してきた。

『この地下か…』と俺は少し不安の声を漏らしながら、ふとあの時の光景が頭を過ぎった。

爺さんが何故あんなに気味の悪い部屋に居たのか…あの大量の虫の死骸がずらりと並べてあったのは何故なのか…

全てを聞かされてから考えると、爺さんは狐に会いに地下に降りていた。そこに俺達が来て、樹海の見学者かと思い爺さんもビクビクしながら身を潜めていた。

あの大量の虫の死骸は、恐らく俺達人間で言うお供えものだろう…俺の考えが正しいのかどおかは爺さんに聞いて見ないと分からないが、恐らく間違っていないだろう…そおであつて欲しい。

俺が過去を振り返っている間に、五右衛門と光と爺さんは地下において、ビーハイブの入った箱のような物を抱えながら上がってきた。

それはそれはもの凄い異臭を放っているかと思つたが、そおでも無かつた。3人の後に続いて俺も小屋の外に出た。

爺さんがランタンを近づけ、中確認すると、ポタポタと涙を流し、ビーハイブに最後のお別れの言葉をかけた。

『ごめんのぉ。お前を苦しめてばかりじゃったな…お前が生きる間はたった一ヶ月くらいの付き合いのじゃったがワシは一時もあの一ヶ月の出来事をわすれちゃおらんよ。』

『最初は、お前がでっかい蛾を食べようとして、ワシが取り上げてデパートで買ってきたドックフードを食べさせたりもしたのお、昆虫はお前の大好物だったのにな…今ではワシが昆虫を食うようになつとるわい…カカッ』

『お前と近くの川に行つて、お前がおぼれて流された時は、心臓が止まるかと思つたのもよお覚えとるわい…本当に死にそうで焦つたのお前なのになあ…』

『おい、ビーハイブ。お前あの一緒に女湯覗いた時の事覚えとるか??、お前ときたら興奮しよつて女湯に飛び込んでいくもんじゃから、ワシ一人で逃げようかと思つたわい。まあお前のおかげである時はある意味美味しい思いをさせてもらったけどな…ハハハハッ。』

『ビーハイブ…ワシが死んで、お前と一緒にの世界に行った時には又一緒に暮そうな…あの世で元気でやれよ…今度は狐の女湯覗こうな…』

爺さんは俺達に『スマンが、これ以上見とると笑顔でお別れできそうにないわ…』と言い、ランタンを渡して座り込んだ。

俺達3人は爺さんの家の倉庫にあったスコップを借り、少しでも柔らかそうな土を見つけ、昔タイムカプセルを埋めた時の様に必死で掘り出した。

50センチくらい掘り、ビーハイブの入った箱をその穴に入れ、塩をまき、ガソリンを箱にかけて、火のついたマッチを放り投げた。

この後俺達は爺さんの綺麗な部屋にもどりビーハイブの事は話題に

せず4人綺麗に並んで眠りについた。

『一難去つて又一難…』

ブウウウウウウ！ブウウウウウウ！ブウウウウウウ
ウ！！

『ん…うるせえ…なあ…』

俺は眠い目を擦りながら、ポケットの中の携帯を取り出した。

ん？？…羽樹から…メールか…まだ7時半じゃねえか…はえええな
あ…

【優馬！！！今どこに居るの！！？？昨日も夜遅くまで薫とキキと
マスターでみんなの帰りを待ってたんだよ！！朝には戻るだろう
男が三人で出歩いてるんだから心配ないってマスターに言われて昨
日は寝ちゃったけど今日の朝になって優馬達の部屋に行っても誰も
いなかったから…無事なら返事ください。それと早く帰ってきてく
ださい。】

羽樹の心配する文章に俺は水風呂に入ったかのように胸をギュッと
締め付けられ、半分眠っていた頭も、フル回転で活動しだした。

『や…やべえ…をい！！！！光！！！！五右衛門！！！！爺さん！！！！
！起きろ！！！！！！』

俺は五右衛門の頬に平手をくらわし、光の布団をひっぺ返し、その
布団を爺さん目掛けて放り投げた。

『いってえなあ！！朝っぱらからなんじゃ！！！！』と五右衛門が怒。

『人が気持ちよお寝とったのになにすんねや！！ど阿呆！！』
と光が怒。

『小僧！！！今日くらいゆっくり寝かせてくれてもいいじゃろう
が！！！』と爺さんが怒。

『お前らアホか！！このメール見てみる！！！！』と俺が怒。

と俺は携帯を前に出し、五右衛門達三人はそれを覗き込むように見
入った。

『薫とキキとマスターでみんなの帰りを待ってたんだよ…やべ！！
！！マスターに殺される…』と五右衛門が焦る。

『優馬達の部屋に行っても誰もいなかったから…キキ…に殺される
…』と光が焦る。

『無事なら返してください。それと早く帰ってきてください…可愛い
子チャンがワシの帰りを…』と爺さんが萌える。

『って小僧…ワシは関係あるのか！？！？』と爺さんが我に返る。

あ…つつい無関係の爺さんまで起こしてしまった。【ブウブウブ
ウ】

爺さんのブウイングも無視し、俺達は身支度を整え…といっても何
も無いが…早急に帰宅しようとした。

『まてい！！！！小僧！！！！』

『なんやねん！！爺さん！！！！ワイら急がなホンマに命が危ないねん！！！！』

と、爺さんはいきなり土下座し、話し出した。

『本当に感謝じゃ。お前らがいなかったらわしは死ぬまでココで暮っていたかもしれん。ビーハイブとの別れは正直心寂しい。』

『けど、コレで時忘れの洞窟も虫の呪いも全部開放されたとワシはおもつとる。その証拠に今、虫を見ても食べたいなどとこれっぽっちもおもわんしのお。』

『恐らくビーハイブはワシにこんな所で腐ってたらダメだと伝えるために石の伝言や虫の呪い、時忘れの洞窟を用意したんじやろうな。』

『死んでしまっても、ビーハイブはちゃんとワシの事を見てくれたんじやな。…その気持ちに答えるためにもワシは今日を持ってココの樹海を去ろうと思う。』

『あの世に行った時にビーハイブに色々話してやれるように、残の人生を楽しんで生きようと思う！！…おぬしらのおかげじゃ。恩に着る…』

と爺さんは下げていた頭を上げ、俺達にニコツつと微笑んだ。

『それにしても爺さん。行くあてあんのか？？？』

『ない！！！！じゃから旅をしようと思う。松尾芭蕉の様にな。おぬしらの家にもいつか寄ろうと思う。差し支えなかったらおぬしらの住む土地だけでもおしえてくれんかのお…』

旅かよ…と突っ込みたかったが、俺達三人の同意で爺さんに俺達の

住所…ではなく【和茶】の住所を紙に書いて爺さんに渡した。

『これまた…遠いのお…コレはワシの目標じゃなあ。カカカカカカ！…！』

『じゃあ爺さんワイらもおホンマに帰るわ！！元気でやるんやで！！…！』

『覗きすぎで捕まるなよ！！…！』

『住所覚えても、死ぬ前に来いよ！！…！死んでからは来るんじゃねーぞ！！…！』

俺達は爺さんが見えなくなるまで何度も振り返り、手を振っては声をかけながら、立ち去った。

『あの爺さんなら、静岡からだろうが北海道からだろうがぜってえ俺達のとこまで来るな！！…！』

『ちげえねえ！！…！』

『ちょっと女湯覗きたいがために、ここからあの旅館まで来るくらいだしなあ！！…！』

『（（（ハハハハハハ）））』

『って笑ろーてる場合ちゃうで…待つとる4人が金棒もって旅館の前でたつとるのが目に浮かぶで…』

光の追い討ち発言にブルブルっと体を震わせて、俺達は片道1時間

近くかかる所を駆け足で30分で帰宅した。

思ったより早く着いた俺達は近くの自販機でジュースを購入し、皆にどおやって説明しよう…と言い訳を考える事にした。俺達は作戦を計30パターンくらい考えた。

作戦1 「いやー。散歩してたら妊婦にばったり出くわしてさ…いきなり倒れるもんだから、今日の朝まで病院で付きっ切りだったわ…病院に居る間は携帯つかえんくてなあ…」

妊婦付き添い大作戦！！

これは俺が考えた作戦だが、自分が病気にかかってるわけでもなく妊婦のご家族の方々が来たら我々が最後まで付き添う必要など全く無いとの事で却下。

作戦2 「ふう…やっと戻ってこれた。それにしても参ったよな！。すんげー追い風で遠くの方まで楽々に行けたんだけど、帰りは恐ろしい向かい風だもんなあ。参った！！参った！！アッハッハ！！」

向かい風大作戦！！

コレは言わずとも分かる五右衛門君による提案だ。…勿論即却下。

作戦3 「おーおったおった。まさか二日もココに泊めてもらえるなんて思ってもいてへんかったからなあ。次のホテルまで三人で向かってたんやわー。せやかて、夜になっても皆全然けーへんやん??それでまさかと思って戻ってきて良かったわあ。良かった良かった。」

先走り大作戦！！

コレは光君の提案だ。案外良さそうだなと思っただが、光本人が、もしそれなら今の時代TELして確認くらいできるわな…と言い出し、結局却下。

結局の所、素直に本当の事を話して謝るか…作戦30パターンの中で最も有力候補とされたあの 作戦21 で行くかと言う話し合いになった。

【実は樹海に再び探検に言つて、そこで虫を食う爺さんや、化け狐の呪いにかかって色々と時間が経ってしまったて、その呪縛から開放された時にはもお深夜で、結局虫を食う爺さんの家に泊めてもらつてたんだよ。】

コレが本当の話だ…いや、今思うとあれは俺達の夢だったんじゃないのか…と実体験した俺達でも信じがたい様なファンタスティックな出来事だった。

そんな事信じてくれるはずもなく、それを話すくらいなら五右衛門が考えた 作戦11 の大名行列に巻き込まれて半日くらい土下座してました。その後は足がしびれて動けませんでした。

こっちの方がまだましに思えてくる次第だ…

よって俺達は、 作戦21 を実行する事にした!!!!!!

『 作戦21 前 』

午前9時。

焼け付くような太陽と、それを照り返すアスファルトが妙に俺達の集中力を高めてくれた。

心なしが静岡は俺達の地元より、空気が綺麗なのか、はたまた磯の香りで気分が良く感じられるからなのか良く分からなかったが、作戦21 を実行するに当たっては申し分ないモチベーションだった。

『ほな、作戦の説明するで、よー聞いとくんやで!!』

ココで、頭の悪い五右衛門と俺のために光が再度 作戦21 の段取りを説明してくれた。

作戦の説明中、流石に暑すぎるアスファルトに耐えかねた俺達は、大きな木の下の木陰に移動した。

光がちょうど良さそうな木の枝を拾い、それを使って地面にガリガリと作戦の内容など、要点をまとめてくれた。

そもそも 作戦21 と言うのは、昨日からずっと部屋に居ましたよ作戦なのだ。

ん!?!? 謎いつて!?!? 意味分かんねえよ!! って???

まあ無理も無い、君達より頭の良い俺ですら光に説明されるまではクエッションマークが頭の中を飛び交ってたもんだ。

要するにだ。

昨日の帰りは確かに遅かったけどちゃんと帰ってきて、部屋にずっと居たんですが！?!? 女性人ついでにマスターさん。そんなに慌ててどおかなされました！?!?!?

とあたかも昨日からずっと部屋に居たかのように振舞う作戦だ。

俺達の部屋809号室にはロビーの横の階段、エレベーターを使わないと行く事はほぼ不可能。

そして、先ほど俺達がロビーを柱の影から覗いたら、マスター達は俺達の帰りをロビーにて待ち構えている。

それに気がついた時は、俺と五右衛門は作戦21もだめか…とため息をついた。

叱られるしかないな…と頂垂れる俺達の肩を光はポンと叩いてニヤリと笑って見せた。

光だけは、皆がロビーで待っていることを逆に利用しようと考えたのだ。

『ええか！?!? こりゃ今までワイらがやってきた中でもかなり危険な作戦やで…よお聞きや。下手したらマスターに2、3発殴られる方が軽傷で済むかもしれへんこつちゃ。』光が真剣に言った。

『うむ…確かにこの作戦…下手したら命落とすじゃねえかよ…』光の言葉に五右衛門も真剣に応答し、俺も唾を飲んで頷いた。

光が提案した作戦とは8階にある俺達の部屋に外から上ると言う作戦なのだ。

当然俺達も最初は、『無理！！無理！！無理！！無理！！』と断固拒否った。

ロッククライマーでもあんな壁登れっこねえぞ！！と言う五右衛門の言葉に俺も大きく頷いた次第だ。

【まあ壁をよじ登るとなったら、流石にロッククライマーでも無理やわな。けどな、ワイらが登るのは1つの階だけや。それも壁をよじ登るんやのおて、あの筒に足を引っ掛けて登るんや。】

と光は俺達の部屋付近の壁を指差した。

太陽が射し、眉間に皺をよせながら俺と五右衛門は確認した。

『確かに、雨水を通す筒みたいなのはあるな…あれでを使って8階まであがるんか！？！？』と五右衛門が無理だ！！と言おうとした時光が『アホか』と五右衛門の言葉を遮った。

『ちやうちやうちやう！！さつきもゆーたけど、あれを使って登るんは7階から8階だけや。それ以外はあの階段ですんなりといきやあええ。』と光が再びホテルの側面を指差した。

あつ！！と俺は光の言いたい事が理解できた。俺の声に光はウィンクし、親指を立てた。

『なるほどなあ…』と少し遅れて五右衛門も気がついた。

『この作戦俺達の部屋が809号室じゃなかったらアウトだったな…』と五右衛門が付け加えた。

『せやな。まあ運も見方してくれとる見たいやし、今回の作戦は上手く行くやろ。』

俺達の部屋809号室はちょうど一番端の位置にあり、その部屋の真下である709号室の横の壁に階段があつた。

その階段を利用して、7階まで上がり、7階まで来たら部屋の横にある雨水を流す筒をつたって上に行くと言うことである。

『けど、なんであの階段7階までしかねーんだ！？！？』と俺が聞くと、確かになと五右衛門も首を傾げた。

『まあその辺はよわからんわ。元々7階までのホテルを客の入りが良いからって事で改装して10階まであげたんかもしれへんしな。ワイらの部屋が709号室やったら何の危険もなくいけたんやけどな。』

一通り、やる事を把握し、俺達は青空の下教室である木陰を離れ、ロビーのオープンなガラスからマスターたちに見られないように、ホテルの裏から周り側面にある階段へと足早に移動した。

『近くで見るとめっちゃ高いなあ……』と五右衛門が思うがまま声を出した。

『じゃっ！とりあえず上がるで！！』と光が立ち入り禁止の掛札をまたぎ、カッカッカツと鉄の階段独特の音を鳴らしながら上がった。いった。

それに続いて、五右衛門、そして俺と順番に上がっていった。

7階：樹海の件で2日間動きっぱなしの俺達の体には酷な階数だった。

体力馬鹿の五右衛門は光をあつという間に追い抜き、俺と光が4階に到達した時にはもお7階で待機していた。

『なあ光よ…この作戦…膝にくるぞ…』

『優馬よ…わかつとるから一々声にだしてゆわんでええやろ…余計にしんどいで…』

『すまぬ…』

7階に着いた時には流石に尻餅について休憩する事しか出来なかった。

『なっさえねえなあ。7階上ったくらいでハアハアハアと…おっさんじゃあるめえし。』と待ちくたびれたぞと五右衛門が腕を組んで俺達を説教し始めた。

『ハア…せやかて、ハアハア…ここ2日間動きっぱなしで…ハア…只でさえ体ボロボロやねん…しんどいつちゅーに…ハアハアハア』と途切れ途切れに光は五右衛門に反論した。

俺はというと、五右衛門への反論を心で言い放ち、声に出すと言う労力は避けた。

『じゃあ、お前ら顔あげてみい！！！！一気に疲れ吹っ飛ぶぞ！！！！』と五右衛門が白い歯をキラリと太陽の反射で輝かせ俯く俺達の肩をゆすった。

『うおおお…マジですげえ…』

『ホンマに疲れ吹き飛ぶでこれは…』

俺と光が声を出したのはほぼ同時だった。

五右衛門が階段の手すりから体ごと乗り出して見ている先には、今までに見たことも無い凄い綺麗な風景があった。

途切れる事の無い太陽の光が、澄み切った海に跳ね返り、キラキラなんていう言葉では表せないほど輝き、波に乗って泳いでいた。

俺は羽樹にもこの光景の感想を伝えたい…そお思ったが、『すげえ…』ただコレしか言葉として表現できないのが悔しく思えた。

もつと賢い人はこの光景を言葉にし、人に伝えられるんだろうなあ…と思うと何だか俺の知り合いは損をしているようにも思えた。

『それにしてもすげえなあ…』と光も口をあけて視線を海に送っていた。

『なっ！！疲れ吹き飛んだだろ！！？』と五右衛門の言葉に、ハッと我に返りった。

『せやな。何か癒されたわ！！！』と光が笑いながら言い。

『うむうむ！！』と俺も大きく頷いた。

変わるはずなのに、さび付いた階段がほんの1分前よりかなり汚い物体に思え『はあ…』とため息がでた。

『…ココからが慎重にならなあかんとこやな。ワイが最初に行くけど、二人はワイが登りきるまでココで待機やで！！登ったら合図送るわー！！』と光は階段の手すりをヒョイッと越えて709号室のベランダへと飛び移った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7224e/>

和茶 6人席

2010年10月9日17時31分発行